埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第88集

幡羅遺跡Ⅱ

― 正倉跡の調査（２）―

2007.3

深谷市教育委員会

巻頭図版 1

幡羅遺跡遠景（北から）

第 3 次調査区

巻頭図版 2

第 3 次調査区（東から）

第 3 号建物跡土層断面

第 2 号溝土層断面

第 5 次調査区

巻頭図版 4

第 5 次調査区（西から）

第 7 次調査区

序

埼玉県内で初の発見となった古代榛沢郡役所正倉跡（中宿遺跡）の発見からちょうど10年、幡羅郡役所跡（幡羅遺跡）が県内で２例目の古代郡役所跡として発見されました。その後の調査で、中宿遺跡と同様に大型の倉庫跡などが次々と確認され、広大な敷地を持っていることが分かってきました。幡羅遺跡周辺は一面畑として残っています。また、東には西別府廃寺跡、西別府祭祀遺跡もあり、古代郡役所跡の景観を非常に良く残しています。

大化の改新以降、様々な改革が行なわれ、約半世紀をかけて日本という国家が整えられていきます。幡羅遺跡はそうした時代の中で形成され、200年以上という非常に長期間にわたり幡羅郡の中心であり続けました。こうした地域史の中でも中核となる遺跡が、ほとんど無傷で残っている例は全国的に見ても稀であり、地域で誇れるものです。そのため、深谷市教育委員会では、幡羅遺跡範囲内容確認調査を行ない、この貴重な遺跡を末永く保存していく所存です。

今回の調査報告書は、正倉域の調査成果をまとめたものです。この成果を広く市民の皆様にご紹介することで、日本の歴史の中に息づく地域の歴史や文化について、ご理解を深めていただきたいと存じます。また、この報告書が学術研究はもとより、学校、社会教育などの生涯学習活動を通じて、皆様が歴史を考えるための資料として役立てば、望外の喜びです。

最後に、地権者の方々をはじめとして、発掘調査および報告書作成にあたり深いご理解とご協力をいただきました関係者の皆様に心から感謝を申し上げます。

平成19年３月

深谷市教育委員会

教育長　　猪　野　幸　男

例　　言

1．本書は、埼玉県深谷市東方に所在する幡羅遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、重要遺跡の範囲内容確認調査であり、国庫補助金、県費補助金の交付を受け、深谷市教育委員会が実施した。

3．調査にあたっては、文化庁文化財部記念物課、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、埼玉県発掘調査評価・指導委員会の指導を受けた。

4．今回報告するのは、平成14・16・17年度に行った、第３・５・７～12・16・17次調査に関するものである。各調査区の地権者・地番・面積・調査担当者・調査期間は第１表の通りである。

5．発掘調査及び出土遺物の整理、報告書の執筆は知久裕昭が担当した。

6．墨書土器については佐藤信氏、灰釉陶器については坂野和信氏、田中広明氏、その他の土器については富田和夫氏のご教示を得た。

7．遺跡の基準点測量は、株式会社東京航業研究所に委託した。

8．炭化米及び炭化材の自然科学分析は、株式会社パリノ・サーヴェイに委託した。

9．出土遺物は、深谷市教育委員会が保管している。

10．本遺跡における概要は一部公表されているが、本書をもって正報告とする。

11．発掘調査から報告書作成に至るまで、次の諸氏のご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表したい。

文化庁　　埼玉県生涯学習文化財課

赤熊浩一	浅野晴樹	出浦　崇	出縄康行	井上尚明	今井　宏	大橋泰夫
大谷　徹	書上元博	金子正之	上野川勝	川口武彦	川原秀夫	木戸春夫
木本雅康	栗岡真理子	小林三郎	小林　高	小宮　豪	小宮俊久	齋藤直美
齋藤欣延	酒井清治	坂井秀弥	坂爪久純	坂本和俊	佐藤　信	寺社下博
篠原英政	末木啓介	菅谷浩之	鈴木靖民	須田　勉	高島英之	高橋一夫
竹野谷俊夫	田中広明	田中弘志	辻　史郎	富田和夫	鳥羽政之	中島広顕
中島　宏	中村太一	原　京子	坂野和信	平野　修	昼間孝志	深谷　昇
藤木　海	松田　哲	松本太郎	水口由紀子	宮瀧交二	宮本直樹	村木志伸
村松　篤	室伏　徹	山路直充	山中敏史	吉野　健	渡辺　一	（敬称略）

凡　　例

１．図面中の方位は、全て国家方眼座標の北を表示している。

２．遺物の実測図は、須恵器の断面を黒塗り、灰釉陶器の断面を網掛けで表現した。また、釉のかかる範囲や赤彩部分については、適宜スクリーントーンで表した。

３．遺物観察表の記載は、以下の通りである。

・計測値の単位はcmである。

・器径、器高で（ ）を付したものは推定値である。

・種別は土師器をＨ、須恵器をＳ、ロクロ土師器をＲ、灰釉陶器をＫとした。

・胎土は、肉眼で確認できた範囲での含有物を、以下のアルファベットで表した。

Ａ…白色粒子、Ｂ…赤色粒子、Ｃ…黒色粒子、Ｄ…石英、Ｅ…角閃石、Ｆ…片岩

Ｇ…白色針状物質、Ｈ…砂礫、Ｉ…雲母

４．遺物の注記、および原図における遺構の略号は、次の通りである。

建物跡…ＳＢ、竪穴建物跡…ＳＪ、溝…ＳＤ、土壙…ＳＫ

５．遺構・遺物実測図の縮尺は、適宜スケールで示した。

６．土層説明中の色調については、『新版標準土色帖』によった。

年 度	調査区	調査期間	地権者	地　　番	調査面積	調査通知	担当者
平成14	第３次	H14.7.24～10.23	田村哲男 栗原安治	東方字森吉3004-1 3005-1	2,000㎡	H14.7.19付深教生発第493号	知久裕昭 青木克尚
平成16	第５次	H16.7.1　～11.30	栗原盛次	東方字辻3059-1	1,800㎡	H16.6.28付深教生発第5758号	知久裕昭
	第７次	H16.9.7　～11.30	岡本正一郎	東方字辻3052-3	700㎡	H16.9.8付深教生発第9333号	知久裕昭
	第８次	H16.12.1～12.24	栗原盛次	東方字辻3059-1	200㎡	H16.6.28付深教生発第5758号	知久裕昭
	第９次	H17.2.8　～2.22	江本昭典	東方字森吉2999-1	100㎡	H17.2.4付深教生発第16190号	知久裕昭
	第10次	H17.3.7　～3.11	江原弘明	東方字風張2888-1	100㎡	H17.3.2付深教生発第17250号	知久裕昭
	第11次	H17.3.7　～3.11	栗原安治	東方字森吉3005-1	100㎡	H17.3.2付深教生発第17250号	知久裕昭
	第12次	H17.3.17～3.22	原　光男	東方字辻3053	100㎡	H17.3.2付深教生発第17512号	知久裕昭
	第16次	H16.11.1～12.24	中嶋光男	東方字風張2887-1	200㎡	H16.10.7付深教生発第10637号	知久裕昭
平成17	第17次	H17.8.3　～8.5	山崎松男	東方字風張2787-2	200㎡	H17.8.1付深教生発第253号	知久裕昭

第１表　調査区一覧表

発掘調査の組織

発掘調査（平成14・16・17年度）

	教 育 長	蜂須　　栄	（平成14年度）
		青木　秀夫	（平成16･17年度）
	教育次長	工藤　友明	（平成14年度）
		古川　国康	（平成16･17年度）
	次　　長	大澤　芳正	
事務局　深谷市教育委員会生涯学習課	課　　長	八須　信治	（平成14年度）
		山口　　清	（平成16･17年度）
		澤出　晃越	（平成17年度）
	主幹兼課長補佐	吉村　善也	（平成14年度）
	課長補佐	田口　英夫	（平成14年度）
		原　　常博	（平成16･17年度）
		猪野塚　昇	（平成16･17年度）
		萩原　昭一	（平成17年度）
	文化財保護係長	木村　文夫	（平成14年度）
		土屋　次雄	（平成16年度）
		青木　克尚	（平成17年度）
	主　　任	古池　晋禄	（平成14年度）
		青木　克尚	（平成14･16年度）
		畦元　直大	（平成16･17年度）
		荻野　直美	（平成17年度）
		知久　裕昭	（平成17年度）
	主　　事	矢野　有紀	（平成14年度）
		荻野　直美	（平成16年度）
		知久　裕昭	（平成14･16年度）
	臨時職員	永井　智教	（平成16･17年度）

報告書刊行（平成18年度）

調査主体者	深谷市教育委員会	教 育 長	猪野　幸男
		教育次長	古川　国康
		次　　長	中村　信雄
事務局	深谷市教育委員会生涯学習課	課　　長	澤出　晃越
		主幹兼課長補佐	武井　　茂
		課長補佐	大谷　住雄
		文化財保護係長	古池　晋禄
		主　　査	高村　敏則
		主　　任	畦元　直大
			荻野　直美
			知久　裕昭
		臨時職員	永井　智教
			吉野　智貴
			栗原貴世実

調査参加者

阿部ルリ子	大澤　大美	大島　周子	小野寺和子	河合　詔子
久米　紀子	倉上多美子	栗原　知恵	小沼　和子	島崎　祐子
砂田伊久子	関口由美子	高田　秀子	滝田　悦子	田中香代子
知久　祥子	浜野　光子	福島祐美子	藤浦　春枝	藤野ウメ子
丸山　和枝	棟安　祥子	本橋　玲子	森　　光代	除村　敦子
横山　明美	吉野九の枝	吉野真由美		

目　　次

序
例言
凡例
発掘調査の組織
目次
Ⅰ　発掘調査の経過……1
　1　調査に至る経過……1
　2　調査方法……1
　3　調査の経過……1
Ⅱ　遺跡の環境……4
　1　地理的環境……4
　2　歴史的環境……5
Ⅲ　遺構と遺物……10
　1　旧石器・縄文時代の遺物……10
　2　第３次調査……11
　　a　概要……11
　　b　建物跡……11
　　c　竪穴建物跡……34
　　d　溝……44
　　e　その他の遺構・遺物……44
　3　第５・８次調査……50
　　a　概要……50
　　b　建物跡……53
　　c　竪穴建物跡……55
　　d　溝……73
　　e　土坑、調査区出土遺物……77
　4　第７次調査……82
　　a　概要……82
　　b　竪穴建物跡……82
　　c　溝……82
　　d　その他の遺構・遺物……88
　5　第16次調査……89
　　a　概要……89
　　b　溝……89
　　c　その他の遺構・遺物……89
　6　第９～12・17次調査……94
　　a　第９次調査……94
　　b　第10次調査……95
　　c　第11次調査……96
　　d　第12次調査……97
　　e　第17次調査……98

Ⅳ　調査のまとめ…… 101
付編１　放射性炭素年代測定…… 116
付編２　第32号建物跡南から出土した炭化材の樹種同定…… 119
報告書抄録

挿図目次

第１図　グリッド分割図…… 2
第２図　埼玉県の地形図…… 4
第３図　幡羅遺跡周辺の遺跡…… 6
第４図　幡羅遺跡周辺の地籍図…… 7
第５図　幡羅遺跡の範囲と周辺遺跡…… 8
第６図　幡羅遺跡全体測量図…… 9
第７図　旧石器・縄文時代の遺物…… 10
第８図　第３次調査区全体測量図…… 12
第９図　第３号建物跡…… 13
第10図　第３号建物跡土層断面図…… 14
第11図　第４・20号建物跡…… 15
第12図　第４号建物跡土層断面図…… 16
第13図　第５・14号建物跡…… 17
第14図　第５・14号建物跡土層断面図（１）…… 18
第15図　第５・14号建物跡土層断面図（２）…… 19
第16図　第６号建物跡…… 21
第17図　第７号建物跡…… 22
第18図　第８号建物跡…… 22
第19図　第９号建物跡…… 23
第20図　第10・11・23号建物跡…… 24
第21図　第12号建物跡…… 24
第22図　第13号建物跡…… 25
第23図　第15号建物跡…… 26
第24図　第17号建物跡…… 27
第25図　第18号建物跡…… 28
第26図　第19号建物跡…… 29
第27図　第21号建物跡…… 30
第28図　第22号建物跡…… 31
第29図　建物跡出土遺物…… 32
第30図　第３号建物跡周辺出土大甕…… 33
第31図　第４号竪穴建物跡…… 34
第32図　第４号竪穴建物跡出土遺物…… 35
第33図　第５・７号竪穴建物跡…… 36
第34図　第５・７号竪穴建物跡土層断面図…… 37
第35図　第６号竪穴建物跡…… 37
第36図　第６号竪穴建物跡出土遺物…… 38
第37図　第８号竪穴建物跡…… 40
第38図　第９号竪穴建物跡…… 41
第39図　第10号竪穴建物跡…… 42
第40図　第５・７～10号竪穴建物跡出土遺物 … 43
第41図　第２号溝…… 45
第42図　第２号溝出土遺物…… 46
第43図　第５号溝…… 47
第44図　第３次調査区溝・土坑出土遺物…… 48
第45図　第３次調査区出土遺物…… 49
第46図　第５・８次調査区全体測量図…… 51
第47図　第32号建物跡、第173号土坑、第46・48号竪穴建物跡…… 52
第48図　第32号建物跡、第173号土坑、第46・48号竪穴建物跡土層断面図…… 53
第49図　第32号建物跡、第173号土坑土層断面図 54
第50図　第32号建物跡、第173号土坑出土遺物 … 54
第51図　第34号竪穴建物跡…… 56
第52図　第34号竪穴建物跡出土遺物…… 57
第53図　第35号竪穴建物跡…… 59
第54図　第35号竪穴建物跡出土遺物…… 60
第55図　第39～41号竪穴建物跡 …… 61
第56図　第39号竪穴建物跡遺物出土状況…… 62
第57図　第39号竪穴建物跡出土遺物（１）…… 63
第58図　第39号竪穴建物跡出土遺物（２）…… 64
第59図　第33・38・40・42～45号竪穴建物跡出土遺物…… 66
第60図　第46・47号竪穴建物跡出土遺物…… 67
第61図　第52号竪穴建物跡…… 68
第62図　第52号竪穴建物跡出土遺物…… 69
第63図　第53・54号竪穴建物跡…… 70
第64図　第53号竪穴建物跡遺物出土状況…… 71
第65図　第53号竪穴建物跡出土遺物…… 72
第66図　第54・55号竪穴建物跡出土遺物…… 73
第67図　第12号溝…… 74

第68図　第12号溝土層断面図…… 75
第69図　第12号溝出土遺物…… 76
第70図　第157・171号土坑…… 78
第71図　第228号土坑 …… 79
第72図　第５次調査区土坑出土遺物…… 79
第73図　第５・８次調査区出土遺物…… 80
第74図　第７次調査区全体測量図…… 83
第75図　第12号溝…… 84
第76図　第13号溝…… 85
第77図　第50号竪穴建物跡周辺…… 86
第78図　第７次調査区北部土坑群…… 87
第79図　第７次調査区出土遺物…… 88
第80図　第16次調査区全体測量図…… 90
第81図　第16次調査区遺構実測図（１）…… 91
第82図　第16次調査区遺構実測図（２）…… 92
第83図　第16次調査区出土遺物…… 93
第84図　第９次調査区全体測量図…… 94
第85図　第10次調査区全体測量図…… 95
第86図　第11次調査区全体測量図…… 96
第87図　第12次調査区全体測量図…… 97
第88図　第９～11次調査区出土遺物 …… 98
第89図　第17次調査区全体測量図…… 99
第90図　鉄製品集成…… 100
第91図　正倉院の変遷（１）…… 102
第92図　正倉院の変遷（２）…… 103
第93図　正倉院の変遷（３）…… 105
第94図　正倉院の変遷（４）…… 106
第95図　倉庫建物の変遷（１）…… 107
第96図　倉庫建物の変遷（２）…… 108
第97図　正倉成立前の土器（１）…… 109
第98図　正倉成立前の土器（２）…… 110
第99図　正倉の廃絶を示す土器…… 110
第100図　第１・２次調査区全体測量図 …… 112
第101図　正倉院の範囲 …… 113

表 目 次

第１表　調査区一覧表
第２表　建物跡出土遺物観察表（１）…… 30
第３表　建物跡出土遺物観察表（２）…… 31
第４表　第４号竪穴建物跡出土遺物観察表（１）…… 35
第５表　第４号竪穴建物跡出土遺物観察表（２）…… 36
第６表　第６号竪穴建物跡出土遺物観察表 …… 39
第７表　第５・７～10号竪穴建物跡出土遺物観察表…… 42
第８表　第２号溝出土遺物観察表（１）…… 46
第９表　第２号溝出土遺物観察表（２）…… 47
第10表　第３次調査区溝・土坑出土遺物観察表（１）…… 48
第11表　第３次調査区溝・土坑出土遺物観察表（２）…… 49
第12表　第３次調査区溝・土坑出土遺物観察表（３）…… 50
第13表　第３次調査区出土遺物観察表…… 50
第14表　第32号建物跡、第173号土坑出土遺物観察表…… 55
第15表　第34号竪穴建物跡出土遺物観察表…… 58
第16表　第35号竪穴建物跡出土遺物観察表…… 60
第17表　第39号竪穴建物跡出土遺物観察表（１）…… 64
第18表　第39号竪穴建物跡出土遺物観察表（２）…… 65
第19表　第33・38・40・42～45号竪穴建物跡出土遺物観察表…… 65
第20表　第46・47号竪穴建物跡出土遺物観察表… 65
第21表　第52号竪穴建物跡出土遺物観察表…… 69
第22表　第53号竪穴建物跡出土遺物観察表（１）…… 70
第23表　第53号竪穴建物跡出土遺物観察表（２）…… 71
第24表　第54・55号竪穴建物跡出土遺物観察表… 73
第25表　第12号溝出土遺物観察表…… 77
第26表　第５次調査区土坑出土遺物観察表…… 81
第27表　第５・８次調査区出土遺物観察表…… 81
第28表　第７次調査区出土遺物観察表…… 88
第29表　第16次調査区出土遺物観察表…… 93
第30表　第９～11次調査区出土遺物観察表 …… 98
第31表　鉄製品一覧表…… 100
第32表　正倉域における建物跡一覧表…… 106

図 版 目 次

巻頭図版１　幡羅遺跡遠景（北から）　第３次調査区
巻頭図版２　第３次調査区（東から）　第３号建物跡土層断面
巻頭図版３　第２号溝土層断面　第５次調査区
巻頭図版４　第５次調査区（西から）　第７次調査区
図版１　第３次調査区（東から）　第３次調査区（北東から）　第３次調査区（西から）
図版２　第３号建物跡　第３号建物跡下層　第３号建物跡周辺大甕出土状況
図版３　第３号建物跡土層断面（１）　第３号建物跡土層断面（２）　第３号建物跡土層断面（３）
図版４　第４号建物跡　第４号建物跡土層断面（１）　第４号建物跡土層断面（２）
図版５　第３次調査区（南西から）　第３次調査区（南東から）　第５号建物跡
図版６　第７号建物跡　第８号建物跡　第９号建物跡
図版７　第19号建物跡　第19号建物跡西柱列北第２柱穴　第19号建物跡遺物出土状況
図版８　第19号建物跡周辺　第22号建物跡　第17・18号建物跡柱穴
図版９　第２号溝土層断面（１）　第４号竪穴建物跡　第４号竪穴建物跡遺物出土状況
図版10　第５・７号竪穴建物跡　第６号竪穴建物跡　第８号竪穴建物跡
図版11　第９号竪穴建物跡　第10号竪穴建物跡　ナイフ形石器出土状況
図版12　第４号建物跡土層断面（３）　第４号建物跡土層断面（４）　第４号建物跡土層断面（５）
第２号溝土層断面（２）　第４号竪穴建物跡カマド　第４号竪穴建物跡貯蔵穴
第７号竪穴建物跡遺物出土状況　第５号溝土層断面
図版13　第32号建物跡、第173号土坑（１）　第32号建物跡土層断面（１）　第32号建物跡土層断面（２）
図版14　第32号建物跡土層断面（３）　第173号土坑土層断面（１）　第５次調査区（西から）
図版15　第34号竪穴建物跡　第39～41号竪穴建物跡　第171号土坑
図版16　第32号建物跡、第173号土坑（２）　第32号建物跡土層断面（４）　第32号建物跡土層断面（５）
第173号土坑土層断面（２）　第12号溝（１）　第12号溝（２）　第46号竪穴建物跡遺物出土状況
第35号竪穴建物跡
図版17　第８次調査区（北から）　第52号竪穴建物跡　第53号竪穴建物跡
図版18　第７次南調査区（北西から）　第12号溝（西から）　第12号溝土層断面
図版19　第13号溝　第13号溝土層断面　第７次北調査区（東から）
図版20　第16次調査区（北から）　第27号溝　第16号溝
図版21　第９次調査第６トレンチ　第９次調査第３トレンチ　第９次調査第４トレンチ
第12次調査第２トレンチ　第18号溝　第12次調査第４トレンチ　第12次調査第５トレンチ
図版22　第７図１（ナイフ形石器）　第７図12（石鏃）　縄文時代の遺物
図版23　第29図２（第４号建物跡出土）　第29図20（第19号建物跡出土）　建物跡出土遺物
図版24　第３号建物跡周辺出土大甕　第30図２（第３号建物跡周辺出土大甕）
第32図１（第４号竪穴建物跡出土）　第32図２（第４号竪穴建物跡出土）
第32図３（第４号竪穴建物跡出土）
図版25　第32図４（第４号竪穴建物跡出土）　第32図９（第４号竪穴建物跡出土）
第４号竪穴建物跡出土遺物（１）　第４号竪穴建物跡出土遺物（２）
図版26　第36図２（第６号竪穴建物跡出土）　第36図４（第６号竪穴建物跡出土）
第36図５（第６号竪穴建物跡出土）　第36図８（第６号竪穴建物跡出土）
第36図９（第６号竪穴建物跡出土）　第36図11（第６号竪穴建物跡出土）
第36図13（第６号竪穴建物跡出土）　第36図14（第６号竪穴建物跡出土）

第36図15（第６号竪穴建物跡出土）　第36図16（第６号竪穴建物跡出土）
図版27　第36図17（第６号竪穴建物跡出土）　第40図８（第７号竪穴建物跡出土）
第40図13（第８号竪穴建物跡出土）　第40図14（第８号竪穴建物跡出土）
第40図20（第10号竪穴建物跡出土）　第９・10号竪穴建物跡出土遺物　第６号竪穴建物跡出土遺物（１）
図版28　第６号竪穴建物跡出土遺物（２）第５・７号竪穴建物跡出土遺物　第８・10号竪穴建物跡出土編物石
図版29　第42図１（第２号溝出土）　第42図８（第２号溝出土）　第42図11（第２号溝出土）
第２号溝出土遺物（１）　第２号溝出土遺物（２）
図版30　第３号溝出土遺物　第４号溝、土坑出土遺物　第３次調査区出土遺物（１）　第３次調査区出土遺物（２）
図版31　第45図７（第３次調査区出土）第45図８（第３次調査区出土）　第50図７（第32号建物跡出土）
第32号建物跡、第173号土坑出土遺物
図版32　第52図１（第34号竪穴建物跡出土）　第52図２（第34号竪穴建物跡出土）
第52図３（第34号竪穴建物跡出土）　第52図15（第34号竪穴建物跡出土）
第52図16（第34号竪穴建物跡出土）　第52図19（第34号竪穴建物跡出土）
第54図５（第35号竪穴建物跡出土）　第57図11（第39号竪穴建物跡出土）
図版33　第57図18（第39号竪穴建物跡出土）　第59図10（第43号竪穴建物跡出土）
第59図22（第45号竪穴建物跡出土）　第60図１（第46号竪穴建物跡出土）
第60図２（第46号竪穴建物跡出土）　第60図３（第46号竪穴建物跡出土）
第34号竪穴建物跡出土遺物（１）
図版34　第34号竪穴建物跡出土遺物（２）　第35号竪穴建物跡出土遺物
図版35　第39号竪穴建物跡出土遺物（１）　第39号竪穴建物跡出土遺物（２）
図版36　第39号竪穴建物跡出土遺物（３）　第33・38・40・42～44号竪穴建物跡出土遺物
図版37　第45～47号竪穴建物跡出土遺物　第52号竪穴建物跡出土遺物
図版38　第53号竪穴建物跡出土遺物（１）　第53号竪穴建物跡出土遺物（２）
図版39　第52号竪穴建物跡出土鍛造剥片　第53号竪穴建物跡出土鍛造剥片
第65図４（第53号竪穴建物跡出土）　第65図10（第53号竪穴建物跡出土）
第65図９（第53号竪穴建物跡出土）　第54・55号竪穴建物跡出土遺物
図版40　第69図１（第12号溝出土）　第69図２（第12号溝出土）　第69図４（第12号溝出土）
第69図５（第12号溝出土）　第69図７（第12号溝出土）　第69図８（第12号溝出土）
第69図９（第12号溝出土）　第69図11（第12号溝出土）　第72図１（第136号土坑出土）
第72図２（第155号土坑出土）
図版41　第72図６（第157号土坑出土）　第72図８（第166号土坑出土）　第12号溝出土遺物（１）
第12号溝出土遺物（２）　第５次調査区土坑出土遺物
図版42　第５次調査区出土遺物　第５・８次調査区出土遺物　第７・９～11次調査区出土遺物
図版43　第16次調査区出土遺物　鉄製品　第３号建物跡周辺出土炭化米　第32号建物跡周辺出土炭化米
付編２図版１
付編２図版２
付編２図版３

Ⅰ　発掘調査の経過

1　調査に至る経過

深谷市は、埼玉県北部に位置し、北を群馬県との境に接する。平成18年１月１日に旧岡部町、旧川本町、旧花園町と合併し、総面積137.58㎢、人口約146,500人となった。当地は農業、工業ともに盛んで、古くから深谷ネギの産地としても有名である。歴史的に見ても、後期旧石器、縄文、弥生時代、古墳時代を始め、幡羅郡家や榛沢郡家が造られ、それぞれ郡の中心として機能していた奈良～平安時代、また百済木遺跡で郡領クラスの豪族が居宅を営んだ奈良時代、深谷上杉氏の拠点であった室町・戦国時代、宿場町として栄えた江戸時代、そして近・現代まで多くの遺跡、文化財が残され、非常に重要な土地であったことが窺える。鎌倉時代の有力御家人であった畠山重忠の本拠地として、或いは近代日本経済界を築いた渋沢栄一の生地としても良く知られる。

幡羅遺跡は、深谷市の北東部、熊谷市との境に位置する。幡羅遺跡に隣接する熊谷市西別府廃寺跡の地は、かねてより瓦が採集されることが知られており、寺院跡や窯跡の可能性が指摘されていた。しかし、長らくその詳細が明らかとされることはなく、熊谷市教育委員会によって1990年に調査されるに至り、ようやく古代寺院跡であることが明らかとなった。

また、同様に隣接する西別府祭祀遺跡は、昭和38年に大場磐雄、小沢国平らによって調査され、馬形や櫛形等の滑石製模造品や土器等が採集された。遺跡は、台地下の湧水地点周辺にあり、水霊信仰との関係が強いと考えられる。

西別府における古代寺院跡や祭祀跡の存在は、周辺に官衙遺跡の存在を想定させるものであった。しかし、その所在については、全く不明であった。平成13年１月、遺跡の北端部で開発が行なわれることが明らかとなり、事前の確認調査が実施された。この時点で、古墳の他に大型の倉庫跡が存在することが明らかとなる。立地や周辺の状況は、既に発見されていた榛沢郡家跡である中宿遺跡に似ており、幡羅郡家の正倉跡との見方が強まった。そのため市教育委員会は、事業主体者と、遺跡保存のための協議を行い、設計変更による現状保存をすることで同意した。翌13年度には、更に詳細な確認調査を実施し、２棟の正倉跡と正倉院区画溝を確認している（第１・２次調査）。

市教育委員会ではこの成果を受け、遺跡の重要性を認識し、平成14年度から保存目的の範囲内容確認調査を開始した。調査は、休耕時に農地を借り上げ、調査終了後は復旧する方針で行なった。平成14年度は第３次調査、15年度は第４次調査、16年度は第５～12・16次調査、17年度は第13～15・17・18次調査、18年度は19・20次調査を実施した。今回の報告分は、この内、正倉院及びその周辺についてであり、その他については今後報告書を刊行する予定である。

2　調査方法

幡羅遺跡では、平成14年度に作成した、航空測量による地形図に基づいて区割りを行なっている（第１図）。範囲は南北600m、東西600mである。この範囲内に、100×100mの大グリッドを設定し、内部を５×５mの小グリッドに分割した。小グリッドは、北西隅から平行式に１～400と呼称した。

3　調査の経過

幡羅遺跡の範囲と構造を確認するため行なった調査の内、既報告である平成13年度のものを除く、正倉域の調査経過について、年度毎に説明する。

平成14年度：第３次調査

前年度に確認された正倉院の、南への広がりを確認する目的で調査区を設定した。その結果、第１・２次調査で確認したものとは別の正倉列及び区画溝が確認

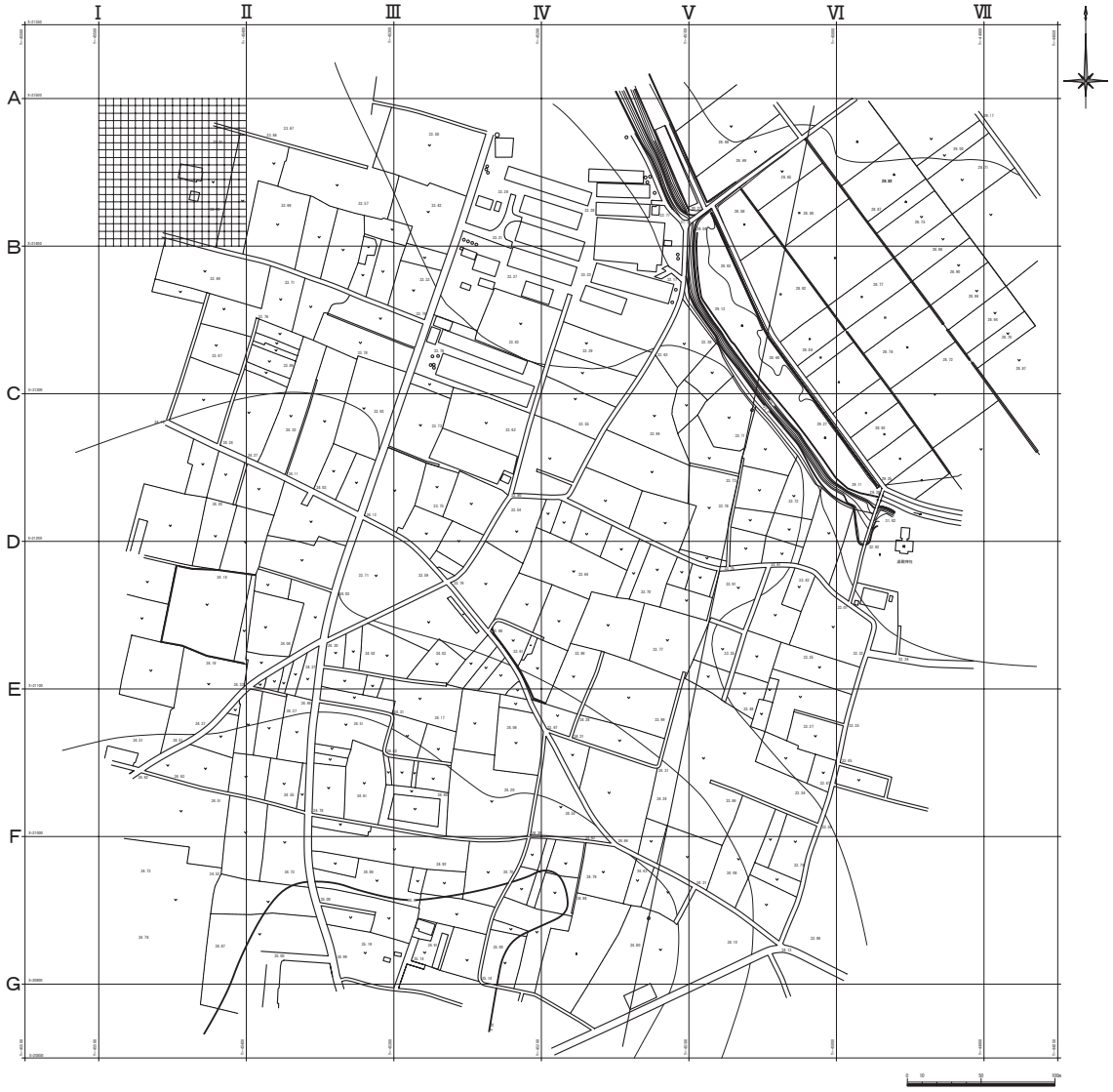
され、正倉院が２つ存在することが明らかとなった。正倉の前段階及び後段階の竪穴建物跡も多数確認され、正倉の開始時期と廃絶時期を推定する上で、貴重な資料が得られた。

確認された主な遺構は、掘立柱建物跡16棟、礎石建物跡４棟、竪穴建物跡９棟、正倉院（南）の北辺区画溝等である。

平成16年度：第５・７～12・16次調査

第３次調査において明らかになった正倉院（南）の南への広がりを確認するため、第５・７・８次調査区を設定した。第５・７次調査では、正倉院（南）の南を区画する溝が確認された。しかし、第５次調査で、礎石建物が区画溝埋没後に建てられていたことが分かり、少なくとも南辺を区画する溝は、正倉の最終段階まで機能していなかったことが明らかとなった。正倉域が広がり、新たに区画溝が掘削されていることも考えられ、第８次調査区を設定したが、区画施設跡は確認されなかった。

第５・７・８次調査で確認された主な遺構は、礎石建物跡１棟、礎石建物跡に付随する土坑、竪穴建物跡



第１図　グリッド分割図

22棟、正倉院（南）の南辺区画溝、古代末の溝１条、古代のものと思われる土坑３基等である。

第９～12次調査は、正倉院（南）の東西への広がり、正倉院（北）の南への広がりを確認する目的で行なったトレンチ調査である。調査の結果、正倉院（南）の西への広がりは確認できなかったが、正倉院（北）の南辺区画溝と正倉院（南）の東辺区画溝が確認され、正倉院の範囲が大部分明らかになった。

第16次調査は、正倉院（南）の西への広がりを確認する目的で行なった。当初、下郷遺跡第５次調査として行なったが、正倉院の内側に当たることが明らかになったため、幡羅遺跡第16次調査と調査名称を後日改めた。確認された主な遺構は、土坑７基と古代末頃の溝２条である。

平成17年度・第17次調査

第17次調査は、正倉院（南）の西限を明らかにする目的で行なったトレンチ調査である。この調査で、南北２つの正倉院の範囲がほぼ確定した。

文化庁文化財部記念物課調査官の視察

埼玉県発掘調査評価・指導委員の視察

第３号建物跡

第５次調査風景

第３次調査風景

第７次調査風景

Ⅱ　遺跡の環境

1　地理的環境

深谷市の地形は、ＪＲ高崎線付近を境として、南に櫛挽台地、北に妻沼低地が広がる。櫛挽台地は、荒川によって作られた古い扇状地が浸食されてできた沖積台地で、寄居付近を頂部としている。妻沼低地は、利根川の自然堤防及び沖積低地であり、加須低地と並び利根川の中流低地の一つに数えられる。

櫛挽台地は、構造的には北西側の武蔵野面に比定される櫛挽面（櫛挽段丘）と南東側の立川面に比定される寄居面（御稜威ヶ原段丘）とで段丘状に形成されている。櫛挽面はほぼＪＲ高崎線沿いの崖線で比高差５～10mをもって妻沼低地と接しているが、寄居面は高崎線より北へ1.5～1.8km程延びていて、比高差２～５mをもって妻沼低地と接している。接線付近での標高は、櫛挽面が40～50m、寄居面が32～36m、妻沼低地が30～31mである。櫛挽面は標高70m付近より発する上唐沢川、押切川、戸田川、唐沢川等が北流していて、櫛挽面北端部は南北に台地を開析する浅い谷が発達したものと考えられる。末端には所謂先端湧水と認められる池等もある。寄居面にはこうした谷筋はほとんど認められず、妻沼低地と接する台地末端部を除き、水利上は生活に不向きだったと考えられる。

妻沼低地は、利根川右岸に広がる肥沃な低地である。南は熊谷市付近を境として秩父山塊に連なる丘陵や台地と大宮台地に挟まれた荒川低地に続き、東は加須低地に接する。妻沼低地は、現在ではほとんど平坦であるが、利根川の氾濫や流路の変遷等により、自然堤防が発達しているものと考えられる。

幡羅遺跡は、櫛挽台地の先端に位置する。周辺一帯は畑地であり、遺跡の保存状況は非常に良好である。北側の低地部分は、崖の切り崩しや埋め立てを伴う耕地整理が行なわれているが、台地上は土地の改変は無く、明治時代初期の地籍図とほとんど変わらない（第４図参照）。北西の西別府祭祀遺跡には、昭和40年代頃まで湧水が豊富にあったが、台地上に工業団地が建

第２図　埼玉県の地形図

設されると、湧水が枯渇したようである。

2　歴史的環境

幡羅遺跡周辺には、数多くの遺跡が存在する。ここでは、郡家成立前の古墳時代後期から平安時代にかけて概観する（第３図）。

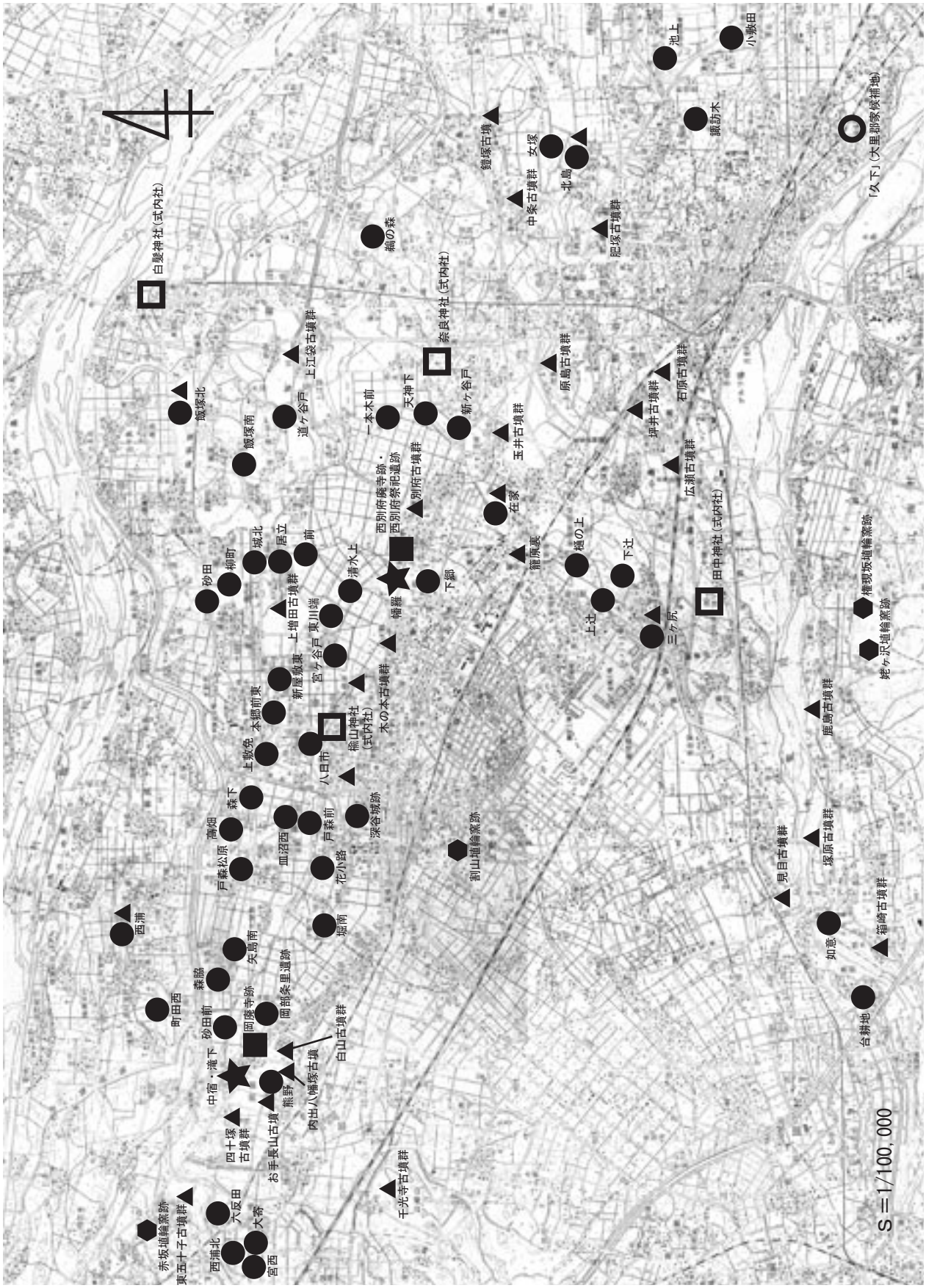
遺跡のほとんどは、低地から台地の縁辺部にかけて分布する。古墳時代後期には、低地域に集落、台地縁辺に古墳が築かれる場合が多い。６世紀代の集落は、上敷免遺跡周辺や城北遺跡周辺、一本木前遺跡等で爆発的に増加する。７世紀になると、それらの集落は規模を縮小させるものが多く、城北遺跡は継続しない。新屋敷東遺跡も同様に住居跡の数は減少するものの、７世紀後半或いは８世紀代と推定される大型倉庫跡が確認されており、特筆される。

一方、宮ヶ谷戸遺跡、東川端遺跡等、７世紀に入って規模が大きくなる集落も認められる。両遺跡は、幡羅遺跡の成立時期と重なる７世紀後半に入ってから住居数は増加し、関連性が考えられる。同じ頃から、西別府祭祀遺跡で、湧水点における祭祀が行なわれるようになる。出土品は石製模造品や墨書土器等で、木製品は確認されていない。祭祀は11世紀頃まで継続するとされる。また、西別府廃寺跡は８世紀初頭に造営されたと考えられ、基壇建物跡や区画溝、多量の瓦等が出土している。寺院は９世紀後半頃までは確実に機能していたと考えられ、その後は集落化が進む。

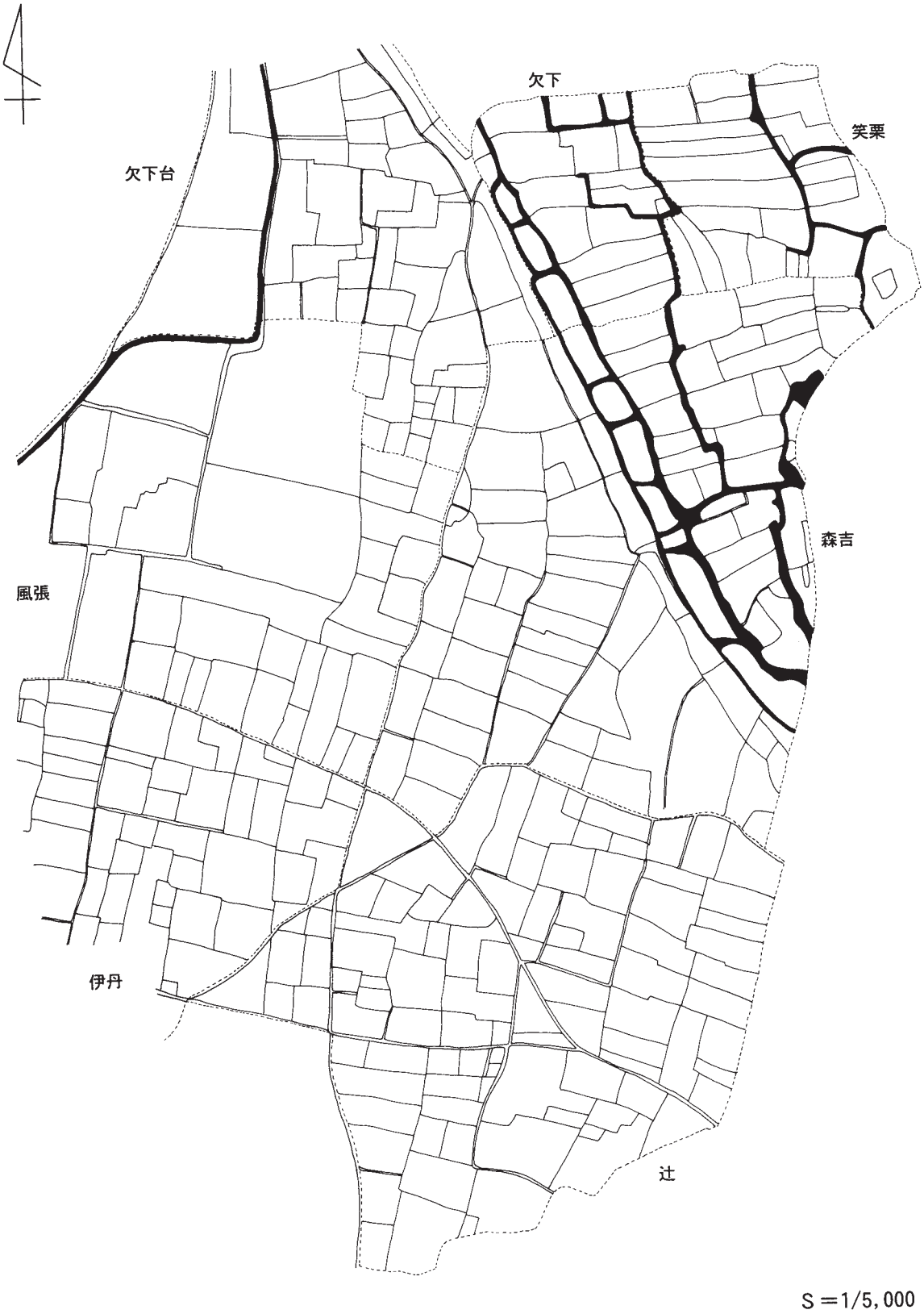
次に郡家跡についてみていく。幡羅遺跡は７世紀後半に、それまで墓域であった台地縁辺に出現する。官衙域の南に広がる下郷遺跡は、周辺に広がる官衙に関連する集落跡で、出現は幡羅遺跡と同時期である。幡羅遺跡が郡家として整備される７世紀末から８世紀になると、住居跡の数が増加する。榛沢郡家跡の熊野・中宿遺跡も同様に７世紀後半、それまでの墓域に出現する。熊野遺跡は初期評家の機能を有していたと考えられている。幡羅郡の東の埼玉郡家跡についてはまだ確認されていないが、整然と並ぶ掘立柱建物跡が出土した池上遺跡、出挙木簡が出土した小敷田遺跡、律令期の祭祀跡や９～10世紀の居宅跡が確認された諏訪木遺跡の周辺に想定される。東山道武蔵路のルートは、この付近に推定される。これらの遺跡群のやや北西に位置する大集落である北島遺跡からは、東山道武蔵路から分岐するとみられる道路跡が確認されている。また、幡羅遺跡と熊野遺跡からも道路跡が確認されており、これらを結ぶルートは伝路であった可能性がある。このルートが旧中山道と一部重なっている点は注目すべきであろう。

９世紀以降になると、集落は分散化する傾向があり、小規模な集落が数多く認められる。台地縁辺部に深谷城跡、花小路遺跡、堀南遺跡等の集落が進出するのもこの頃である。深谷城跡からは掘立柱建物跡や多量の土器が出土し、灰釉陶器も含まれる。花小路遺跡は、仏堂と思われる建物跡や、官衙的な掘方、規模をもつ掘立柱建物跡が確認されている。また、飯塚北遺跡、北島遺跡、諏訪木遺跡等で、方一町程度の方形区画施設跡がみられるようになる。幡羅遺跡においても、ほぼ同規模の方形区画施設が９世紀或いは10世紀頃出現する。内部の建物跡が未確認のため、施設の性格は不明だが、それらの遺跡との関係から館の可能性が考えられる。

後期古墳は、東は別府古墳群から西は楡山神社付近まで、幾つかのまとまりをもちながら分布している。この地域の古墳群においては、現在のところ、前方後円墳等傑出した古墳は確認されていない。終末期古墳については、幡羅遺跡の南方約２㎞にある籠原裏遺跡で、径20m未満の円墳群が確認されている。ここからは、鉄製鞘尻金具、銅製双脚金物等が出土しており、古墳群中の幾つかは、八角形墳とする見解もある。また、同じく南東約５㎞にある広瀬古墳群中には、上円下方墳といわれる宮塚古墳（径約24m）がある。一方、榛沢郡家跡の熊野・中宿遺跡周辺では、６世紀後半から７世紀にかけての首長墓とみられる４基の古墳があり、その変遷が推定されている。



第３図　幡羅遺跡周辺の遺跡（古墳時代後期～平安時代）



第４図　幡羅遺跡周辺の地籍図（明治時代の地籍図をもとに作成）

第５図　幡羅遺跡の範囲と周辺遺跡

第６図　幡羅遺跡全体測量図（Ｓ＝１／4,000）

（註：平成19年１月までの調査成果で、道路跡については、東半が推定線である。）

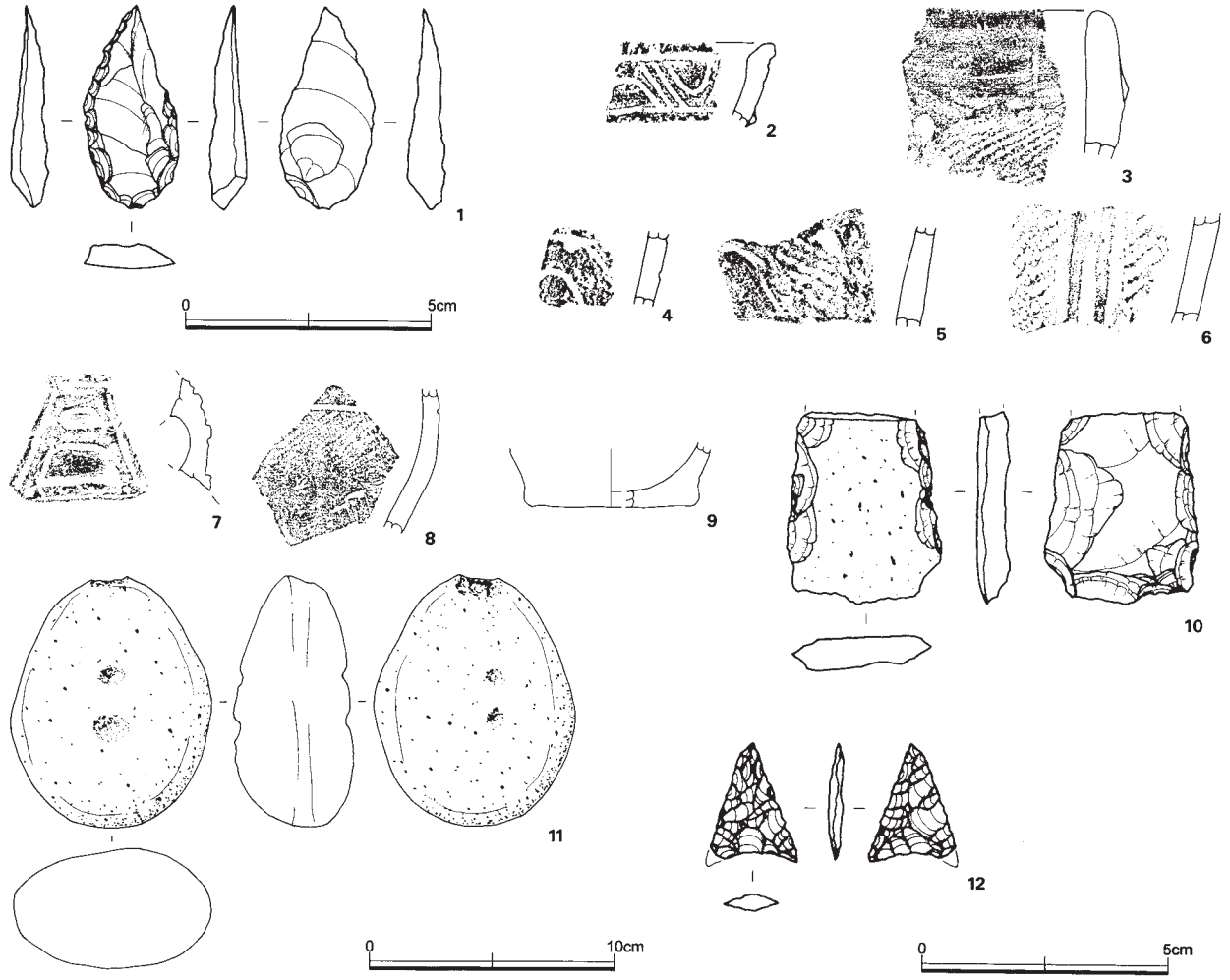
Ⅲ　遺構と遺物

１　旧石器・縄文時代の遺物

第７図１はナイフ形石器である。第３次調査の遺構確認時にソフトローム上面から出土した。チャート製で、打面部を基端とする。裏面は打瘤痕があり、調整は行なわれない。表面は、片側及び基部周辺に小剥離が施される。長さ4.6㎝、幅1.9㎝、厚さ0.5㎝を測る。後期旧石器時代の所産である。

２～12は縄文時代の遺物である。２・４・５・10・12は第３次調査区、３は第11次調査区、６・７・９は第５次調査区、８・11は第７次調査区から出土した。

２は口唇部がやや外反する。口縁部には三角形の区画が、結節沈線により横に連続して描かれる。文様帯は、隆帯により区画される。胎土に金雲母を含む。３～６は加曽利Ｅ式土器である。３は口縁部資料で、微隆起線とＬＲの縄文が施される。４・５は沈線により弧状の文様が描かれる。５はＬＲの縄文が看取できる。６は隆帯と凹線による懸垂文とＲＬの縄文が施される。７は注口土器の把手であろうか。隆帯で方形区画を作り、中は無文、隆帯上にＬＲの縄文が施される。隆帯上の文様基点には、二個一組の刺突がなされる。８は胴上部にＬＲの縄文と横位の沈線が施される。後期の所産と思われる。９は底部資料である。推定底径6.8㎝を測る。



第７図　旧石器・縄文時代の遺物

10～12は石器である。10は打製石斧である。硬質の砂岩製で、片面に自然面を残す。残存長7.7㎝、幅6.2㎝、厚さ1.2㎝を測る。11は磨石である。両面に小さな凹みが２箇所ずつある。安山岩製で、長さ10㎝、幅8.0㎝、厚さ4.7㎝を測る。12は石鏃である。チャート製で、長さ2.4㎝、残存幅1.8㎝、厚さ0.3㎝を測る。

2　第３次調査

a　概要

第３次調査区は、Ｃ－Ⅲ－87～Ｃ－Ⅳ－263グリッドに設けた。第１・２次調査区で確認された正倉院の広がりを確認する目的で調査区を設定したが、その区画溝とは繋がらない別の区画溝が確認され、もう一つの正倉院があることが明らかとなる。

確認された主な遺構は、掘立柱建物跡16棟、礎石建物跡４棟、竪穴建物跡９棟、区画溝１条である。中世頃の土壙や溝が若干認められるものの、第１・２次調査区に比べて少なく、古代の遺構は遺存状況が良好と言える。調査区周辺の標高は約34mで、遺構確認面までの深さは約30㎝を測る。

掘立柱建物跡の重複は非常に激しく、掘立柱建物３～４時期の後に礎石建物へと建て替えが行なわれている。礎石建物の廃絶後に再び掘立柱建物が建てられていることも確認された。

竪穴建物跡は、７世紀後半～末頃のものと、10世紀後半のものがあり、その間は存在しない。そのため、正倉の存続時期はその間と推定される。

保存目的の調査であるため、建物跡はもとより竪穴建物跡もほとんどは確認面まで、もしくは部分的な調査に止めている。竪穴建物跡が９棟と比較的多く確認されたため、出土遺物はコンテナ６箱と正倉跡の調査としては多いが、正倉跡に伴うものはほとんど無いと考えられる。しかし、前述した通り、間接的に正倉の時期を決定する資料となるものである。

b　建物跡

第３号建物跡（第９・10図、第29図１、第２表）

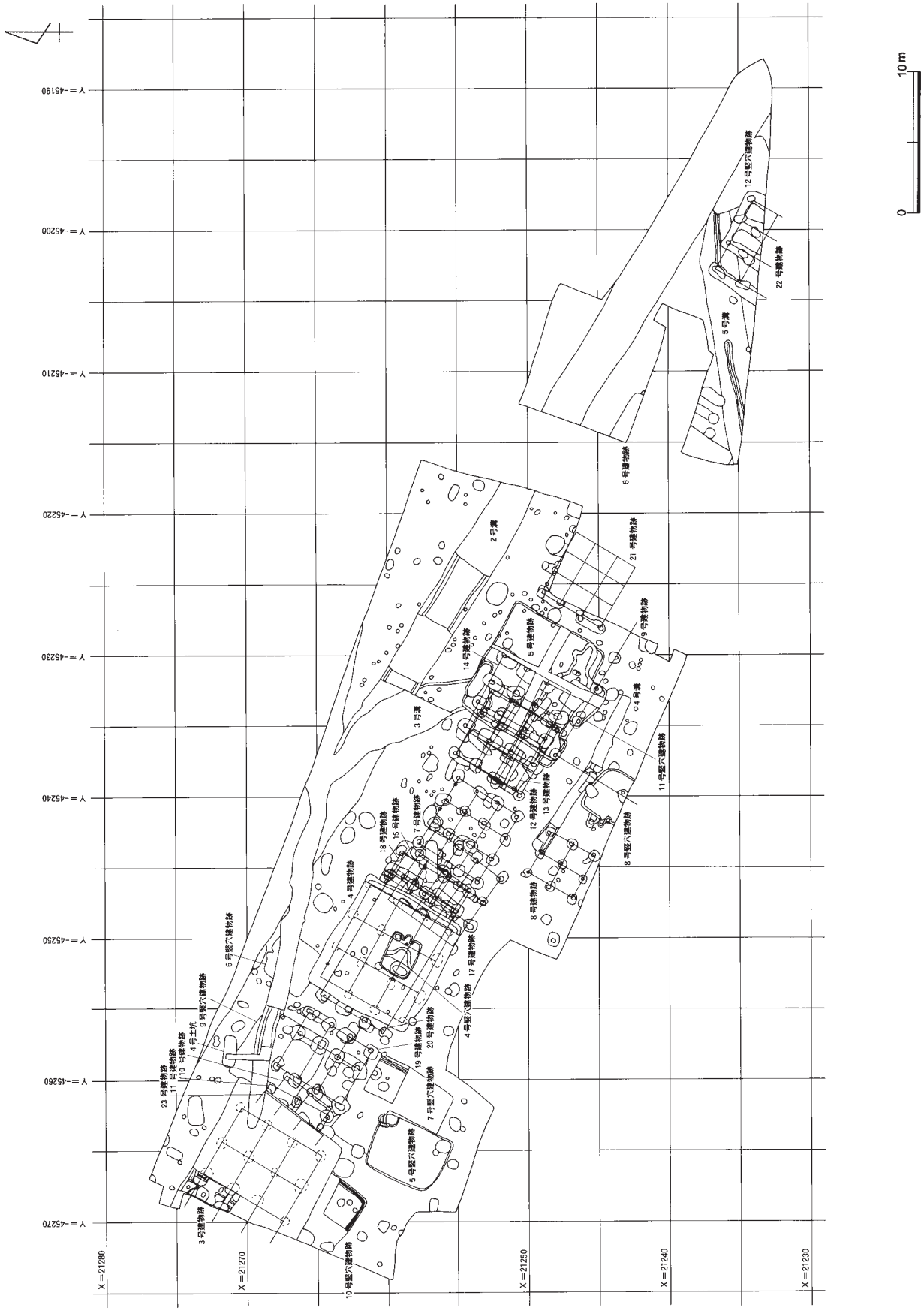
調査区西端に位置し、一部は第９次調査区にかかる。掘込地業の総柱式礎石建物で、掘込地業の範囲は15.5～16.1m×8.8mを測る。桁行５間（13.4m）×梁行３間（6.75m）で、柱間は桁行が2.7m（９尺）等間、梁行が2.25m（7.5尺）等間である。主軸方位はＮ－60°－Ｗで、第９・10号竪穴建物跡と第10・11・23号建物跡を切り、第３号溝に切られる。

掘込地業は、確認面から0.4mの深さで、底面からは前段階の柱穴が確認された。柱穴は、礎石推定位置と全てが一致しないことから、第３号建物跡と同位置、同規模の掘立柱建物跡は存在しなかったことが分かる。掘込地業の底面は、やや凹凸がある。また、礎石推定位置の直下は、周囲より若干深い掘り込みが認められる部分と、直下の柱穴全体を壷地業しているとみられる部分とがある。

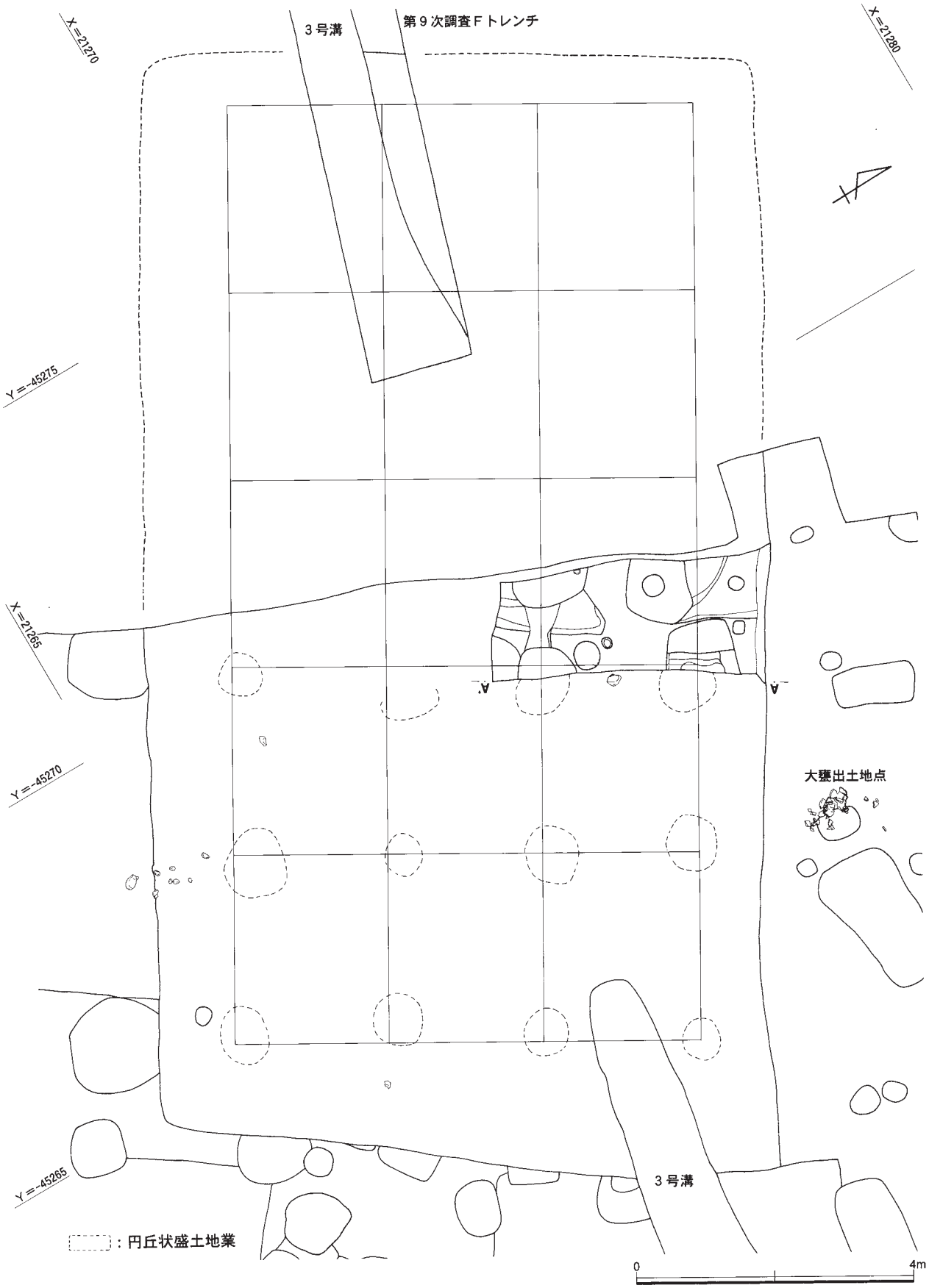
礎石や根固め石は残っていないが、確認面にて礎石推定位置に径約80㎝の円形プランが確認できた。断面からは、その部分が皿状の掘り込みで、一段と堅牢な地業となっていることが分かった。。根固め石等が検出されていないことから、掘込地業中層にて行なわれていると考えられる。この工法は、幡羅遺跡では他の建物跡には無く、特殊なものである。円丘状盛土地業、もしくはそれに類する工法と思われる。土層断面からは、２つの掘り込みの開始面は異なっており、外側が一段低い面で掘り込まれている。

また、第３号建物跡周辺には、炭化米が多く散っていた。遺構確認面までの深さが30～40㎝と浅く耕作の影響を受けているため、炭化米はまとまった形での検出ではない。しかし、他の建物跡周辺には認められなかったことから、本建物跡が火災に遭ったものと推定される。

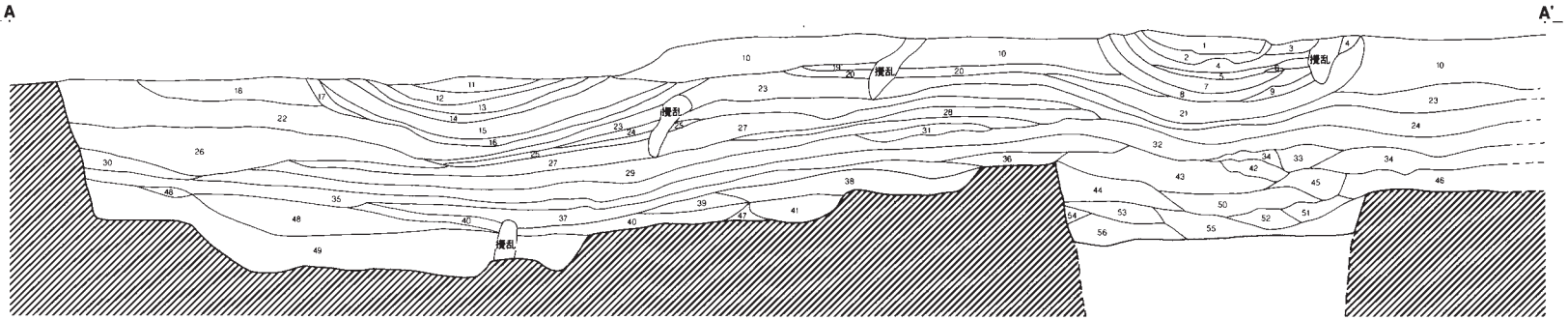
建物跡の北側からは、大甕の破片がまとまって出土した。大甕が据えられていた可能性が高く、本建物跡に関連する遺物と思われる。しかし、遺存部位は少な



第８図　第３次調査区全体測量図

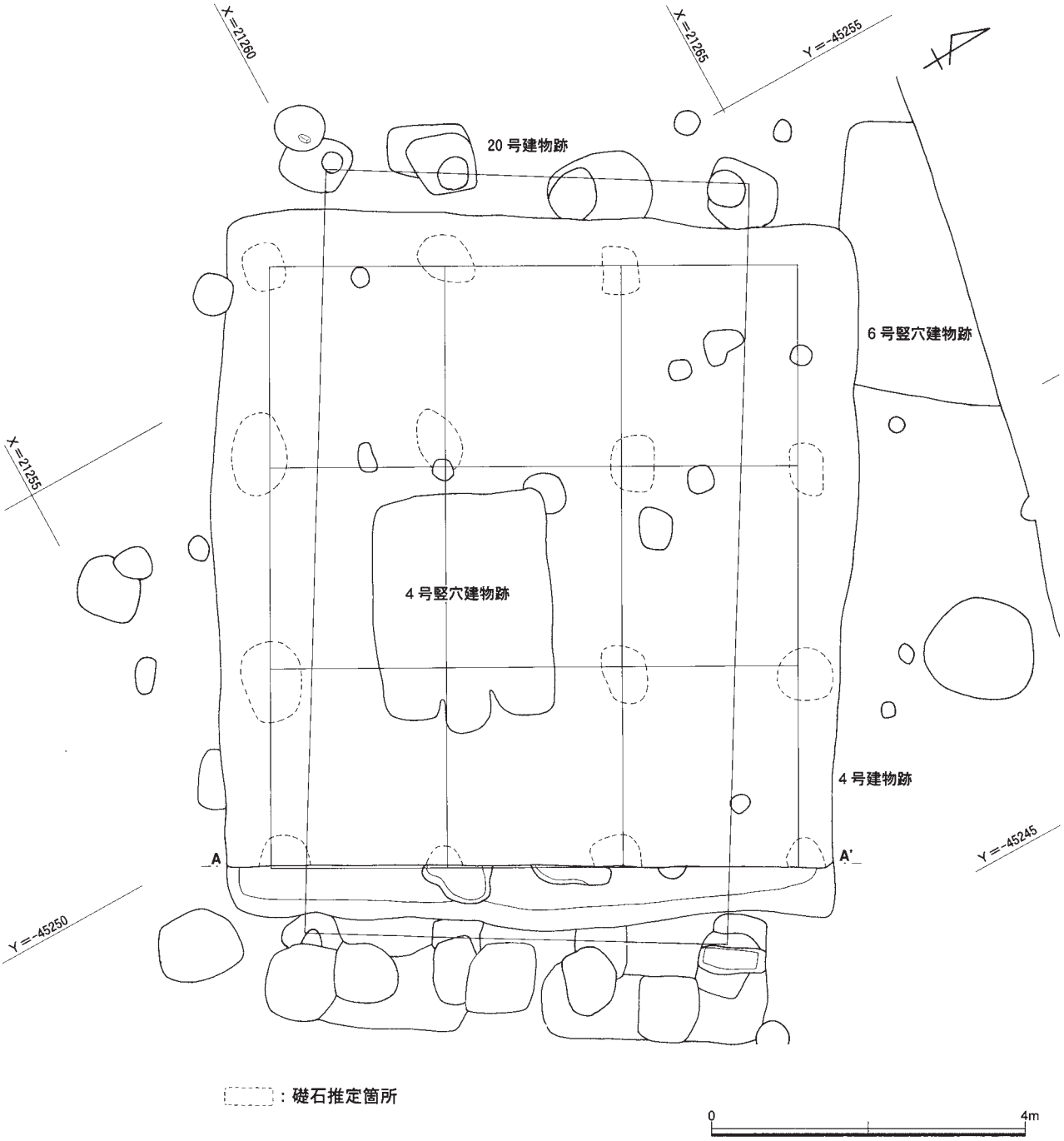

3号溝
第9次調査Fトレンチ
X=21270
X=21280
Y=-45275
X=21265
Y=-45270
Y=-45265
A
A'
大甕出土地点
3号溝
：円丘状盛土地業
0
4m

第9図　第3号建物跡



1層　黄褐色土　ハードロームを叩き締めている。
2層　暗黄褐色土　ローム粒を多く含む。
3層　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。
4層　黒色土　ローム粒をわずかに含む。
5層　黒褐色土　ローム粒を含む。
6層　黒褐色土　ローム粒をほとんど含まない。
7層　灰褐色土　ローム粒をやや多く含む。
8層　黒色土　ローム粒をわずかに含む。
9層　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。
10層　暗褐色土　ローム粒・ブロック（1cm）、黒褐色土粒をやや多く含む。
上面近くに炭化粒を含む。他層に比べやや締まり弱い。
11層　黒色土　ローム粒をわずかに含む。
12層　黄褐色土　ローム粒を多量に含む。
13層　黒褐色土　ローム粒を含む。
14層　黄褐色土　ローム粒を多量に含む。
15層　黒褐色土　ローム粒を含む。
16層　黄褐色土　ローム粒を多量に含む。
17層　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。
18層　暗褐色土　ローム粒を含む。
19層　暗褐色土　ローム粒・ブロック（1cm）、黒褐色土粒を少し含む。
20層　黒褐色土　ローム粒・ブロック（1cm）を少し含む。
21層　灰褐色土　ローム粒・ブロック（1cm）、黒褐色土粒を多量に含む。
22層　暗茶褐色土　ローム粒・ブロック（1cm）をやや多く含む。
23層　灰褐色土　ローム粒、黒褐色土粒を含む。
24層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
25層　暗灰褐色土　ローム粒を少し含む。
26層　暗灰褐色土　ローム粒・ブロック（1cm）、黒褐色土粒をやや多く含む。
27層　暗褐色土　ローム粒、黒褐色土粒をやや多く含む。
28層　暗灰褐色土　ローム粒をやや多く含む。
29層　灰褐色土　ローム粒・ブロック（1cm）をやや多く含む。
30層　暗黄褐色土　ローム粒を多く含む。
31層　黄褐色土　ロームを主体とする。
32層　暗灰褐色土　ローム粒・ブロック（1cm）、黒褐色土粒をやや多く含む。
33層　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。
34層　暗黄褐色土　ローム粒を多く含む。
35層　黒褐色土　ローム粒・ブロック（1cm）をやや多く含む。
36層　黄褐色土　ロームを主体とする。
37層　暗黄褐色土　ローム粒を多く含む。
38層　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。
39層　黒褐色土　ローム粒をやや多く含む。
40層　暗黄褐色土　ローム粒・ブロック（1～3cm）を多く含む。
41層　暗黄褐色土　ローム粒・ブロック（1cm）を多く含む。
42層　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。
43層　黒褐色土　ローム粒・黒色土粒を含む。
44層　灰褐色土　ローム粒・ブロックを多量に含む。
45層　灰褐色土　ローム粒をやや多く含む。焼土粒をわずかに含む。
46層　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。
47層　暗黄褐色土　ローム粒を多量に含む。
48層　暗黄褐色土　ローム粒を多量に含む。黒褐色土粒を少し含む。
49層　黄褐色土　ローム粒・ブロック（1～2cm）を多量に含む。
50層　黄褐色土　締りが非常に強いハードローム。
51層　茶褐色土　ローム粒を多く含む。
52層　黄褐色土　ハードロームを主体とする。ローム粒を含む。黒褐色土粒を少し含む。
53層　茶褐色土　ローム粒を多く含む。炭化粒を少し含む。
54層　黄褐色土　ロームを主体とする。
55層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
56層　黄褐色土　ハードロームを主体とする。ローム粒を含む。黒褐色土粒を少し含む。

第10図　第3号建物跡土層断面図



第11図　第４・20号建物跡

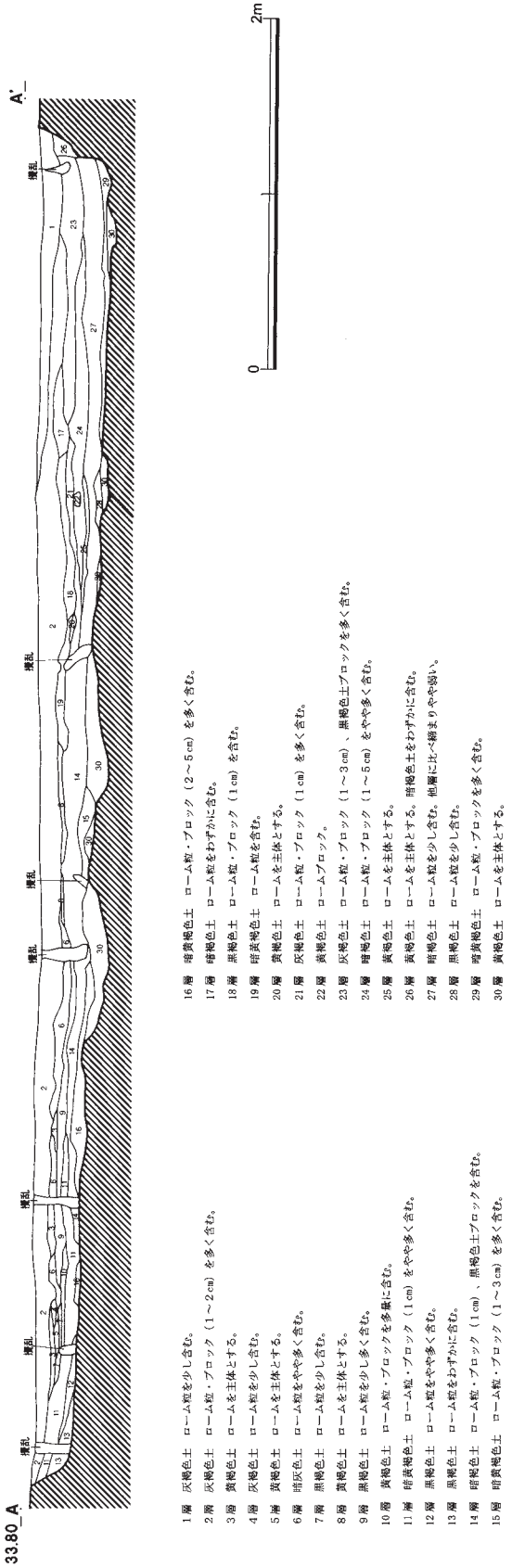
く、底部付近を除いては破片資料である。実測図及び拓影図は第30図に示した。

掘込地業からの出土遺物は少なく、図示できた遺物は、須恵器の蓋１点である（第29図１）。

第４号建物跡（第11・12図、第29図２・３、第２表）

西調査区中央付近に位置する。掘込地業の総柱式礎石建物で、掘込地業の範囲は8.8～９m×7.8～8.1mを測る。明瞭ではないが、周囲よりやや硬化した部分を確認できたため、礎石推定箇所とした。それによると、桁行３間（7.65m）×梁行３間（6.75m）で、柱間は、桁行が2.55m（8.5尺）等間、梁行が2.25m（7.5尺）等間である。

主軸方位はN－60°－Wで、第15・17・18・20号建



第12図　第４号建物跡土層断面図

物跡、第６号竪穴建物跡を切り、第４号竪穴建物跡に切られる。

掘込地業は、確認面から0.4mの深さで、底面にやや凹凸が認められる。また、北側がやや深くなっている。

図示できた遺物は、第29図２・３である。２は南比企産の須恵器坏底部で、〔実ヵ〕の墨書が認められる。３は土錘で、第６号竪穴建物跡からの流れ込みの可能性が高い。

第５号建物跡（第13～15図、第29図４～10、第２・３表）

西調査区東部に位置する。掘込地業の総柱式礎石建物で、掘込地業の範囲は8.5m×7.5mを測る。礎石の位置は確認できず、建物規模は不明だが、概ね桁行３間（7.2m）×梁行３間（6.3m）程度と推定できる。

主軸方位はN－60°－Wで、第12・13・14号建物跡、第11号竪穴建物跡を切り、第２・５号土坑に切られる。掘込地業は確認面から0.1～0.3mの深さで、南西部がやや深くなる。

図示できた遺物は、第29図４～10である。全て須恵器で、４は坏、５は盤である。６～８は灰釉がかかる。８は平瓶と思われる。

第６号建物跡（第16図、第29図11、第３表）

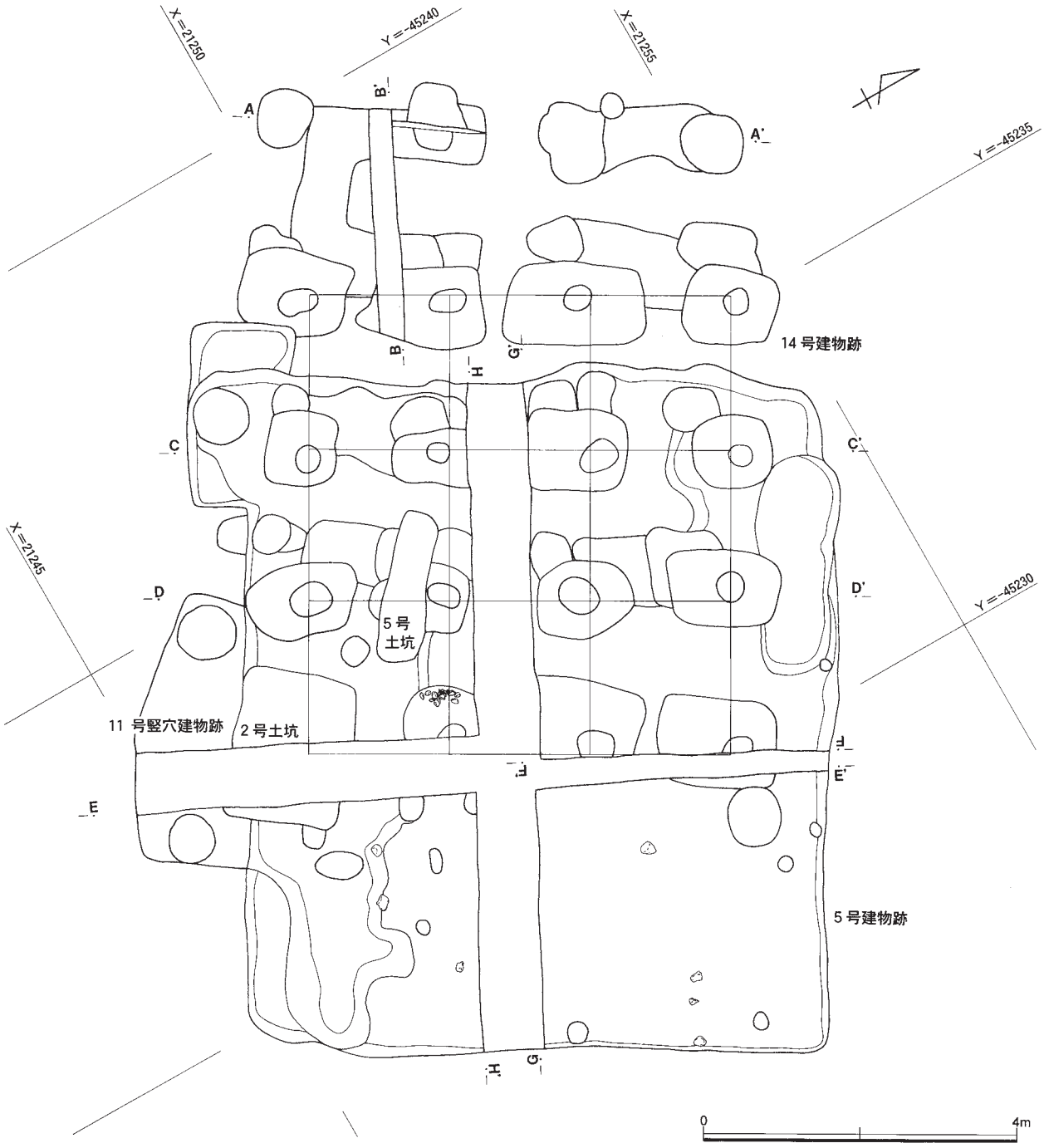
西と東の調査区にまたがる。掘込地業の総柱式礎石建物で、掘込地業の範囲は9.8m×8.3mを測る。礎石の位置は確認できず、建物規模は不明だが、概ね桁行３間（7.65m）×梁行３間（6.75m）程度と推定できる。主軸方位はN－60°－Wである。

図示できた遺物は、土師器坏１点である（第29図11）。

第７号建物跡（第17図、第29図12・13、第３表）

西調査区中央付近、第４号建物跡と第５号建物跡の間に位置する。総柱式掘立柱建物跡で、桁行３間（5.4m）×梁行３間（4.95m）、柱間は桁行が1.8m（６尺）等間、梁行が1.65m（5.5尺）等間である。

主軸方位はN－59°－Wで、第15・17号建物跡を切



第13図　第５・14号建物跡

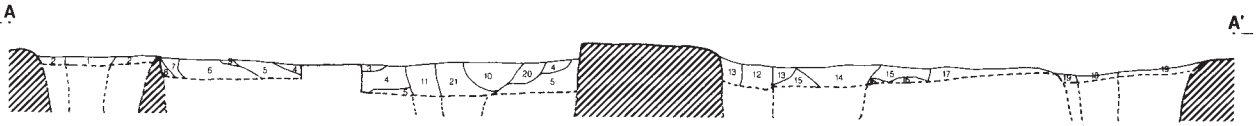
り、第３号土坑に切られる。柱穴の掘方は、隅丸方形を基本とするが、円形に近いものもある。掘方の径は70～80cmを測る。柱は柱痕跡を残すものと、抜き取るものがある。柱痕跡から、柱の径は25～30cmと思われる。

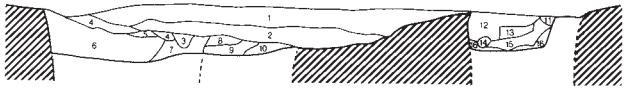
図示できた遺物は、第29図12・13である。12は須恵器蓋、13は須恵器椀である。

第８号建物跡（第18図、第29図14、第３表）

西調査区南部に位置する。総柱式掘立柱建物跡で、桁行２間（3.6m）×梁行２間（3.3m）、柱間は桁行が1.8m（６尺）等間、梁行が1.65m（5.5尺）の南北に若干長い建物跡である。

主軸方位はN－30°－Eで、第４号溝に切られる。柱穴の掘方は円形に近いものが多く、径60～80cmを





SPA

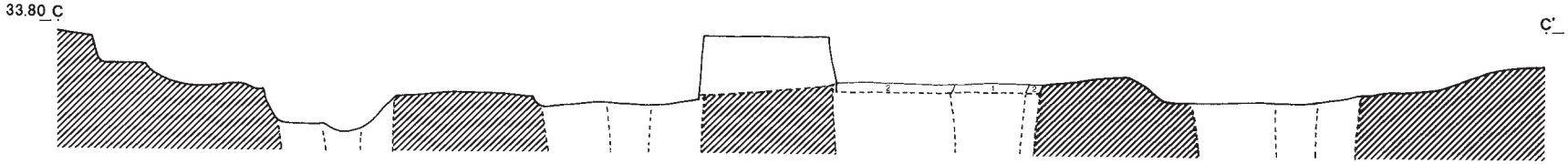
1層　灰褐色土　ローム粒を含む。締まりなし。柱痕。
2層　暗褐色土　ローム粒、黒褐色土粒を含む。締まり強い。
3層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。締まり強い。
4層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。締まり強い。
5層　黒褐色土　ローム粒・ブロック（1～2㎝）を少し含む。締まり強い。
6層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。締まり強い。
7層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。締まり強い。
8層　黄褐色土　ロームを主体とする。締まり強い。
9層　暗黄褐色土　ローム粒・ブロックを多量に含む。締まり強い。
10層　暗灰褐色土　ローム粒を含む。
11層　黄褐色土　ローム粒・ブロック（1～3㎝）を主体とする。
12層　暗灰褐色土　ローム粒を少し含む。締まりなし。
13層　黒褐色土　ローム粒・ブロック（3㎝）を少し含む。
14層　灰褐色土　ローム粒・ブロックを少し含む。締まりなし。柱痕。
15層　黒褐色土　ローム粒・ブロックを少し含む。
16層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。
17層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。
18層　灰褐色土　ローム粒・黒褐色土粒を少し含む。締まりなし。柱痕。
19層　暗灰褐色土　ローム粒を少し含む。黒褐色土粒・ブロックを含む。
20層　灰褐色土　ローム粒を少し含む。
21層　黒褐色土　ローム粒をやや多く含む。

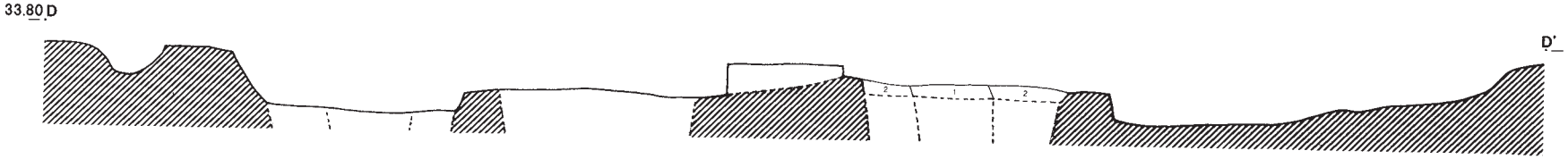
SPB

1層　灰褐色土　ローム粒・ブロック（1㎝）をやや多く含む。
2層　暗褐色土　ローム粒・ブロック（1～2㎝）を多く含む。
3層　黒褐色土　ローム粒・焼土粒をわずかに含む。
4層　黒褐色土　ローム粒・ブロック（1㎝）を少し含む。
5層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。
6層　暗黄褐色土　ローム粒・ブロック（1～5㎝）を多く含む。
7層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
8層　黒褐色土　ローム粒をやや多く含む。
9層　暗黄褐色土　ローム粒を多く含む。
10層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。
11層　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。
12層　暗黄褐色土　ローム粒・ブロックを多く含む。
13層　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。
14層　黄褐色土　ロームブロック。
15層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。
16層　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。

SPC・SPD

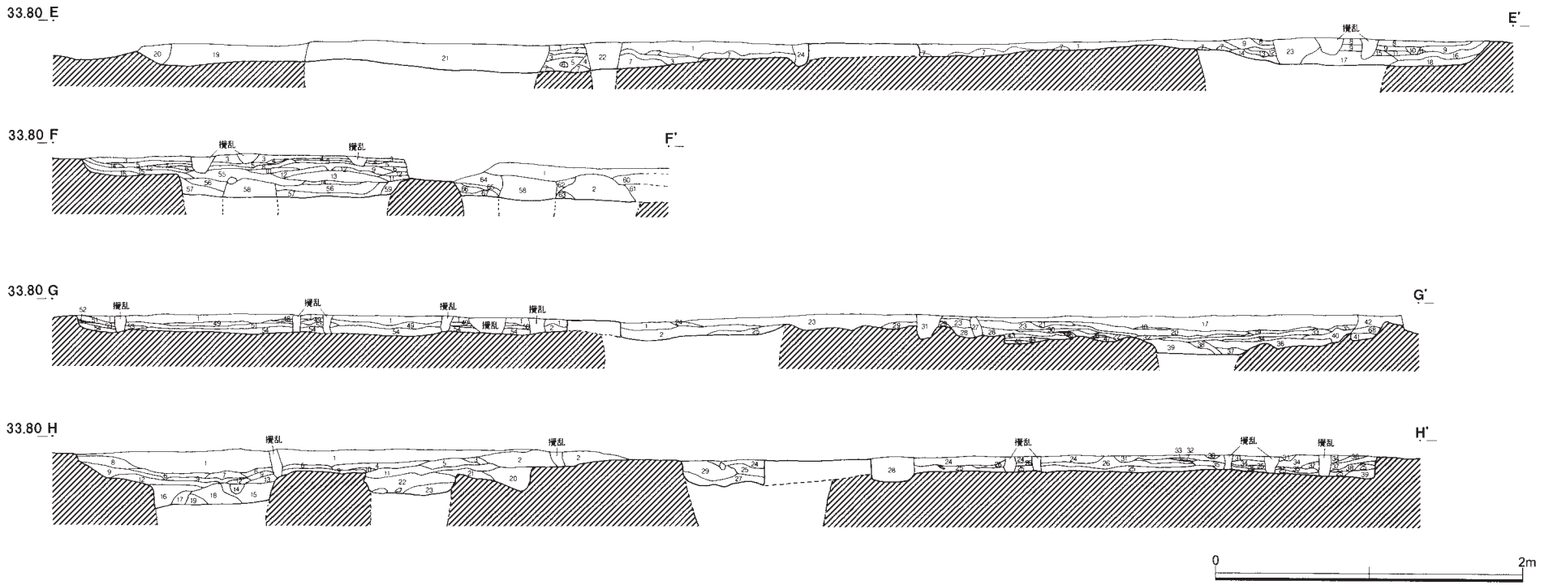
1層　暗灰褐色土　ローム粒を少し含む。締まりなし。柱痕。
2層　黒褐色土　ローム粒・ブロックを含む。





0　2m

第14図　第5・14号建物跡土層断面図（1）



SPE

1層　暗褐色土　ローム粒を含む。
2層　暗黄褐色土　ローム粒・ブロックを多く含む。
3層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
4層　黄褐色土　ロームを主体とする。
5層　黒褐色土　ローム粒を含む。焼土粒をわずかに含む。
6層　黄褐色土　ロームブロック。
7層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。
8層　暗褐色土　ローム粒をやや多く含む。
9層　暗黄褐色土　ローム粒を多く含む。
10層　黄褐色土　ロームを主体とする。
11層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
12層　暗褐色土　ローム粒を少し含む。
13層　黄褐色土　ローム粒を主体とする。
14層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
15層　黒褐色土　ローム粒を多く含む。
16層　暗褐色土　ローム粒を少し含む。
17層　暗黄褐色土　ローム粒・ブロック（1cm）を多く含む。
18層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。
19層　黒褐色土　ローム粒をやや多く含む。炭化粒をわずかに含む。住居跡覆土。
20層　暗褐色土　ローム粒を多く含む。柱穴覆土。
21層　暗褐色土　ローム粒・ブロック（1～3cm）を多量に含む。焼土粒をわずかに含む。土坑覆土。
22層　灰褐色土　ローム粒を含む。
23層　暗褐色土　ローム粒を少し含む。
24層　暗褐色土　ローム粒を少し含む。柱穴覆土。

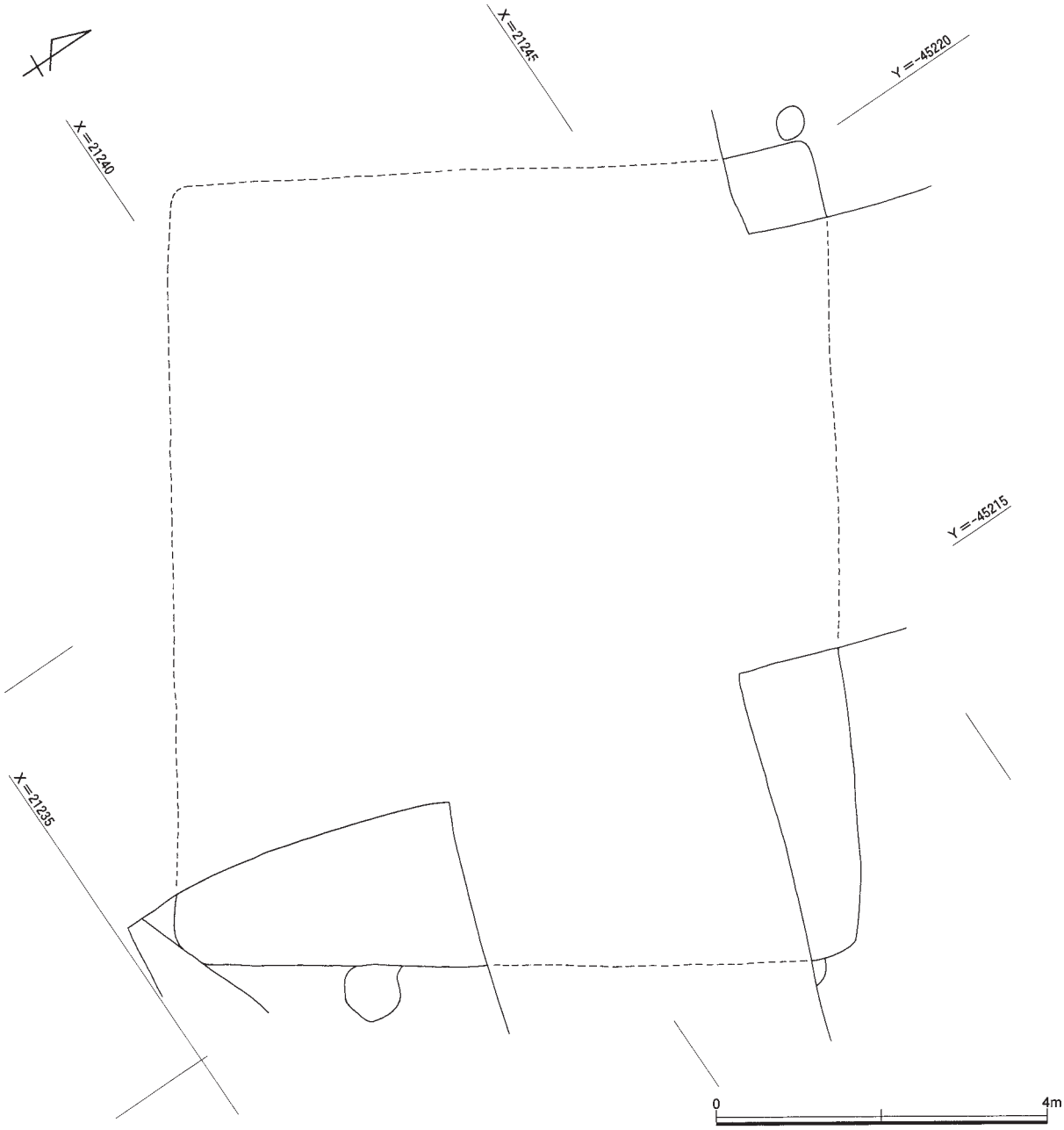
SPF・SPG

1層　暗褐色土　ローム粒を少し含む。
2層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。
3層　暗灰褐色土　ローム粒を少し含む。
4層　暗黄褐色土　ローム粒をやや多く含む。
5層　暗褐色土　ローム粒を含む。
6層　灰褐色土　ローム粒を含まない。
7層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
8層　暗黄褐色土　ローム粒・ブロックをやや多く含む。
9層　暗黄褐色土　ローム粒をやや多く含む。
10層　黒褐色土　ローム粒をやや多く含む。
11層　暗褐色土　ローム粒を少し含む。
12層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
13層　暗褐色土　ローム粒を少し含む。
14層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
15層　暗褐色土　ローム粒を含む。
16層　暗褐色土　ローム粒を少し含む。
17層　暗褐色土　ローム粒・ブロック（1cm）を含む。
18層　黄褐色土　ローム粒を主体とする。
19層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
20層　暗黄褐色土　ローム粒をやや多く含む。
21層　黒褐色土　ローム粒を含む。
22層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。
23層　暗褐色土　ローム粒・ブロック（1cm）を少し含む。
24層　黄褐色土　ローム粒を多く含む。
25層　暗黄褐色土　ローム粒・ブロック（1cm）を多く含む。
26層　黒褐色土　ローム粒を含む。
27層　黄褐色土　ロームを主体とする。
28層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。
29層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。
30層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
31層　灰褐色土　ローム粒を含む。柱穴覆土。
32層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。
33層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
34層　暗黄褐色土　ローム粒・ブロックをやや多く含む。
35層　灰褐色土　ローム粒を少し含む。
36層　灰褐色土　ローム粒を含む。
37層　黒褐色土　ローム粒をやや多く含む。
38層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。
39層　黒褐色土　ローム粒・ブロックをやや多く含む。
40層　暗黄褐色土　ローム粒・ブロック（1cm）をやや多く含む。
41層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
42層　灰褐色土　ローム粒を含む。
43層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
44層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。
45層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
46層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
47層　黄褐色土　ローム粒を主体とする。
48層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
49層　暗黄褐色土　ローム粒・ブロック（1～3cm）をやや多く含む。
50層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
51層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
52層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。
53層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
54層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。
55層　暗灰褐色土　ローム粒・ブロックをやや多く含む。
56層　暗黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。黒褐色土を含む。
57層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。
58層　灰褐色土　ローム粒をわずかに含む。締まりなし。柱痕。
59層　黒褐色土　ローム粒・ブロックを少し含む。
60層　暗褐色土　ローム粒を含む。
61層　黒褐色土　ローム粒・ブロックを少し含む。
62層　暗褐色土　ローム粒・ブロック（1cm）を少し含む。
63層　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。
64層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。
65層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
66層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。
67層　灰褐色土　ローム粒を少し含む。
68層　暗黄褐色土　ローム粒・ブロックをやや多く含む。

SPH

1層　暗灰褐色土　ローム粒・ブロック（1cm）を多く含む。炭化粒をわずかに含む。
2層　灰褐色土　ローム粒を多く含む。
3層　暗褐色土　ローム粒を少し含む。
4層　暗褐色土　ローム粒を多く含む。
5層　暗黄褐色土　ローム粒を多量に含む。
6層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。
7層　茶褐色土　ローム粒を含む。
8層　暗褐色土　ローム粒を多く含む。
9層　黒褐色土　ローム粒を含む。
10層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。
11層　暗黄褐色土　ローム粒を主体とする。
12層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。
13層　暗黄褐色土　ローム粒を主体とする。
14層　暗黄褐色土　ローム粒をやや多く含む。
15層　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。
16層　黒褐色土　ローム粒・ブロック（1cm）を多量に含む。
17層　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。
18層　黒褐色土　ローム粒を含む。
19層　暗灰褐色土　ローム粒・ブロックを多く含む。
20層　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。
21層　暗褐色土　ローム粒を少し含む。
22層　黒褐色土　ローム粒・ブロック（3～5cm）をわずかに含む。
23層　暗褐色土　ローム粒・ブロック（1cm）を多く含む。
24層　暗褐色土　ローム粒を少し含む。
25層　暗黄褐色土　ローム粒・ブロックを多く含む。
26層　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。
27層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
28層　暗灰褐色土　ローム粒を含む。
29層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。
30層　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。
31層　暗黄褐色土　ローム粒を多く含む。
32層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。
33層　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。
34層　暗黄褐色土　ローム粒・ブロックを多く含む。
35層　黒褐色土　ローム粒・ブロック（1cm）を少し含む。
36層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
37層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。
38層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
39層　灰褐色土　ローム粒をやや多く含む。
40層　黒褐色土　ローム粒・ブロック（2cm）を含む。

第15図　第５・14号建物跡土層断面図（２）



第16図　第６号建物跡

測る。柱は柱痕跡を残すものと、抜き取るものがある。柱痕跡から、柱の径は20～30cmと思われる。

図示できた遺物は、横瓶の破片１点である（第29図14）。

第９号建物跡（第19図）

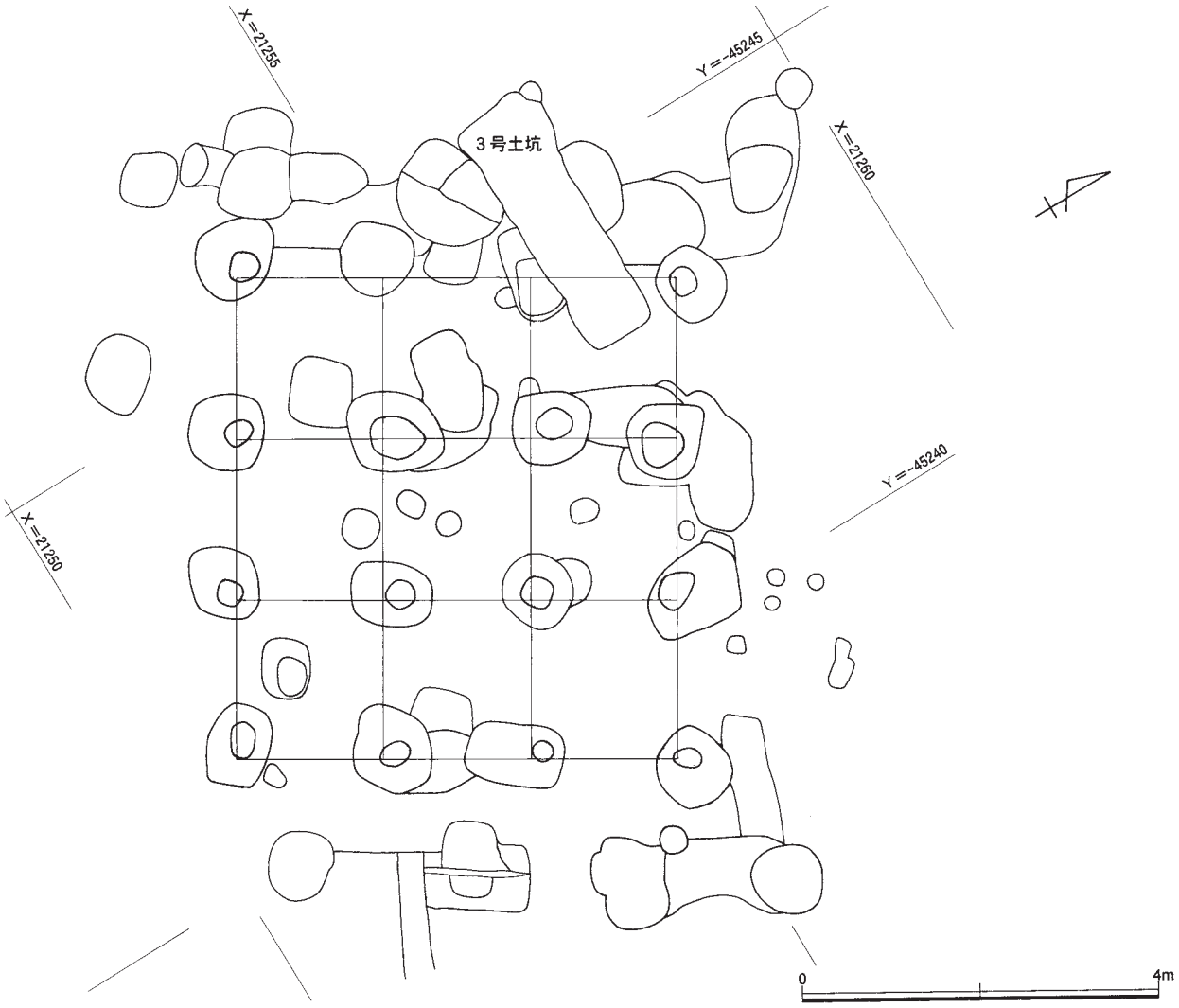
西調査区南部に位置する。側柱式掘立柱建物跡で、桁行４間（10.8m）以上、梁行３間（8.1m）と推定される。柱間は桁行、梁行共に2.7m（９尺）等間である。

主軸方位はN－59°－Wで、第８・11号竪穴建物跡を切り、第４号溝に切られる。柱穴の掘方は、径70～80cmの円形を基本とし、一部隅丸方形も認められる。柱は全て柱痕跡を残しており、柱の径は約25cmと思われる。

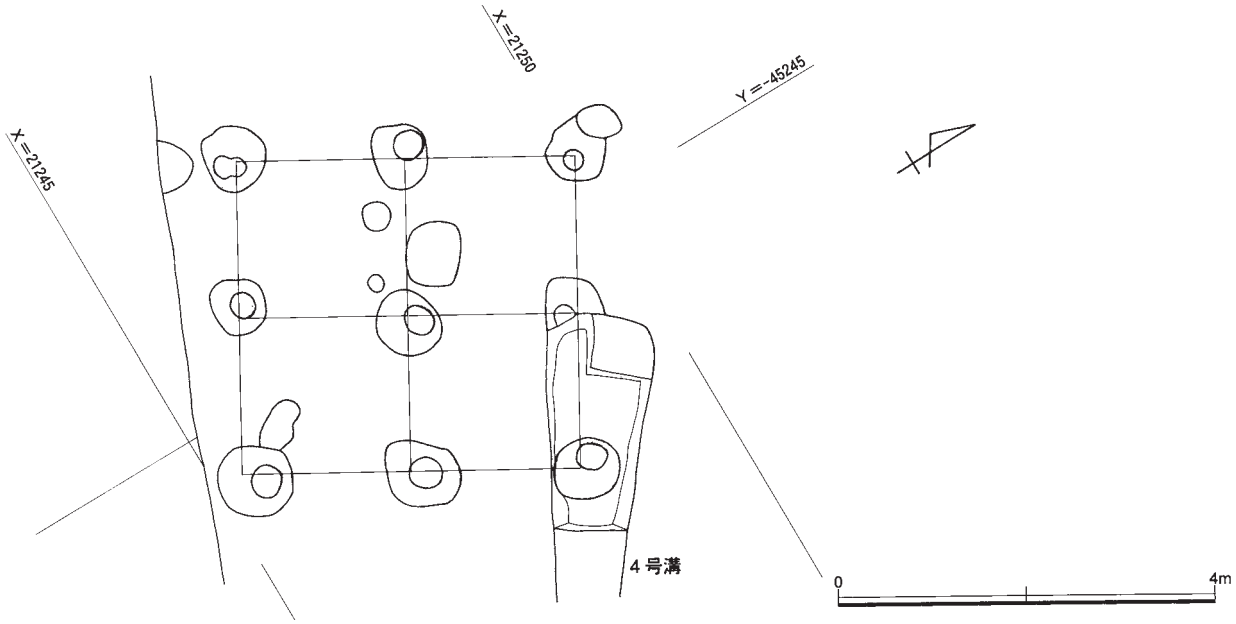
図示できる遺物は出土しなかった。

第10号建物跡（第20図）

西調査区西部に位置する掘立柱建物跡である。第３



第17図　第７号建物跡



第18図　第８号建物跡

号建物跡に切られるため規模は不明だが、梁行２間(3.9m)、柱間は1.95m（6.5尺）を測る。

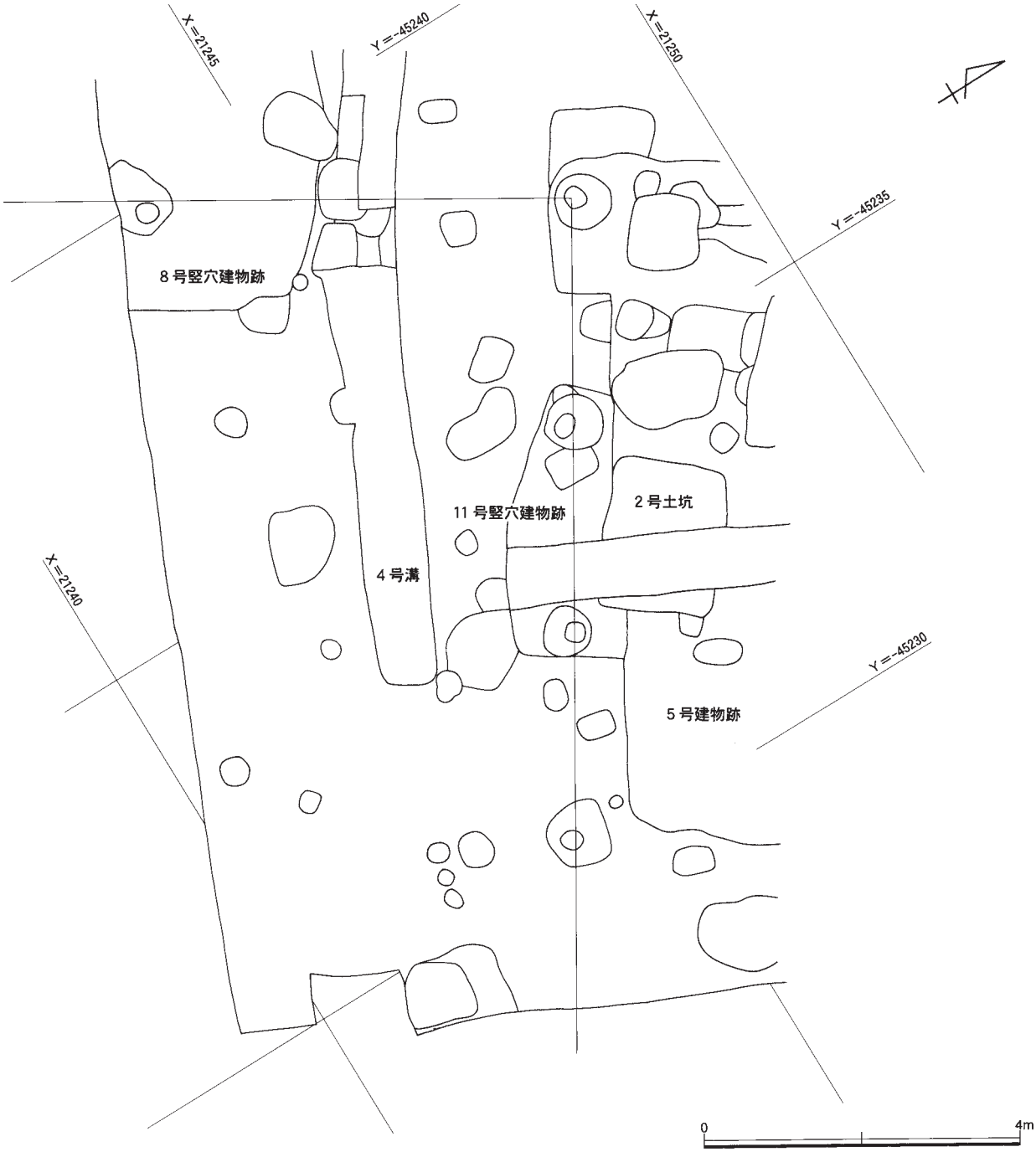
主軸方位はＮ－52°－Ｗで、第９号竪穴建物跡を切り、第３・11号建物跡に切られる。柱穴の掘方は、一辺約50cmの隅丸方形である。

図示できる遺物は出土しなかった。

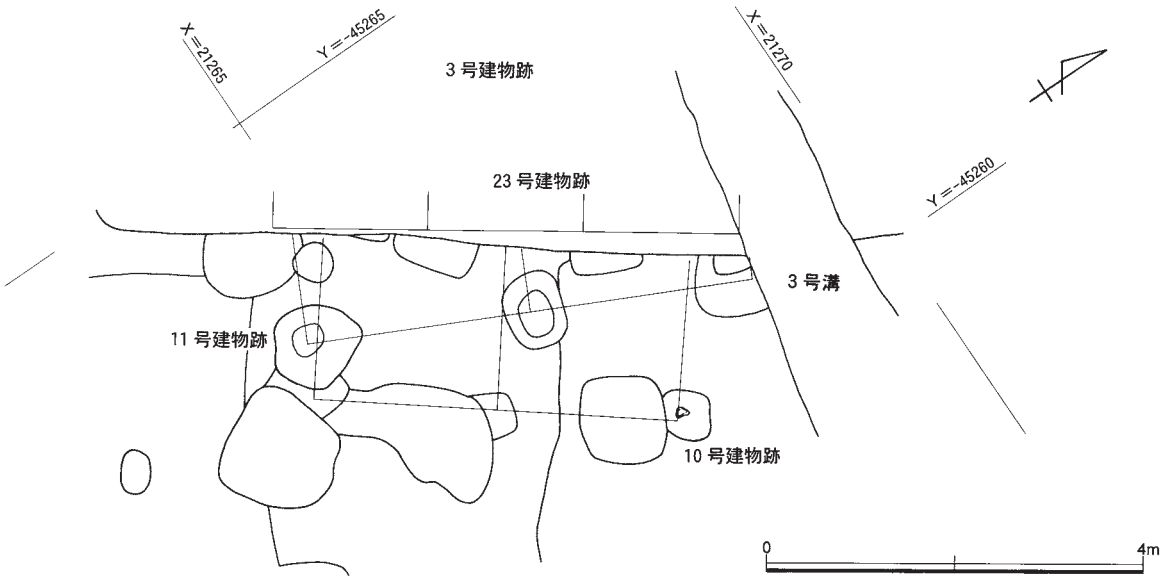
第11号建物跡（第20図）

西調査区西部に位置する掘立柱建物跡である。第３号建物跡に切られるため規模は不明だが、梁行２間(4.8m)、柱間は2.4m（８尺）を測る。

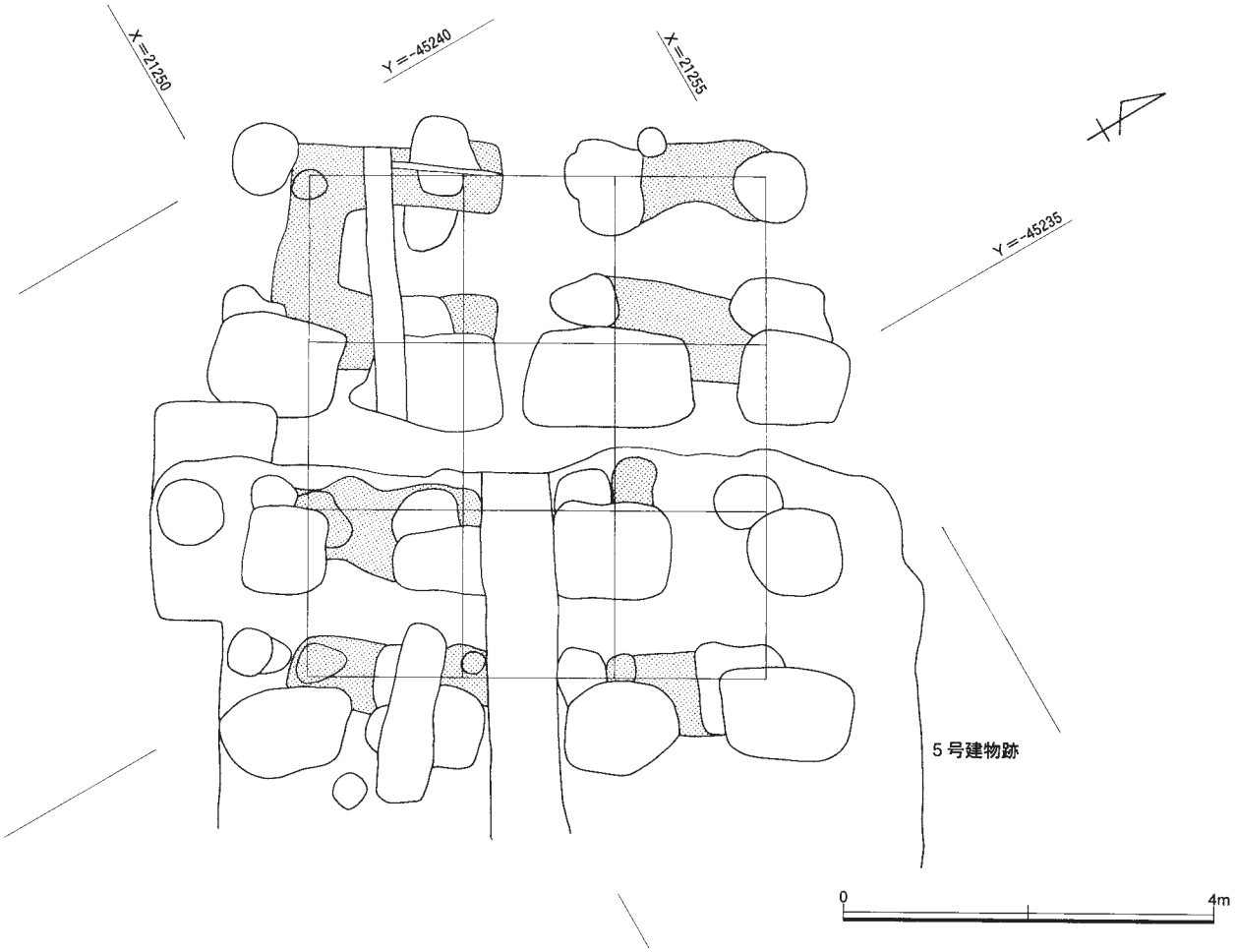
主軸方位はＮ－63°－Ｗで、第９号竪穴建物跡、第10号建物跡を切り、第３・23号建物跡、第３号溝に切られる。柱穴の掘方は、一辺60～80cmの隅丸方形で



第19図　第９号建物跡



第20図　第10・11・23号建物跡



第21図　第12号建物跡

ある。柱は柱痕跡を残すものと、抜き取るものがある。抜き取り痕内には、焼土粒、炭化粒を少量含む。

図示できる遺物は出土しなかった。

第12号建物跡（第21図）

西調査区東部に位置する。総柱式掘立柱建物跡で、桁行３間（5.4m）×梁行３間（4.95m）、柱間は桁行が1.8m（６尺）等間、梁行が1.65m（5.5尺）等間である。

主軸方位はＮ－60°－Ｗで、第13～15号建物跡、第５号土坑に切られる。柱穴の掘方は、大部分が布掘りである。柱は柱痕跡を残すものと、抜き取るものがある。柱痕跡から、柱の径は約25cmと思われる。

図示できる遺物は出土しなかった。

第13号建物跡（第22図）

西調査区東部に位置する。総柱式掘立柱建物跡で、桁行３間（5.4m）×梁行３間（5.4m）、柱間は桁行、梁行共に1.8m（６尺）等間である。

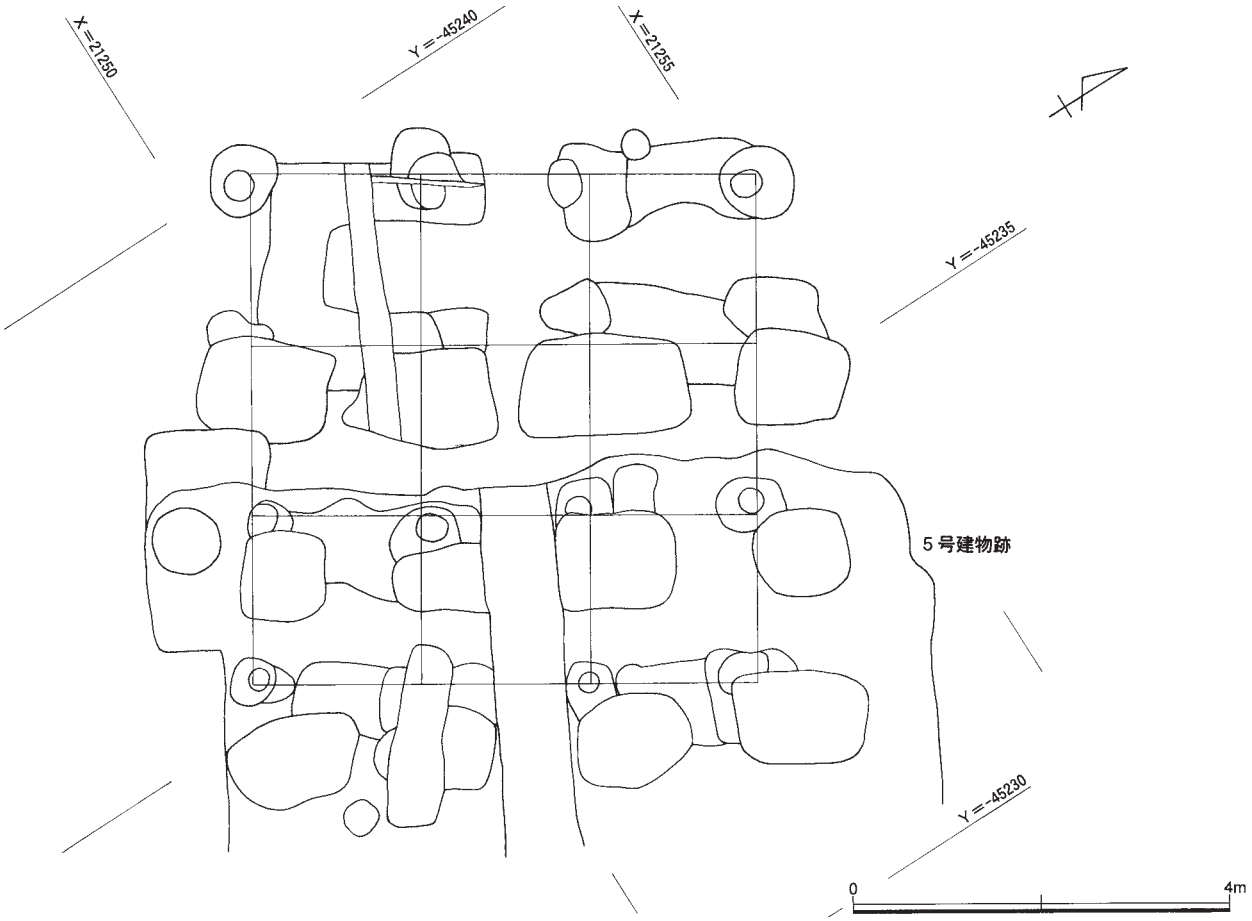
主軸方位はＮ－57°－Ｗで、第12号建物跡を切り、第14・15号建物跡、第５号土坑に切られる。柱穴の掘方は、径0.5～１mの円形を基本とする。柱は柱痕跡を残すものが多く、抜き取るものもある。柱痕跡から、柱の太さは径20～30cmと思われる。

図示できる遺物は出土しなかった。

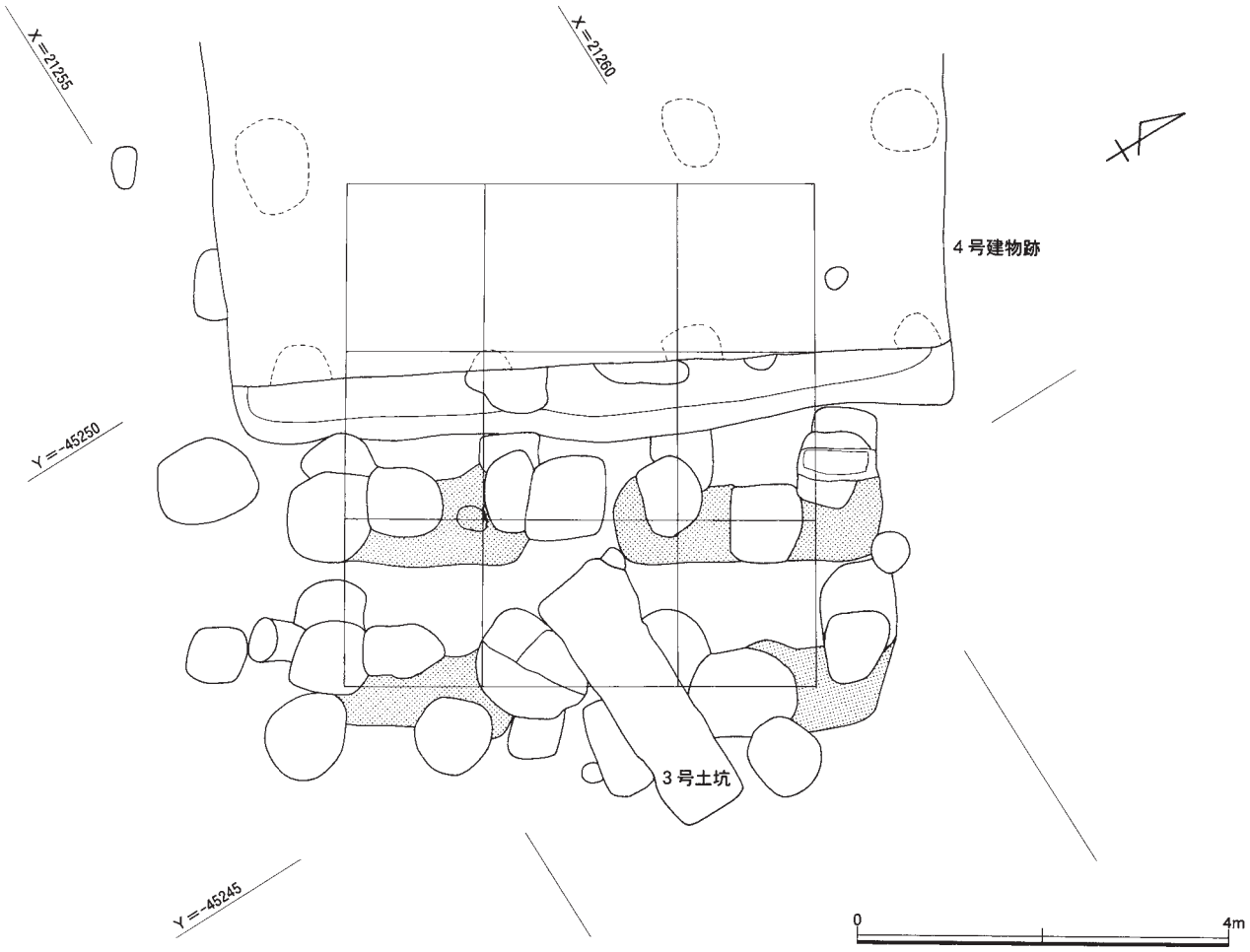
第14号建物跡（第13～15図、第29図15・16、第３表）

西調査区東部に位置する。総柱式掘立柱建物跡で、桁行３間（5.85m）×梁行３間（5.4m）、柱間は桁行が1.95m（6.5尺）等間、梁行が1.8m（６尺）等間である。

主軸方位はＮ－60°－Ｗで、第12・13号建物跡を切り、第15号建物跡、第２・５号建物跡に切られる。柱穴の掘方は隅丸長方形を基本とし、長軸１～1.8m、短軸0.7～1.1mを測る。柱は全て柱痕跡を残しており、柱の太さは径30～40cmと思われる。



第22図　第13号建物跡



第23図　第15号建物跡

図示できた遺物は、第29図15・16である。15は須恵器壷、16は羽口である。

第15号建物跡（第23図）

西調査区中央部に位置する。総柱式掘立柱建物跡で、桁行３間（5.4m）程度又はそれ以上×梁行３間（5.1m）、柱間は桁行が1.8m（６尺）、梁行は中央が2.1m（７尺）、両端が1.5m（５尺）である。

主軸方位はN－58°－Wで、第４・17・18・20号建物跡、第３号土坑に切られる。柱穴の掘方は、二柱穴一体の掘方である。柱痕跡は一箇所のみ確認できた。柱の太さは径約25cmと思われる。

図示できる遺物は出土しなかった。

第17号建物跡（第24図、第29図17、第３表）

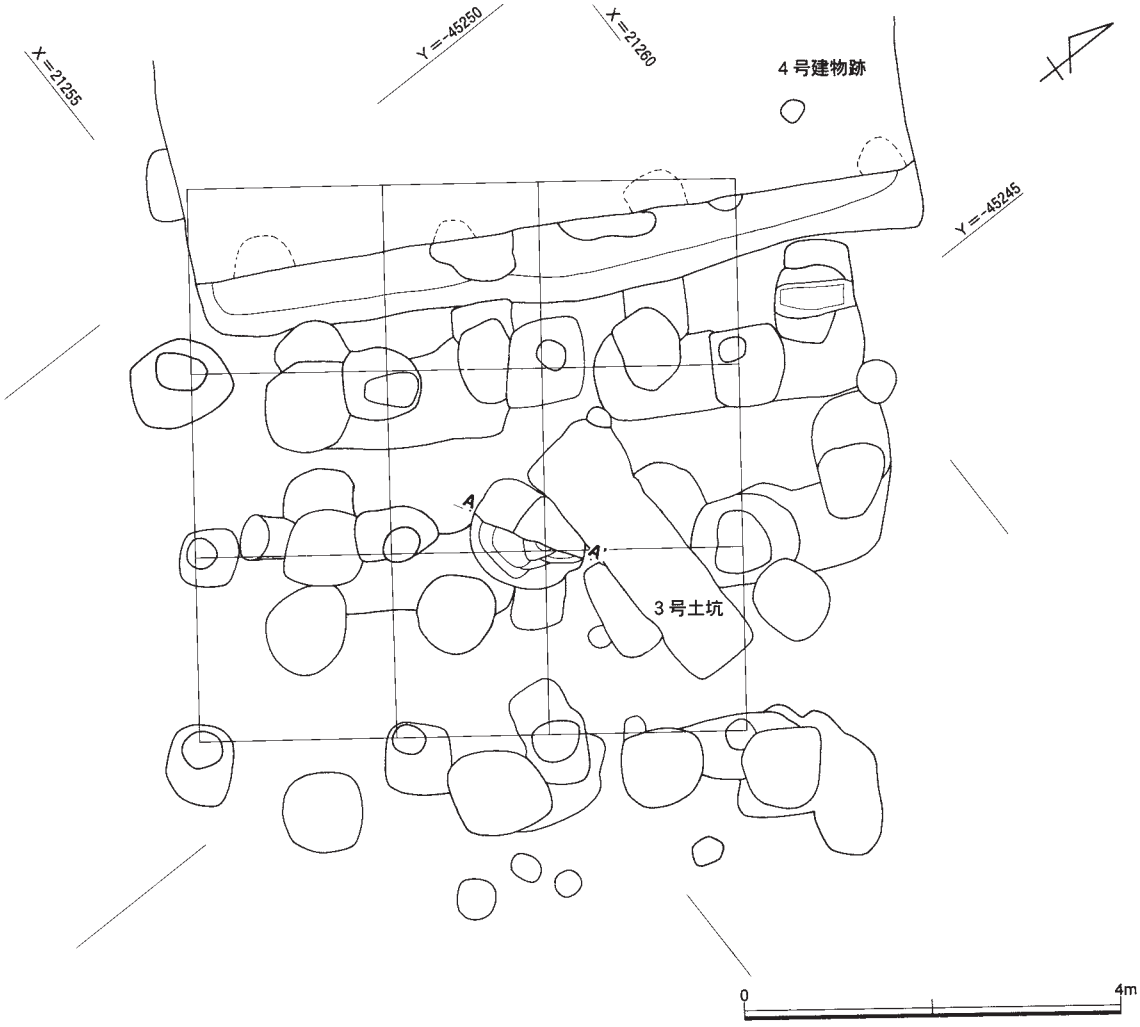
西調査区中央部に位置する。総柱式掘立柱建物跡で、桁行３間（5.85m）又はそれ以上、梁行３間（5.85m）、柱間は桁行が1.95m（6.5尺）、梁行は中央が1.65m（5.5尺）、両端が2.1m（７尺）である。

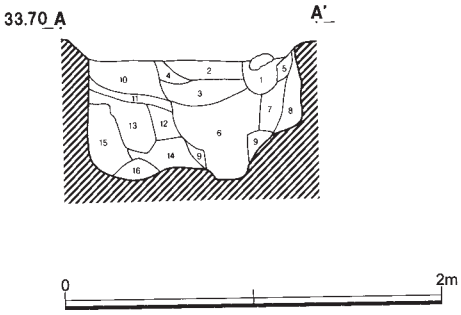
主軸方位はN－53°－Wで、第15・18・20号建物跡を切り、第４号建物跡、第３号土坑に切られる。柱の掘方は一辺0.6～１mの隅丸方形を基本とする。柱は柱痕跡を残すものと、抜き取るものがある。柱痕跡から、柱の径は約30cmと思われる。

図示できた遺物は、土師器皿１点である（第29図17）。

第18号建物跡（第25図、第29図18、19、第３表）

西調査区中央部に位置する総柱式掘立柱建物跡である。第４号建物跡に切られるため正確な規模は不明だが、桁行３間（5.4m）程度又はそれ以上、梁行３間（5.4m）、柱間は桁行、梁行共1.8m（６尺）等間である。





1層　明褐色土　ローム粒、礫を含む。締まりなし。
2層　暗褐色土　ローム粒・ブロック（2～10cm）を少し含む。
3層　暗灰褐色土　ローム粒を少し含む。締まり強い。
4層　暗黄褐色土　ローム粒・ブロック（1cm）をやや多く含む。
5層　暗黄褐色土　ローム粒を多量に含む。締まり強い。
6層　暗褐色土　ローム粒・ブロック（1cm）を含む。締まりなし。
7層　灰褐色土　ローム粒を少し含む。締まり強い。
8層　暗褐色土　ローム粒、黒褐色土ブロックを含む。
9層　黄褐色土　ローム粒を主体とする。締まり弱い。
10層　明褐色土　ローム粒・ブロック（1cm）を少し含む。
11層　灰褐色土　ローム粒・ブロック（1～2cm）をやや多く含む。
12層　暗灰褐色土　ローム粒を少し含む。締まり強い。
13層　暗褐色土　ローム粒をやや多く含む。
14層　暗黄褐色土　ローム粒・ブロック（1～3cm）を多量に含む。
15層　黒褐色土　ローム粒・ブロック（1～3cm）を含む。粘性あり。
16層　灰褐色土　ローム粒を含む。

第24図　第17号建物跡

主軸方位はN－60°－Wで、第15・20号建物跡を切り、第4・17号建物跡、第3号土坑に切られる。柱の掘方は、一辺0.7～1mの隅丸方形を基本とする。柱は柱痕跡を残すものと、抜き取るものがある。柱痕跡から、柱の径は約30cmと思われる。

図示できた遺物は、第29図18、19である。

第19号建物跡（第26図、第29図20～22、第3表）

西調査区西部に位置する。柱の配置が不規則だが、総柱式掘立柱建物跡である。桁行3間（5.4m）、梁行2間（4.5m）、柱間は桁行が1.8m（6尺）等間、梁行は西側が2.7m（9尺）、東側が1.8m（6尺））である。他の建物群とは長短軸を違える。

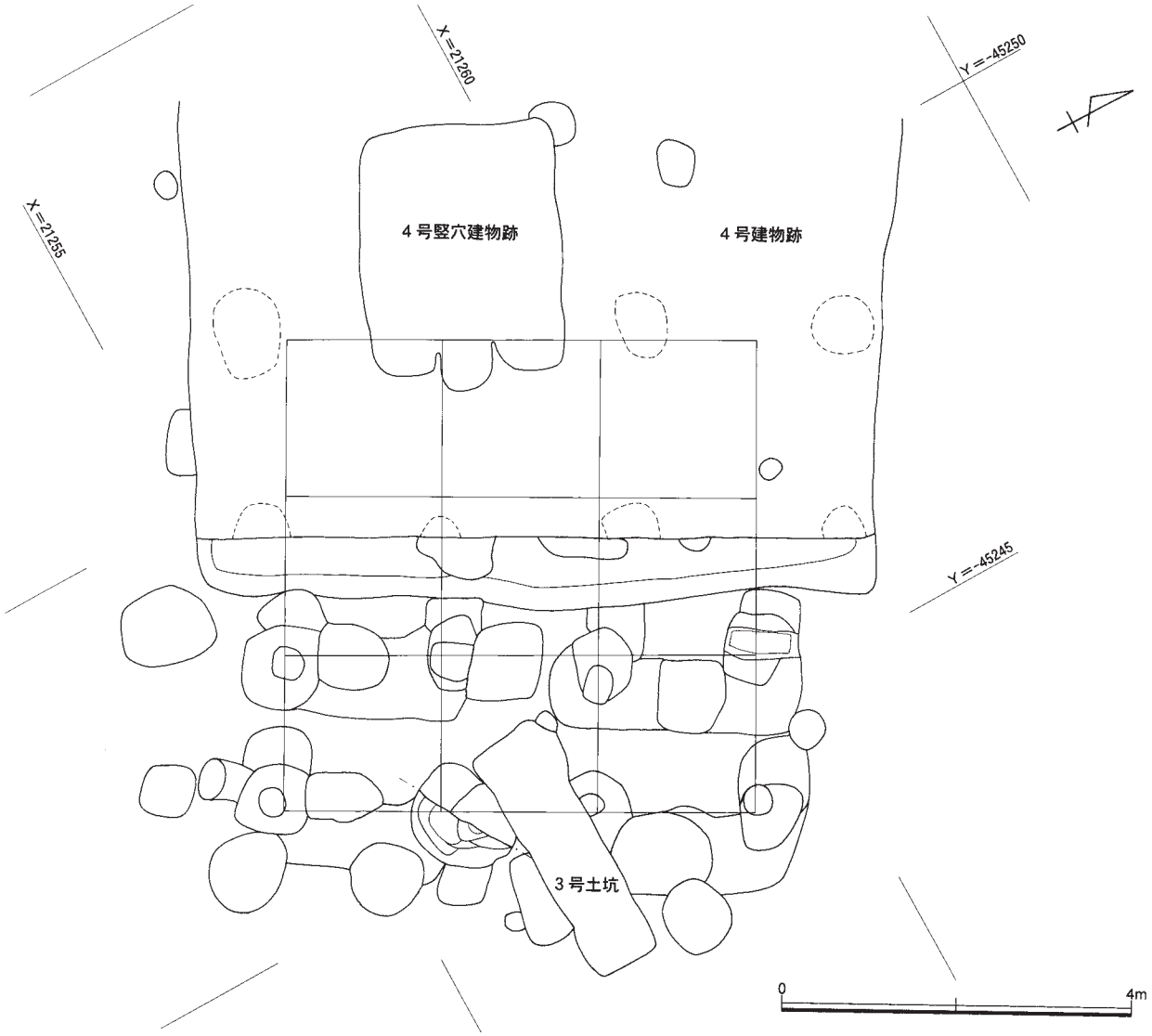
主軸方位はN－31°－Eで、第９号竪穴建物跡、第10号建物跡を切る。柱の掘方は、一辺0.9～1.2mの隅丸方形を基本とし、桁方向の柱間に溝を持つものがある。柱は柱痕跡を残すものと、抜き取るものがある。柱痕跡から、柱の径は30～40cmと思われる。最も北西側の柱穴列は、全て柱が抜き取られる。この柱穴列の北から２番目の柱穴の柱抜き取り穴上部からは、第29図20が出土し、柱穴及び抜き取り穴の覆土から炭化物、炭化米が少量確認された。

図示できた遺物は、第29図20～22である。20はロクロ土師器坏、21は土師器坏、22は須恵器甕である。出土遺物から、建物の廃絶時期は10世紀前半～中頃と推定される。

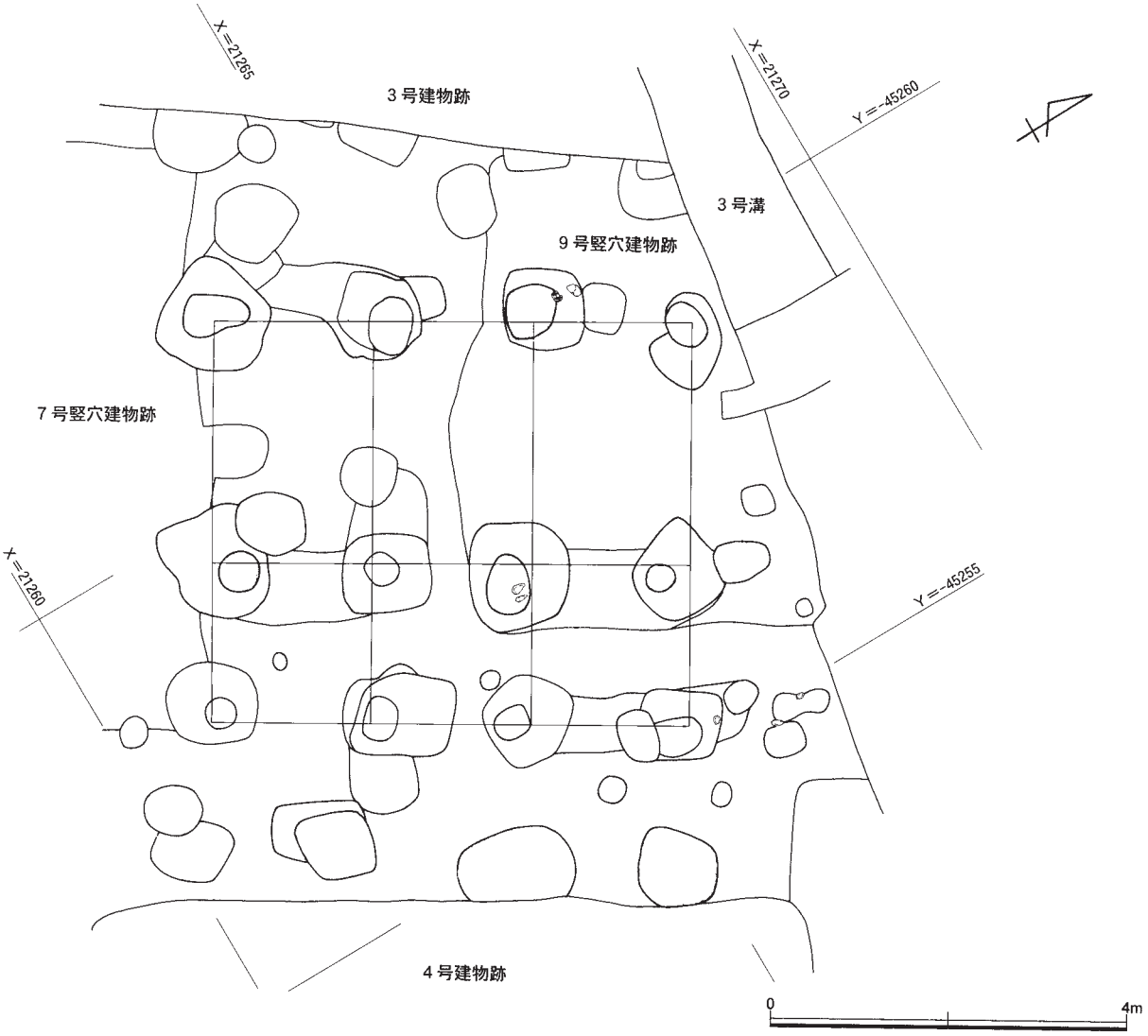
第20号建物跡（第11図、第29図23、第３表）

西調査区中央部に位置する掘立柱建物跡である。中央部を第４号建物跡に切られており、当初は南東側を第16号建物跡とし、別の建物跡と捉えたが、柱穴の配列、主軸方位、、及び建物の変遷を考慮し、桁行の比較的長い１棟の建物跡と考えた。桁行５間（9.7m）程度、梁行３間（5.4m）を測る。柱間は桁行が1.94m（6.5尺）程度、梁行が1.8m（６尺）等間である。

主軸方位はN－60°－Wで、第15号建物跡を切り、第４・17・18号建物跡に切られる。柱穴の掘方は、一辺0.7～1.3mの隅丸方形を基本とする。柱は柱痕跡を残すものと、抜き取るものがある。柱痕跡から、柱の太さは径25～30cmと思われる。



第25図　第18号建物跡



第26図　第19号建物跡

図示できた遺物は、須恵器甕破片１点である（第29図23）。

第21号建物跡（第27図）

西調査区東端部に位置する。総柱式掘立柱建物跡と思われ、桁行３間(5.4m)又はそれ以上、梁行３間(4.95m)、柱間は桁行が1.8m（６尺）等間、梁行が1.65m(5.5尺）等間である。

主軸方位はN－60°－Wである。柱穴の掘方は二柱穴一体の掘方で、柱は柱痕跡を残すものと、抜き取るものがある。柱痕跡から、柱の太さは径30～40cmと思われる。

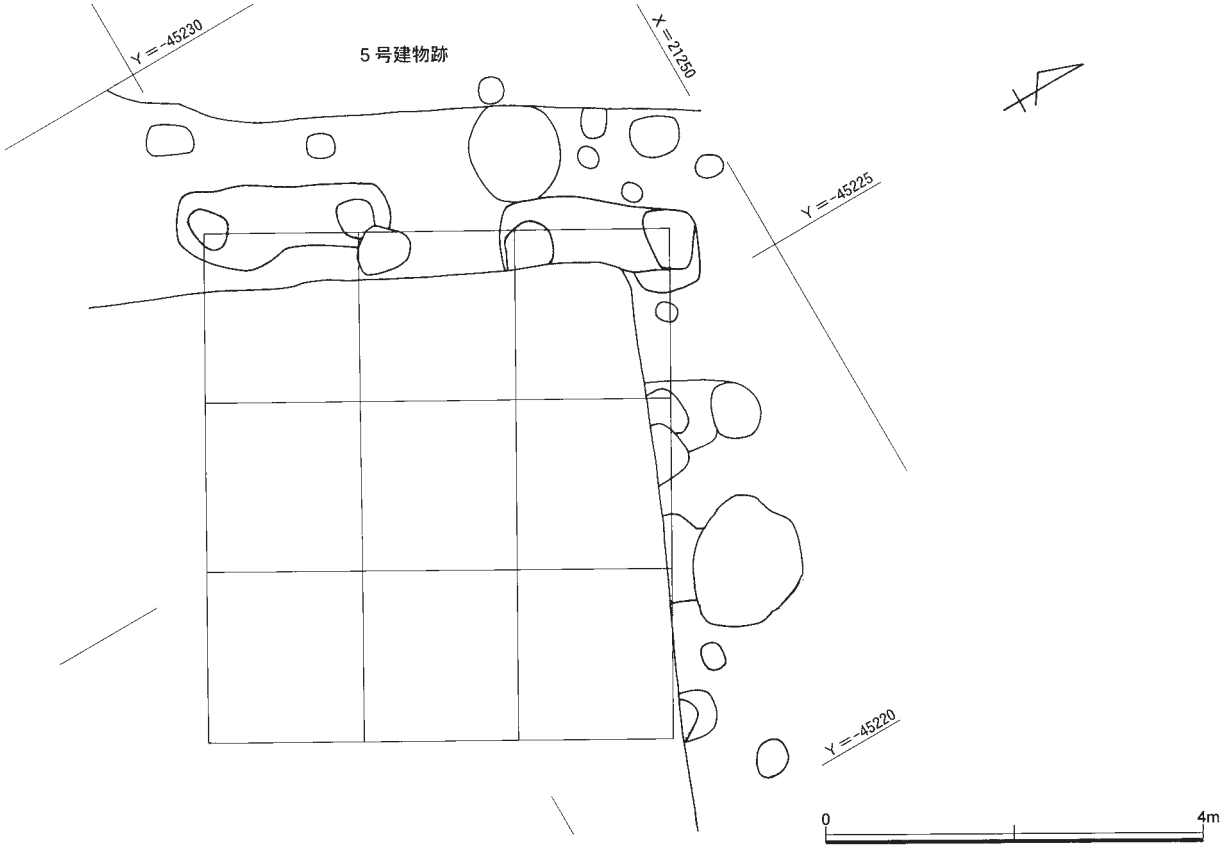
図示できる遺物は出土しなかった。

第22号建物跡（第28図）

東調査区に位置する。総柱式掘立柱建物跡で、規模は不明だが、桁行３間（5.85m)、柱間は桁行が1.95m（6.5尺）等間、梁行が1.95m（6.5尺）である。

主軸方位はN－62°－Wで、第12号竪穴建物跡を切る。柱の掘方は布掘りで、桁側に溝を持つ部分もある。柱は大部分抜き取られていると思われるが、１箇所のみ柱痕跡が認められる。柱痕跡から、柱の径は約30cmと思われる。

図示できる遺物は出土しなかった。



第27図　第21号建物跡

第23号建物跡（第20図）

西調査区西部に位置する掘立柱建物跡である。第３号建物跡に切られるため規模は不明だが、梁行３間（4.95m）、柱間は1.65m（5.5尺）を測る。

主軸方位はN－55°－Wで、第11号建物跡を切り、第３号建物跡、第３号溝に切られる。柱の掘方は、隅丸方形を基本とすると思われる。

図示できる遺物は出土しなかった。

第３号建物跡周辺出土大甕（第30図）

第30図１～７は、第３号建物跡の北側からまとまって出土した大甕の破片である。全て同一個体と考えられる。焼成は良好で、色調は青灰色を呈し、胎土に赤・黒色粒、片岩、砂礫を含む。残存率は10％程度で、底部付近が最も残る。

調査風景

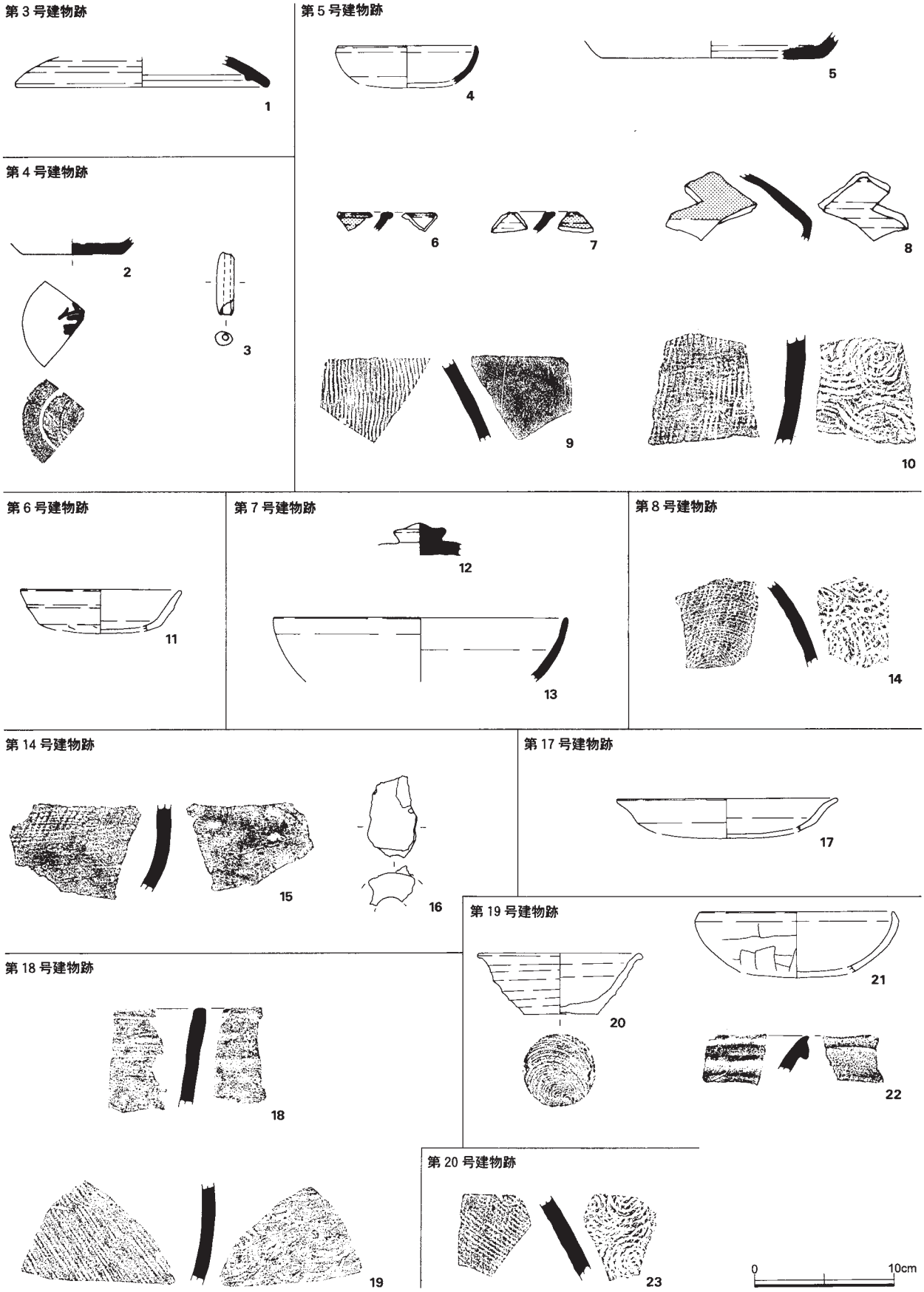
番号	出土遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	第３号建物跡	S	蓋	(18.0)	－	－	ＡＢＥＦ	普	青灰	15%	
2	第４号建物跡	S	坏	－	－	(7.2)	ＡＣＤＧＨ	良	褐灰	15%	墨書〔実ヵ〕
3	第４号建物跡		土錘	長　4.5	幅　1.3	厚　1.0	ＡＣＦＨ	不良	褐灰	95%	
4	第５号建物跡	S	坏	(10.0)	(3.0)	－	ＡＣＦＨ	良	灰	10%	

第２表　建物跡出土遺物観察表（１）

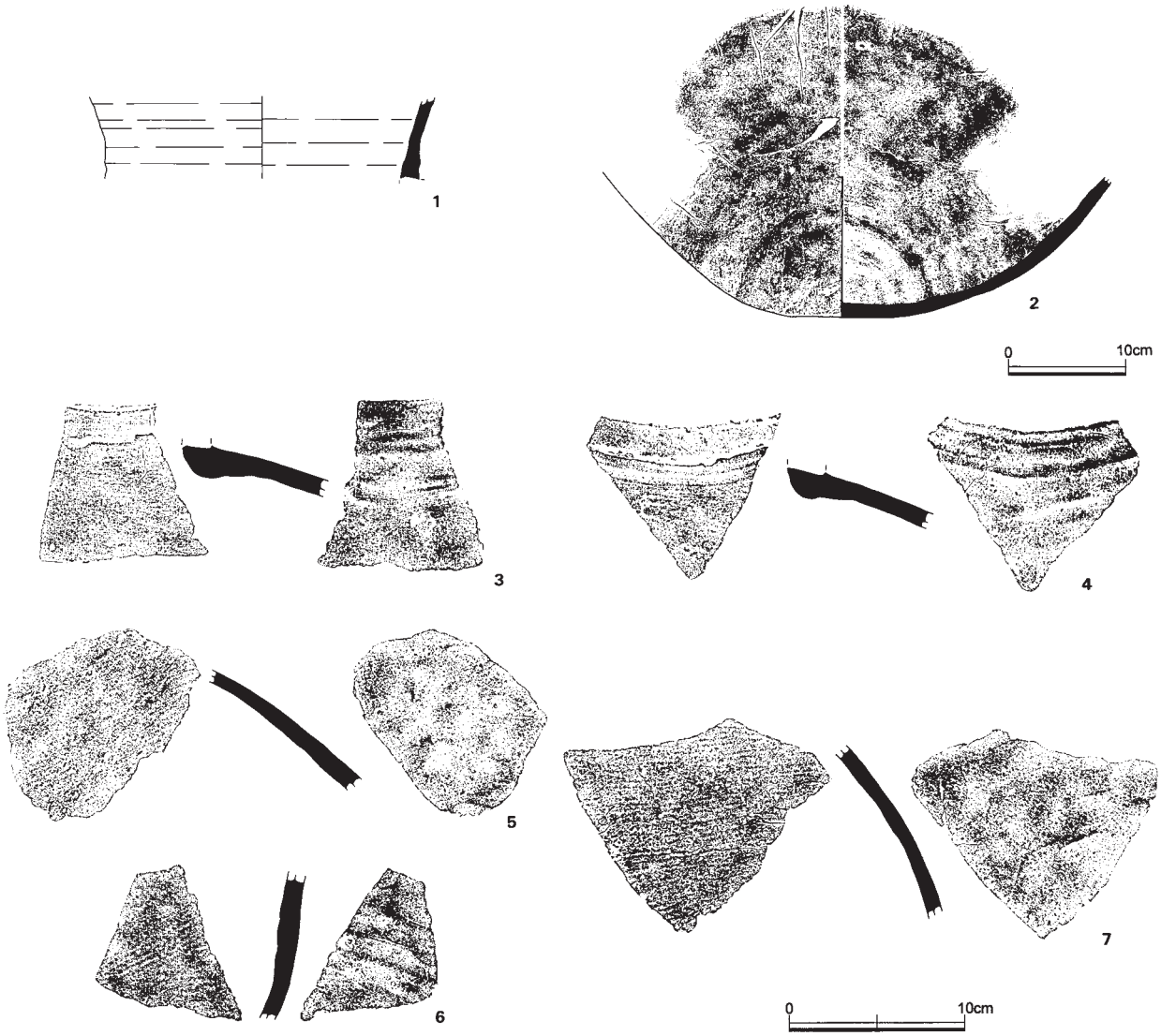
第28図　第22号建物跡

番号	出土遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
5	第５号建物跡	S	盤	－	－	(16.0)	ＡＣＨ	良	青灰	10%	
6	第５号建物跡	S	－	－	－	－	ＡＣ	良	灰	－	口線部付近に自然釉
7	第５号建物跡	S	－	－	－	－	ＡＣ	良	灰	－	内面に自然釉
8	第５号建物跡	S	平瓶	－	－	－	ＡＣ	良	灰	5%	外面肩部に自然釉
9	第５号建物跡	S	甕	－	－	－	ＡＣＤ	良	青灰	－	
10	第５号建物跡	S	甕	－	－	－	ＡＢＦＨ	良	青灰	－	
11	第６号建物跡	H	坏	(11.6)	(3.1)	－	ＡＣＥ	普	褐灰	15%	
12	第７号建物跡	S	蓋	－	－	－	ＡＣＦ	良	灰	10%	
13	第７号建物跡	S	椀	(21.0)	－	－	ＡＤＧＨ	良	黒褐	5%	
14	第８号建物跡	S	横瓶	－	－	－	ＡＦＨ	良	青灰	－	
15	第14号建物跡	S	壷	－	－	－	ＡＦＨ	良	褐灰	－	
16	第14号建物跡		羽口	－	－	－	ＡＣＤＥ	良	橙	－	表面に鉄成分が付着し還元化
17	第17号建物跡	H	皿	(16.0)	(2.8)	－	ＡＢＣＤＥ	良	橙	10%	
18	第18号建物跡	S	甑	－	－	－	ＡＣＦＨ	良	暗橙	－	
19	第18号建物跡	S	甕	－	－	－	ＡＣＤＦＨ	良	青灰	－	
20	第19号建物跡	R	坏	11.7	4.4	5.3	ＡＣＤＥＨ	良	橙	90%	
21	第19号建物跡	H	坏	(14.0)	(4.7)	－	ＡＣＥ	良	橙	20%	
22	第19号建物跡	S	甕	－	－	－	ＡＦＨ	良	青灰	－	
23	第20号建物跡	S	甕	－	－	－	ＡＣＦＨ	良	青灰	－	

第３表　建物跡出土遺物観察表（２）



第29図　建物跡出土遺物



第30図　第３号建物跡周辺出土大甕

第３次調査現地説明会

C　竪穴建物跡

第４号竪穴建物跡（第31・32図、第４・５表）

西調査区中央部に位置し、第４号建物跡掘込地業の中央部を掘り込んで構築される。平面形は方形で、長軸2.8m、短軸2.3mを測る。主軸方位はＮ－120°－Ｅである。

床面は確認面から７cmの深さで、西半が一段深く20cmを測る。壁溝は確認されなかった。カマドは南東壁中央に構築される。カマド前には径15cm、床面からの深さ18cmのピットが確認された。貯蔵穴はカマドの左脇に造られる。径60cmの円形で、床面からの深さは22cmを測る。

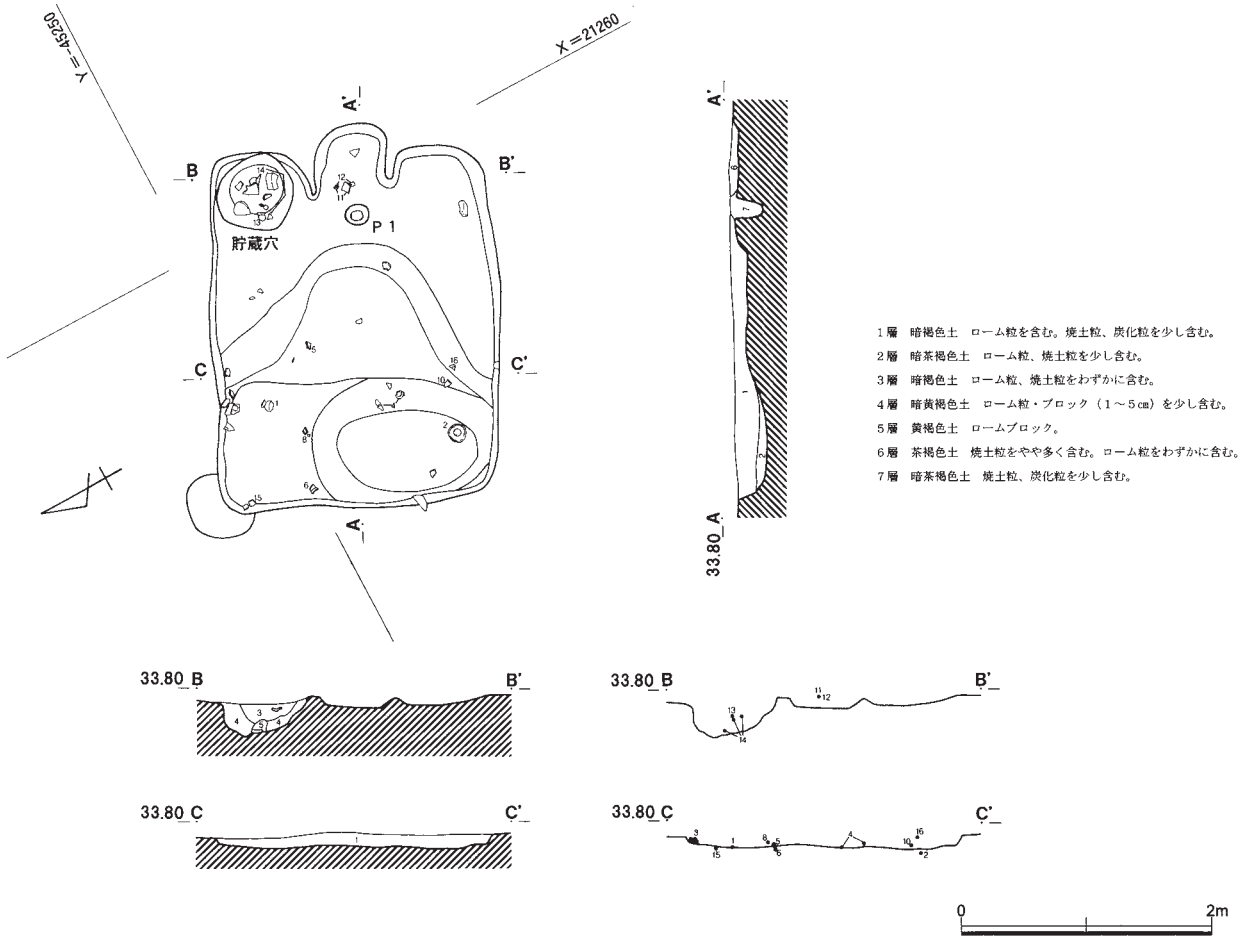
図示できた遺物は、第32図１～16である。１～10はロクロ土師器である。１～３は内黒の高台椀である。内面には丁寧なミガキが施される。４、５は低脚の高台椀、６は高脚の高台椀、７～９は小皿、10は皿である。９は〔㊤ヵ〕の墨書が認められる。11～14は土師器甕、15・16は須恵器甕である。遺構の時期は、10世紀後半と推定される。

第５号竪穴建物跡（第33･34図、第40図１～６、第７表）

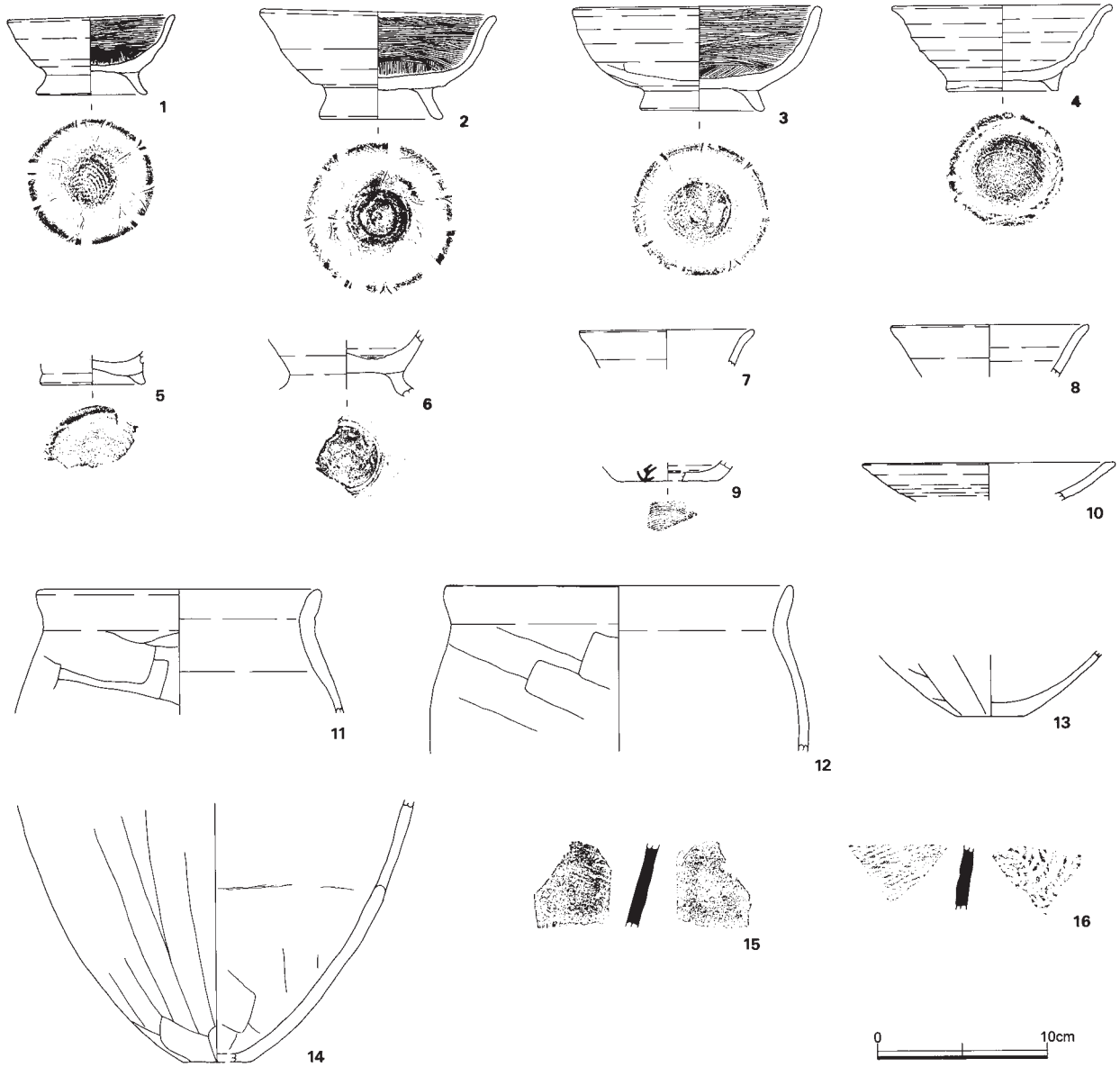
西調査区西部に位置し、第７号建物跡を切る。平面形は方形で、長軸5.5m、短軸4.3mを測る。主軸方位はＮ－25°－Ｅである。

床面はほぼ平坦で、確認面からの深さは約10cmを測る。壁溝は確認されなかった。カマドは北東隅に構築される。燃焼部は一段深くなり、袖は片側のみ検出された。柱穴や貯蔵穴は確認されなかった。

本竪穴建物跡は完掘したものの、出土遺物が非常に少なかった。図示できた遺物は、第40図１～６である。２は暗文坏、３は須恵器蓋、１・４・５は須恵器甕、



第31図　第４号竪穴建物跡



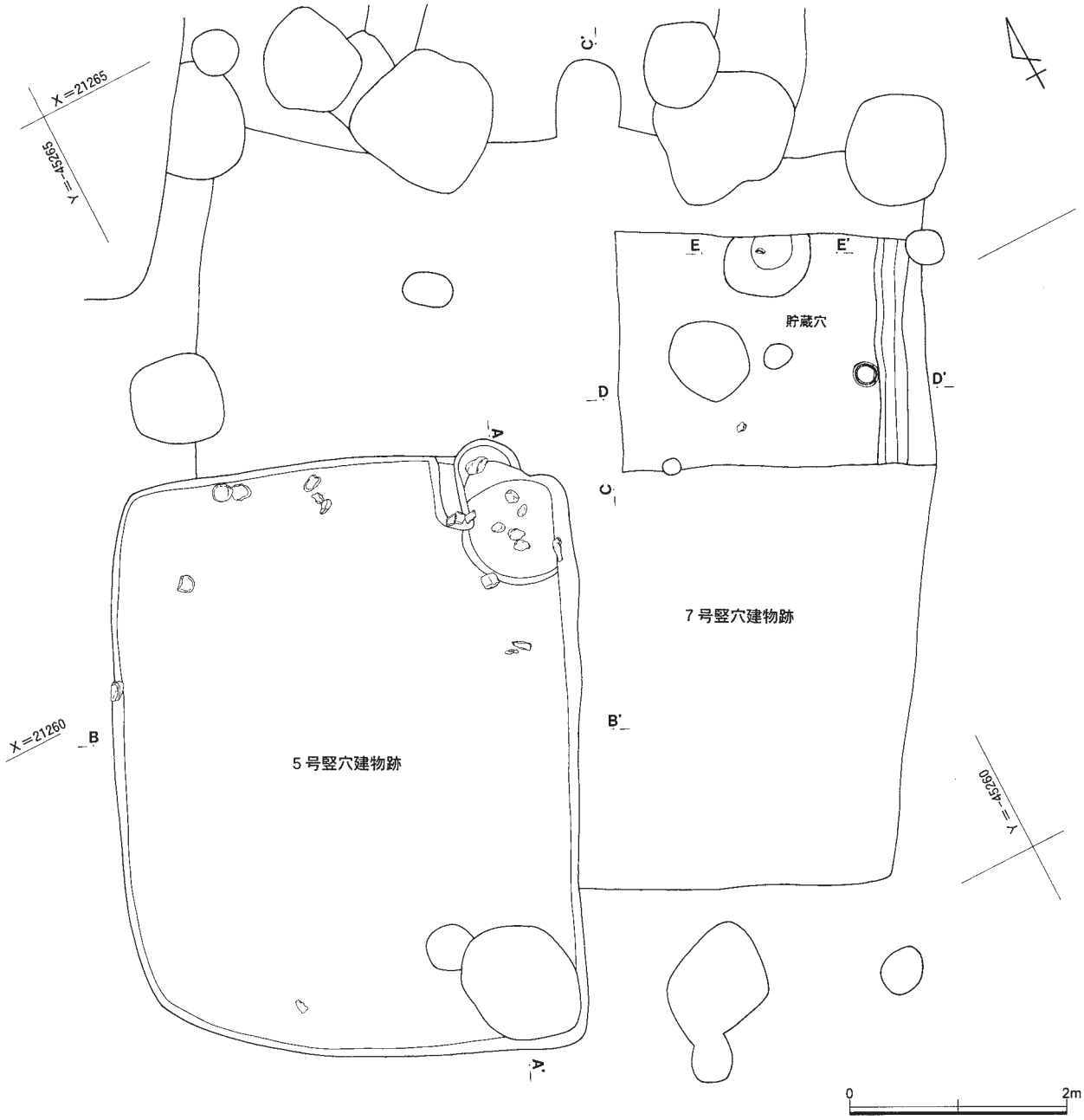
第32図　第４号竪穴建物跡出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	R	高台椀	10.0	4.5	6.6	A C D E H	良	黄橙	95%	内面黒色処理
2	R	高台椀	14.0	6.3	7.3	A C D E H	良	黄橙	100%	内面黒色処理
3	R	高台椀	14.8	6.0	7.4	A B C D E H	良	黄橙	80%	内面黒色処理
4	R	高台椀	13.1	5.0	6.6	A C E H	普	黒褐	70%	
5	R	高台椀	－	－	(6.2)	A C D E	良	橙	10%	
6	R	高台椀	－	－	－	A C D E	良	赤橙	20%	
7	R	小皿	(10.4)	－	－	A B C D E	良	橙	15%	
8	R	小皿	(11.6)	－	－	A C D E	良	黄橙	15%	
9	R	小皿	－	－	(6.0)	A B C E	良	橙	10%	墨書〔㊤ヵ〕
10	R	皿	(15.0)	－	－	A B C D E	良	褐灰	15%	
11	H	甕	(16.8)	－	－	A B C E	良	にぶい橙	10%	

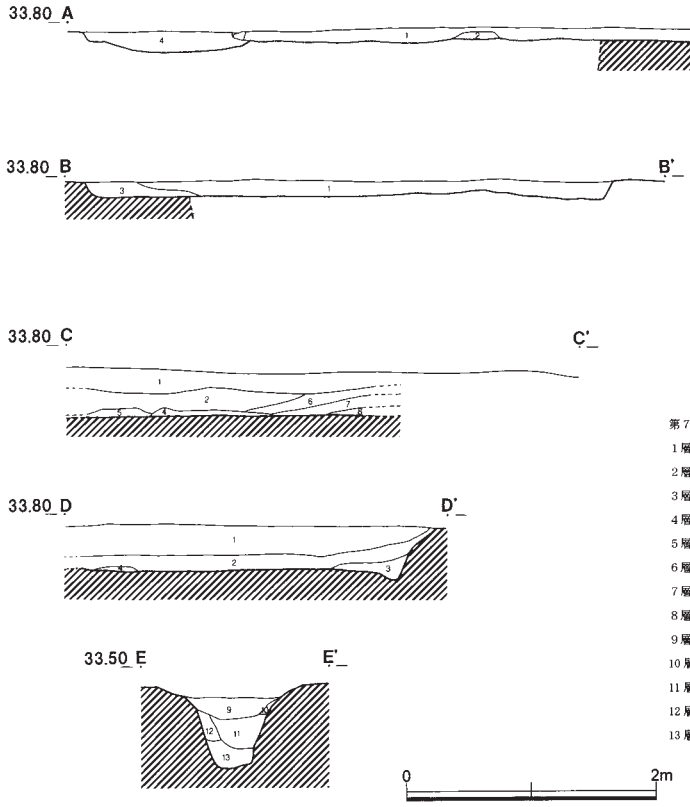
第４表　第４号竪穴建物跡出土遺物観察表（１）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
12	H	甕	(20.6)	－	－	A B C E	良	褐灰	15%	
13	H	甕	－	－	4.0	A E	良	黒褐	5%	内面に炭化物が付着
14	H	甕	－	－	(4.0)	A B C D E	良	黄橙	15%	
15	S	甕	－	－	－	A C F G H	良	灰	－	
16	S	甕	－	－	－	A C F	良	灰	－	

第５表　第４号竪穴建物跡出土遺物観察表（２）



第33図　第５・７号竪穴建物跡



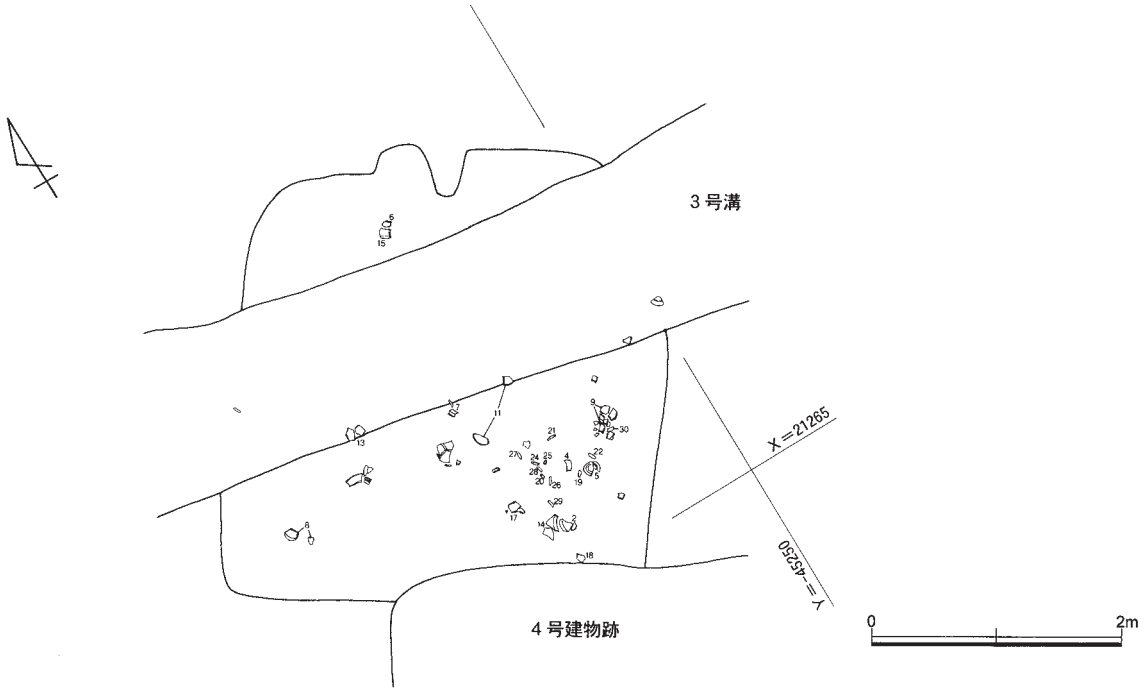
第５号竪穴建物跡

１層　暗褐色土　炭化物をやや多く含む。上面付近に炭化米を含む。
２層　暗褐色土　焼土を多量に含む。
３層　茶褐色土　ローム粒をやや多く含む。炭化物を含む。
４層　灰褐色土　焼土粒、炭化粒をやや多く含む。

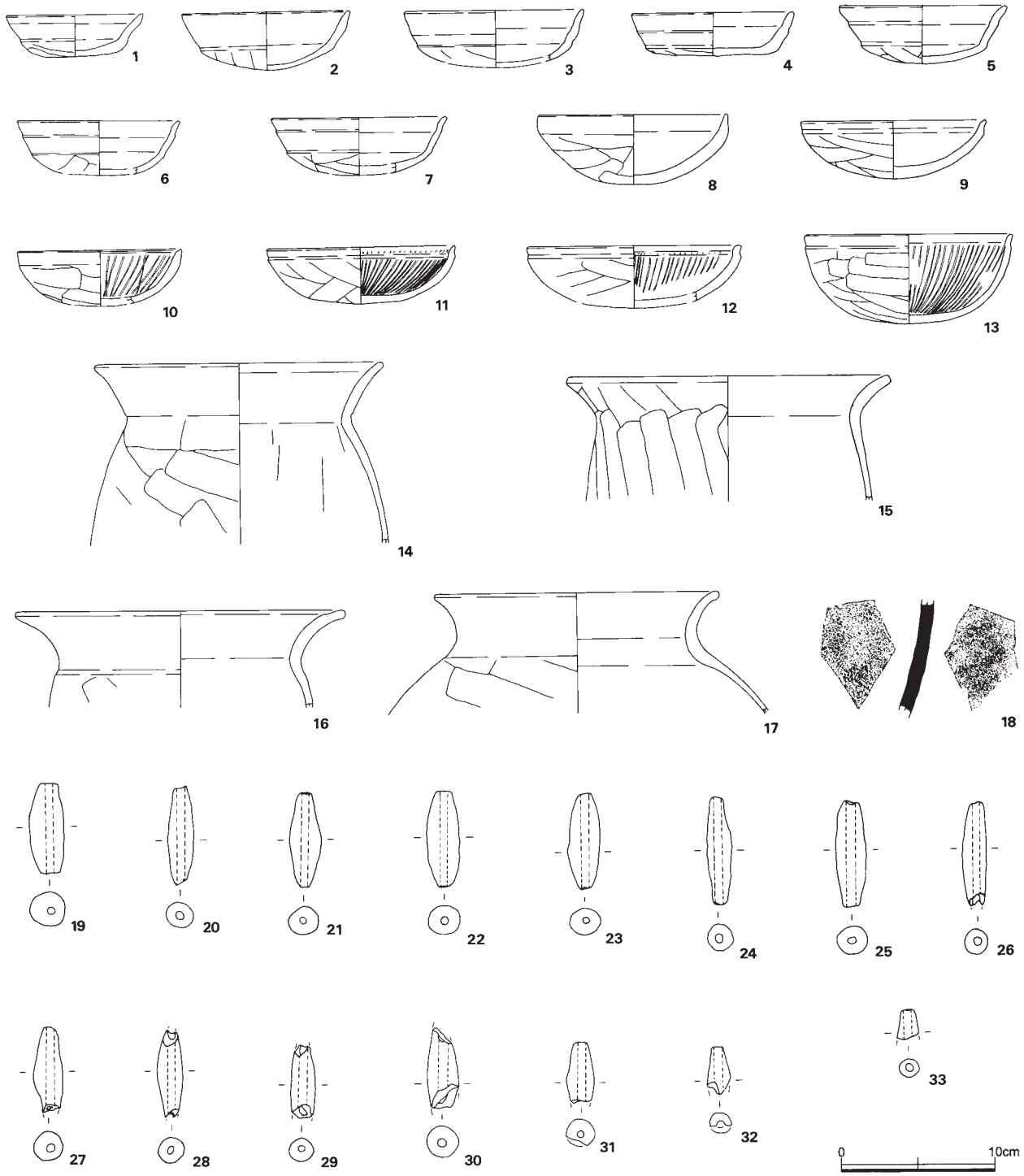
第７号竪穴建物跡

１層　暗褐色土　ローム粒を含む。ロームブロック（１cm）、焼土粒を少し含む。
２層　暗茶褐色土　ローム粒をやや多く含む。焼土粒を含む。ロームブロック（１～５cm）を少し含む。
３層　茶褐色土　ローム粒を多く含む。
４層　黄褐色土　ロームで構成される。
５層　黒褐色土　黄褐色粘土、ローム粒、焼土粒を含む。
６層　灰褐色土　ローム粒をわずかに含む。焼土粒を少し含む。
７層　灰白色土　灰白色粘土を多く含む。ローム粒、焼土粒を含む。
８層　赤褐色土　焼土を多量に含む。
９層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
10層　黄褐色土　ロームで構成される。
11層　茶褐色土　ローム粒を多く含む。
12層　暗黄褐色土　ローム粒を多く含む。
13層　黄白色土　ローム粒・ブロック（１cm）を多く含む。

第34図　第５・７号竪穴建物跡土層断面図



第35図　第６号竪穴建物跡



第36図　第６号竪穴建物跡出土遺物

６は円筒埴輪である。遺構の時期は、７世紀後半と推定される。

第６号竪穴建物跡（第35・36図、第６表）

西調査区北部に位置し、第４号建物跡、第３号溝に切られる。平面形は方形で、長軸3.6m、短軸3.4mを測る。主軸方位はN－38°－Eである。カマドは北東壁中央に構築される。

掘り下げはほとんど行なっていないが、確認面付近から多くの遺物が出土した。図示できた遺物は、第36図１～33である。18を除き全て土師器で、１～３は模倣坏或いは有段口縁坏の段が退化したもの、４～７

は有段口縁坏、８は北武蔵型坏、９は暗文系無文坏、10～13は暗文坏、14～16は甕、17は壷である。また、18は須恵器甕、19～33は土錘である。遺構の時期は、７世紀後半と推定される。

第７号竪穴建物跡（第33･34図、第40図７～12、第７表）

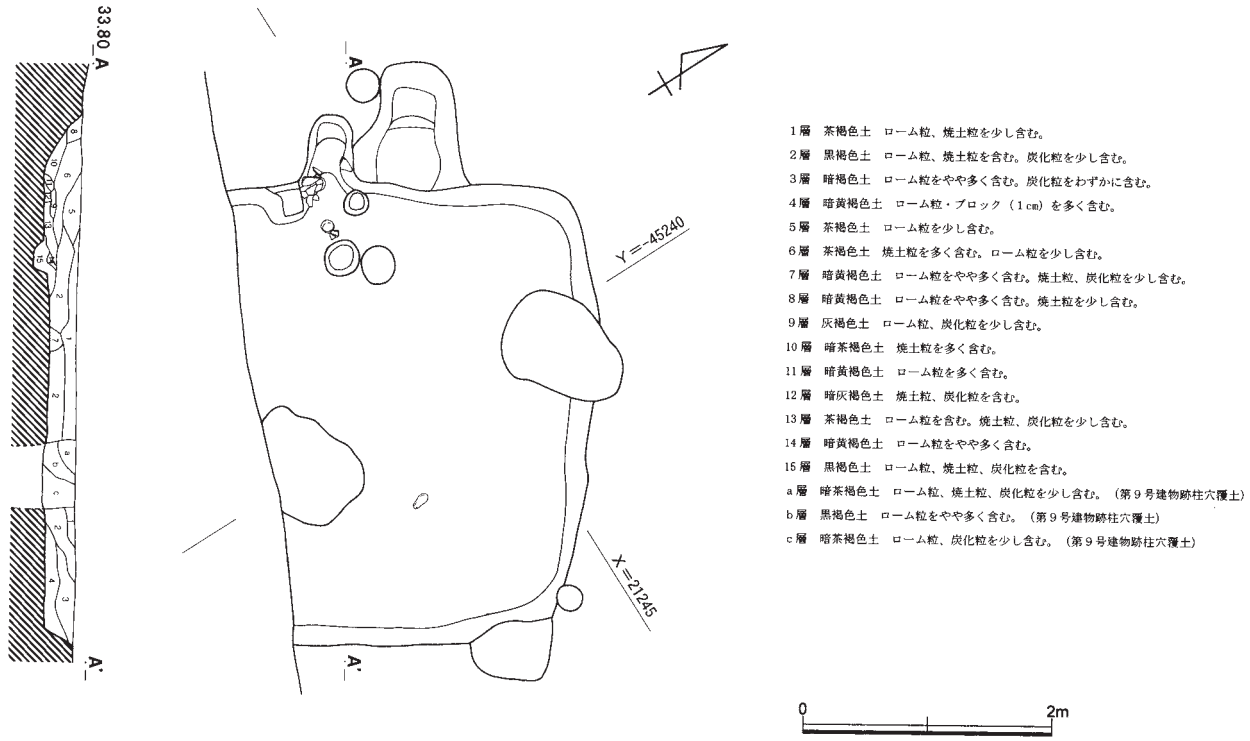
西調査区西部に位置し、第19号建物跡、第５号竪穴建物跡に切られる。平面形は方形で、長軸6.9m、短軸6.6mを測る。主軸方位はN－34°－Eである。

部分的な調査であるが、床面はほぼ平坦で、確認面からの深さは35cmを測る。壁溝は幅24cm、床面からの深さ５cmである。カマドは北東壁中央に構築される。貯蔵穴は径約１mの円形で、床面からの深さは64cmを測る。また、主柱穴と思われるピットが検出された。

図示できた遺物は、第40図７～12である。７は有段口縁坏、８・９は土師器甕、10～12は須恵器甕破

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	H	坏	(9.0)	2.7	－	ＡＣＤＥ	普	にぶい橙	30%	
2	H	坏	11.0	3.7	－	ＡＢＣＥ	良	にぶい橙	80%	
3	H	坏	(11.6)	(3.7)	－	ＡＢＣＤＥ	良	黒褐	20%	
4	H	坏	10.6	2.8	－	ＡＣＥ	良	赤橙	90%	
5	H	坏	11.0	3.8	－	ＡＣＥ	良	黒褐	95%	
6	H	坏	(10.6)	(3.5)	－	ＡＣＤＥ	良	にぶい橙	20%	
7	H	坏	(11.6)	(3.7)	－	ＡＢＣＤＥ	良	黒褐	30%	
8	H	坏	12.3	4.5	－	ＡＢＣＤＥ	良	橙	90%	
9	H	坏	12.0	3.8	－	ＡＢＣＤＥ	普	橙	80%	内面は磨耗が激しく暗文が確認できない
10	H	坏	(10.8)	(3.6)	－	ＡＣＤＥ	良	橙	40%	
11	H	坏	12.3	3.7	－	ＡＣＥＨ	良	橙	80%	
12	H	坏	(14.0)	(4.0)	－	ＡＣＤＥ	良	橙	15%	
13	H	坏	(13.6)	5.8	－	ＡＢＣＥ	良	黒褐	30%	
14	H	甕	(19.0)	－	－	ＡＢＣＥＨ	良	橙	15%	
15	H	甕	(21.2)	－	－	ＡＢＣＥＨ	良	赤橙	15%	
16	H	甕	(21.6)	－	－	ＡＢＣＥＨ	良	赤橙	10%	
17	H	壷	(18.8)	－	－	ＡＢＣＥ	良	黒褐	10%	
18	S	甕	－	－	－	ＡＣＧＨ	良	灰	－	
19		土錘	長　5.8	幅　2.2	厚　2.2	ＡＥＦＩ	良	にぶい橙	100%	
20		土錘	長　6.2	幅　1.6	厚　1.6	ＡＢＣＦＩ	良	褐灰	100%	
21		土錘	長　6.1	幅　2.0	厚　1.8	ＡＢＣＦＨ	良	褐灰	95%	
22		土錘	長　6.2	幅　2.1	厚　1.8	ＡＣＦＩ	良	橙	100%	
23		土錘	長　6.2	幅　2.0	厚　1.7	ＡＣＦＨＩ	良	橙	100%	
24		土錘	長　7.0	幅　1.7	厚　1.7	ＡＢＣＨ	良	にぶい橙	100%	
25		土錘	長　6.9	幅　2.0	厚　1.8	ＡＢＣＤＦＨＩ	良	にぶい橙	100%	
26		土錘	長　－	幅　1.5	厚　1.6	ＡＢＣＦＨ	良	赤橙	90%	
27		土錘	長　－	幅　1.9	厚　1.9	ＡＢＣＤＥＨ	良	橙	80%	
28		土錘	長　－	幅　1.7	厚　1.7	ＡＢＣＥＦＨ	良	橙	90%	
29		土錘	長　－	幅　1.6	厚　1.6	ＡＣＦＩ	良	赤橙	50%	
30		土錘	長　－	幅　2.1	厚　2.0	ＡＢＣＨ	良	橙	50%	
31		土錘	長　－	幅　1.8	厚　(1.8)	ＡＢＣＥ	良	橙	30%	
32		土錘	長　－	幅　1.5	厚　(1.3)	ＡＣ	良	橙	30%	
33		土錘	長　－	幅　1.4	厚　1.2	ＡＢＣ	良	赤橙	20%	

第６表　第６号竪穴建物跡出土遺物観察表



第37図　第８号竪穴建物跡

片である。８は東壁際床面直上に伏せられた状態で出土した。遺構の時期は、７世紀後半と推定される。

第８号竪穴建物跡（第37図、第40図13～16、第７表）

西調査区南部に位置し、第９号建物跡に切られる。平面形は方形で、一辺3.6mを測る。主軸方位はN－55°－Wである。

床面はほぼ平坦で、確認面からの深さは約30cmを測る。壁溝は確認されなかった。カマドは北西壁に構築される。カマド前に径30cm、床面からの深さ10cmのピットが検出された。

図示できた遺物は、第40図13～16である。13は有段口縁坏、14は土師器甕底部、15・16は編物石である。遺構の時期は、７世紀後半と推定される。

第９号竪穴建物跡（第38図、第40図17・18、第７表）

西調査区北部に位置し、第３・10・11・19・23号建物跡、第３号溝、第４号土坑に切られる。平面形は方形で、長軸5.4m、短軸5.0mを測る。主軸方位はN－54°－Wである。

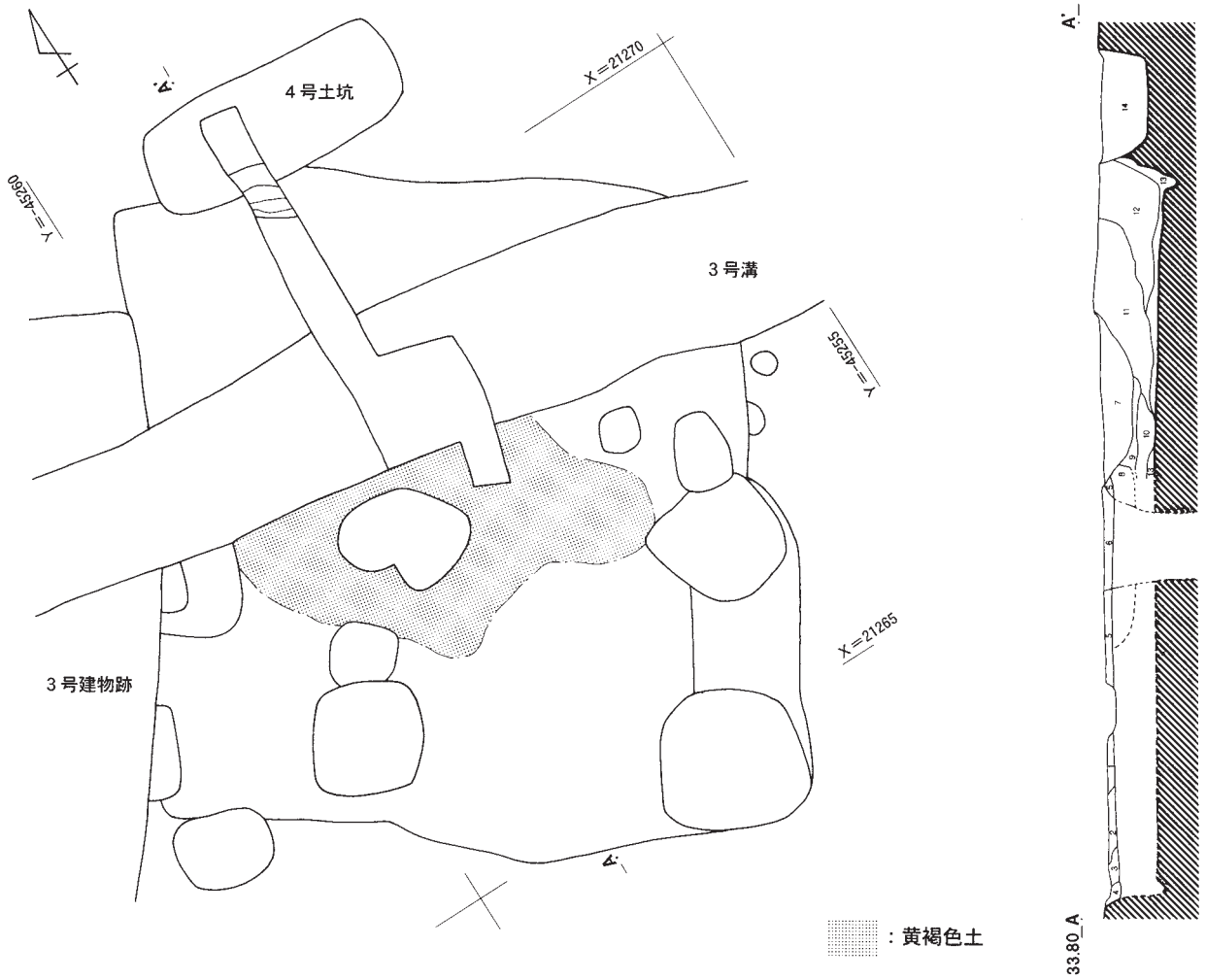
床面の深さは確認面から約50cm、壁溝は幅26cm、床面からの深さは10cmである。カマドは第３号建物跡に切られている北西壁に構築されると思われる。覆土上層には、硬く締まる黄褐色土が堆積し、明らかに埋め戻されている状況が観察された。遺物もほとんど出土せず、正倉造営直前期のものである可能性が高い。

図示できた遺物は、第40図17・18の土師器で、有段口縁坏と暗文坏が１点ずつである。遺構の時期は、７世紀後半～末頃と推定される。

第10号竪穴建物跡（第39図、第40図19～27、第７表）

西調査区西端部に位置し、第３号建物跡に切られる。平面形は方形で、一辺5.2m以上、主軸方位はN－40°－Eである。

床面はほぼ平坦で、確認面からの深さは約40cmである。壁溝は幅15cm、床面からの深さは５cmを測る。主柱穴と思われるピットが確認された。また、南東壁際から、編物石がまとまって出土した。



1層　暗黄褐色土　ローム粒をやや多く含む。
2層　暗褐色土　ローム粒、焼土粒、炭化粒をわずかに含む。
3層　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。
4層　暗褐色土　ローム粒、炭化粒をわずかに含む。
5層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。
6層　暗褐色土　ローム粒を含む。（第19号建物跡柱穴覆土）
7層　灰褐色土　ローム粒、炭化粒をわずかに含む。（第3号溝覆土）
8層　黄褐色土　ローム粒・ブロックで構成される。硬く締まる。
9層　暗灰褐色土　ローム粒・ブロック（1～2㎝）を多く含む。
10層　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。
11層　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
12層　暗褐色土　ローム粒を少し含む。
13層　暗灰褐色土　ローム粒をやや多く含む。
14層　灰褐色土　ローム粒・ブロック（1㎝）をやや多く含む。（第4号土坑覆土）

第38図　第9号竪穴建物跡

図示できた遺物は、第40図19～27である。19は北武蔵型坏、20は暗文坏、21～27は編物石である。遺構の時期は、7世紀後半と推定される。

第11号竪穴建物跡

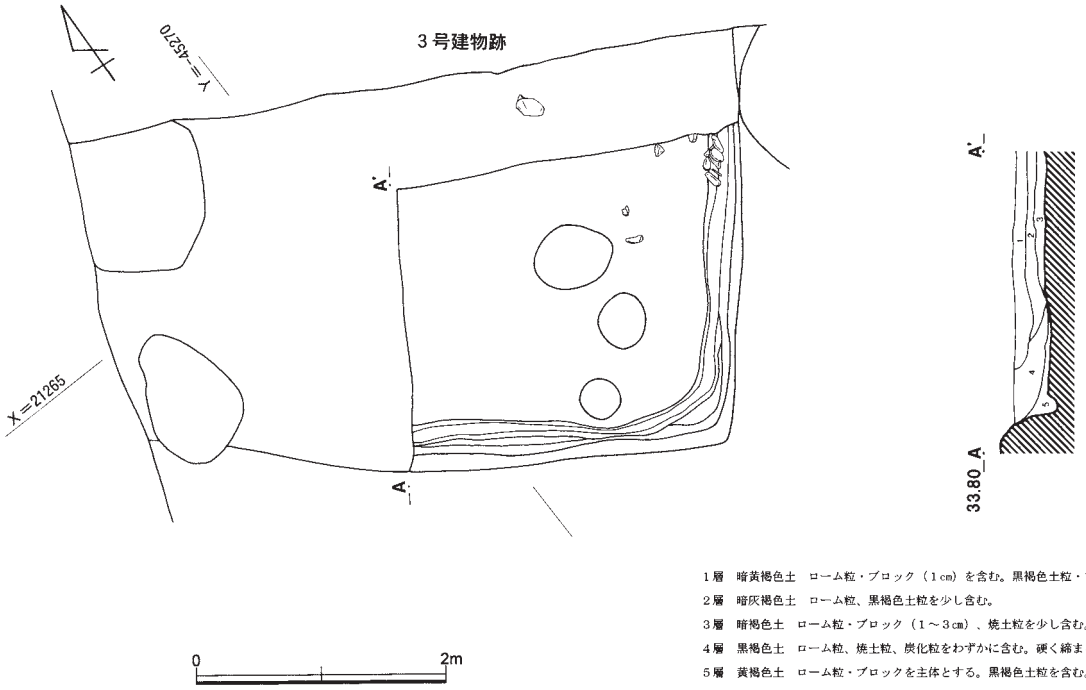
西調査区東部に位置し、第5・9・14号建物跡、第2号土坑に切られる。平面形は方形で、一辺3.4m、主軸方位はN－35°－Eである。床面の深さは、確認面から約10㎝を測る。

図示できる遺物は出土しなかった。遺構の時期は、建物跡との切り合い関係から、7世紀後半と推定される。

第12号竪穴建物跡

東調査区頭部に位置し、第22号建物跡、第2号溝に切られる。平面形は方形で、長軸約5.2m、短軸約4.5mを測る。主軸方位はN－15°－Wである。

図示できる遺物は出土しなかった。遺構の時期は、建物跡や区画溝との切り合い関係から、7世紀後半と推定される。

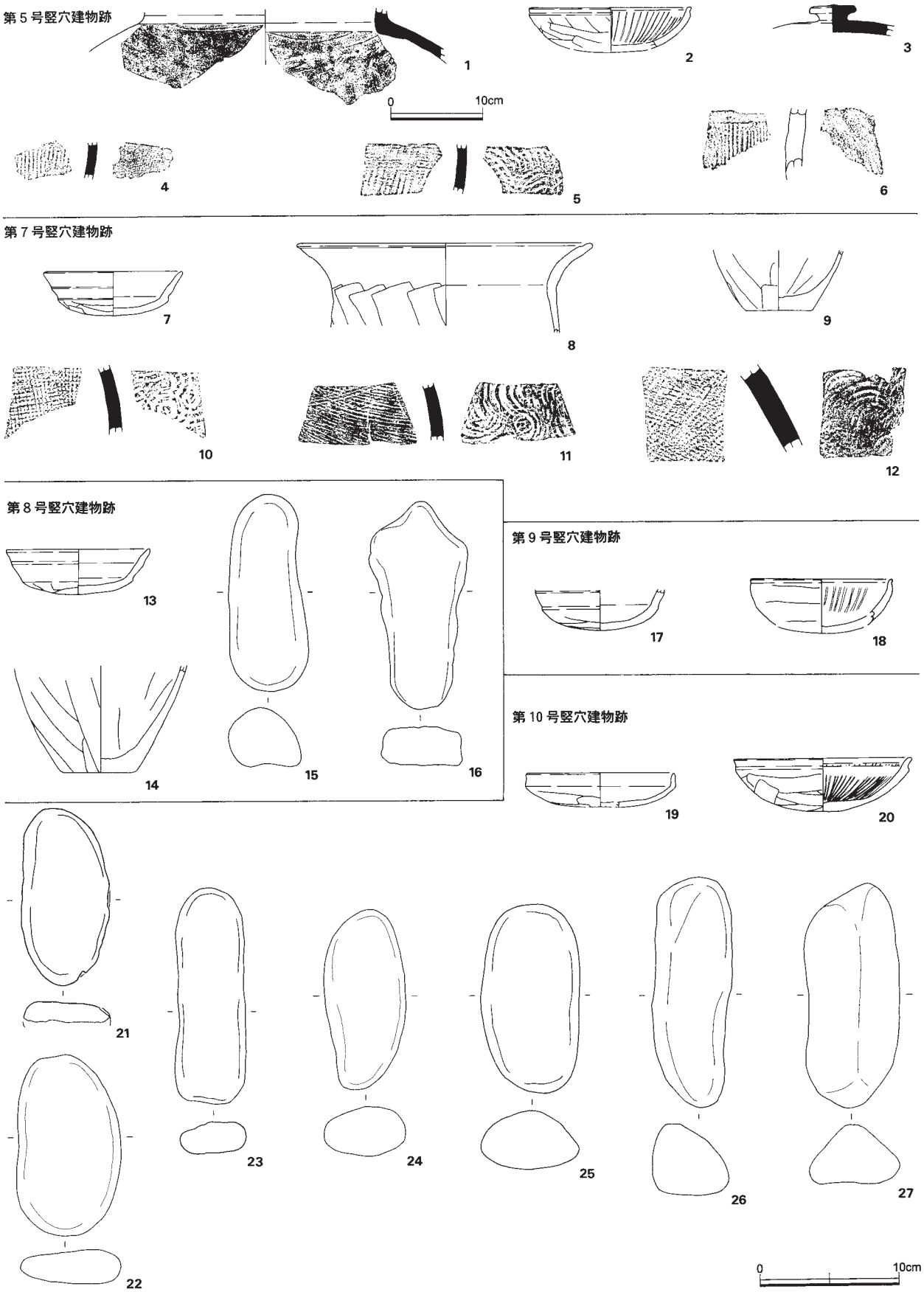


1層　暗黄褐色土　ローム粒・ブロック（1cm）を含む。黒褐色土粒・ブロックを含む。
2層　暗灰褐色土　ローム粒、黒褐色土粒を少し含む。
3層　暗褐色土　ローム粒・ブロック（1～3cm）、焼土粒を少し含む。
4層　黒褐色土　ローム粒、焼土粒、炭化粒をわずかに含む。硬く締まる。
5層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。黒褐色土粒を含む。

第39図　第10号竪穴建物跡

番号	出土遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	第5号竪穴建物跡	S	甕	－	－	－	A C F H	良	青灰	－	
2	第5号竪穴建物跡	H	坏	(11.8)	(3.2)	－	A C D E	良	橙	25%	
3	第5号竪穴建物跡	S	蓋	－	－	－	A H	良	灰	10%	
4	第5号竪穴建物跡	S	甕	－	－	－	A C	良	灰	－	外面に自然釉
5	第5号竪穴建物跡	S	甕	－	－	－	A B C H	普	灰	－	
6	第5号竪穴建物跡		埴輪	－	－	－	A B C E H	良	橙	－	
7	第7号竪穴建物跡	H	坏	(10.0)	3.1	－	A C D E	普	黒褐	25%	
8	第7号竪穴建物跡	H	甕	21.4	－	－	A B C E H	良	赤橙	30%	
9	第7号竪穴建物跡	H	甕	－	－	4.7	A B C E H	良	赤橙	10%	
10	第7号竪穴建物跡	S	甕	－	－	－	A C F H	良	灰	－	
11	第7号竪穴建物跡	S	甕	－	－	－	A C F H	良	灰	－	
12	第7号竪穴建物跡	S	甕	－	－	－	A C F H	良	灰	－	
13	第8号竪穴建物跡	H	坏	10.5	3.3	－	A C D E	良	黒褐	100%	内面黒色処理
14	第8号竪穴建物跡	H	甕	－	－	5.0	A B C E I	良	にぶい橙	20%	
15	第8号竪穴建物跡		編物石	長　14.0	幅　5.6	厚　4.0	石材　砂岩				重さ　430g
16	第8号竪穴建物跡		編物石	長　14.8	幅　7.0	厚　2.8	石材　砂岩				重さ　385g
17	第9号竪穴建物跡	H	坏	－	－	－	A C E	普	黄橙	15%	
18	第9号竪穴建物跡	H	坏	(10.2)	(3.9)	－	A C D E	良	赤橙	10%	
19	第10号竪穴建物跡	H	坏	(10.8)	(2.4)	－	A C E H I	良	橙	25%	
20	第10号竪穴建物跡	H	坏	12.8	3.8	－	A B C E		赤橙	60%	
21	第10号竪穴建物跡		編物石	長　12.5	幅　6.4	厚　－	石材　砂岩				重さ　190g
22	第10号竪穴建物跡		編物石	長　12.9	幅　7.4	厚　2.4	石材　砂岩				重さ　400g
23	第10号竪穴建物跡		編物石	長　15.4	幅　4.8	厚　2.2	石材　片岩				重さ　310g
24	第10号竪穴建物跡		編物石	長　12.7	幅　5.8	厚　3.5	石材　片岩				重さ　405g
25	第10号竪穴建物跡		編物石	長　13.4	幅　7.1	厚　4.1	石材　砂岩				重さ　550g
26	第10号竪穴建物跡		編物石	長　16.4	幅　5.6	厚　5.0	石材　砂岩				重さ　700g
27	第10号竪穴建物跡		編物石	長　16.0	幅　6.5	厚　4.1	石材　砂岩				重さ　660g

第7表　第5・7～10号竪穴建物跡出土遺物観察表



第40図　第５・７～10号竪穴建物跡出土遺物

d　溝

第２号溝（第41・42図、第８・９表）

調査区北部に位置し、建物跡の北側に約６ｍの間隔を空けて平行する、正倉院（南）の北辺を区画する溝と考えられる。第12号竪穴建物跡を切り、第３・５号溝に切られる。断面形は逆台形を呈し、上部がやや広がる。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは約80㎝である。幅は上端が約３ｍ、下端が約２ｍを測る。主軸方位はＮ－58°－Ｗである。覆土の状況から、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は第６号竪穴建物跡周辺で特に多く、それらの流れ込みによるものが多いと思われる。図示できた遺物は、第42図１～28である。１～19は土師器で、１は模倣坏、２～８は有段口縁坏、９～12は北武蔵型坏、13～15は暗文坏、16～19は甕である。20～25は須恵器で、20･21は蓋、22～25は甕である。26は瓦、27・28は土錘である。

第３号溝（第８図、第44図１～12、第10・11表）

調査区北部に位置し、第３・５・11・23号建物跡、第６・９号竪穴建物跡、第２号溝を切る。主軸方位はＮ－80°－Ｗであるが、途中で南東に分岐する。幅は1.3～３ｍ、確認面からの深さは第９号竪穴建物跡周辺で約30㎝を測る。

図示できた遺物は、第44図１～12である。２は有段口縁坏、１・４～６は須恵器甕、３は須恵器瓶、７・８はロクロ土師器の高台椀、９は瓦、10・11は土錘、12は青磁碗である。遺構の時期は、切り合いと青磁碗の出土から、中世と推定される。

第４号溝（第８図、第44図13～16、第11表）

調査区南部に位置し、第８・９号建物跡を切る。幅は約80㎝、確認面からの深さは約20㎝を測る。主軸方位はＮ－60°－Ｗである。

図示できた遺物は、第44図13～16である。13は白磁碗、14は青磁碗、15は土師質の鉢、16は瓦質の内耳土器である。遺構の時期は、中近世と思われる。

第５号溝（第43図）

調査区南東部に位置し、第22号建物跡、第12号竪穴建物跡、第２号溝を切る。幅は約2.2ｍ、緩やかな落ち込みで、確認面からの深さは約30㎝を測る。図示できる遺物は出土しなかった。

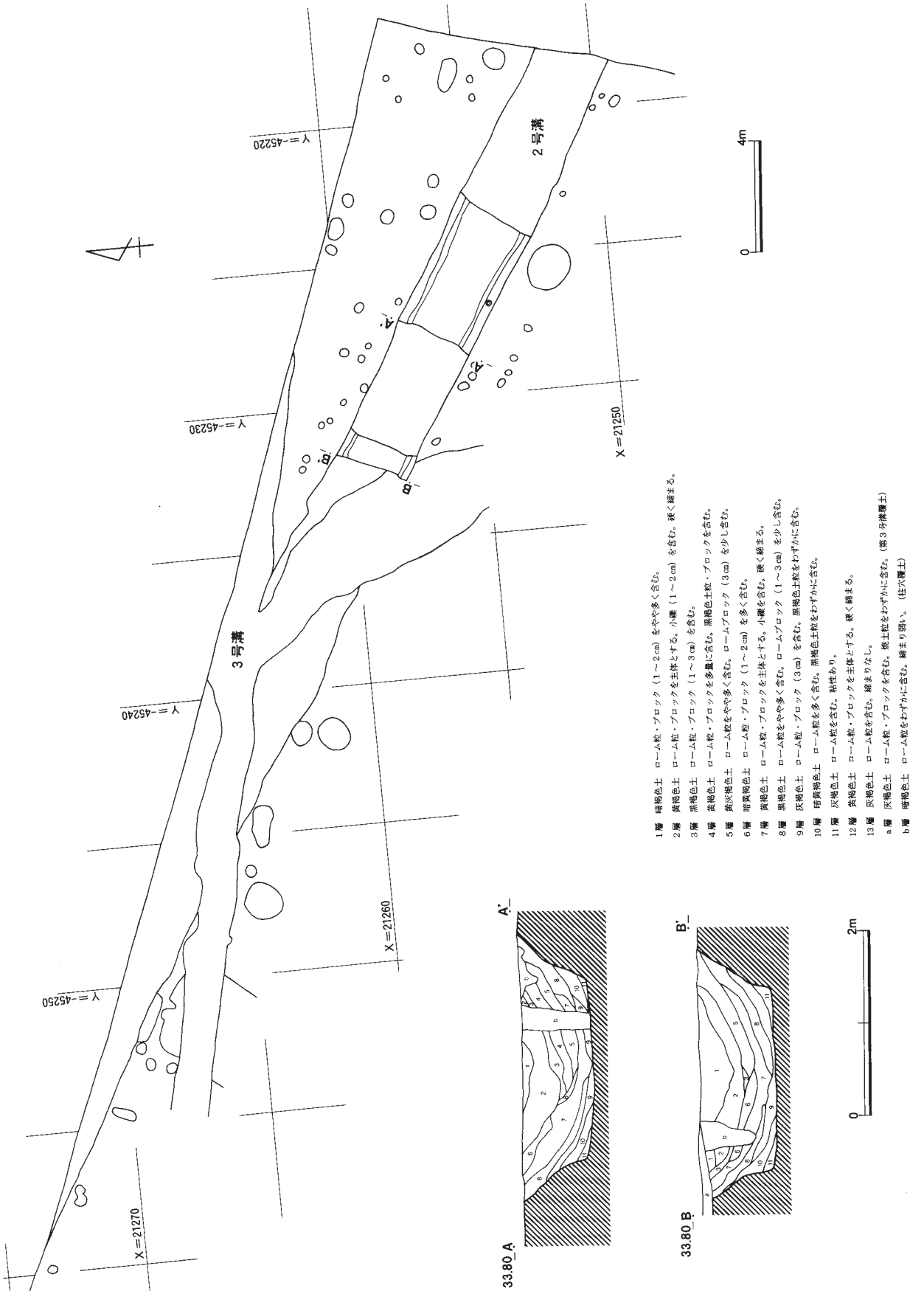
覆土は硬く締まっており、現況の道路とも重なる部分があることから、中近世頃の道路跡と考えられる。

e　その他の遺構・遺物

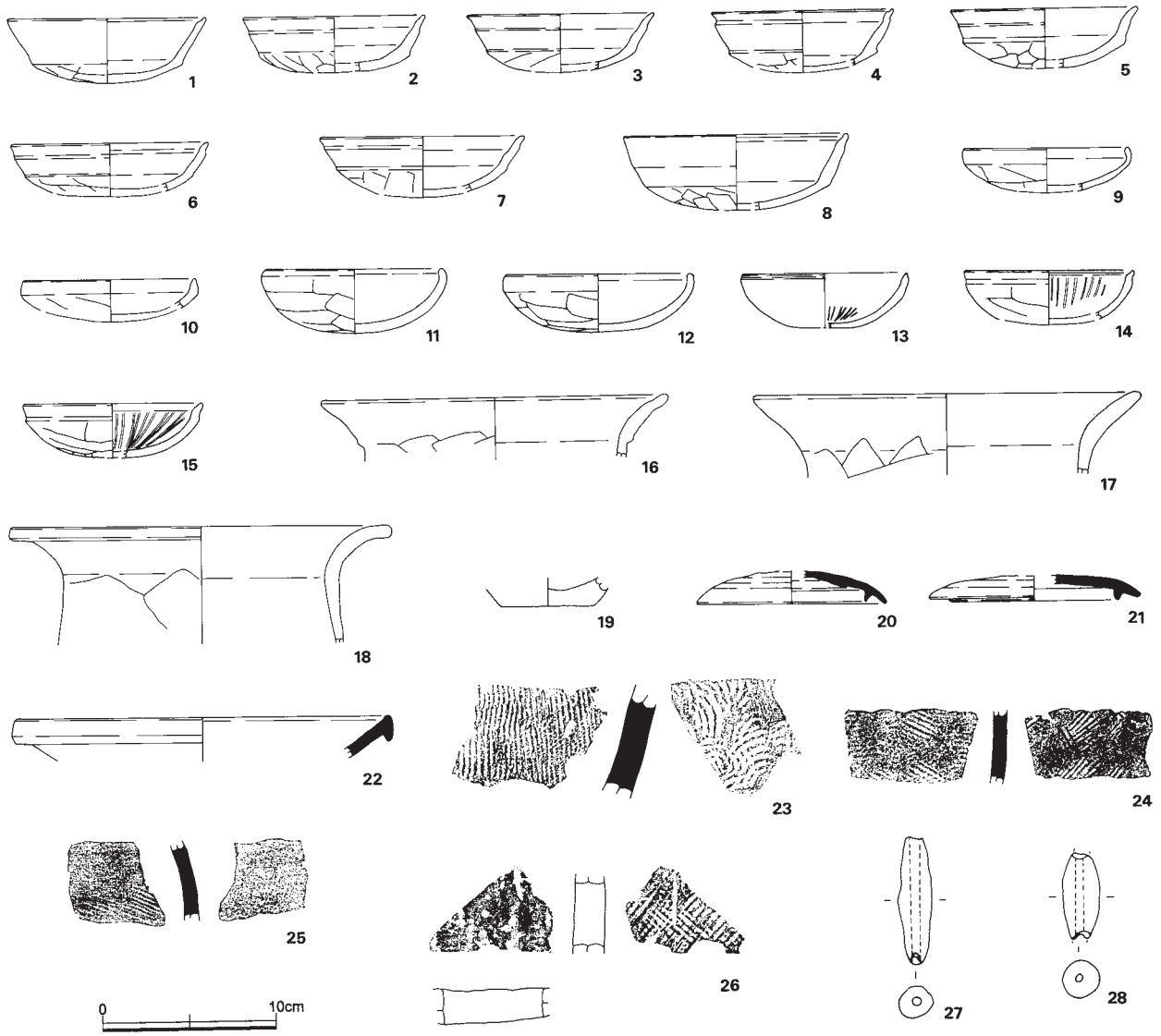
その他の遺構として、土坑・ピット群が確認されている。

土坑は番号を付したものが５基ある。第１号土坑は図示できなかったが、第14号建物跡の北西柱穴列の上部に重複していた。図示できた遺物は、第44図17・18である。共に須恵器瓶で､17は外面に自然釉がかかる。第２～５号土坑は、いずれも方形土坑である。第２・５号土坑は、第５・14号建物跡等を切る。第３号土坑は、第７号土坑を切る。第４号土坑は、第９号竪穴建物跡を切る。図示できた遺物は、第３号土坑出土の第44図19の須恵器甕のみである。遺構の切り合いから、これらの土坑は全て中世頃のものと推定される。

また、調査区一括出土遺物は、第45図に示した。


2号溝
3号溝
Y＝-45220
Y＝-45230
Y＝-45240
Y＝-45250
X＝21250
X＝21260
X＝21270
A'
33.80 A
B'
33.80 B
0
2m
0
4m
1層　暗褐色土　ローム粒・ブロック（1～2㎝）をやや多く含む。
2層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。小礫（1～2㎝）を含む。硬く締まる。
3層　黒褐色土　ローム粒・ブロック（1～3㎝）を含む。
4層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを多量に含む。黒褐色土粒・ブロックを含む。
5層　黄灰褐色土　ローム粒をやや多く含む。ロームブロック（3㎝）を少し含む。
6層　暗黄褐色土　ローム粒・ブロック（1～2㎝）を多く含む。
7層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。小礫を含む。硬く締まる。
8層　黒褐色土　ローム粒をやや多く含む。ロームブロック（1～3㎝）を少し含む。
9層　灰褐色土　ローム粒・ブロック（3㎝）を含む。黒褐色土粒をわずかに含む。
10層　暗黄褐色土　ローム粒を多く含む。黒褐色土粒をわずかに含む。
11層　灰褐色土　ローム粒を含む。粘性あり。
12層　黄褐色土　ローム粒・ブロックを主体とする。硬く締まる。
13層　灰褐色土　ローム粒を含む。締まりなし。
a層　灰褐色土　ローム粒・ブロックを含む。焼土粒をわずかに含む。（第３号構覆土）
b層　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。締まり弱い。（住穴覆土）

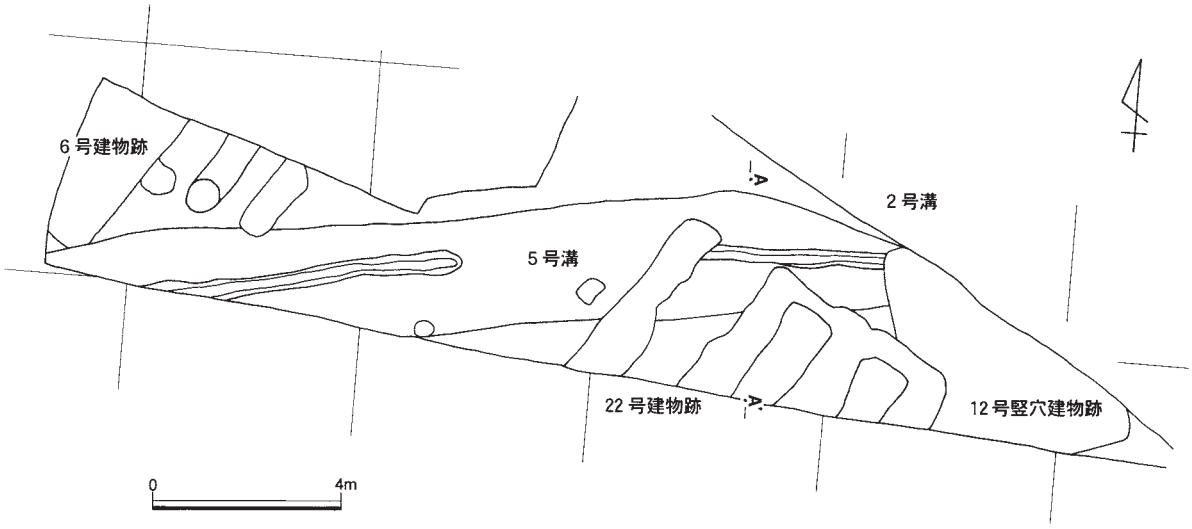
第41図　第２号溝

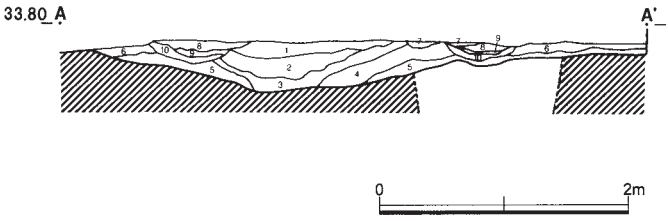


第42図　第２号溝出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	H	坏	(11.4)	3.7	－	A C E F	良	橙	50%	
2	H	坏	(10.4)	3.2	－	A C D E	良	黒褐	30%	
3	H	坏	(10.8)	(3.3)	－	A C E	良	灰	20%	
4	H	坏	(10.6)	(3.5)	－	A E	良	暗褐	15%	
5	H	坏	(10.8)	3.4	－	A C E I	良	黒褐	30%	
6	H	坏	(11.4)	(3.0)	－	A C	普	にぶい橙	30%	
7	H	坏	(11.8)	(3.5)	－	A B C D E	良	黄橙	20%	
8	H	坏	13.0	4.3	－	A B C E	良	赤橙	60%	内面黒色処理
9	H	坏	(9.6)	(2.5)	－	A C E I	良	橙	15%	
10	H	坏	(10.0)	(2.4)	－	A B C E	良	橙	10%	
11	H	坏	(10.2)	3.6	－	A C E I	良	橙	50%	
12	H	坏	(10.6)	3.3	－	A B C E	良	橙	30%	
13	H	坏	(9.6)	3.1	－	A C E I	不良	橙	30%	
14	H	坏	(9.8)	(3.1)	－	A C E	良	橙	15%	

第８表　第２号溝出土遺物観察表（１）



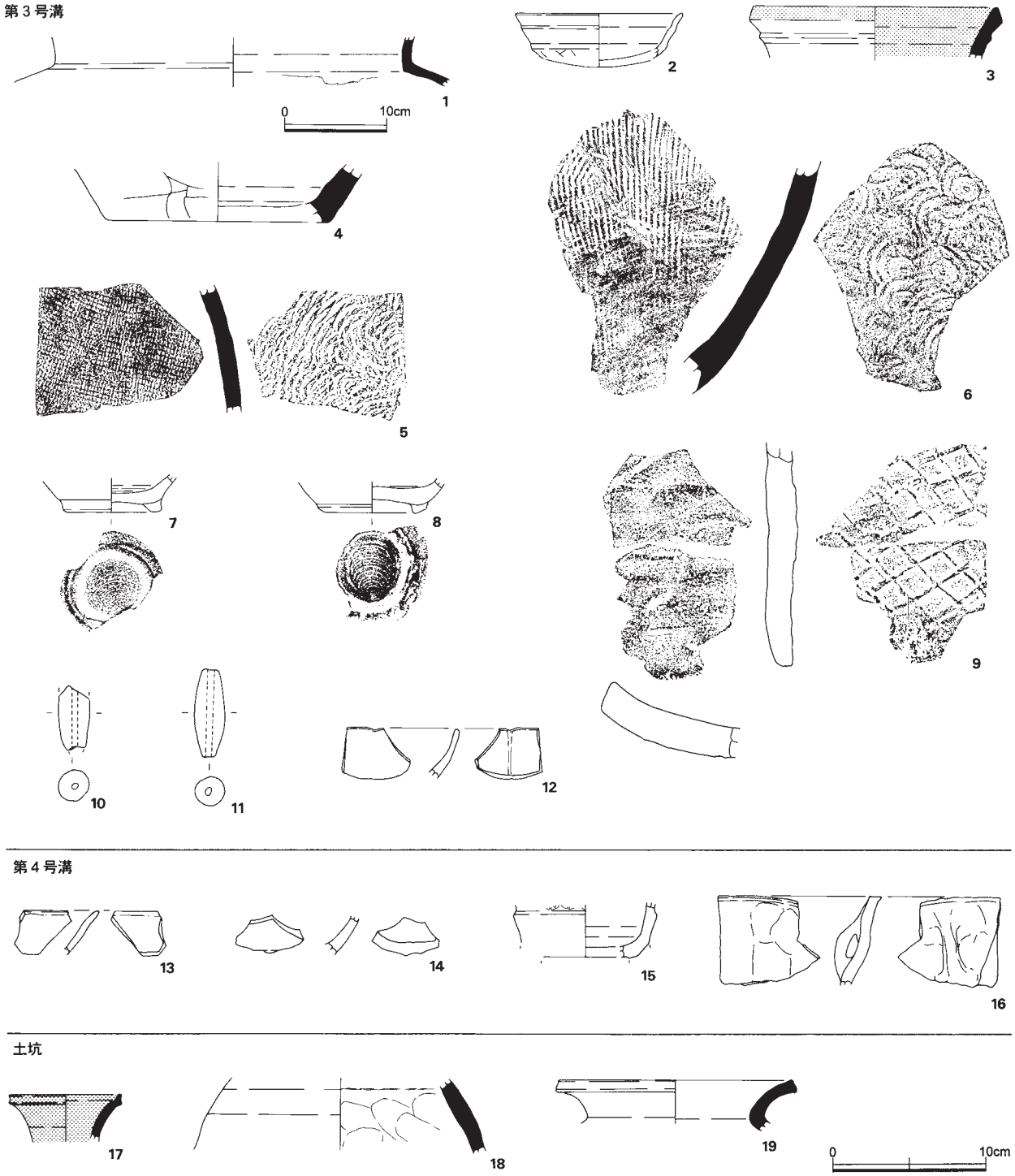


1層　暗褐色土　粘性なし。締まりあり。
2層　暗褐色土　ロームブロックを含む。粘性なし。締まりあり。
3層　暗褐色土　ローム粒を多く含む。粘性、締まりあり。
4層　暗灰褐色土　ロームブロックを多く含む。粘性、締まりあり。
5層　暗灰褐色土　粘性、締まりあり。
6層　暗灰褐色土　粘性、締まりなし。
7層　暗灰色土　砂質土。粘性、締まりなし。
8層　暗灰褐色土　粘性なし。硬く締まる。
9層　暗灰色土　粘性なし。硬く締まる。
10層　暗灰色土　ローム粒を多く含む。粘性なし。締まりあり。

第43図　第５号溝

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
15	H	坏	(10.4)	3.1	－	A B C E	良	赤橙	20%	
16	H	甕	(20.0)	－	－	A B C E H	普	橙	5%	
17	H	甕	(22.0)	－	－	A B C E H	良	橙	5%	
18	H	甕	(22.0)	－	－	A B C D E	良	にぶい橙	5%	
19	H	甕	－	－	5.4	A C D E H	良	にぶい橙	－	
20	S	蓋	(11.0)	－	－	A C F H	良	灰	20%	
21	S	蓋	(12.0)	－	－	A C F H	良	灰	20%	
22	S	甕	(21.8)	－	－	A G H	良	青灰	－	
23	S	甕	－	－	－	A C F H	良	灰	－	
24	S	甕	－	－	－	A B C F H	良	灰	－	
25	S	甕	－	－	－	A G	良	青灰	－	
26		瓦	－	－	－	A B C F H	普	灰褐	－	
27		土錘	長　7.2	幅　2.0	厚　1.8	A C H	良	橙	100%	
28		土錘	長　－	幅　2.1	厚　2.1	A B C F H I	普	にぶい橙	90%	

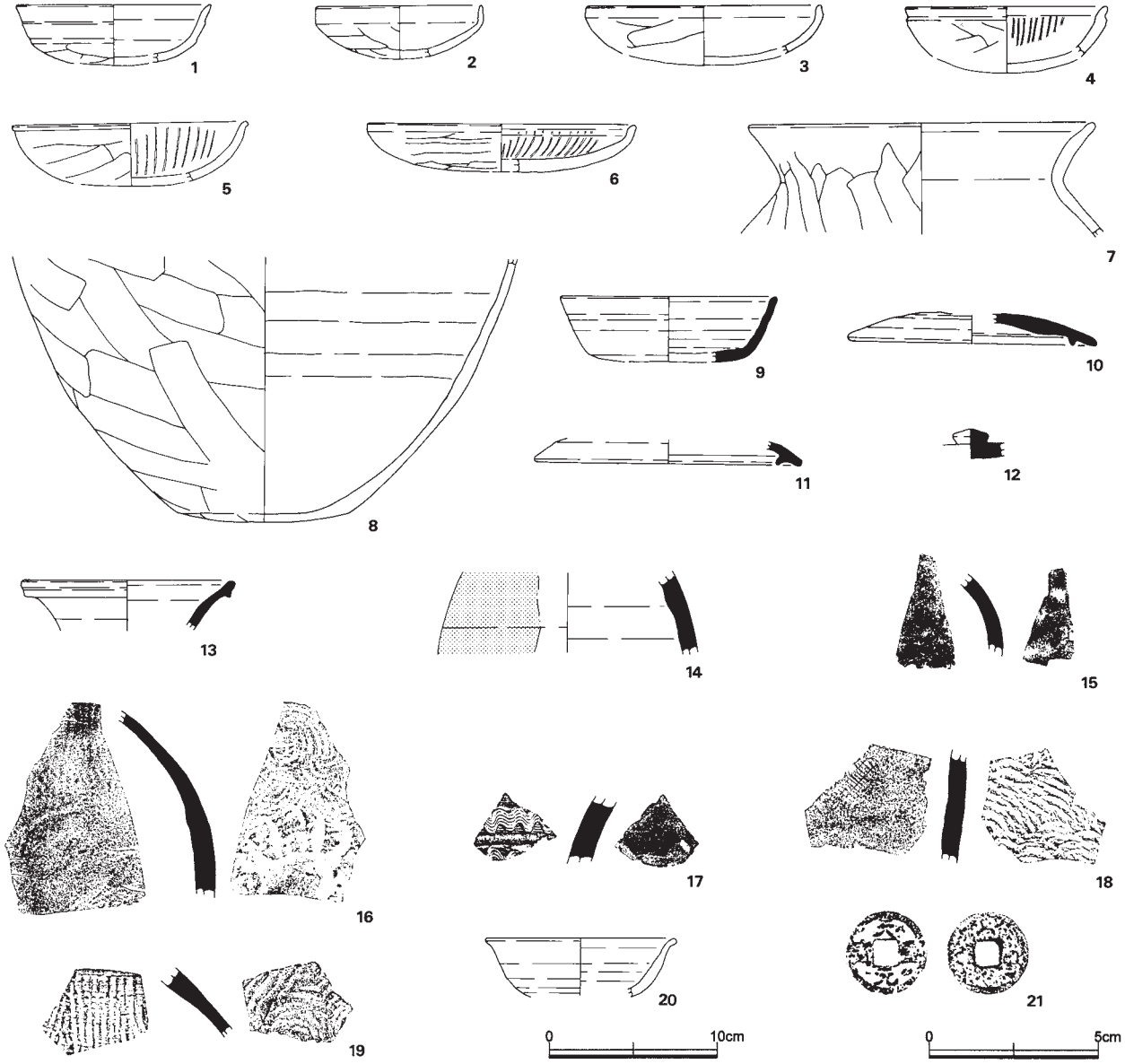
第９表　第２号溝出土遺物観察表（２）



第44図　第３次調査区溝・土坑出土遺物

番号	出土遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	第３号溝	S	甕	－	－	－	ＡＣＤＨ	良	灰	－	
2	第３号溝	H	坏	(11.0)	(3.5)	－	ＡＢＣＥ	良	橙	25%	
3	第３号溝	S	瓶	(15.8)	－	－	ＡＣ	良	灰	－	内外面に自然釉
4	第３号溝	S	甕	－	－	(14.6)	ＡＣＧＨ	良	灰	－	

第10表　第３次調査区溝・土坑出土遺物観察表（１）



第45図　第３次調査区出土遺物

番号	出土遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
5	第３号溝	S	甕	－	－	－	ＡＣＦＨ	良	青灰	－	
6	第３号溝	S	甕	－	－	－	ＡＣＦＨ	良	青灰	－	
7	第３号溝	R	高台椀	－	－	6.0	ＡＢＣＥ	良	橙	30%	
8	第３号溝	R	高台椀	－	－	6.0	ＡＢＣＤＥＩ	良	橙	30%	
9	第３号溝		瓦	長　－	幅　－	厚　1.8	ＡＣＦＨ	良	灰	15%	
10	第３号溝		土錘	長　－	幅　2.0	厚　2.1	ＡＣＨ	不良	灰褐	40%	
11	第３号溝		土錘	長　5.6	幅　2.0	厚　1.9	ＡＢＣＦＨ	良	にぶい橙	100%	
12	第３号溝	青磁	碗	－	－	－	ＡＣ	良	緑青	10%	
13	第４号溝	白磁	碗	－	－	－	ＡＣ	良	白	5%	
14	第４号溝	青磁	碗	－	－	－	ＡＣ	良	青白	5%	
15	第４号溝	土師質	鉢	－	－	(8.4)	ＡＢＣＨ	良	橙	10%	
16	第４号溝	瓦質	内耳土器	－	－	－	ＡＣＨ	良	黒褐	5%	

第11表　第３次調査区溝・土坑出土遺物観察表（２）

番号	出土遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
17	第１号土坑	S	瓶	(7.2)	－	－	ＡＣ	良	灰	－	内外面に自然釉
18	第１号土坑	S	瓶	－	－	－	ＡＣＧ	良	灰	5%	
19	第３号土坑	S	壷	(15.4)	－	－	ＡＣＦＨ	良	青灰	－	

第12表　第３次調査区溝・土坑出土遺物観察表（３）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	H	坏	(11.6)	(3.6)	－	ＡＣＥ	普	灰	20%	
2	H	坏	(10.0)	(3.1)	－	ＡＣＨ	普	橙	20%	
3	H	坏	(14.0)	(3.5)	－	ＡＣＤＥＩ	良	にぶい橙	15%	
4	H	坏	(12.0)	(3.9)	－	ＡＣＥ	良	赤橙	10%	
5	H	坏	(14.0)	(3.7)	－	ＡＣＥ	良	橙	15%	
6	H	坏	(16.0)	2.8	－	ＡＣＤＥＨ	良	橙	15%	
7	H	甕	(20.6)	－	－	ＡＣＥ	普	黒褐	10%	
8	H	甕	－	－	－	ＡＢＣＥＨ	普	にぶい橙	20%	
9	S	坏	(12.8)	3.8	－	ＡＣＧ	普	灰	20%	
10	S	蓋	(14.6)	－	－	ＡＣＦＨ	普	灰	20%	
11	S	蓋	(15.8)	－	－	ＡＣ	良	灰	5%	外面に自然釉
12	S	蓋	－	－	－	ＡＣＨ	良	灰	5%	
13	S	瓶	(12.6)	－	－	ＡＣＨ	良	青灰	－	
14	S	瓶	－	－	－	ＡＣ	良	灰白	－	外面に自然釉
15	S	瓶	－	－	－	ＡＣＨ	良	灰	－	外面に自然釉
16	S	横瓶	－	－	－	ＡＣＤ	良	青灰	－	
17	S	甕	－	－	－	ＡＣＦ	良	灰	－	
18	S	甕	－	－	－	ＡＣＦ	良	青灰	－	
19	S	甕	－	－	－	ＡＢＣ	良	灰	－	
20	R	小皿	(11.4)	－	－	ＡＢＣＥ	良	褐灰	15%	
21		銭貨	長　4.7	幅　4.6	厚　1.4					「天聖元宝」

第13表　第３次調査区出土遺物観察表

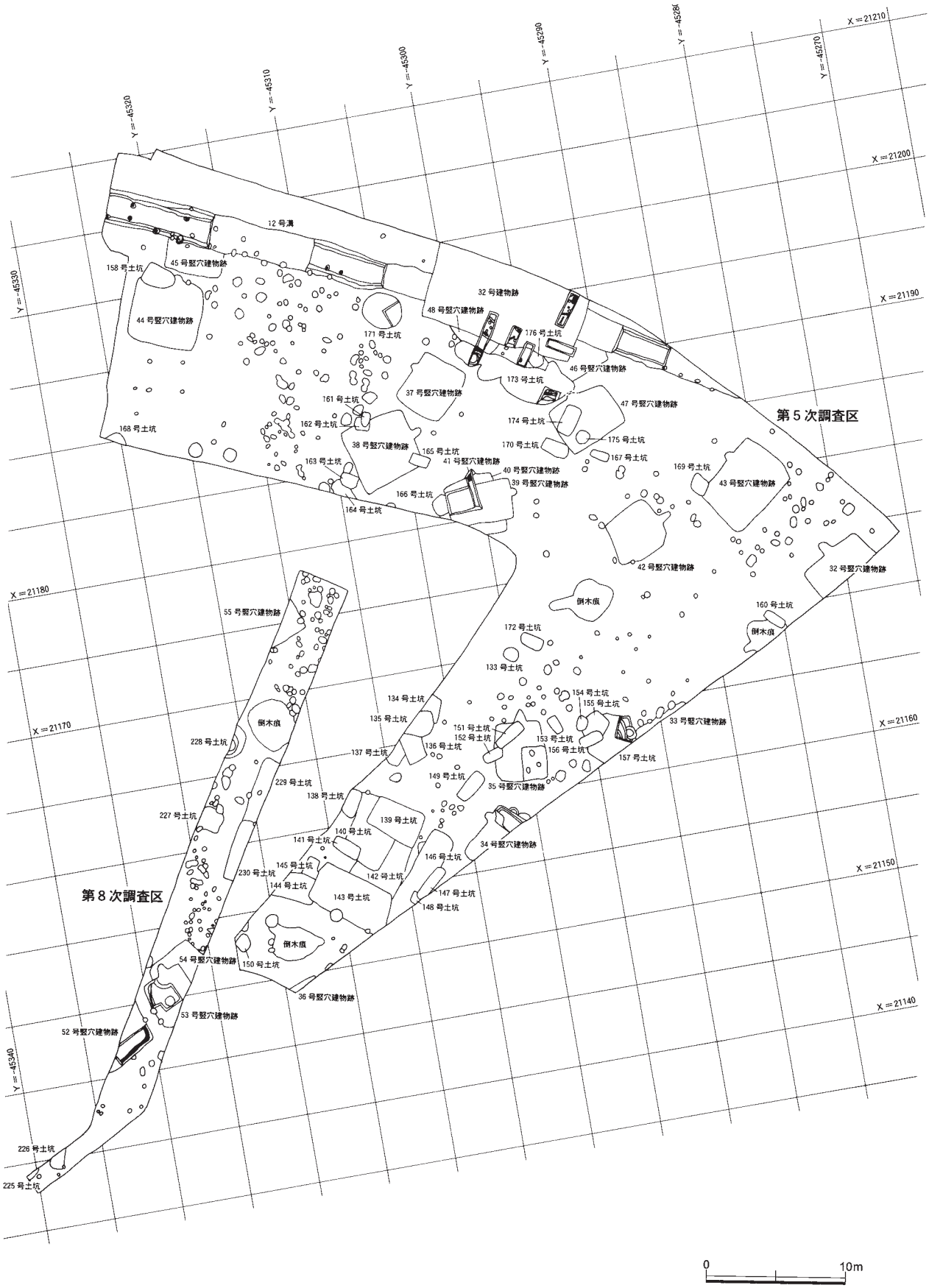
3　第５・８次調査

a　概要

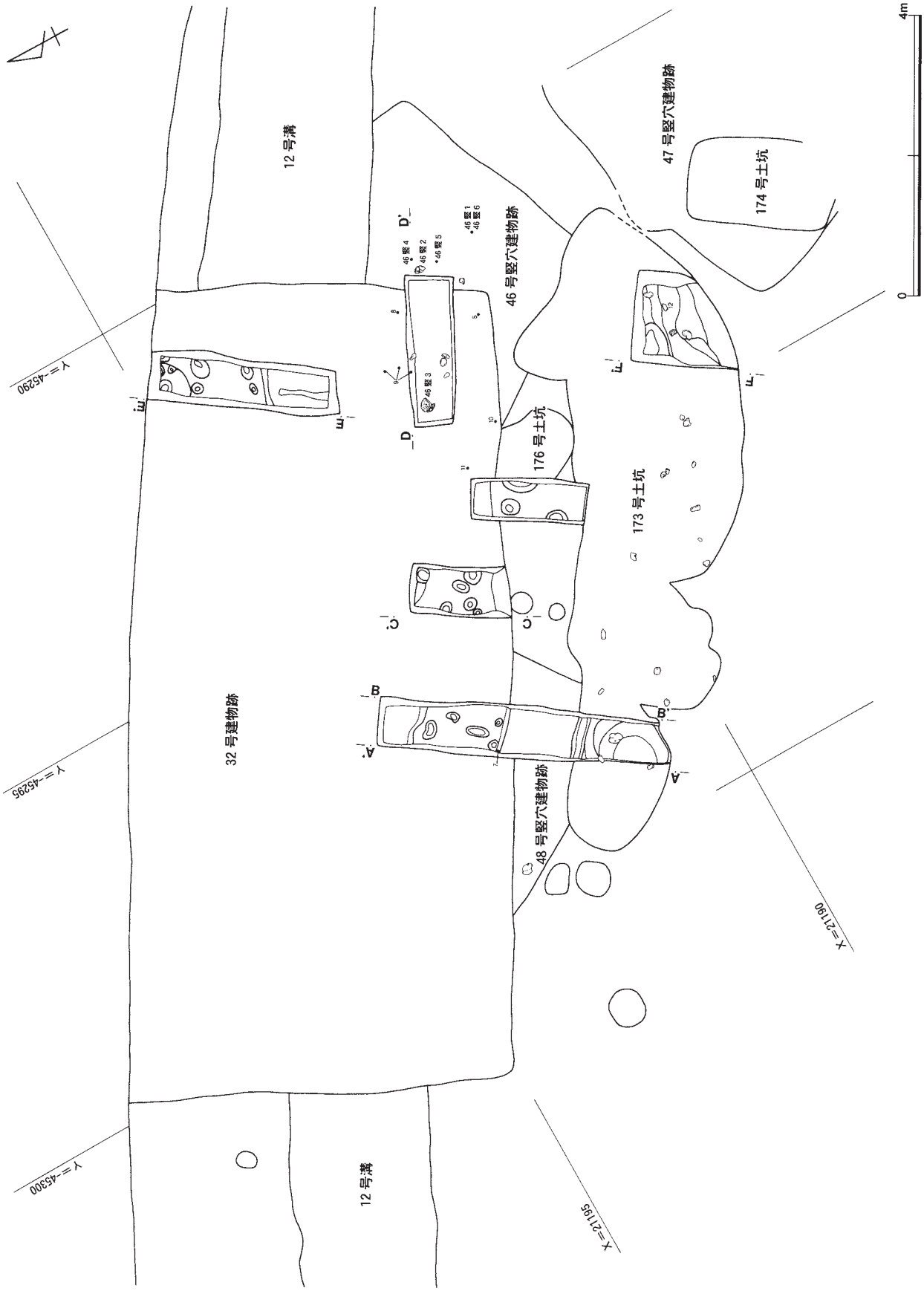
第５・８次調査区はＣ－Ⅱ－376～Ｄ－Ⅲ－161に設けた。第３次調査で確認された正倉院（南）の南及び西への広がりを確認する目的で、調査区を設定した。その結果、南側を区画すると考えられる区画溝が確認された。

確認された主な遺構は、礎石建物跡１棟とそれに伴う土坑、竪穴建物跡21棟、区画溝１条、古代のものと思われる土坑３基等である。礎石建物跡周辺からは、多量の炭化米が出土している。また、竪穴建物跡の中には、鍛冶工房跡の可能性があるものが２棟確認された。調査区周辺の標高は約34mで、遺構確認面までの深さは約30～40cmを測る。

確認された正倉跡は礎石建物跡１棟のみであり、正倉院を区画するとみられる区画溝が確認されたことから、正倉院（南）の南辺域に当たると考えられる。しかし、礎石建物の掘込地業は区画溝を切っており、礎石建物の段階には、この南辺区画溝は機能していなかったと考えられる。更に南に区画施設が造られた可能性を考えたが、その痕跡は確認されなかった。出土遺物は、竪穴建物跡からのものを中心にコンテナ６箱分出土した。



第46図　第５・８次調査区全体測量図



第47図　第32号建物跡、第173号土坑、第46・48号竪穴建物跡

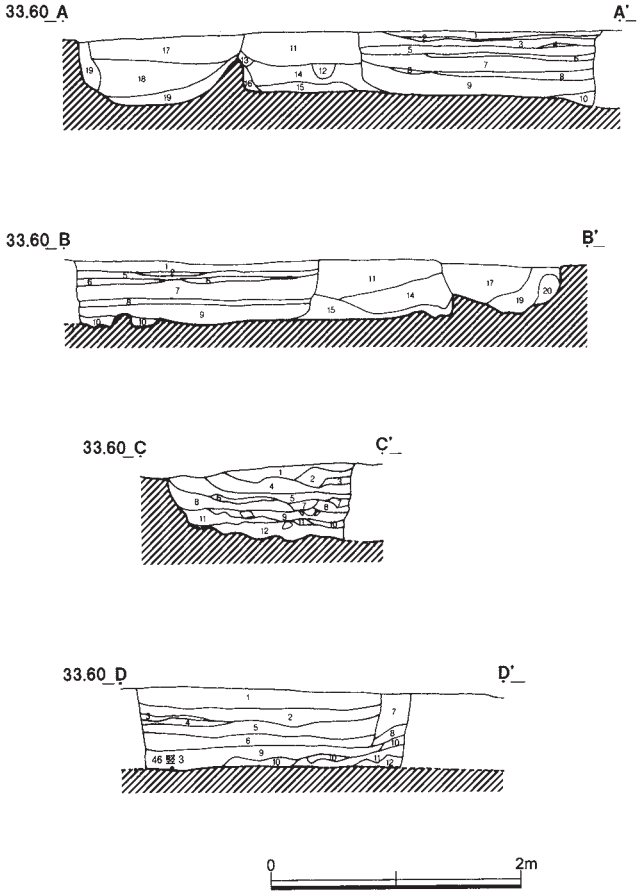
b　建物跡

第32号建物跡（第47～50図、第14表）

第５次調査区北端に位置し、第46･48号竪穴建物跡、第12号溝を切る。掘込地業の総柱式礎石建物で、掘込地業の範囲は、北半が現道の下にあるため短軸は不明だが、長軸約11.5mを測る。礎石の位置は確認できず、建物規模は定かではないが、概ね桁行４間（9.6～10.8m）×梁行３間程度と推定できる。主軸方位はN－60°－Wである。

掘込地業は確認面から約50cmの深さで、底面はやや凹凸がある。地業土は全体が均一ではなく、ＳＰＣ－Ｃ’では中層に礫を多量に用いていた。

また南側には建物に沿って、不整楕円形の土坑が連結した形態をもつ第173号土坑がある。底面まで２箇所を掘り下げたところ、共に壁は緩やかに立ち上がる。



ＳＰＡ・Ｂ

第 32 号建物跡

1 層　灰黄褐色土　10YR4/2　ローム粒・ブロック（1 cm）を含む。

2 層　褐灰色土　10YR4/1　ローム粒・ブロック（1 cm）を多く含む。締まりやや強い。

3 層　灰黄褐色土　10YR4/2　ローム粒を含む。焼土粒、炭化粒をわずかに含む。締まりやや強い。

4 層　褐灰色土　10YR4/1　ローム粒を多く含む。焼土粒をわずかに含む。締まり強い。

5 層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒をやや多く含む。焼土粒、炭化粒をわずかに含む。締まり強い。

6 層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒・ブロック（1 cm）を多く含む。締まりやや強い。

7 層　黒褐色土　10YR3/1　ローム粒・ブロック（1 cm）を含む。焼土粒、炭化粒をわずかに含む。

8 層　明黄褐色土　10YR6/6　ローム粒・ブロック（1～2 cm）を多量に含む。締まりやや強い。

9 層　黒色土　10YR2/1　ローム粒・ブロック（1 cm）を含む。締まりやや強い。

10 層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒を含む。

第 48 号竪穴建物跡

11 層　黒褐色土　10YR3/1　ローム粒、焼土粒、炭化粒を含む。締まりやや弱い

12 層　黒色土　10YR1.7/1　ローム粒をわずかに含む。

13 層　褐灰色土　10YR4/1　ローム粒をやや多く含む。締まりやや弱い。

14 層　黒褐色土　10YR3/1　ローム粒、焼土粒、炭化粒を含む。

15 層　黒色土　10YR2/1　ローム粒をやや多く含む。焼土粒をわずかに含む。

16 層　灰黄褐色土　10YR4/2　ローム粒を多く含む。締まりやや弱い。

第 173 号土坑

17 層　灰黄褐色土　10YR4/2　ローム粒、焼土粒、炭化粒、炭化米を含む。締まりやや弱い。

18 層　黒色土　10YR2/1　ローム粒、焼土粒をわずかに含む。

19 層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒・ブロック（1～5 cm）を多量に含む。締まりやや弱い。

20 層　明黄褐色土　10YR6/6　ロームで構成される。黒褐色土ブロックを含む。締まり弱い。壁面崩落土。

ＳＰＣ

第 32 号建物跡

1 層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒を少し含む。締まり強い。

2 層　褐色土　10YR4/6　ローム粒・ブロック（1 cm）をやや多く含む。黒褐色土ブロック（3 cm）を含む。締まり強い。

3 層　黒褐色土　10YR3/1　ローム粒、焼土粒をわずかに含む。締まり強い。

4 層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　ローム粒・ブロック（1 cm）をやや多く含む。締まり強い。

5 層　黒褐色土　10YR3/1　ローム粒を含む。締まり強い。

6 層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　ローム粒・ブロック（1 cm）をやや多く含む。締まり強い。

7 層　褐色土　10YR4/6　ローム粒・ブロック（1～3 cm）を多く含む。締まり強い。

8 層　黒色土　10YR2/1　ローム粒をやや多く含む。締まり強い。

9 層　黒褐色土　10YR3/2　礫を多量に含む。ローム粒・ブロック（1～3 cm）を含む。締まり非常に強い。

10 層　黄褐色土　10YR5/6　ソフトロームで構成される。締まり強い。

11 層　にぶい黄橙色土　10YR6/4　ハードロームで構成される。締まり強い。

12 層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒・ブロック（1～3 cm）を含む。締まり非常に強い。

ＳＰＤ

第 32 号建物跡

1 層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒・ブロック（1 cm）を含む。焼土粒、炭化粒を少し含む。締まり強い。

2 層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　ローム粒・ブロック（1～3 cm）を多量に含む。焼土粒をわずかに含む。締まり強い。

3 層　黒褐色土　10YR3/1　ローム粒を少し含む。締まり強い。

4 層　黒色土　10YR2/1　ローム粒・ブロック（1～2 cm）を含む。締まり強い。

5 層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒・ブロック（1～2 cm）を含む。焼土粒をわずかに含む。締まり強い。

6 層　にぶい黄褐色土　10YR5/4　ローム粒・ブロック（1～3 cm）を多く含む。焼土粒、炭化粒をわずかに含む。締まり強い。

第 46 号竪穴建物跡

7 層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒を含む。焼土粒、炭化粒をわずかに含む。

8 層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒、焼土粒、炭化粒をわずかに含む。

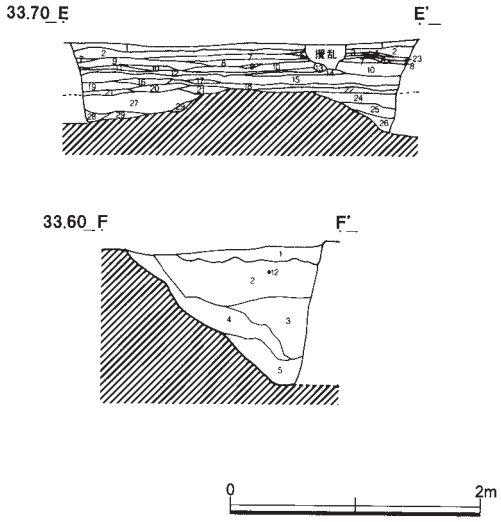
9 層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒・ブロック（1～3 cm）をやや多く含む。焼土粒、炭化粒を少し含む。締まりやや強い。

10 層　明黄褐色土　10YR6/6　ローム粒、ハードロームブロック（5 cm）を主体とする。締まりやや強い。

11 層　黒色土　10YR1.7/1　ローム粒・ブロック（3 cm）を少し含む。締まりやや弱い。

12 層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒、ハードロームブロック（2～5 cm）を多く含む。

第48図　第32号建物跡、第173号土坑、第46・48号竪穴建物跡土層断面図



SPF

第173号土坑

1層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　炭化米、炭化物を多量に含む。

2層　にぶい黄褐色土　10YR5/4　炭化米、炭化物、焼土粒をわずかに含む。締まり強い。

3層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒、焼土粒を少し含む。締まりやや弱い。

4層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒を多量に含む。締まりやや強い。

5層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒をわずかに含む。締まりやや弱い。

SPE

第32号建物跡

1層　灰黄褐色土　10YR5/2　ローム粒・ブロック（1cm）を含む。締まり強い。

2層　灰黄褐色土　10YR4/2　ローム粒・ブロック（1cm）を含む。締まり強い。

3層　黒色土　10YR2/1　ローム粒をわずかに含む。締まり強い。

4層　褐灰色土　10YR4/1　ローム粒・ブロック（1cm）を含む。炭化粒をわずかに含む。締まり強い。

5層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒を含む。締まり強い。

6層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒をわずかに含む。締まり強い。

7層　黒色土　10YR2/1　ローム粒を少し含む。焼土粒をわずかに含む。締まり強い。

8層　褐灰色土　10YR4/1　ローム粒・ブロック（1cm）を含む。締まり強い。

9層　灰黄褐色土　10YR4/2　ローム粒、黒色土粒を含む。締まり強い。

10層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒・ブロック（1cm）を含む。締まり強い。

11層　黒色土　10YR2/1　ローム粒を少し含む。締まり強い。

12層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒を多量に含む。焼土粒をわずかに含む。締まり強い。

13層　にぶい黄褐色土　10YR5/4　ハードロームブロック。締まり強い。

14層　黒色土　10YR2/1　ローム粒を少し含む。締まり強い。

15層　灰黄褐色土　10YR4/2　ローム粒・ブロック（1～3cm）を多く含む。締まり強い。

16層　灰黄褐色土　10YR4/2　ローム粒・ブロック（1cm）を多量に含む。締まり強い。

17層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　ローム粒・ブロック（1cm）を多量に含む。締まり強い。

18層　灰黄褐色土　10YR4/2　ローム粒・ブロック（1cm）を多量に含む。締まり強い。

19層　褐灰色土　10YR4/1　ローム粒・ブロック（1～3cm）を多量に含む。締まり強い。

20層　黄褐色土　10YR3/3　ローム粒・ブロック（1～2cm）を多量に含む。締まり強い。

21層　にぶい黄褐色土　10YR5/4　ローム粒・ブロック（3cm）を多量に含む。締まり強い。

22層　黒褐色土　10YR3/1　ローム粒を少し含む。焼土粒をわずかに含む。締まり強い。

23層　黒色土　10YR2/1 ローム粒をわずかに含む。締まり強い。

土坑

24層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒・ブロック（1cm）を少し含む。締まりやや強い。

25層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　ローム粒を含む。締まりやや強い。

26層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒を少し含む。締まりやや強い。

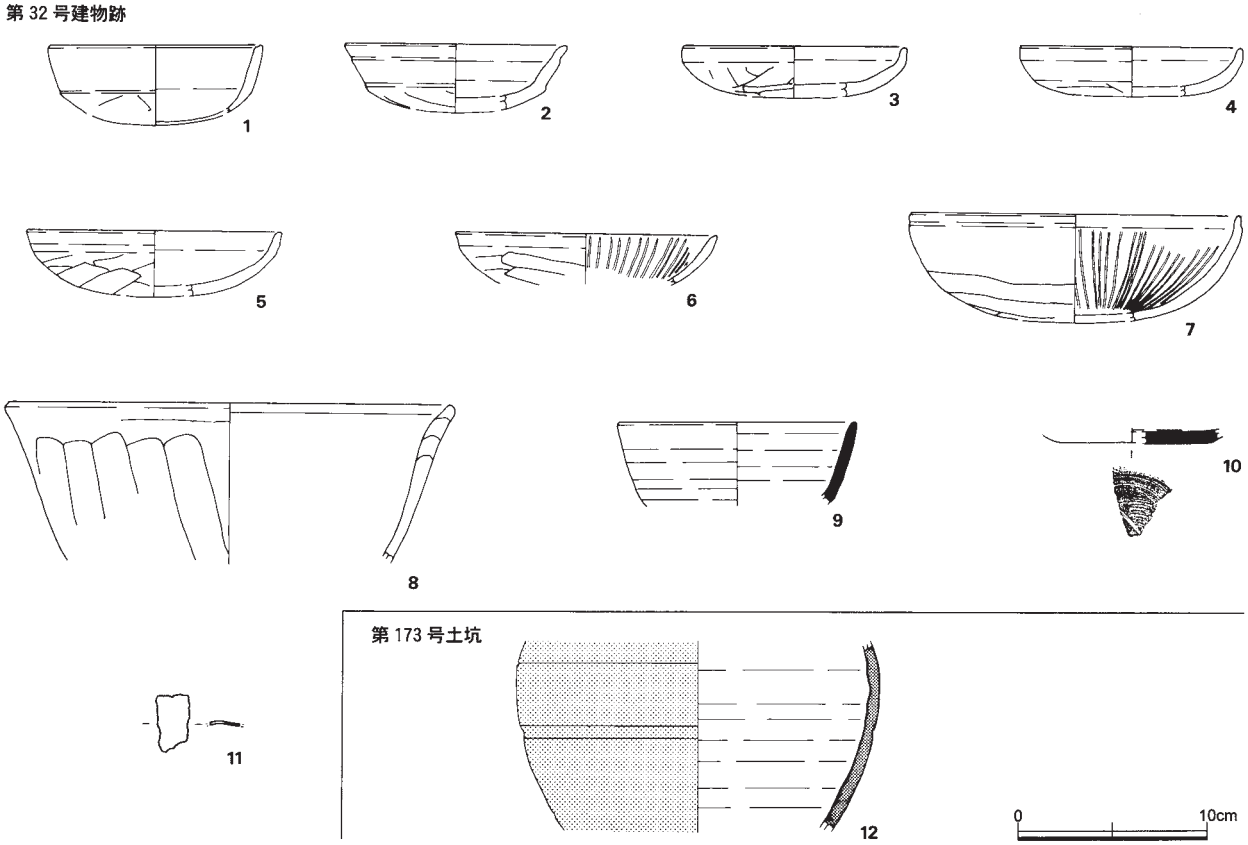
第12号溝

27層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒を少し含む。締まりやや強い。

28層　褐灰色土　10YR4/1　ローム粒を少し含む。締まりやや強い。

29層　褐色土　10YR4/6　ローム粒、ハードロームブロック（5cm）を主体とする。締まり強い。

第49図　第32号建物跡、第173号土坑土層断面図



第50図　第32号建物跡、第173号土坑出土遺物

番号	出土遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	第32号建物跡	H	坏	(11.2)	(4.2)	－	ＡＢＣＥ	良	橙	15%	
2	第32号建物跡	H	坏	(11.6)	(3.6)	－	ＡＣＥ	良	にぶい橙	15%	
3	第32号建物跡	H	坏	(11.8)	(2.7)	－	ＡＣＤＥ	良	黒褐	20%	
4	第32号建物跡	H	坏	(11.6)	(2.6)	－	ＡＣＥＦ	普	橙	15%	
5	第32号建物跡	H	坏	(13.6)	(3.5)	－	ＡＢＣ	良	にぶい橙	30%	
6	第32号建物跡	H	坏	(14.0)	－	－	ＡＣ	良	赤橙	15%	
7	第32号建物跡	H	坏	(17.4)	(5.7)	－	ＡＢＣＥ	良	橙	30%	
8	第32号建物跡	H	鉢	(23.6)	－	－	ＡＢＣＥＨ	普	橙	10%	
9	第32号建物跡	S	坏	(12.6)	－	－	ＡＣＦＨ	良	灰	25%	
10	第32号建物跡	S	坏	－	－	7.8	ＡＣＧ	良	灰	5%	
11	第32号建物跡		鉄片	長　3.0	幅　1.7	厚　0.1					重さ　1.30ｇ
12	第173号土坑	K	瓶	－	－	－	ＡＣＨ	良	灰褐	10%	猿投産

第14表　第32号建物跡、第173号土坑出土遺物観察表

底面までの深さは、東部が約110㎝、西部が約40㎝を測る。

建物跡南側には、特に第173号土坑東部を中心に、炭化米が多量に散っていたため、本建物が正倉火災に遭ったものと思われる。炭化米は第173号土坑覆土上層中にも多量に含まれており、火災に遭った時点では、土坑は完全に埋没していなかったものと思われる。またそのため、建物の正面は北側であることが推定できる。

図示できた遺物は、第32号建物跡出土のものが第50図１～11、第173号土坑出土のものが第50図12である。１は模倣坏、２は有段口縁坏、３～５は北武蔵型坏、６・７は暗文坏、８は鉢、９・10は須恵器坏、11は鉄片である。12は灰釉陶器の瓶で、猿投産と思われる。肩部に沈線が施され、外面は回転ヘラ削りで、丁寧に仕上げられる。長頸瓶或いは浄瓶と思われる。

c　竪穴建物跡

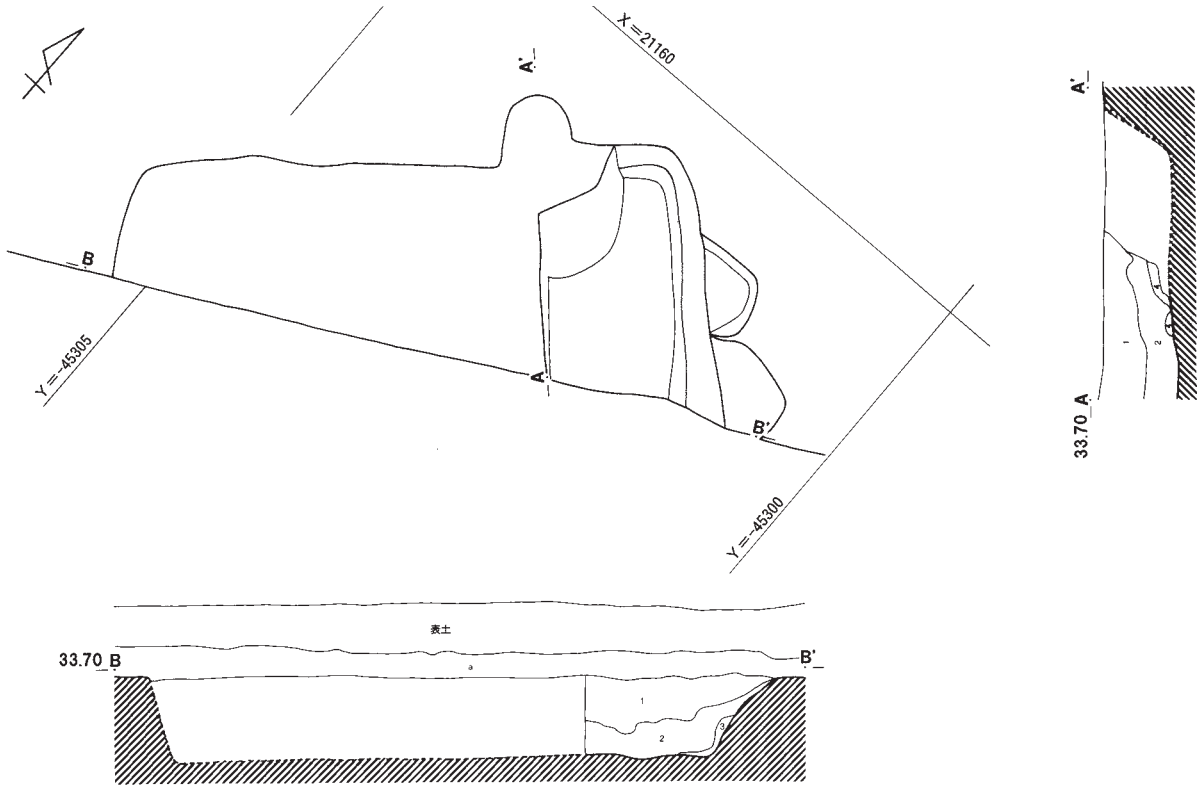
第32号竪穴建物跡（第46図）

第５次調査区南端部に位置し、南東半は調査区外にある。平面形は方形で、一辺約５ｍを測る。主軸方位はＮ－30°－Ｗである。

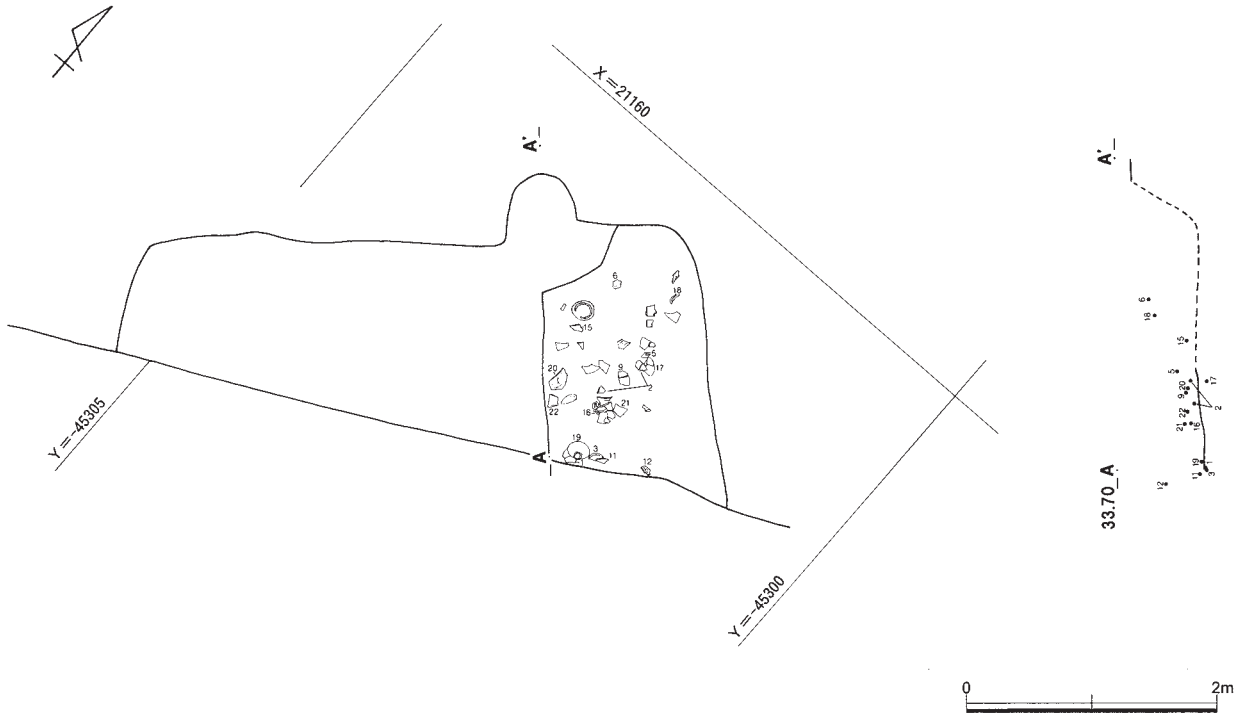
図示できる遺物は出土しなかった。

第33号竪穴建物跡（第46図、第59図１、第19表）

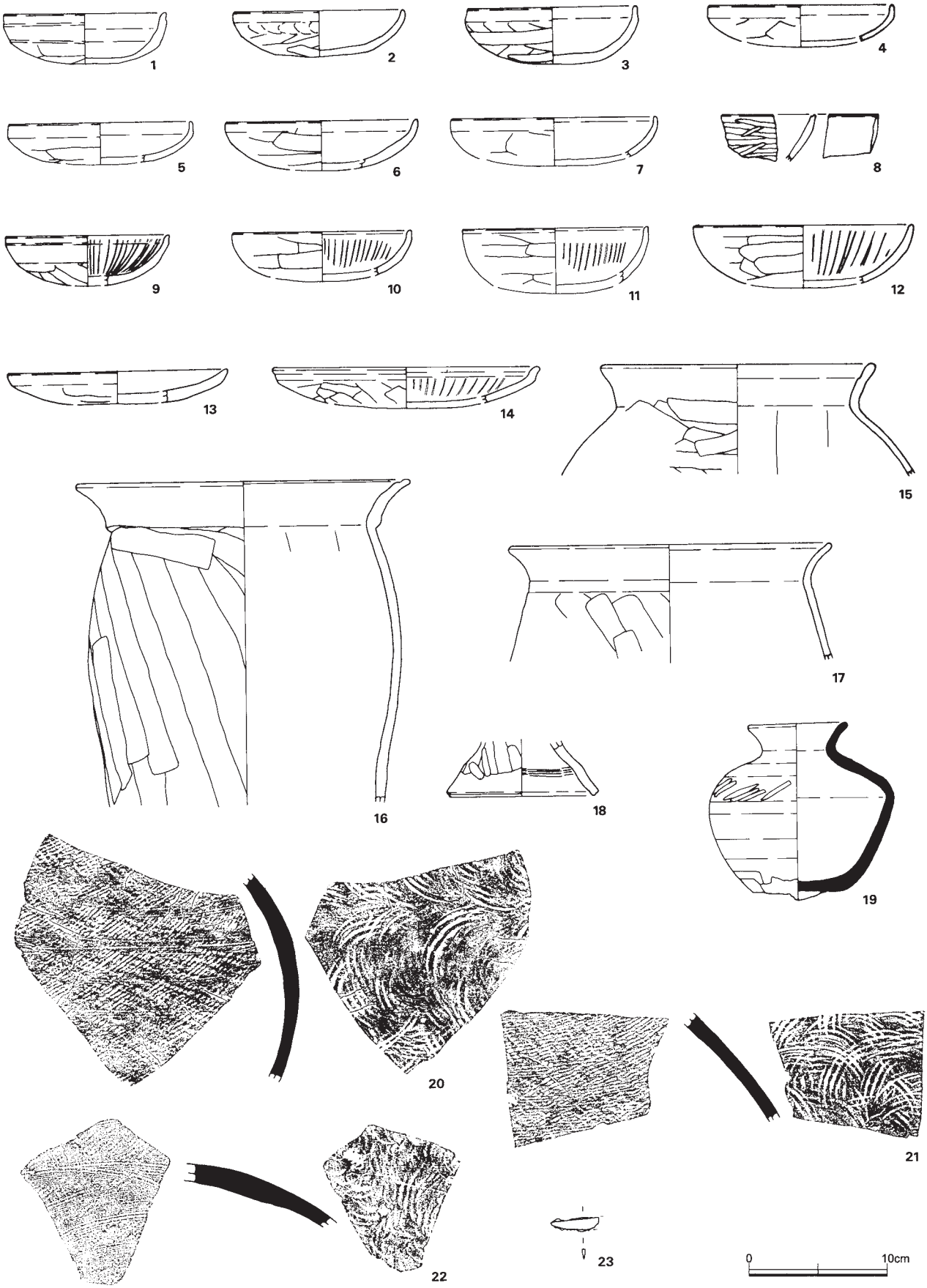
第173号土坑調査風景



a層　灰黄褐色土　10YR5/2　ローム粒、焼土粒、白色粒を少し含む。
1層　黒褐色土　10YR1/3　ローム粒、焼土粒を少し含む。
2層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒、焼土粒をやや多く含む。炭化粒を少し含む。
3層　明黄褐色土　10YR6/6　ローム粒を多く含む。
4層　にぶい黄橙色土　10YR7/4　ローム粒を多く含む。焼土粒、炭化粒を含む。



第51図　第34号竪穴建物跡



第52図　第34号竪穴建物跡出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	H	坏	11.8	3.6	－	ＡＢＣＥ	良	黒褐	70%	
2	H	坏	(12.4)	3.3	－	ＡＢＣＥ	良	橙	40%	
3	H	坏	12.2	4.0	－	ＡＢＣＤＥＦＨ	良	橙	98%	
4	H	坏	(13.4)	(3.0)	－	ＡＣＨ	良	橙	15%	
5	H	坏	(13.4)	(3.0)	－	ＡＢＣＥ	良	橙	15%	
6	H	坏	(14.0)	(3.6)	－	ＡＣＥ	普	橙	15%	
7	H	坏	(14.8)	(3.5)	－	ＡＣＥ	良	橙	10%	
8	H	坏	－	－	－	ＡＣ	良	赤橙	5%	
9	H	坏	(11.8)	3.6	－	ＡＣＥ	良	橙	40%	
10	H	坏	(13.0)	(3.6)	－	ＡＣＥ	普	橙	15%	
11	H	坏	(13.4)	(4.7)	－	ＡＣＥ	良	にぶい橙	10%	
12	H	坏	(16.0)	(4.5)	－	ＡＢＣＥ	良	暗褐	15%	
13	H	皿	(16.0)	(2.3)	－	ＡＢＣＥ	良	暗褐	15%	
14	H	皿	(19.4)	(3.0)	－	ＡＢＣＥ	良	灰褐	10%	
15	H	甕	(19.8)	－	－	ＡＢＣ	良	橙	10%	
16	H	甕	(24.0)	－	－	ＡＣＥＨ	良	橙	40%	
17	H	甕	(23.2)	－	－	ＡＢＣＥ	良	橙	10%	
18	H	台付甕	－	－	(10.6)	ＡＢＣＥ	良	暗褐	5%	
19	S	壷	(7.2)	12.1	6.4	ＡＣ	良	青灰	95%	底部に窯体が付着
20	S	甕	－	－	－	ＡＣＨ	良	灰	－	
21	S	甕	－	－	－	ＡＣＨ	良	灰褐	－	
22	S	横瓶	－	－	－	ＡＢＣＦＨ	良	灰	－	
23		刀子	長　－	幅　0.9	厚　0.2					重さ　2.17ｇ

第15表　第34号竪穴建物跡出土遺物観察表

第５次調査区南東部に位置し、南東半は調査区外にある。平面形は方形で、一辺約4.3ｍを測る。主軸方位はＮ－65°－Ｅである。

図示できた遺物は、第59図１の暗文皿である。

第34号竪穴建物跡（第51・52図、第15表）

第５次調査区南東部に位置し、南東半は調査区外にある。平面形は方形で、一辺4.7ｍを測る。主軸方位はＮ－40°－Ｗである。

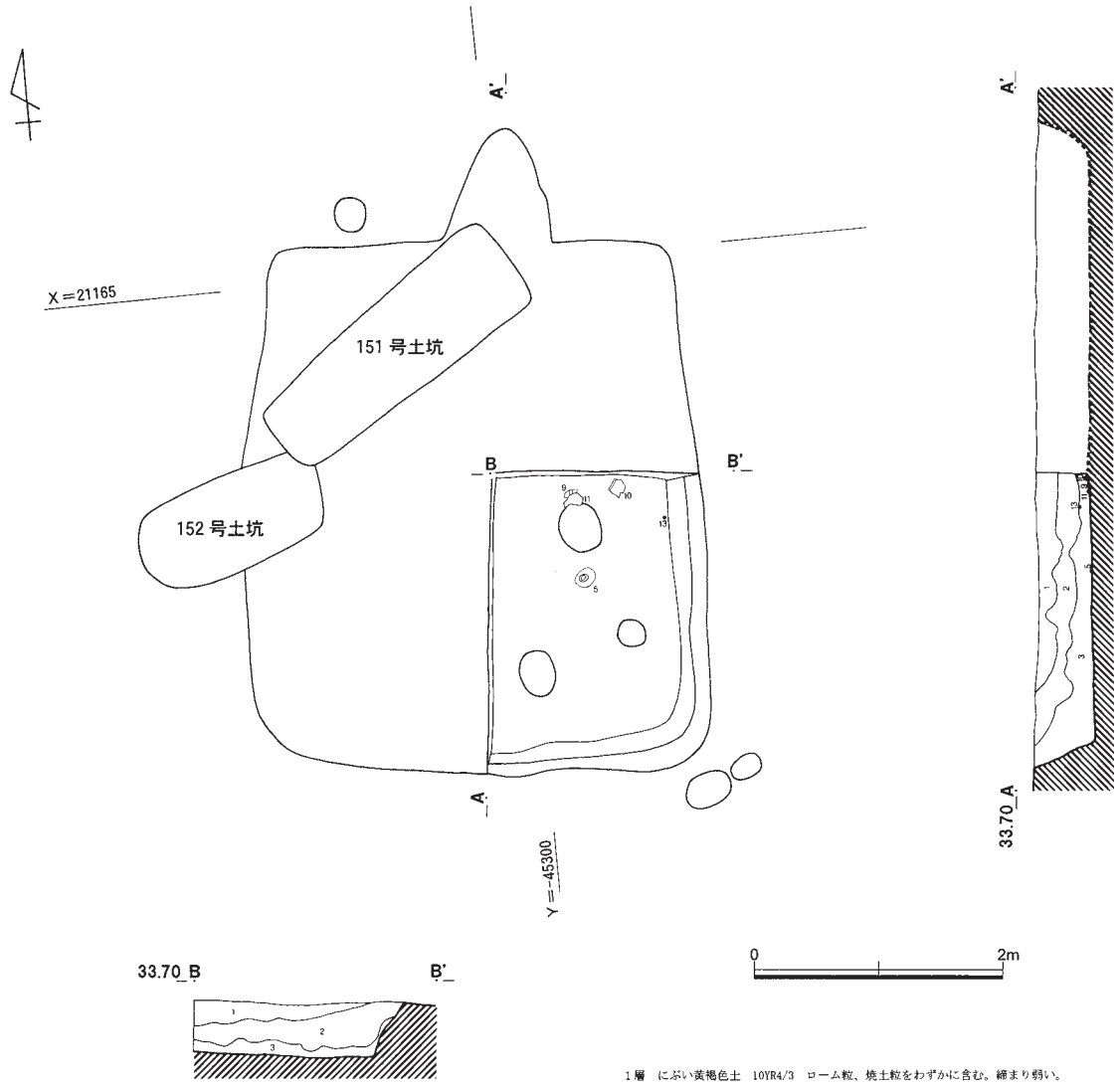
床面はほぼ平坦で、確認面からの深さは60㎝を測る。壁は緩やかに立ち上がる。壁溝は確認されなかった。なお、カマド袖の補強材と思われる倒立甕を確認したが、取り上げは行なわなかった。

図示できた遺物は、第52図１～23である。１は有段口縁坏、２～７は北武蔵型坏、８は暗文系無文坏と思われ、外面を丁寧に磨く。９～12は暗文坏、13は皿、14は暗文皿、15～17は甕、18は台付甕と思われる。19～22は須恵器で、19は小型壷、20・21は甕、22は横瓶である。23は刀子の先端部である。遺構の時期は７世紀後半～末頃と推定される。

第35号竪穴建物跡（第53・54図、第16表）

第５次調査区南部に位置し、第151・152号土坑に切られる。平面形は方形で、長軸4.2ｍ、短軸3.7ｍを測る。主軸方位はＮ－５°－Ｅである。

床面はほぼ平坦で、確認面からの深さは48㎝を測る。壁は斜めに立ち上がる。壁溝は確認されなかった。遺物の多くは、床面付近より出土した。図示できた遺物は、第54図１～13である。１は暗文坏、２～４はロクロ土師器坏、５はロクロ土師器高台椀、６・７は甕である。８～11は須恵器で、８は坏、９・10は壷又は甕、11は甕である。12は土錘、13は鉄釘である。遺構の時期は、10世紀前半～中頃と推定される。



1層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　ローム粒、焼土粒をわずかに含む。締まり弱い。
2層　褐色土　10YR4/4　ローム粒を少し含む。締まり弱い。
3層　明黄褐色土　10YR6/6　ローム粒をやや多く含む。焼土粒、炭化粒を少し含む。締まり弱い。

第53図　第35号竪穴建物跡

第36号竪穴建物跡（第46図）

第５次調査区南端部に位置し、大部分が調査区外にある。平面形は方形と思われ、主軸方位はＮ－70°－Ｅである。

図示できる遺物は出土しなかった。

第37号竪穴建物跡（第46図）

第５次調査区北部に位置する。平面形は方形で、長軸4.1m、短軸3.7mを測る。主軸方位はＮ－45°－Ｗである。

図示できる遺物は出土しなかった。

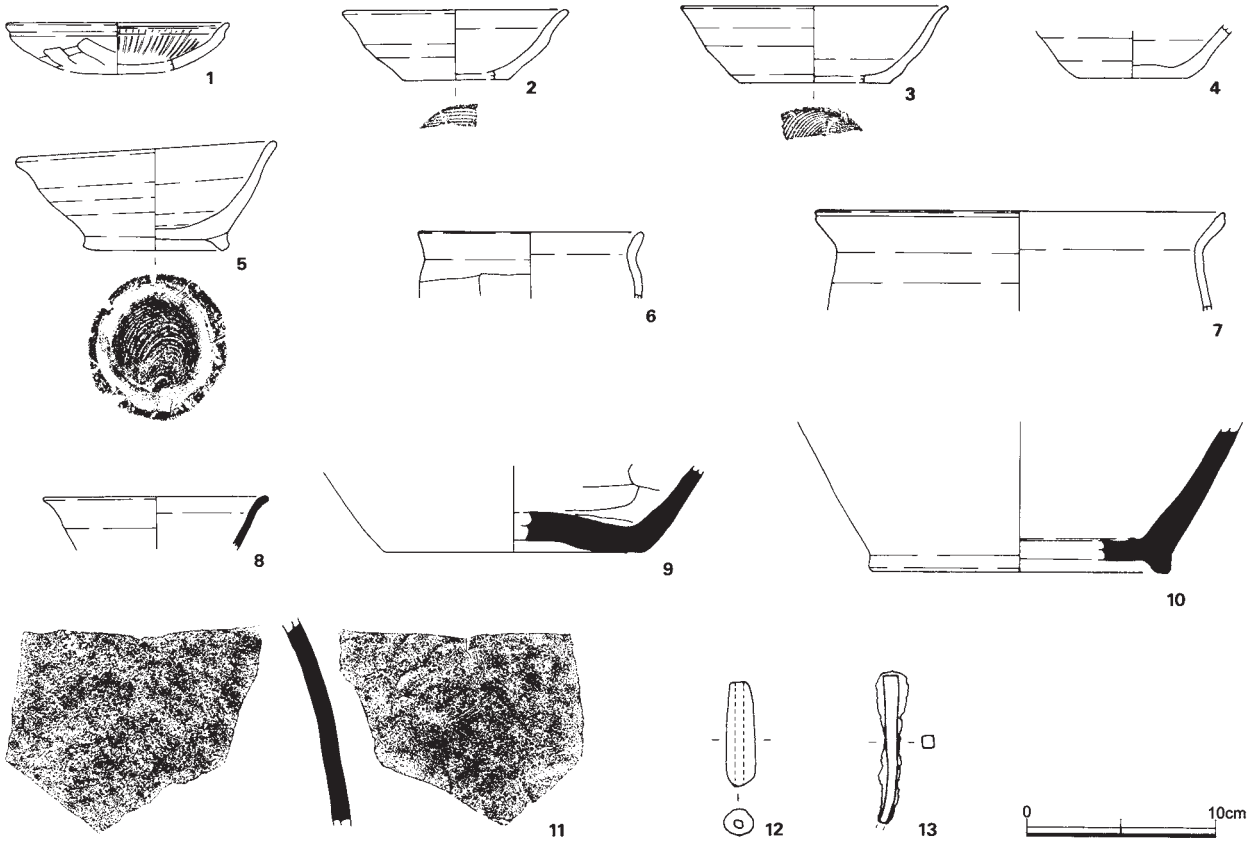
第38号竪穴建物跡（第46図、第59図２～４、第19表）

第５次調査区中央部に位置し、第162・163・165号土坑に切られる。平面形は方形で、長軸4.7m、短軸4.6mを測る。主軸方位はＮ－75°－Ｅである。

図示できた遺物は、第59図２～４である。２は須恵器甕、３は土師器小型壷、４は棒状鉄製品である。

第39号竪穴建物跡（第55～58図、第17・18表）

第５次調査区中央部に位置し、第40・41号竪穴建物跡を切る。平面形は長方形で、長軸4.7m、短軸2.9mを測る。主軸方位はＮ－88°－Ｅである。床面は軟弱で、確認面からの深さは約30cmである。



第54図　第35号竪穴建物跡出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	H	坏	(11.8)	(2.7)	－	A B C E	良	黒褐	20%	
2	R	坏	(11.8)	3.7	(5.6)	A C E	普	にぶい橙	20%	
3	R	坏	(14.2)	4.0	(8.0)	A B C E	良	橙	20%	
4	R	坏	－	－	(5.8)	A B C E	良	橙	20%	
5	R	高台椀	13.6	5.3	7.8	A B C E	良	黄橙	100%	
6	H	甕	(11.8)	－	－	A B C E	良	橙	5%	
7	H	甕	(21.6)	－	－	A B C E H	良	黒褐	5%	
8	S	坏	(12.0)	－	－	A C H	良	灰	10%	
9	S	甕	－	－	(13.8)	A C G H	良	青灰	－	
10	S	甕	－	－	15.6	A C E F H	普	灰褐	5%	
11	S	甕	－	－	－	A C F H	良	青灰	－	
12		土錘	長　5.5	幅　1.5	厚　1.4	A B C E	良	橙	100%	
13		釘	長　－	幅　0.6	厚　0.7					重さ　16.84g

第16表　第35号竪穴建物跡出土遺物観察表

図示できた遺物は、第57図１～34図、第58図35～39である。１～４は有段口縁坏、５・６は模倣坏、７～18は北武蔵型坏、19・20は暗文坏、21～25は皿、26・27は暗文皿である。28は土師器蓋の輪状摘みと思われる。29～36は土師器甕である。37～39は須恵器で、37は蓋、38は脚付盤、39は盤である。遺構の時期は、７世紀後半～末頃と思われる。

第40号竪穴建物跡（第55図、第59図５、第19表）

第５次調査区中央部に位置し、第41号竪穴建物跡を切り、第39号竪穴建物跡に切られる。平面形は方形で、長軸4.5m、短軸3.8mを測る。カマドは確認されなかっ

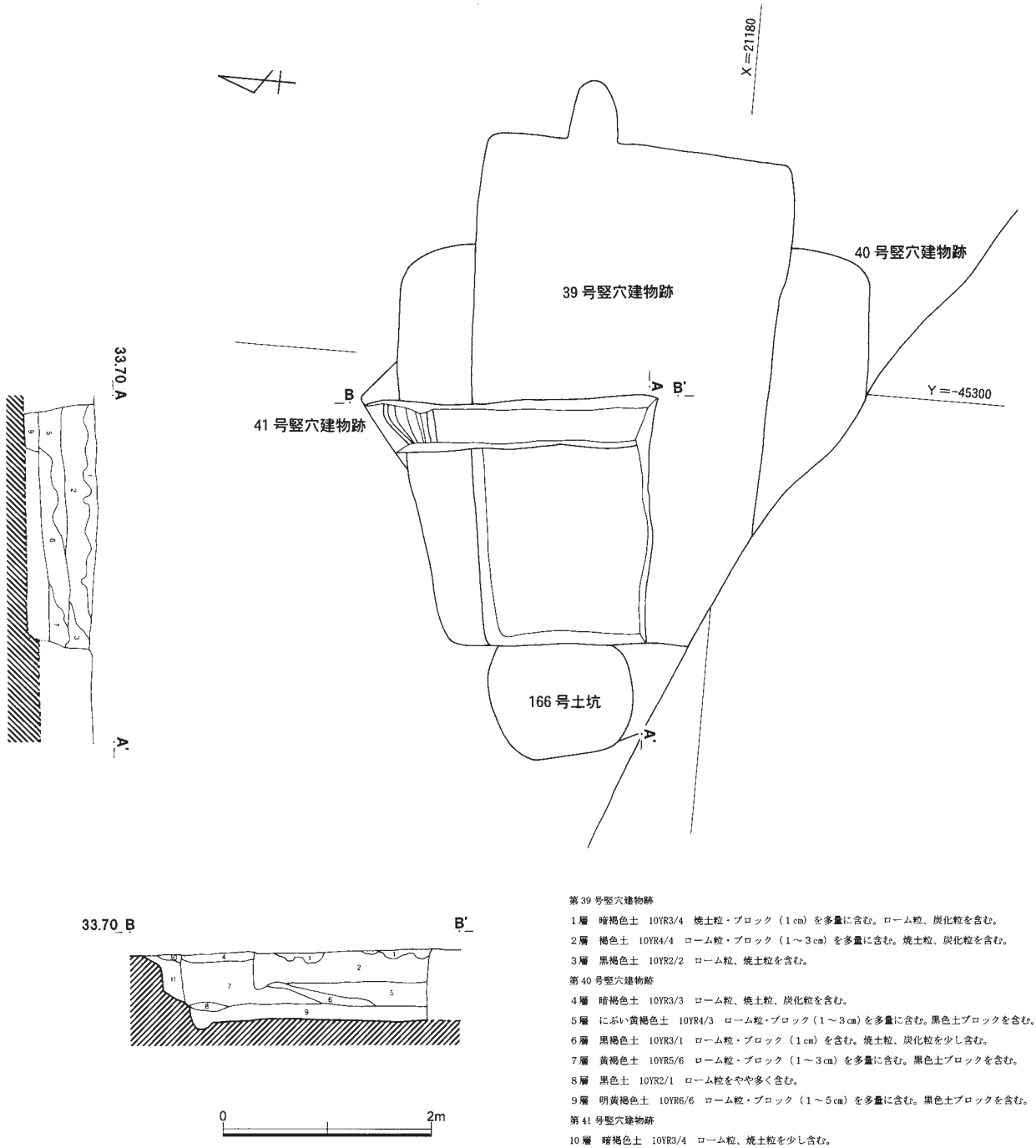
たが、カマドの位置及び主軸方位は、第39号竪穴建物跡とほぼ同じものと思われる。確認面から床面までの深さは約70㎝である。なお、９層上面で床面を造り直している可能性がある。

図示できた遺物は、第59図５の土師器皿である。

第41号竪穴建物跡（第55図）

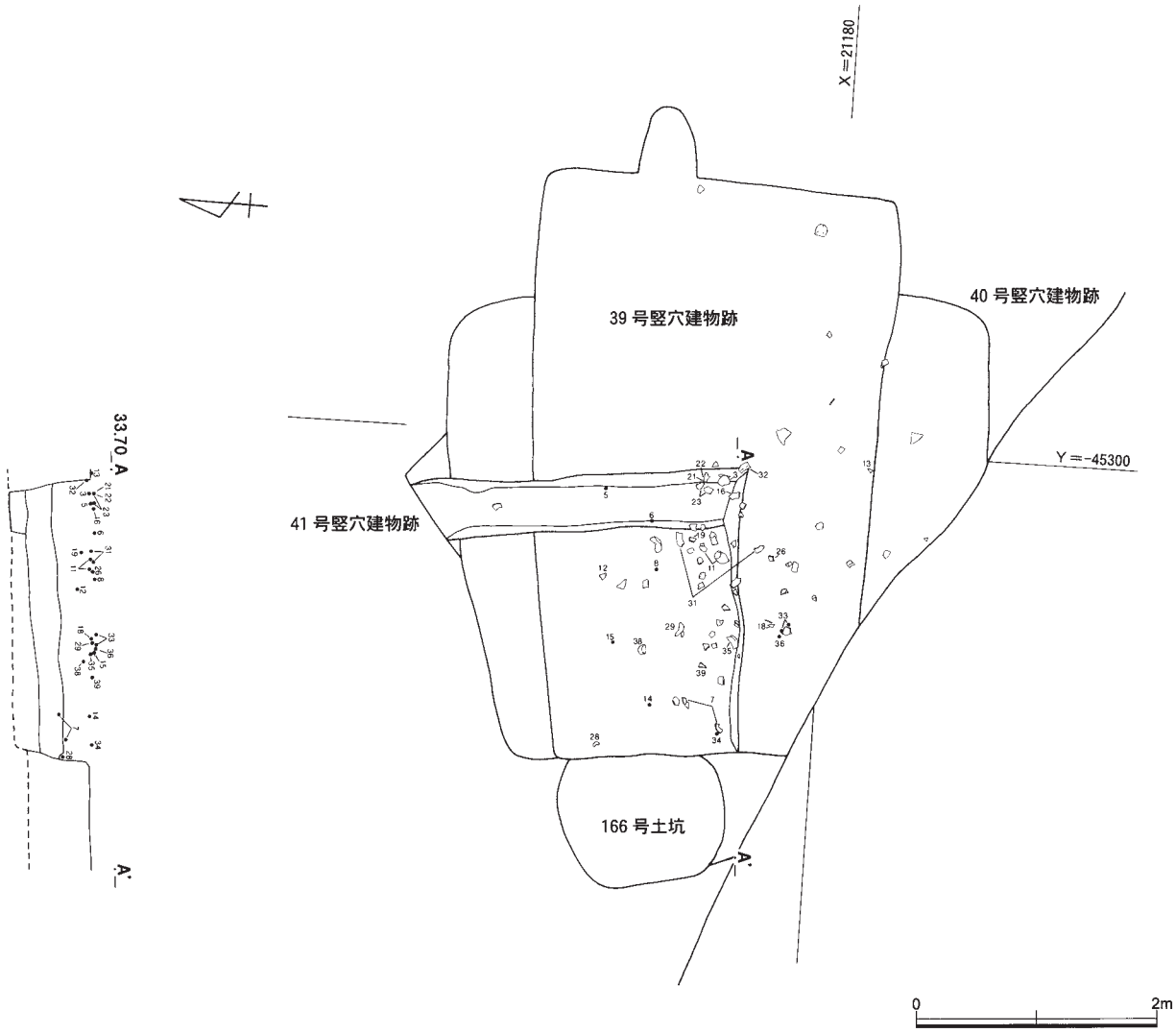
第５次調査区中央部に位置し、第39・40号竪穴建物跡に切られる。平面形は方形と思われ、一辺約4.2mを測る。主軸方位はＮ－45°－Ｅである。

図示できる遺物は出土しなかった。



第 39 号竪穴建物跡
1 層　暗褐色土　10YR3/4　焼土粒・ブロック（1㎝）を多量に含む。ローム粒、炭化粒を含む。
2 層　褐色土　10YR4/4　ローム粒・ブロック（1～3㎝）を多量に含む。焼土粒、炭化粒を含む。
3 層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒、焼土粒を含む。
第 40 号竪穴建物跡
4 層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒、焼土粒、炭化粒を含む。
5 層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　ローム粒・ブロック（1～3㎝）を多量に含む。黒色土ブロックを含む。
6 層　黒褐色土　10YR3/1　ローム粒・ブロック（1㎝）を含む。焼土粒、炭化粒を少し含む。
7 層　黄褐色土　10YR5/6　ローム粒・ブロック（1～3㎝）を多量に含む。黒色土ブロックを含む。
8 層　黒色土　10YR2/1　ローム粒をやや多く含む。
9 層　明黄褐色土　10YR6/6　ローム粒・ブロック（1～5㎝）を多量に含む。黒色土ブロックを含む。
第 41 号竪穴建物跡
10 層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒、焼土粒を少し含む。
11 層　褐色土　10YR4/4　ローム粒・ブロック（1～5㎝）を多く含む。

第55図　第39～41号竪穴建物跡



第56図　第39号竪穴建物跡遺物出土状況

第42号竪穴建物跡（第46図）

第５次調査区東部に位置する。平面形は方形で、一辺3.6mを測る。主軸方位はN－65°－Eである。

図示できた遺物は、第59図６の北武蔵型坏である。

第43号竪穴建物跡（第46図、第59図７～12、第19表）

第５次調査区東部に位置し、第169号土坑に切られる。平面形は方形で、長軸5.7m、短軸4.2mを測る。主軸方位はN－35°－Wである。

図示できた遺物は、第59図７～12である。７・８は有段口縁坏、９は北武蔵型坏、10は暗文坏、11は暗文皿、12は棒状鉄製品である。遺構の時期は、７世紀後半と推定される。

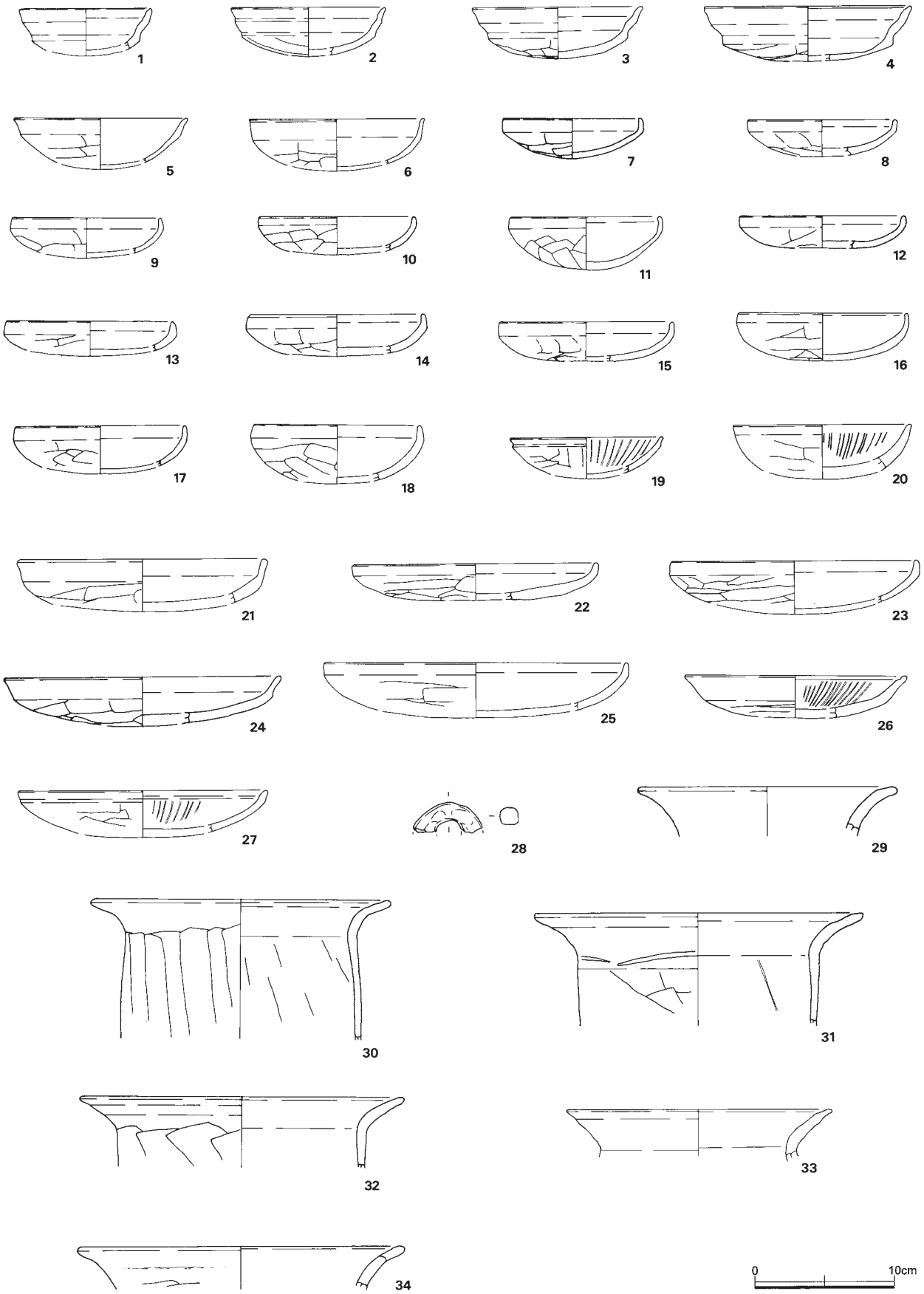
第44号竪穴建物跡（第46図、第59図13～20、第19表）

第５次調査区西部に位置する。平面形は方形で、長軸5.0m、短軸4.7mを測る。主軸方位はN－20°－Eである。

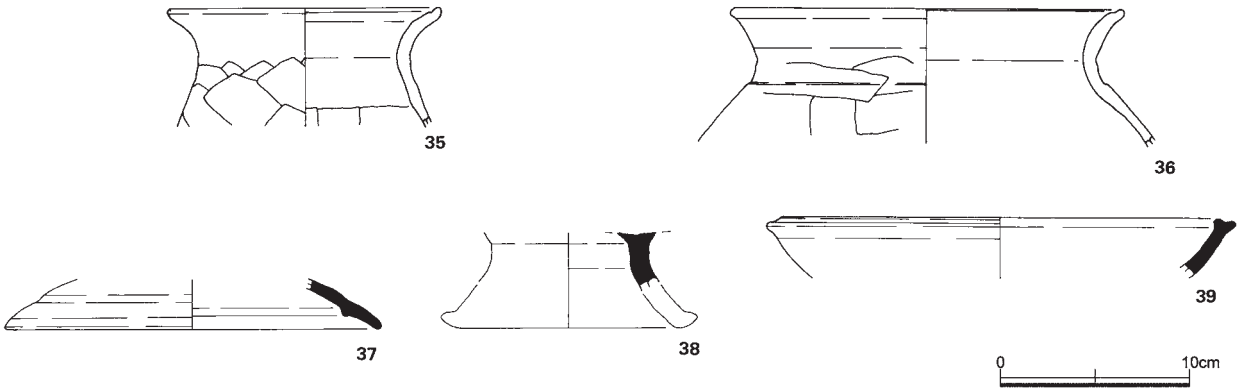
図示できた遺物は、第59図13～20である。13は有段口縁坏、14は北武蔵型坏、15は暗文坏、16は暗文椀、17は甕、18・19は須恵器で、18は蓋、19は脚付盤である。20は土錘である。遺構の時期は、７世紀後半と推定される。

第45号竪穴建物跡（第46図、第59図21～26、第19表）

第５次調査区西部に位置し、北半を第12号溝により切られる。平面形は方形で、一辺4.1mを測る。主軸



第57図　第39号竪穴建物跡出土遺物（１）



第58図　第39号竪穴建物跡出土遺物（２）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	H	坏	(9.4)	(3.4)	－	A C E	良	橙	15%	
2	H	坏	(11.0)	(3.5)	－	A C E	良	暗褐	25%	
3	H	坏	(12.2)	3.7	－	A B C D E	良	橙	30%	
4	H	坏	(14.8)	3.9	－	A C E	良	暗褐	－	
5	H	坏	(12.4)	(3.6)	－	A C	良	橙	15%	
6	H	坏	(12.6)	(3.7)	－	A C E	良	橙	15%	
7	H	坏	(10.0)	3.0	－	A C E	良	黒褐	40%	
8	H	坏	(10.6)	(2.6)	－	A B C E	良	橙	25%	
9	H	坏	(10.6)	(2.9)	－	A B C E	良	赤橙	15%	
10	H	坏	(11.2)	(2.7)	－	A C D E H	良	橙	15%	
11	H	坏	10.8	3.8	－	A B C E H	良	灰褐	95%	
12	H	坏	(11.8)	(2.3)	－	A B C E	良	橙	15%	
13	H	坏	(11.8)	(2.5)	－	A C E	良	橙	10%	
14	H	坏	(12.5)	(3.0)	－	A C E	良	橙	15%	
15	H	坏	(12.4)	(2.8)	－	A C E	良	橙	15%	
16	H	坏	(12.0)	3.4	－	A B C E	良	橙	20%	
17	H	坏	(12.4)	(3.4)	－	A C E	良	橙	10%	
18	H	坏	(12.0)	(4.2)	－	A C H	良	橙	40%	
19	H	坏	(11.0)	(2.9)	－	A B C E	良	橙	15%	
20	H	坏	(12.6)	(3.9)	－	A C E H	良	赤橙	15%	
21	H	皿	(17.6)	(3.7)	－	A C E	良	暗褐	20%	
22	H	皿	(17.6)	(2.6)	－	A B C E	良	にぶい橙	15%	
23	H	皿	(17.6)	(3.8)	－	A B C E	良	橙	20%	
24	H	皿	(19.8)	(3.5)	－	A B C E	良	橙	30%	
25	H	皿	(22.0)	(3.9)	－	A B C E	良	にぶい橙	10%	
26	H	皿	(15.8)	(3.0)	－	A C E	良	暗褐	15%	
27	H	皿	(18.0)	(3.3)	－	A C E	良	黄橙	5%	
28	H	蓋	－	－	－	A C E	良	灰褐	5%	
29	H	甕	(18.2)	－	－	A C E H	良	橙	5%	
30	H	甕	(21.4)	－	－	A B C E H	良	にぶい橙	10%	
31	H	甕	(23.6)	－	－	A B C E H	良	橙	10%	
32	H	甕	(23.2)	－	－	A B C E	良	灰褐	5%	
33	H	甕	(19.0)	－	－	A B C E	良	橙	5%	
34	H	甕	(23.0)	－	－	A C E	良	黒褐	－	

第17表　第39号竪穴建物跡出土遺物観察表（１）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
35	H	甕	(14.2)	－	－	A B C E H	良	赤橙	10%	
36	H	甕	(20.6)	－	－	A B C D E H	良	橙	5%	
37	S	蓋	(19.8)	－	－	A B C D E H	普	灰	20%	
38	S	脚付盤	－	－	－	A B C E	良	灰	5%	
39	S	盤	(23.0)	－	－	A C F H	良	青灰	－	

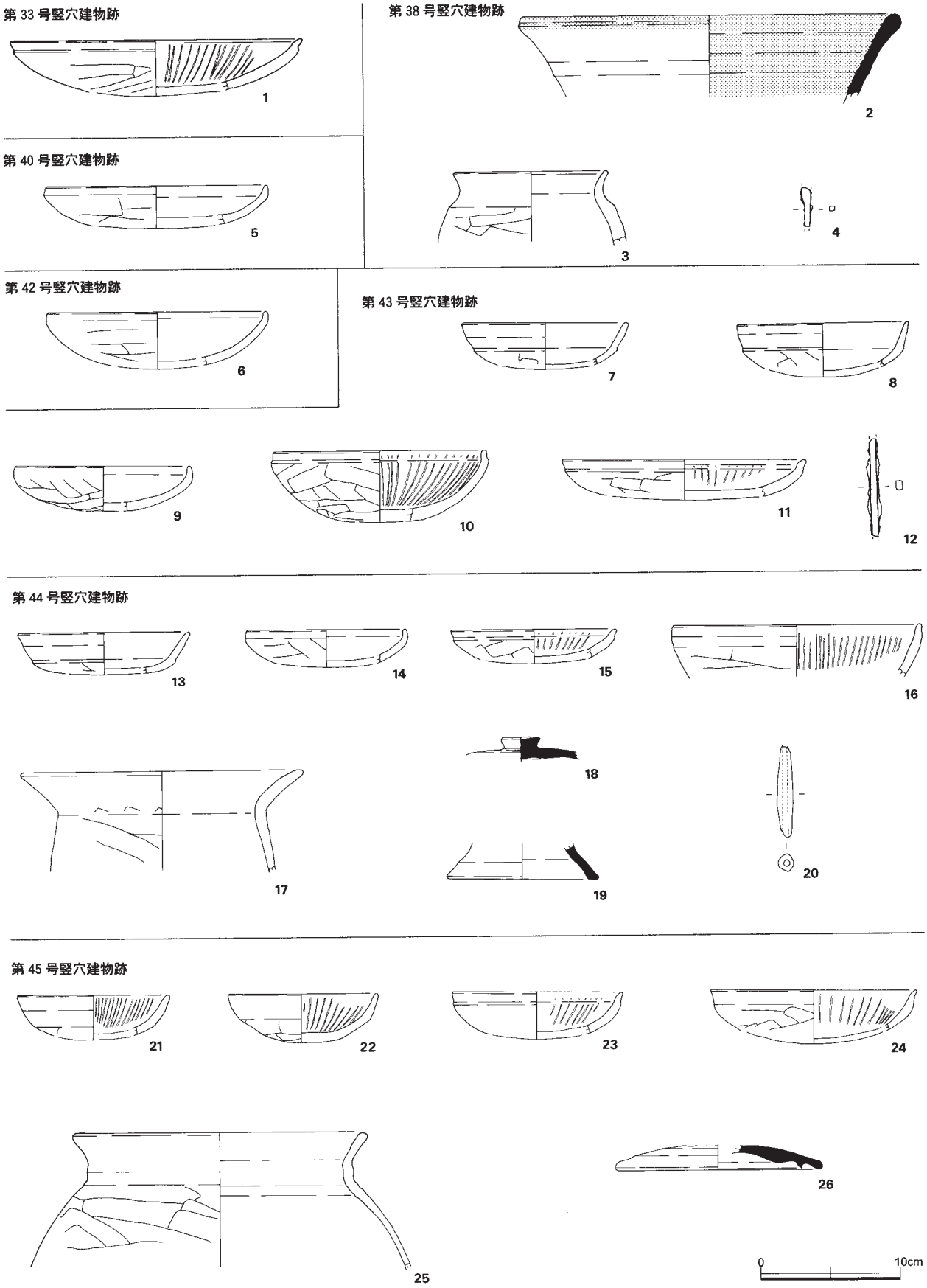
第18表　第39号竪穴建物跡出土遺物観察表（２）

番号	出土遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	第33号竪穴建物跡	H	皿	(21.0)	(4.0)	－	A B C E I	良	橙	15%	
2	第38号竪穴建物跡	S	甕	(27.0)	－	－	A C H	良	灰	－	内外面に自然釉
3	第38号竪穴建物跡	H	壷	(11.0)	－	－	A C E H	良	橙	10%	
4	第38号竪穴建物跡		棒状鉄製品	長　－	幅　0.4	厚　0.4					重さ　0.99g
5	第40号竪穴建物跡	H	皿	(16.0)	(3.0)	－	A B C E	良	灰褐	10%	
6	第42号竪穴建物跡	H	坏	(15.8)	(4.1)	－	A C	良	にぶい橙	15%	
7	第43号竪穴建物跡	H	坏	(12.0)	(3.3)	－	A B C	普	にぶい橙	10%	
8	第43号竪穴建物跡	H	坏	(12.2)	(3.9)	－	A C	良	赤橙	10%	
9	第43号竪穴建物跡	H	坏	(12.6)	(3.2)	－	A B C E	良	橙	30%	
10	第43号竪穴建物跡	H	坏	(15.2)	(5.0)	－	A C E	良	黒褐	30%	
11	第43号竪穴建物跡	H	皿	(17.6)	(2.9)	－	A C E	良	灰褐	10%	
12	第43号竪穴建物跡		棒状鉄製品	長　－	幅　0.5	厚　0.7					重さ　7.54g
13	第44号竪穴建物跡	H	坏	(12.2)	(3.0)	－	A B C E	良	暗褐	10%	
14	第44号竪穴建物跡	H	坏	(11.4)	(2.7)	－	A C E H	良	にぶい橙	10%	
15	第44号竪穴建物跡	H	坏	(11.0)	(2.4)	－	A B C E	良	赤橙	10%	
16	第44号竪穴建物跡	H	椀	(17.8)	－	－	A C E	良	黒褐	10%	
17	第44号竪穴建物跡	H	甕	(20.4)	－	－	A B C E H	良	橙	10%	
18	第44号竪穴建物跡	S	蓋	－	－	－	A C D H	良	灰	20%	
19	第44号竪穴建物跡	S	脚付盤	－	－	(11.0)	A C D H	良	灰	－	
20	第44号竪穴建物跡		土錘	長　－	幅　1.1	厚　1.2	A C E	良	暗褐	95%	
21	第45号竪穴建物跡	H	坏	(10.8)	(3.2)	－	A B C E	良	橙	15%	
22	第45号竪穴建物跡	H	坏	(10.8)	3.5	－	A B C E H	普	橙	80%	
23	第45号竪穴建物跡	H	坏	(12.2)	(3.4)	－	A B C E	良	橙	10%	
24	第45号竪穴建物跡	H	坏	(14.8)	(3.9)	－	A C E	良	黒褐	10%	
25	第45号竪穴建物跡	H	甕	(20.8)	－	－	A B C E	良	橙	10%	
26	第45号竪穴建物跡	S	蓋	(14.6)	－	－	A C F H	良	青灰	20%	

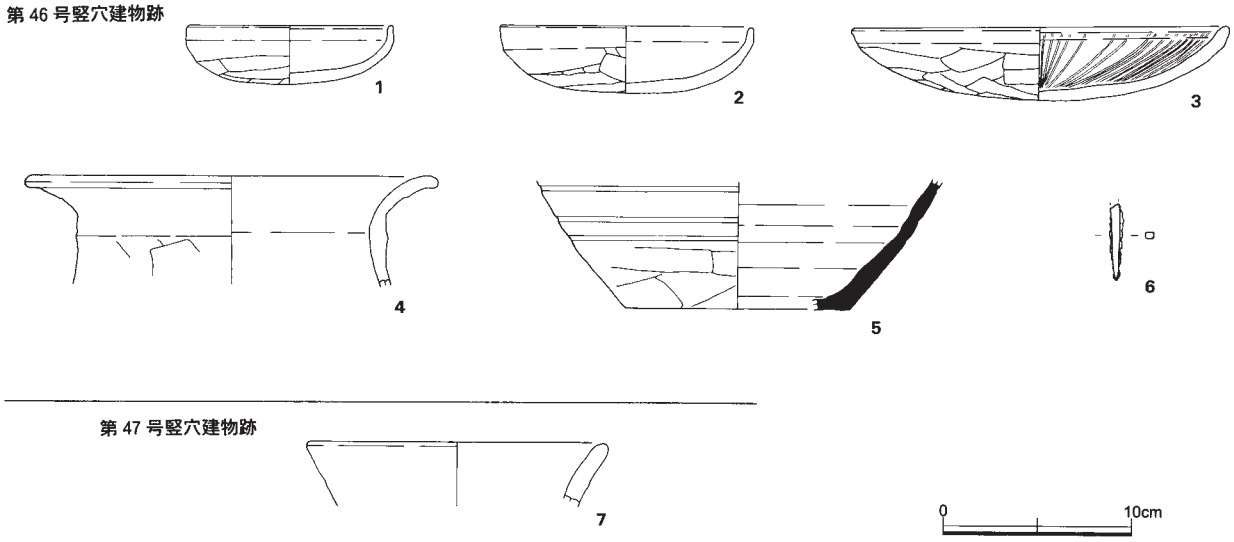
第19表　　第33・38・40・42 ～ 45号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	出土遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	第46号竪穴建物跡	H	坏	10.8	3.1	－	A B C E	良	橙	60%	
2	第46号竪穴建物跡	H	坏	13.5	3.5	－	A B C E	良	橙	90%	
3	第46号竪穴建物跡	H	皿	19.9	3.8	－	A B C E	良	にぶい橙	90%	
4	第46号竪穴建物跡	H	甕	(21.4)	－	－	A B C D E F H	良	にぶい橙	5%	
5	第46号竪穴建物跡	S	壷	－	－	(12.0)	A C F H	良	青灰	5%	
6	第46号竪穴建物跡		棒状鉄製品	長　－	幅　0.4	厚　0.4					重さ　1.80g
7	第47号竪穴建物跡	H	甕	(15.8)	－	－	A C D E H	良	橙	－	

第20表　第46・47号竪穴建物跡出土遺物観察表



第59図　第33・38・40・42 ～ 45号竪穴建物跡出土遺物



第60図　第46・47号竪穴建物跡出土遺物

方位はN－20°－Eである。

図示できた遺物は、第59図21～26である。21～24は暗文坏、25は甕、26は須恵器蓋である。遺構の時期は、７世紀後半と推定される。

第46号竪穴建物跡（第47･48図､第60図１～６､第20表）

第５次調査区北部に位置し、第32号建物跡、第173号土坑、第12号溝に切られる。平面形は方形で、一辺約3.9mを測る。主軸方位はN－20°－Wである。

図示できた遺物は、第60図１～６である。１・２は北武蔵型坏、３は暗文皿､4は土師器甕、５は須恵器壷、６は棒状鉄製品である。遺構の時期は、７世紀末頃と推定される。

第47号竪穴建物跡（第46図、第60図７、第20表）

第５次調査区北部に位置し、第174・175号土坑に切られる。平面形は方形で、長軸4.5m、短軸3.7mを測る。主軸方位はN－20°－Wである。

図示できた遺物は、第60図７の土師器甕である。

第48号竪穴建物跡（第47・48図）

第５次調査区北部に位置し、第32号建物跡、第173号土坑に切られる。平面形は方形で、主軸方位はN－30°－Wである。

図示できる遺物は出土しなかった。

第52号竪穴建物跡（第61・62図、第21表）

第８次調査区南部に位置する。北西部は調査区外にあり不明だが、平面形は方形で、一辺約4.2mを測る。主軸方位はN－20°－Wである。

床面はほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。床面の深さは確認面から25cmを測る。壁溝は幅20cm、床面からの深さ約10cmで、東壁際がピット状に深くなる。

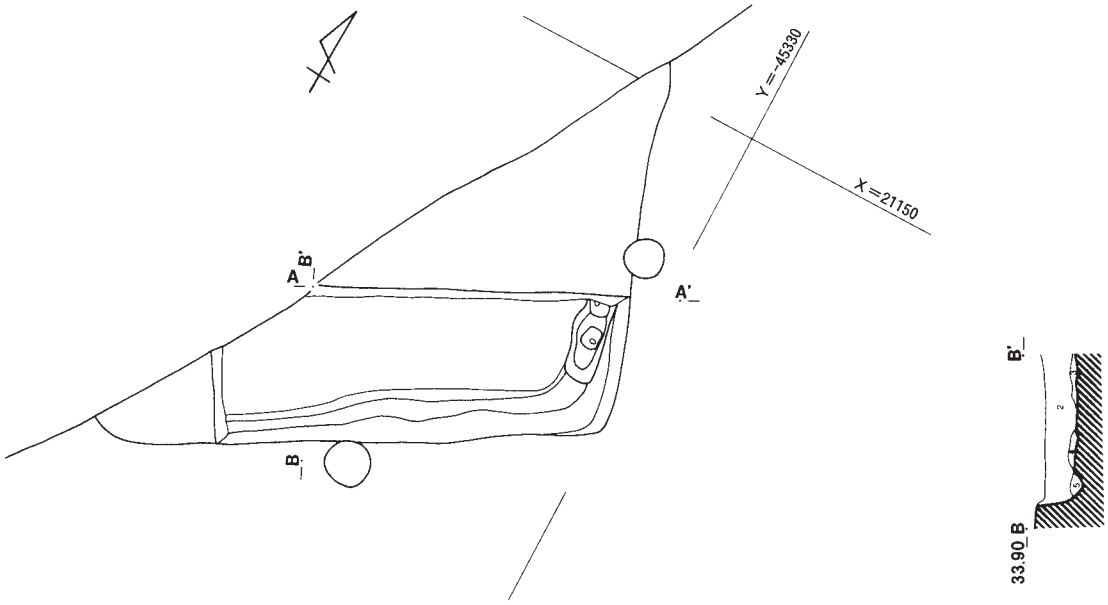
遺物は鉄滓が多く、鍛冶工房跡の可能性が考えられたため、床面付近の覆土を水洗したところ、鍛造剥片が少量採取された。そのため、本遺構は鍛冶工房跡の可能性が高いと考えられる。

図示できた遺物は、第62図１～９である。１は暗文系無文坏で、内面が丁寧に磨かれる。２・３は暗文皿、４は甕である。５は羽口の先端部、６～８は鉄滓、９は鉄塊系遺物である。遺構の時期は、７世紀後半～末頃と推定される。

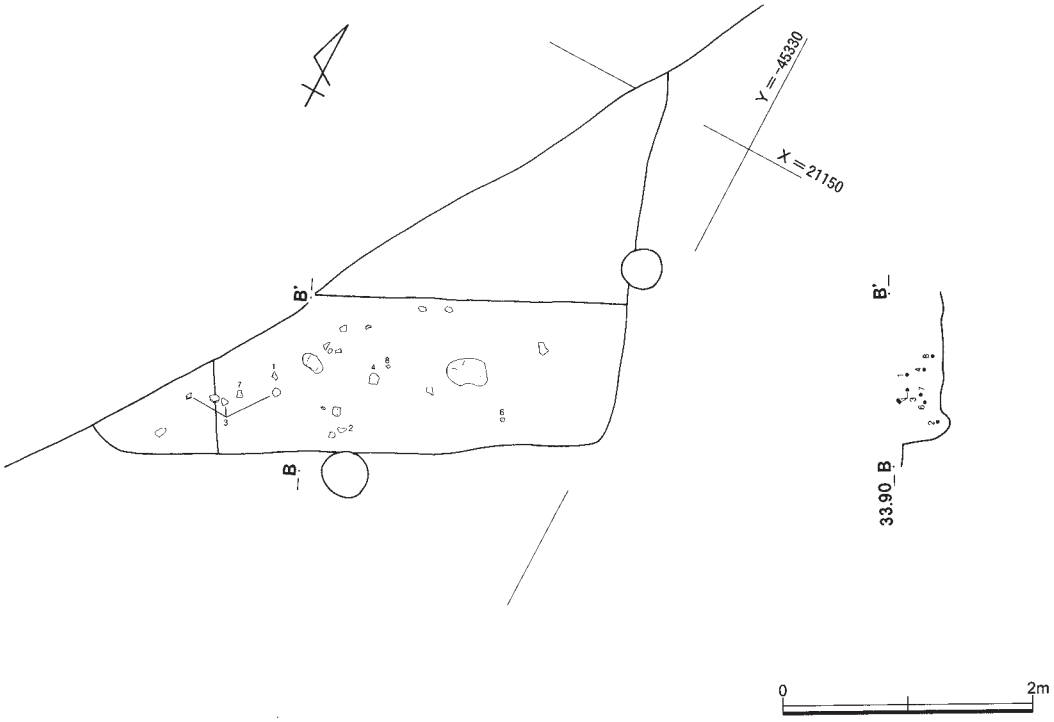
第53号竪穴建物跡（第63～65図、第22・23表）

第８次調査区南部に位置し、第54号竪穴建物跡を切る。平面形は方形で、長軸3.6m、短軸3.2mを測る。主軸方位はN－22°－Wである。

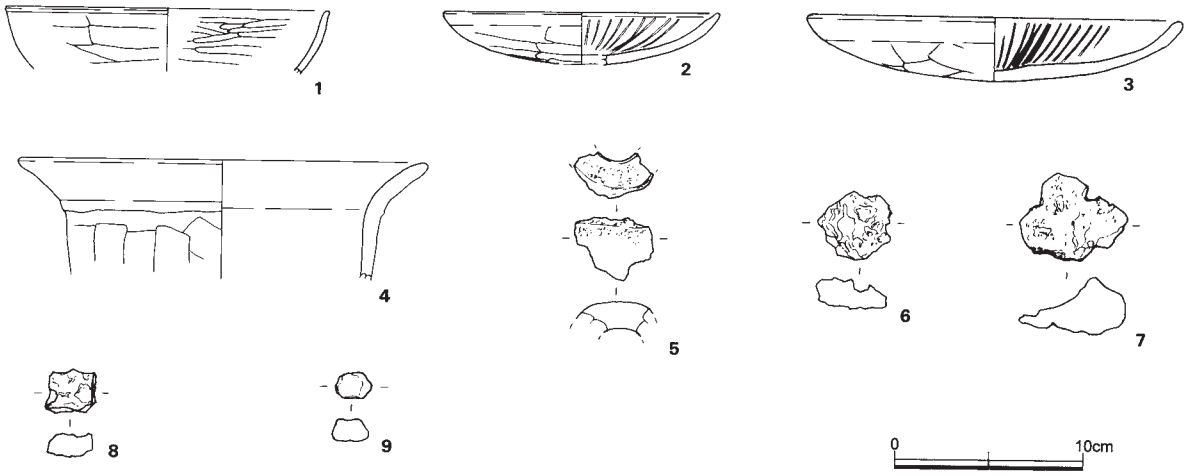
床面はほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。床面の



1層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒を少し含む。
2層　黒褐色土　10YR2/2　焼土粒を多く含む。ローム粒、炭化粒を含む。締まり弱い。
3層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒をやや多く含む。焼土粒、炭化粒を含む。
4層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　ローム粒を多く含む。
5層　黄褐色土　10YR5/8　ローム粒を多量に含む。
6層　褐色土　10YR4/4　ローム粒を多く含む。締まり弱い。



第61図　第52号竪穴建物跡



第62図　第52号竪穴建物跡出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	H	坏	(17.0)	－	－	ＡＢＣＥ	良	橙	10%	内面を丁寧に磨く
2	H	皿	(14.6)	(2.7)	－	ＡＣＥ	良	橙	20%	
3	H	皿	(19.6)	3.3	－	ＡＢＣＥ	良	にぶい橙	20%	
4	H	甕	(21.6)	－	－	ＡＣＤＥＨ	良	にぶい橙	5%	
5		羽口	長　－	幅　－	厚　－					鉄成分がわずかに付着
6		鉄滓	長　3.8	幅　3.5	厚　1.5					重さ　11.54g
7		鉄滓	長　5.7	幅　4.6	厚　3.0					重さ　44.85g
8		鉄滓	長　2.4	幅　2.2	厚　1.1					重さ　12.09g
9		鉄塊系遺物	長　1.9	幅　1.3	厚　1.1					重さ　5.53g

第21表　第52号竪穴建物跡出土遺物観察表

深さは確認面から40cmを測る。壁溝は幅20cm、床面からの深さ８cmである。

遺物は第52号竪穴建物跡と同様に鉄滓が多く、鍛冶工房跡の可能性が考えられたため、床面付近の覆土を水洗したところ、鍛造剥片が少量採取された。そのため、本遺構もまた鍛冶工房跡の可能性が高いと考えられる。

図示できた遺物は、第65図１～33である。１～12は土師器で、１・２は暗文坏、３は続比企型坏（富田1992）で内外面が赤彩される。４は北武蔵型坏、５～８は暗文坏、９～12は甕である。13～16は須恵器で、13・15は坏、14は蓋、16は壷である。17～20は土錘、21は棒状鉄製品、22は針金状鉄製品、23は鉄片、24は羽口の先端部、25～29は鉄滓、30～33は編物石である。遺構の時期は、７世紀後半と推定される。

第54号竪穴建物跡（第63図、第66図１～６、第24表）

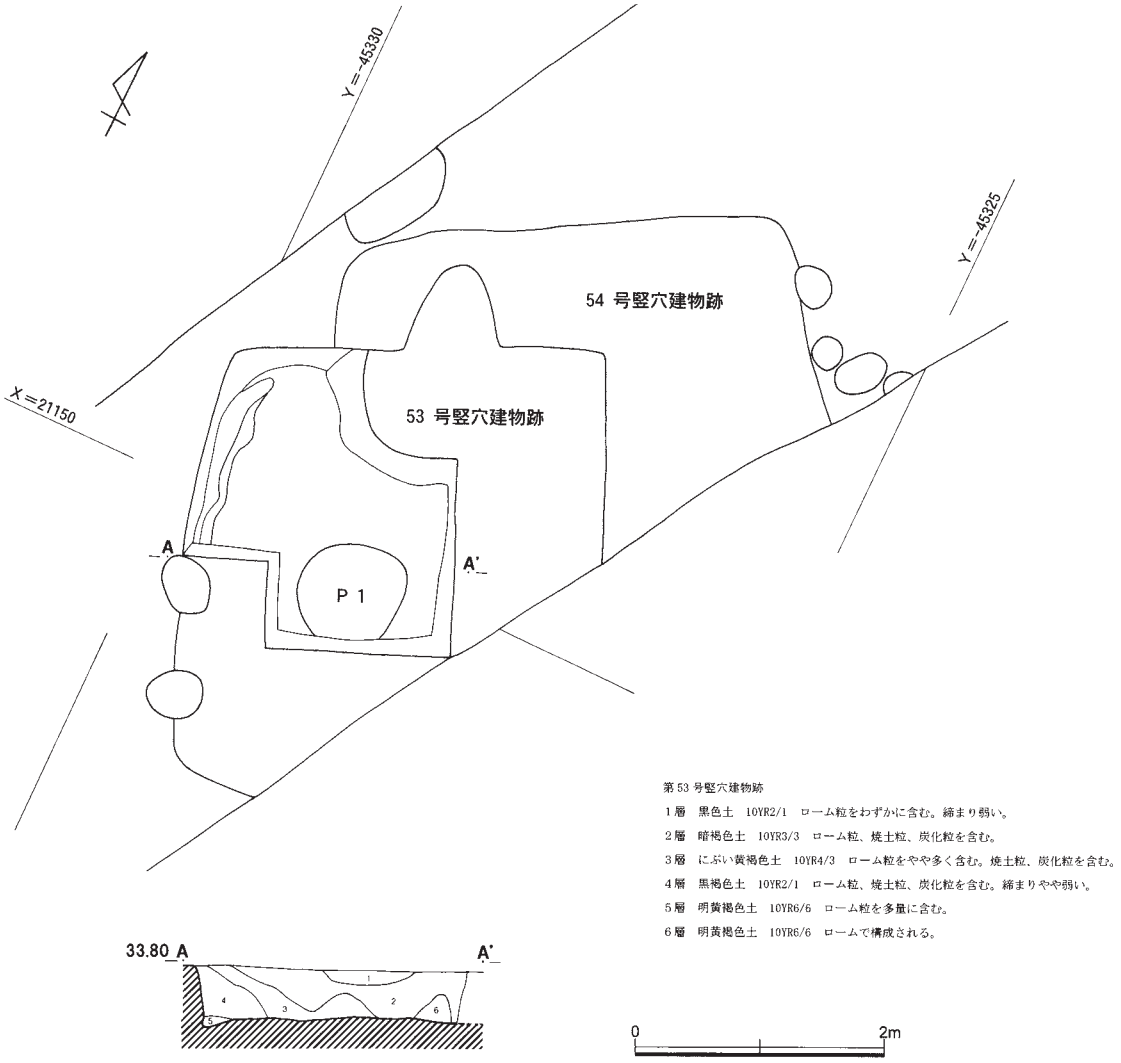
第８次調査区南部に位置し、第53号竪穴建物跡に切られる。平面形は方形で、一辺約3.7mを測る。主軸方位はＮ－60°－Ｅである。

図示できた遺物は、第66図１～６である。１は有段口縁坏、２・３は暗文坏、４～６は甕である。遺構の時期は、７世紀後半と推定される。

第55号竪穴建物跡（第46図、第66図７、第24表）

第８次調査区北部に位置する。大半が調査区外にあるため規模は不明だが、平面形は方形で、主軸方位はＮ－20°－Ｗである。

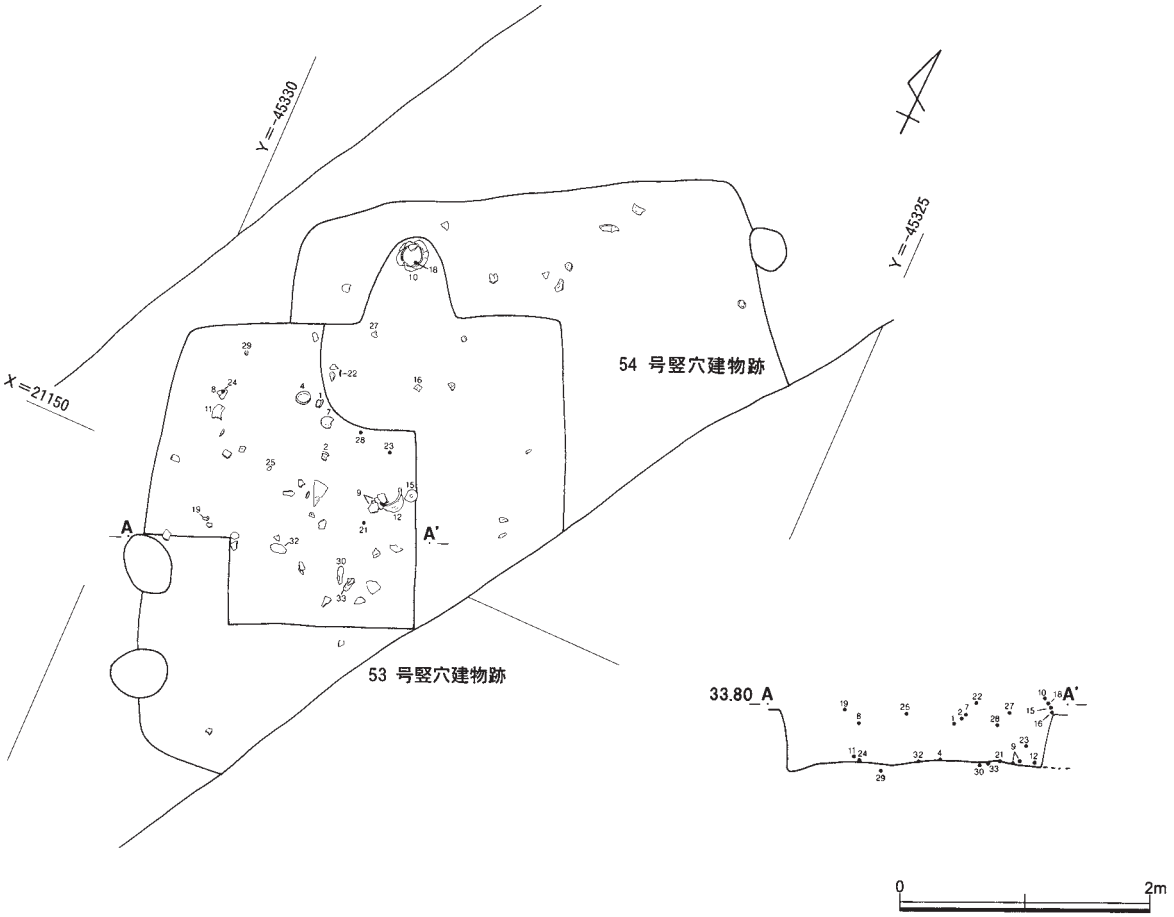
図示できた遺物は、第66図７の須恵器瓶である。内面に自然釉がかかる。



第63図　第53・54号竪穴建物跡

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	H	坏	(10.6)	(2.8)	－	A B C E	良	暗褐	20%	
2	H	坏	(11.0)	3.0	－	A C E	良	黄橙	30%	
3	H	坏	(9.4)	－	－	A C E	良	橙	10%	内外面が赤彩される
4	H	坏	12.3	4.6	－	A C H	良	橙	95%	
5	H	坏	(11.6)	3.1	－	A B C E H	良	橙	30%	
6	H	坏	(12.6)	(3.0)	－	A C E	良	橙	15%	
7	H	坏	(13.2)	4.1	－	A C E	良	黒褐	30%	
8	H	坏	(13.6)	(4.0)	－	A C E	良	橙	15%	
9	H	甕	(21.6)	－	－	A B C E	良	にぶい橙	10%	
10	H	甕	(23.0)	－	－	A B C E H	良	橙	20%	
11	H	甕	(21.8)	－	－	A B C E H	良	橙	10%	
12	H	甕	(19.6)	－	－	A B C E	良	橙	15%	
13	S	坏	(11.5)	－	－	A C F	良	灰	15%	
14	S	蓋	(14.8)	－	－	A C	良	灰	25%	外面に自然釉

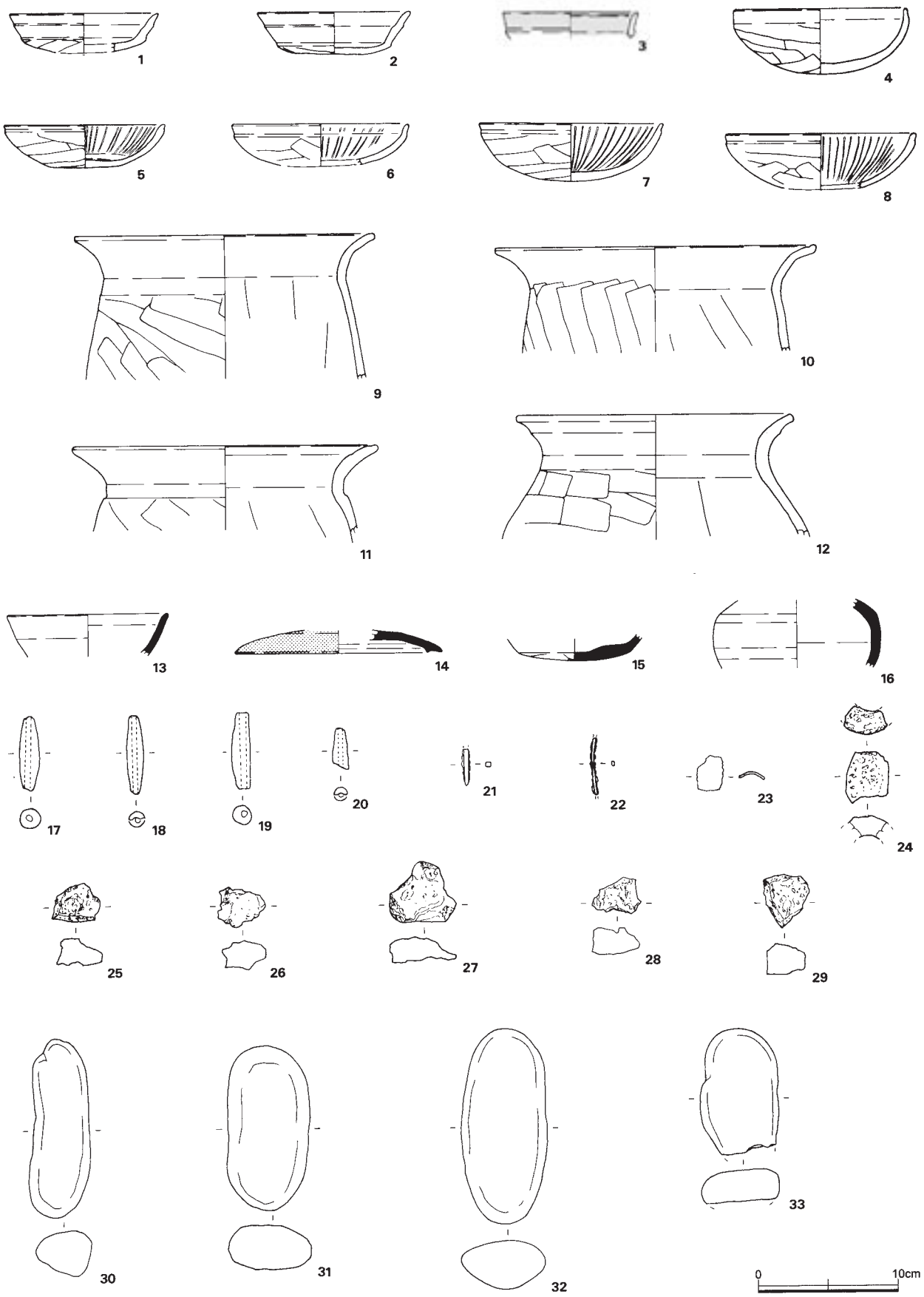
第22表　第53号竪穴建物跡出土遺物観察表（1）



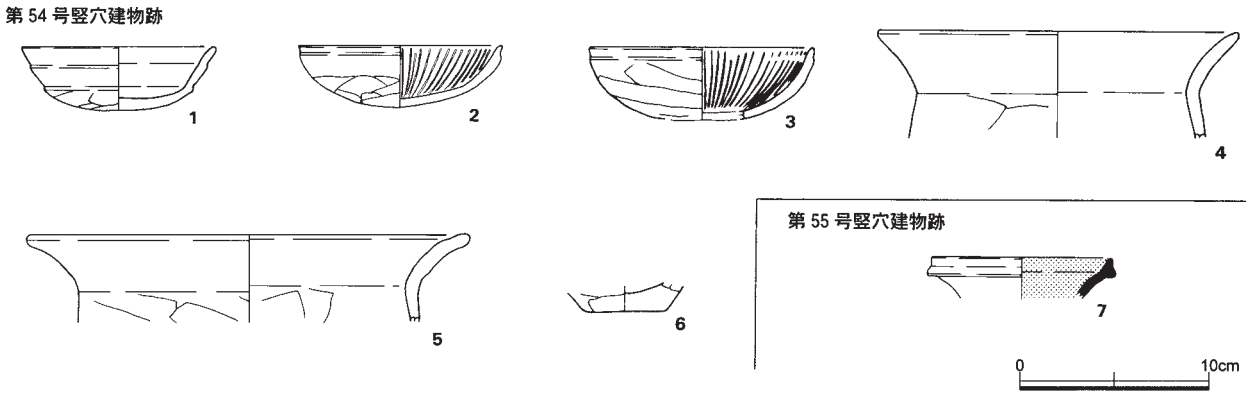
第64図　第53号竪穴建物跡遺物出土状況

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
15	S	坏	－	－	－	A B C D F	良	灰	40%	
16	S	壷	－	－	－	A C	良	灰	5%	
17		土錘	長 5.2	幅 1.5	厚 1.4	A C E H	良	黒褐	100%	
18		土錘	長 5.6	幅 1.2	厚 －	A B C E	良	橙	50%	
19		土錘	長 5.4	幅 1.3	厚 1.4	A B C E	良	にぶい橙	100%	
20		土錘	長 －	幅 1.0	厚 －	A C	良	橙	25%	
21		棒状鉄製品	長 －	幅 0.3	厚 0.3					重さ 0.91g
22		針金状鉄製品	長 －	幅 0.1	厚 0.3					重さ 0.87g
23		鉄片	長 2.5	幅 1.8	厚 0.1					重さ 2.24g
24		羽口	長 －	幅 －	厚 －					発泡した鉄成分が付着
25		鉄滓	長 3.3	幅 2.7	厚 1.8					重さ 21.57g
26		鉄滓	長 3.3	幅 2.7	厚 1.8					重さ 11.32g
27		鉄滓	長 4.7	幅 4.4	厚 1.7					重さ 16.63g
28		鉄滓	長 3.5	幅 2.4	厚 1.9					重さ 10.67g
29		鉄滓	長 3.8	幅 3.3	厚 2.2					重さ 36.98g
30		編物石	長 12.7	幅 4.0	厚 3.2	石材　砂岩				重さ 260g
31		編物石	長 11.7	幅 5.8	厚 3.2	石材　片岩				重さ 375g
32		編物石	長 13.9	幅 6.2	厚 3.5	石材　砂岩				重さ 370g
33		編物石	長 －	幅 5.6	厚 －	石材　砂岩				重さ 200g

第23表　第53号竪穴建物跡出土遺物観察表（２）



第65図　第53号竪穴建物跡出土遺物



第66図　第54・55号竪穴建物跡出土遺物

番号	出土遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	第54号竪穴建物跡	H	坏	(10.2)	3.3	－	A C E	良	黒褐	30%	
2	第54号竪穴建物跡	H	坏	(10.8)	3.2	－	A B C E	良	赤橙	30%	
3	第54号竪穴建物跡	H	坏	(12.0)	(3.8)	－	A C E H	良	橙	25%	
4	第54号竪穴建物跡	H	甕	(19.0)	－	－	A B C E H	良	橙	5%	
5	第54号竪穴建物跡	H	甕	(23.0)	－	－	A B C E H	良	にぶい橙	5%	
6	第54号竪穴建物跡	H	甕	－	－	4.4	A C E H	良	にぶい橙	5%	
7	第55号竪穴建物跡	S	瓶	(9.6)	－	－	A C	良	灰	－	内面に自然釉

第24表　第54・55号竪穴建物跡出土遺物観察表

d　溝

第12号溝（第67～69図、第25表）

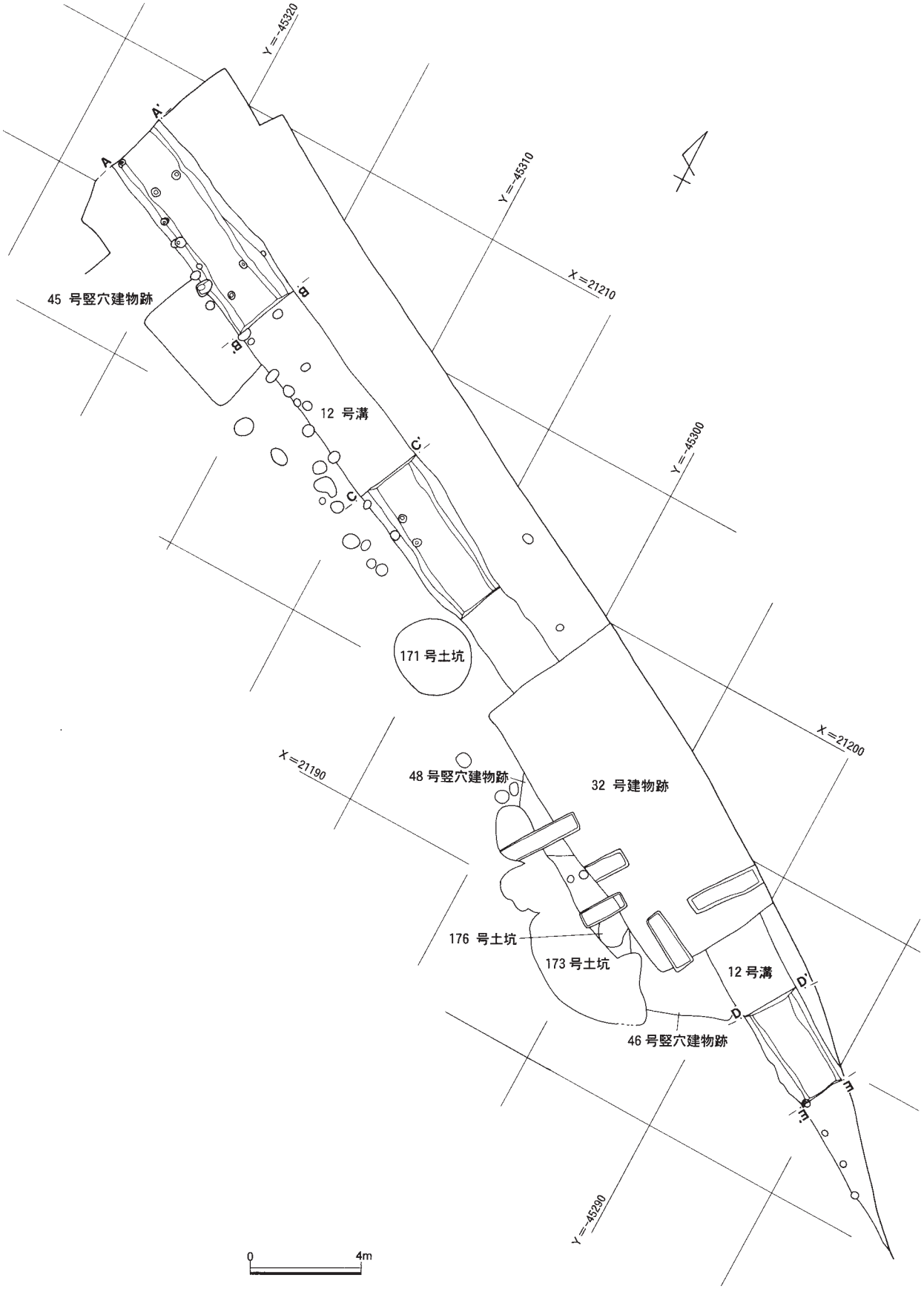
第５次調査区北部に位置し、調査区北壁にほぼ沿って走る。位置関係から、正倉院（南）の南辺を区画する溝と考えられる。第45・46・48号竪穴建物跡を切り、第32号建物跡に切られる。断面形は逆台形を呈し、上部がやや広がる。底面はほぼ平坦で、幅は上端が2.1～2.4m、下端が1.2～1.5mを測り、確認面からの深さは35～60cmで、西側が深くなる。主軸方位はN－65°－Wである。

覆土はローム粒・ブロックをやや多く含むが、第２号溝のように埋め戻されたことが明瞭なものとは様相を異にする。また、第32号建物跡の掘込地業により切られているため、礎石建物が建てられる段階には、この南辺区画溝が機能を失うことが明らかである。それに替わる区画施設が更に南に存在する可能性を考えたが、確認できなかった。

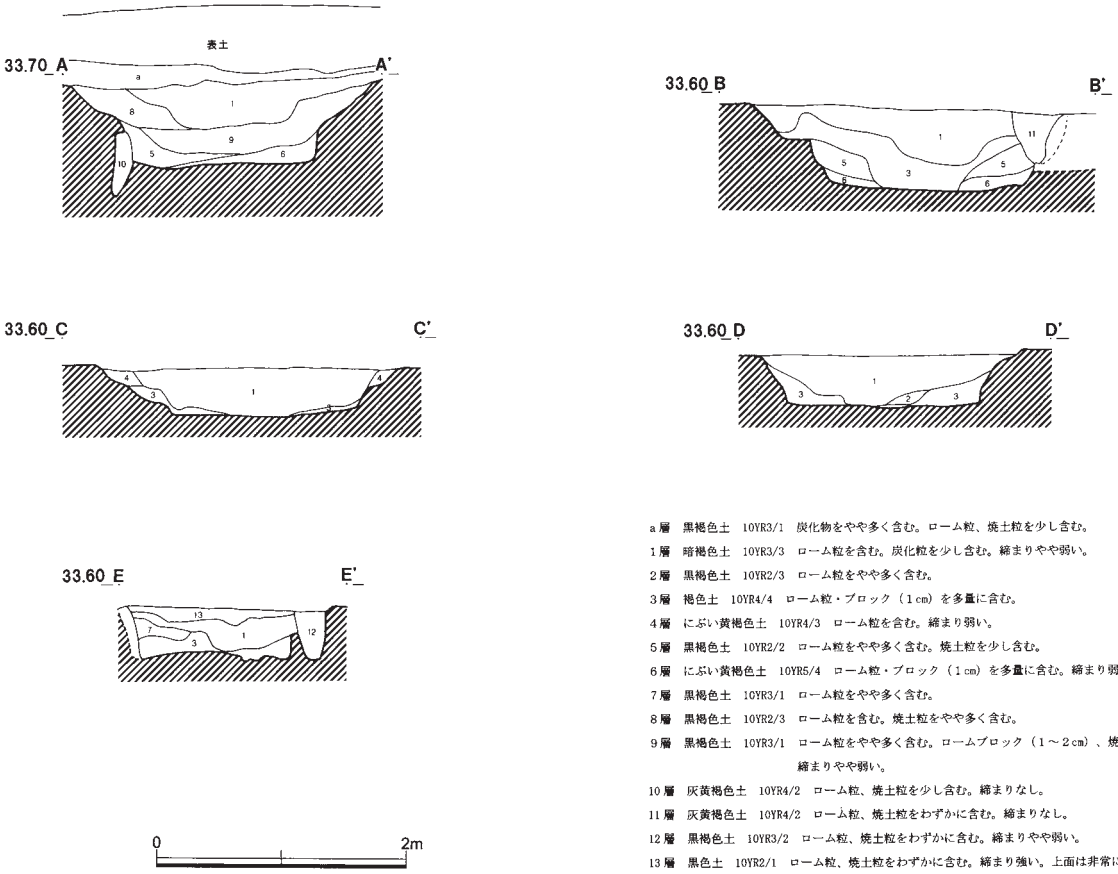
また、第12号溝の南側に重複して、小ピットが多数確認された。これらは第12号溝を切っており、或いは柵列の可能性も考えられる。但し小ピットは、第32号建物跡を囲う位置にはない。また、第32号建物跡の周辺では認められない。

第12号溝のうち、第32号建物跡の東側は、覆土上層が非常に硬化しており、通路として使用されていた可能性が高い。

図示できた遺物は、第69図１～30である。１～23は土師器で、１は模倣坏、２～13は有段口縁坏、14～17は北武蔵型坏、18・19は暗文坏、20は暗文皿、21は椀、22・23は甕である。24～27は須恵器で、24は長頸瓶、25は瓶、26は甕、27は横瓶である。28・29は土錘、30は性格不明鉄製品で、端部が折れ曲がっている。基部のみの遺存で、先端部の方は折れたものとみられ欠損している。


Y=-45320
Y=-45310
Y=-45300
Y=-45290
X=21210
X=21200
X=21190
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
45 号竪穴建物跡
12 号溝
171 号土坑
48 号竪穴建物跡
32 号建物跡
176 号土坑
173 号土坑
12 号溝
46 号竪穴建物跡
0
4m

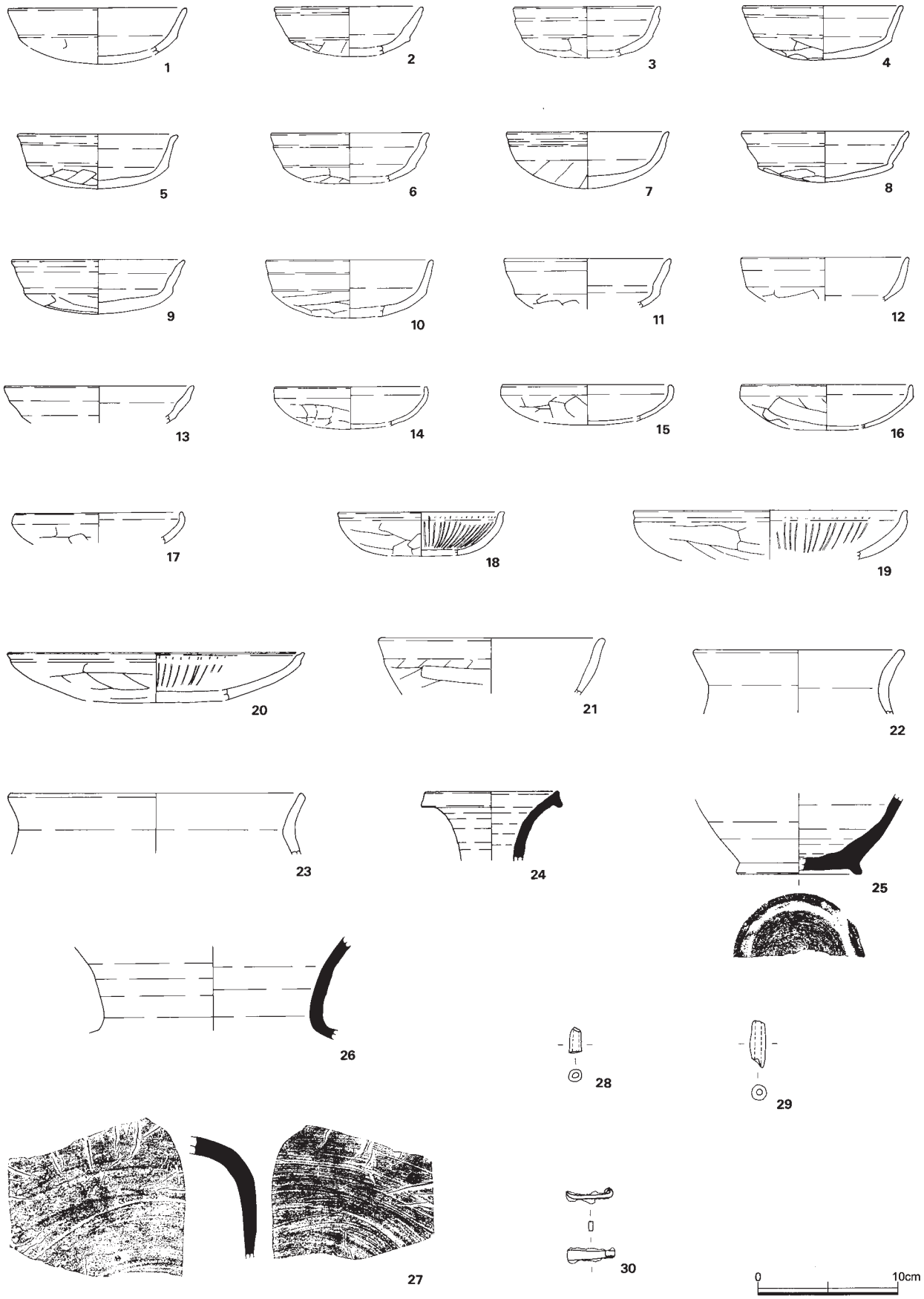
第67図　第12号溝



a層　黒褐色土　10YR3/1　炭化物をやや多く含む。ローム粒、焼土粒を少し含む。
1層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒を含む。炭化粒を少し含む。締まりやや弱い。
2層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒をやや多く含む。
3層　褐色土　10YR4/4　ローム粒・ブロック（1cm）を多量に含む。
4層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　ローム粒を含む。締まり弱い。
5層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒をやや多く含む。焼土粒を少し含む。
6層　にぶい黄褐色土　10YR5/4　ローム粒・ブロック（1cm）を多量に含む。締まり弱い。
7層　黒褐色土　10YR3/1　ローム粒をやや多く含む。
8層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒を含む。焼土粒をやや多く含む。
9層　黒褐色土　10YR3/1　ローム粒をやや多く含む。ロームブロック（1～2cm）、焼土粒を含む。締まりやや弱い。
10層　灰黄褐色土　10YR4/2　ローム粒、焼土粒を少し含む。締まりなし。
11層　灰黄褐色土　10YR4/2　ローム粒、焼土粒をわずかに含む。締まりなし。
12層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒、焼土粒をわずかに含む。締まりやや弱い。
13層　黒色土　10YR2/1　ローム粒、焼土粒をわずかに含む。締まり強い。上面は非常に硬化。

第68図　第12号溝土層断面図

第12号溝



第69図　第12号溝出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	H	坏	(12.8)	(4.0)	－	A C E	良	橙	30%	
2	H	坏	10.6	3.5	－	A B C E	良	橙	70%	
3	H	坏	(10.4)	(3.6)	－	A B C E	良	橙	15%	
4	H	坏	11.3	3.8	－	A C E	良	橙	75%	
5	H	坏	11.5	3.8	－	A B C E H	良	橙	98%	
6	H	坏	(11.4)	(3.6)	－	A B C E	良	橙	25%	
7	H	坏	11.6	4.0	－	A B C E	良	橙	70%	
8	H	坏	12.0	3.6	－	A C E	良	橙	65%	
9	H	坏	(12.2)	3.8	－	A B C E	良	にぶい橙	70%	
10	H	坏	(11.8)	(4.1)	－	A C E	良	赤橙	15%	
11	H	坏	(11.8)	－	－	A C E H	良	橙	25%	
12	H	坏	(11.8)	－	－	A B C E	良	橙	15%	
13	H	坏	(13.4)	－	－	A C D E	良	黄橙	20%	
14	H	坏	(11.0)	(3.0)	－	A C	良	橙	20%	
15	H	坏	(12.0)	(2.9)	－	A C E	良	橙	15%	
16	H	坏	(12.2)	(3.2)	－	A C E	良	にぶい橙	25%	
17	H	坏	(12.0)	－	－	A C E	良	橙	10%	
18	H	坏	(11.8)	(3.1)	－	A C E	良	橙	15%	
19	H	坏	(19.6)	－	－	A C E	良	橙	10%	
20	H	皿	(21.2)	(3.6)	－	A C E	良	橙	15%	
21	H	椀	(16.0)	－	－	A B C E	良	暗褐	15%	
22	H	甕	(15.0)	－	－	A B C E H	普	橙	5%	
23	H	甕	(21.0)	－	－	A C E	良	橙	5%	
24	S	長頸瓶	(9.6)	－	－	A C	良	灰	5%	
25	S	瓶	－	－	9.0	A C H	良	灰	10%	底部内面に自然釉
26	S	甕	－	－	－	A B C E F H	良	灰	－	
27	S	横瓶	－	－	－	A C	良	灰	5%	
28		土錘	長　－	幅　0.9	厚　0.9	A C				
29		土錘	長　－	幅　1.1	厚　1.1					
30		不明鉄製品	長　－	幅　0.7	厚　0.2					重さ　2.33ｇ

第25表　第12号溝出土遺物観察表

e　土坑、調査区出土遺物

土坑は、中世のものを中心に49基が確認された。古代のものと思われるものは４基である。その内の一つである第173号土坑については、第32号建物跡に伴うと考えられるため、建物跡の項で記述した。それを除く３基について述べたい。

また、調査区一括出土遺物は、第73図に示した。

第157号土坑（第70図、第72図４～７、第26表）

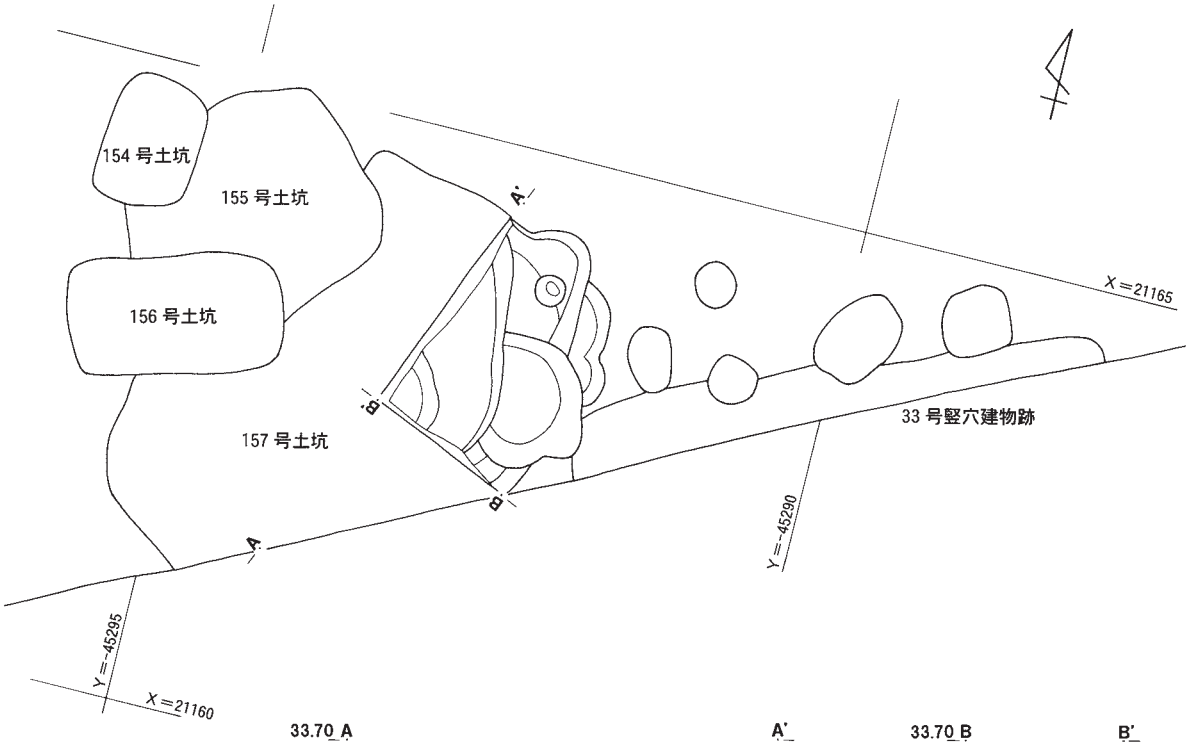
第５次調査区南東部に位置し、第155・156号土坑に切られる。平面形は不整長方形を呈し、長軸3.9m、短軸2.4mを測る。壁は斜め又は階段状に立ち上がる。確認面からの深さは90cmで、主軸方位はN－23°－Eである。

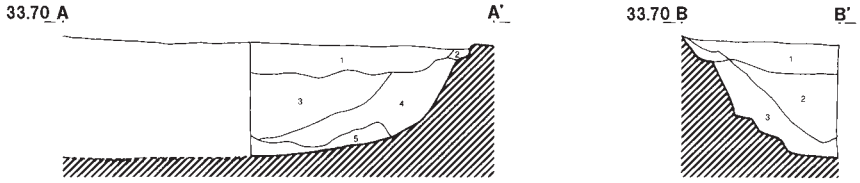
図示できた遺物は、第72図４～７である。４は北武蔵型坏、５・６は甕、７は須恵器坏である。

第171号土坑（第70図）

第５次調査区北部に位置する。平面形は円形で、径約2.8mを測る。壁は緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは50cmである。

図示できる遺物は出土しなかった。





第 157 号土坑

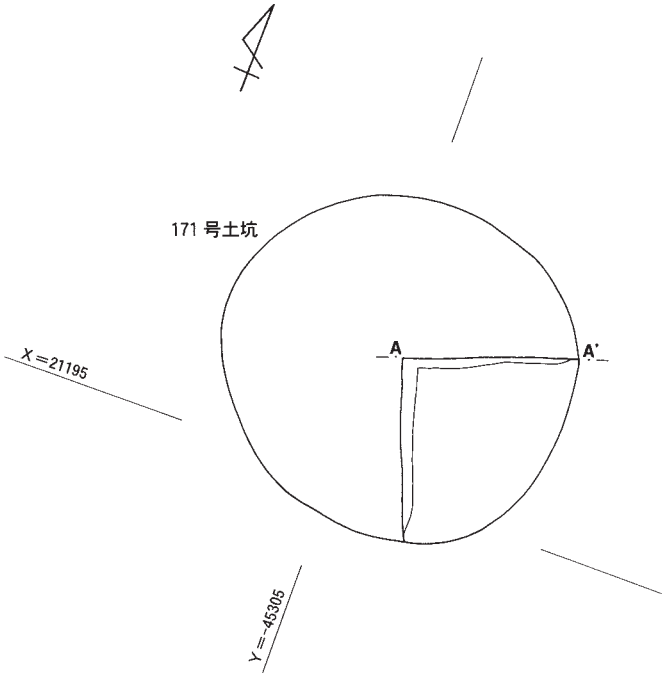
1 層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　ローム粒、焼土粒をわずかに含む。

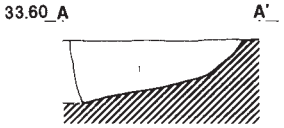
2 層　明黄褐色土　10YR6/6　ローム粒を多く含む。

3 層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒、焼土粒を少し含む。

4 層　褐色土　10YR4/4　ローム粒を多く含む。

5 層　黄橙色土　10YR7/8　ローム粒・ブロック（1～5cm）を多く含む。

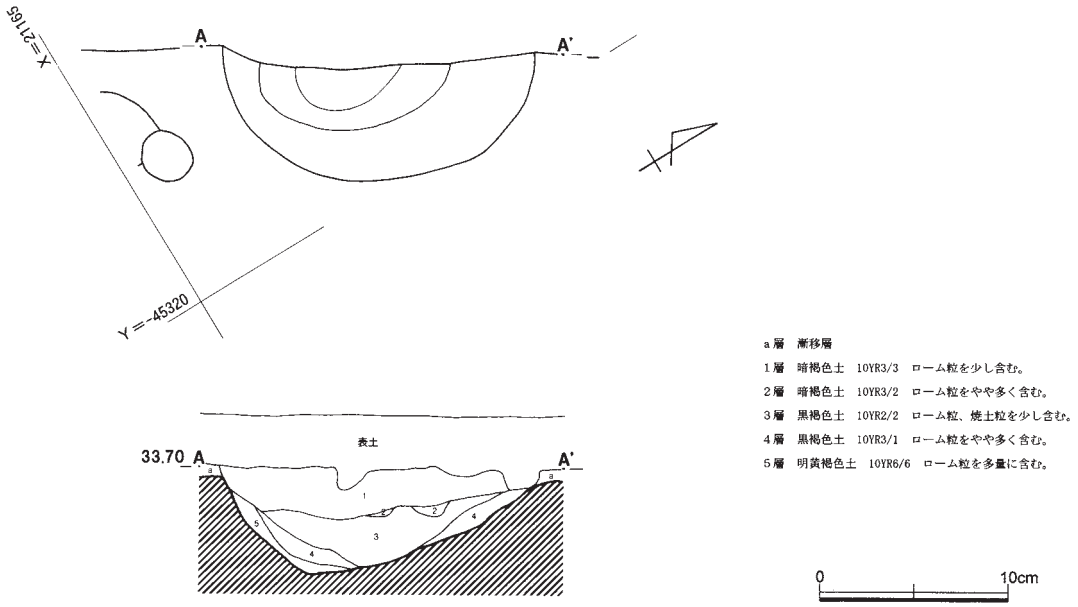




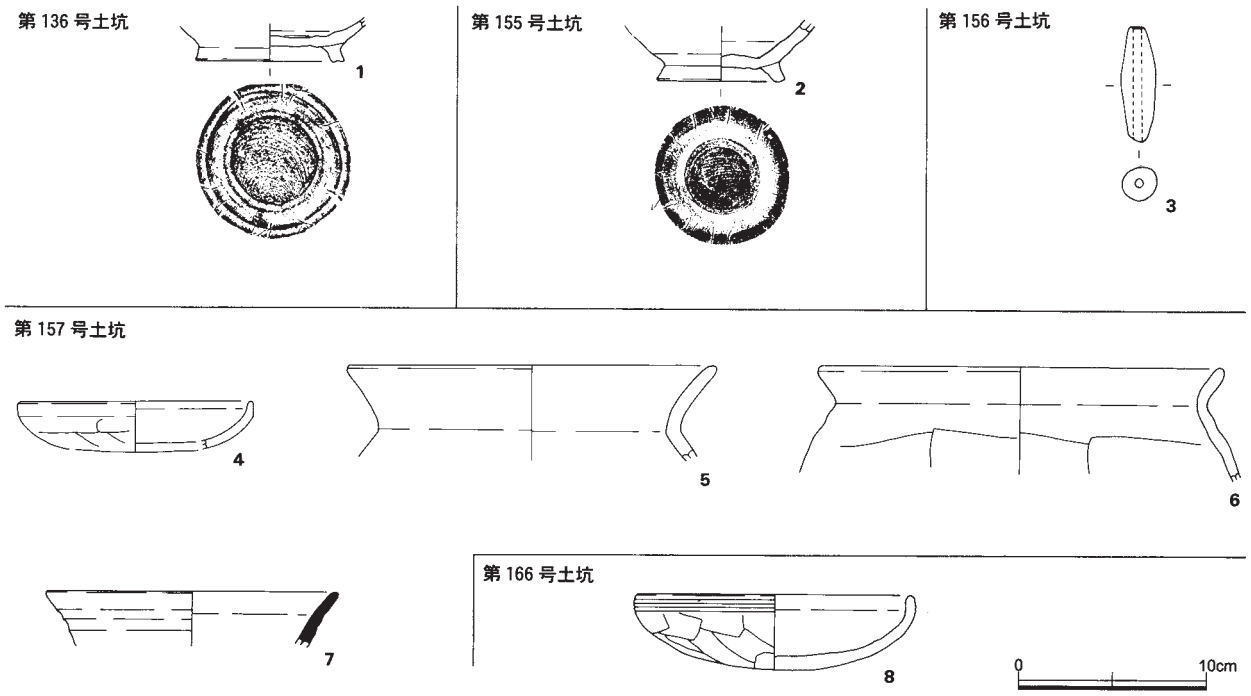
第 171 号土坑

1 層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　ローム粒、炭化粒を含む。焼土粒を少し含む。

第70図　第157・171号土坑



第71図　第228号土坑



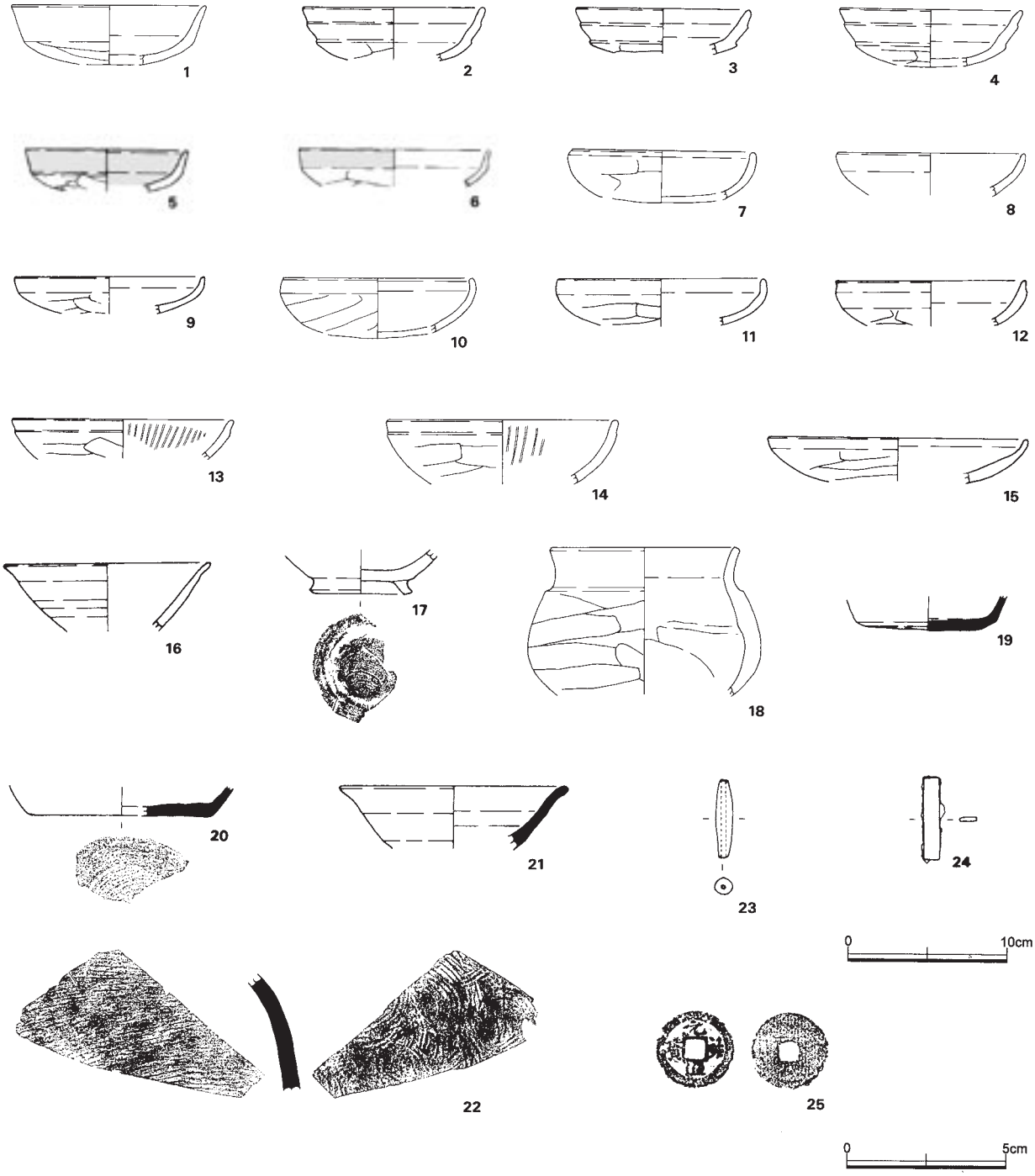
第72図　第５次調査区土坑出土遺物

第228号土坑（第71図）

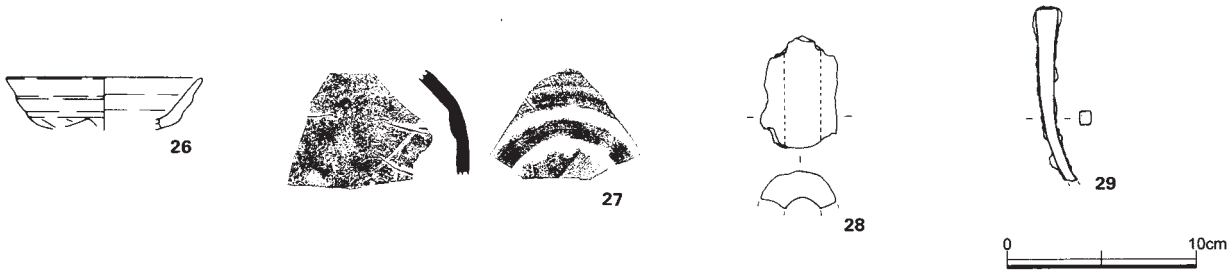
第８次調査区北部に位置する。平面形は円形で、径2.5mを測る。椀状の掘り込みで、確認面からの深さは70cmである。

図示できる遺物は出土しなかった。

第５次調査区



第８次調査区



第73図　第５・８次調査区出土遺物

番号	出土遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	第136号土坑	R	高台椀	－	－	(8.9)	A B C F H	良	にぶい橙	30%	
2	第155号土坑	R	高台椀	－	－	(6.5)	A C E	良	黄橙	30%	
3	第156号土坑		土錘	長　6.0	幅　1.8	厚　1.8	A C E F H	良	灰褐	100%	
4	第157号土坑	H	坏	(12.4)	(2.7)	－	A C E H	良	橙	10%	
5	第157号土坑	H	甕	(19.6)	－	－	A C E H	良	橙	5%	
6	第157号土坑	H	甕	(21.4)	－	－	A B C E	良	にぶい橙	15%	
7	第157号土坑	S	坏	(15.4)	－	－	A C E	普	灰	10%	
8	第166号土坑	H	坏	(14.6)	3.9	－	A C	良	にぶい橙	50%	

第26表　第５次調査区土坑出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	H	坏	(12.2)	(3.7)	－	A C H	良	にぶい橙	25%	内面黒色処理
2	H	坏	(11.4)	－	－	A C E	良	黒褐	20%	
3	H	坏	(11.0)	－	－	A C E	良	暗褐	20%	
4	H	坏	(11.4)	(3.6)	－	A C E	良	にぶい橙	15%	
5	H	坏	(10.0)	－	－	A C H	良	橙	15%	内外面が赤彩される
6	H	坏	12.0	－	－	A C E	良	橙	15%	外面が赤彩される
7	H	坏	(11.6)	(3.3)	－	A B C E H	良	橙	10%	
8	H	坏	(12.0)	－	－	A B C	良	暗褐	15%	
9	H	坏	(11.8)	－	－	A B C E	良	橙	10%	
10	H	坏	(12.0)	(3.8)	－	A C E	良	にぶい橙	15%	
11	H	坏	(13.0)	－	－	A B C E	良	橙	15%	
12	H	坏	(12.0)	－	－	A B C E	良	橙	15%	
13	H	坏	(13.8)	－	－	A C E	良	赤橙	10%	
14	H	坏	(14.6)	－	－	A C E	普	橙	15%	
15	H	皿	(16.4)	－	－	A B C E	良	橙	10%	
16	R	高台椀	(12.8)	－	－	A C E	良	にぶい橙	20%	
17	R	高台椀	－	－	(6.0)	A B C D E	良	橙	25%	
18	H	甕	(11.8)	－	－	A C E	良	橙	25%	
19	S	坏	－	－	(7.0)	A C D F H	良	灰	25%	
20	S	坏	－	－	(11.6)	A C G H	良	灰	15%	
21	S	坏	(14.4)	－	－	A C	普	灰	20%	
22	S	甕	－	－	－	A C D E F H	良	青灰	－	
23		土錘	長　4.9	幅　1.1	厚　1.0	A B C E	良	黄橙	100%	
24		延板状金具	長　5.1	幅　1.1	厚　0.2					重さ　4.54g
25		銭貨	長　2.46	幅　2.48	厚　0.11					「元祐通宝」
26	H	坏	(10.4)	－	－	A　C　E	良	橙	15%	
27	S	瓶	－	－	－	A　C	良	灰	5%	外面に自然釉
28		羽口	長　－	幅　－	厚　－	A　C　E	良	橙	5%	
29		釘	長　－	幅　1.2	厚　1.2					重さ　21.85g

第27表　第５・８次調査区出土遺物観察表

4　第７次調査

a　概要

第７次調査区は、Ｄ－Ⅲ－98～Ｄ－Ⅳ－161グリッドに設けた。第３・５次調査区で確認された正倉院（南）の東への広がりを確認する目的で、調査区を設定した。調査区は、北と南の２箇所に分かれている。

確認された主な遺構は、竪穴建物跡２棟、正倉院（南）の南辺区画溝、古代末頃の溝１条、中世のものと思われる土坑43基等である。調査区周辺の標高は約34mで、遺構確認面までの深さは約30～50㎝を測る。遺構確認面は北に向かって深くなり、中世の遺構が多くなる。

調査の結果、正倉院（南）の南辺区画溝は、本調査区より更に東に延びることが確認された。出土遺物はわずかで、コンテナ１箱に満たない程度である。

b　竪穴建物跡

第50号竪穴建物跡（第77図）

南調査区北部に位置し、大部分攪乱を受ける。床面硬化部分のみ確認され、竪穴建物跡と考えられる。そのため、規模や主軸方位は不明である。これに伴うとみられる遺物は出土しなかった。

第７次調査区

第51号竪穴建物跡（第74図）

北調査区北東部に位置し、第208・215・216号土坑に切られる。一部で床面と思われる硬化部分が確認されたため、確認面から床面までの深さは極めて浅いと思われる。主軸方位はほぼ真北である。

図示できる遺物は出土しなかった。

c　溝

第12号溝（第75図、第79図１、第28表）

南調査区南部に位置し、調査区南壁にほぼ沿って走る。正倉院（南）の南辺を区画する溝である。第13号溝に切られる。断面形は、基本的に上部がやや広がる逆台形である。幅は上端が約1.5m、下端が0.７～１mを測る。確認面からの深さは20～30㎝で、南側がやや深くなる。主軸方位はＮ－60～65°－Ｗである。

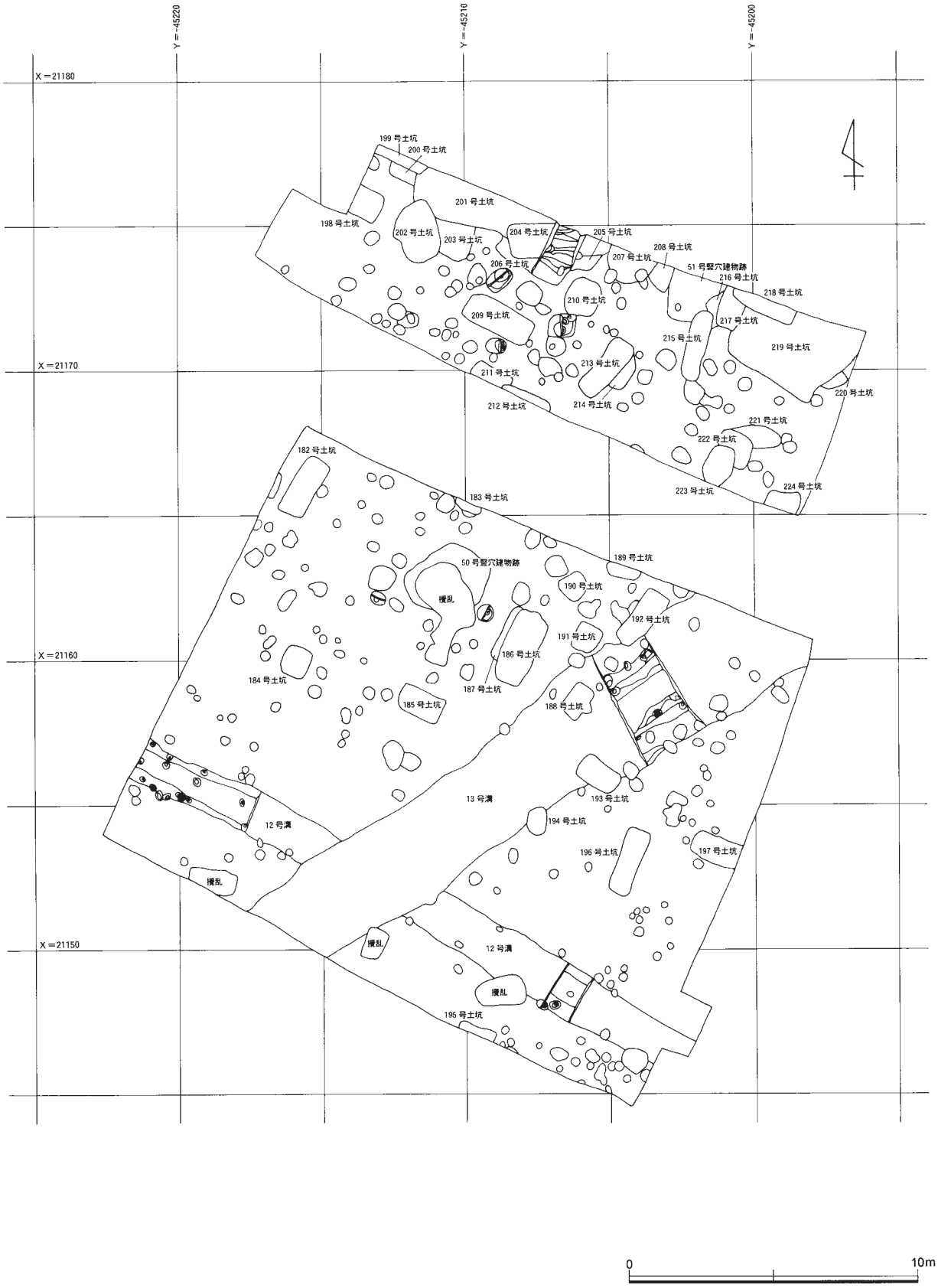
また、溝を切る小ピットが多数確認されたが、柵列として捉えられる状況ではなかった。

図示できた遺物は、第79図１の須恵器蓋である。

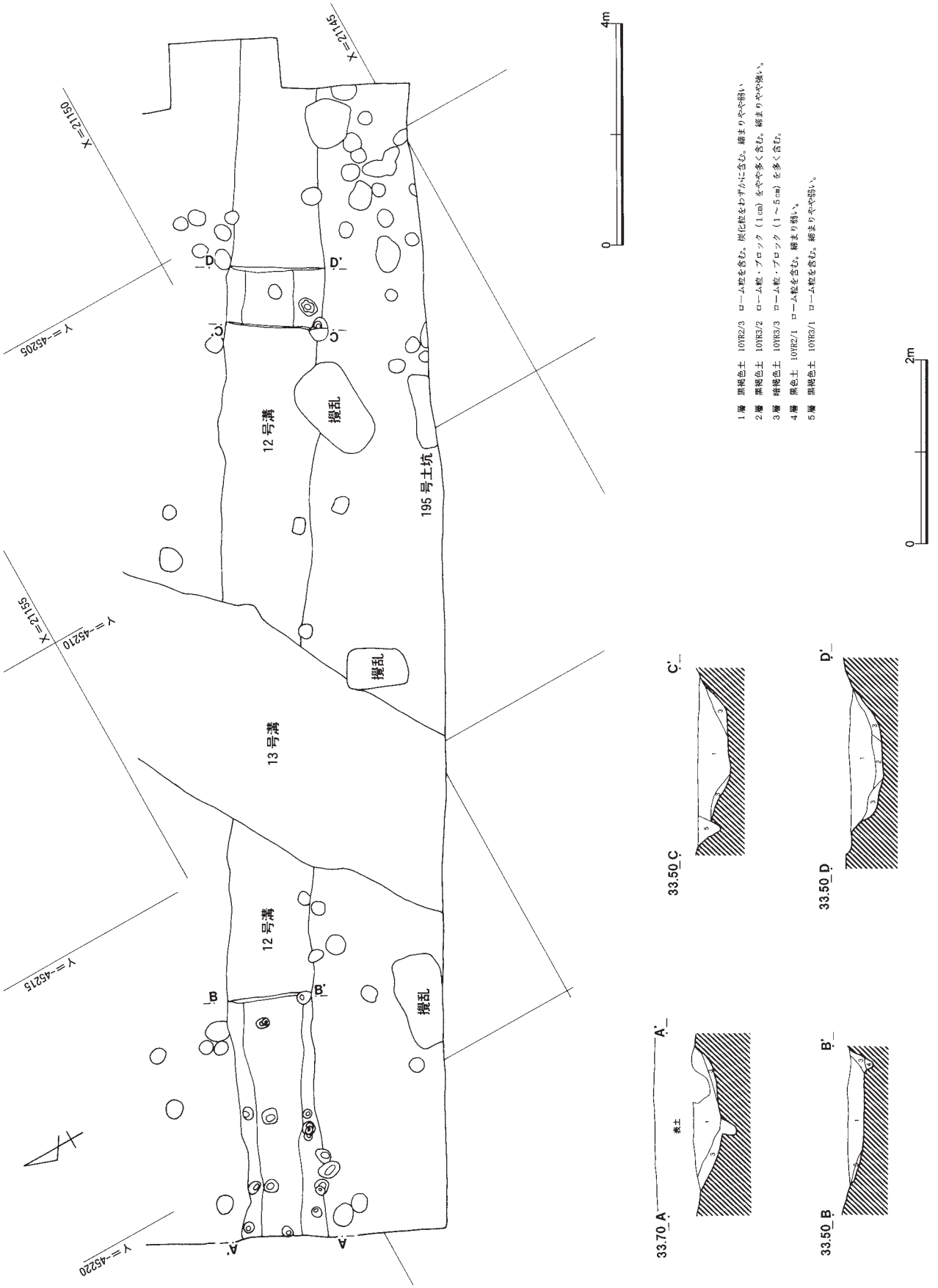
第13号溝（第76図、第79図２～４、第28表）

南調査区に位置し、第12号溝を切り、第188・192～194号土坑に切られる。壁は斜め又は階段状に立ち上がる。幅３～4.4m、確認面からの深さ約１mを測り、主軸方位はＮ－57°－Ｅである。

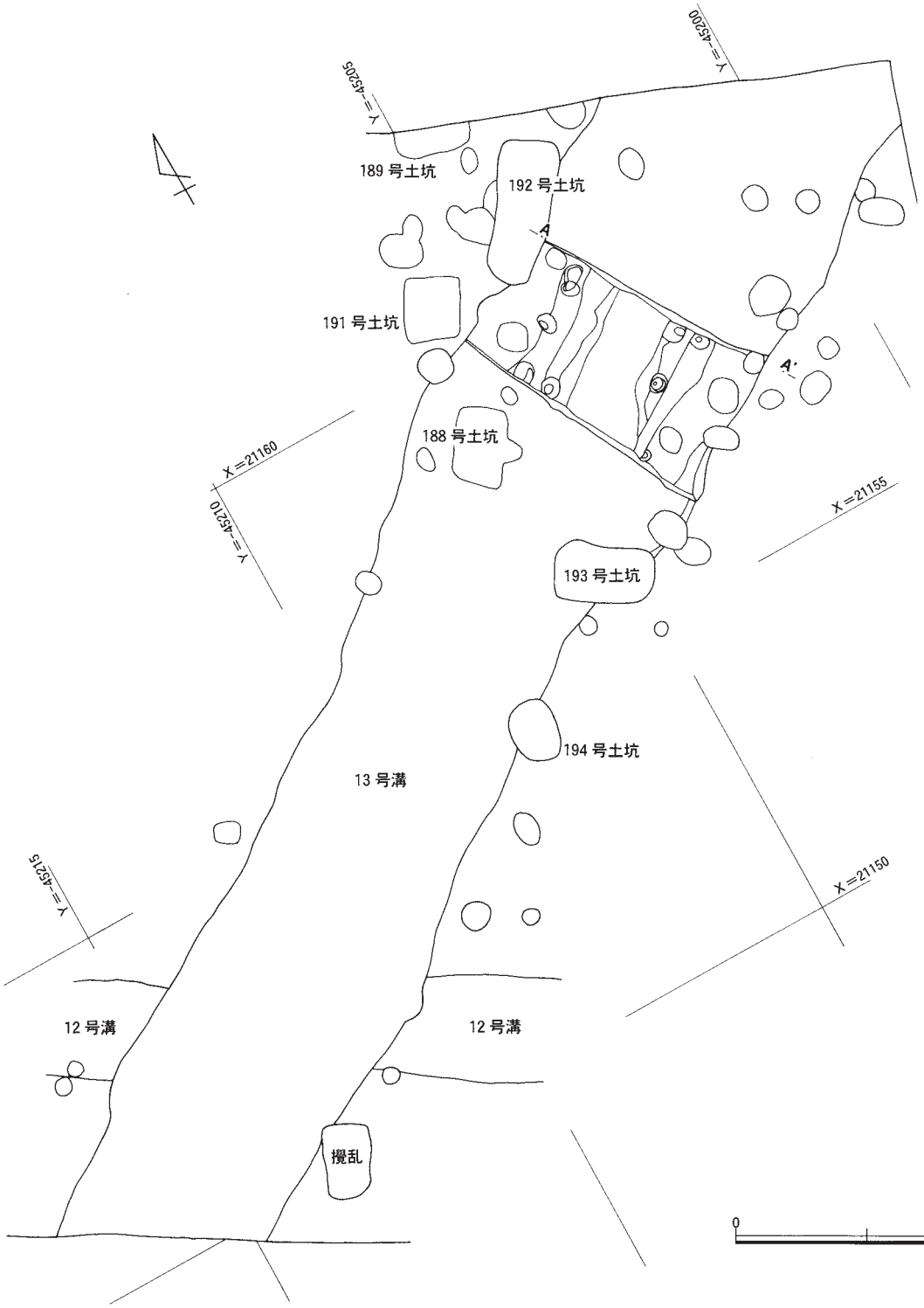
図示できた遺物は、第79図２～４である。全てロクロ土師器の小皿である。遺構の時期は、古代末頃と推定される。

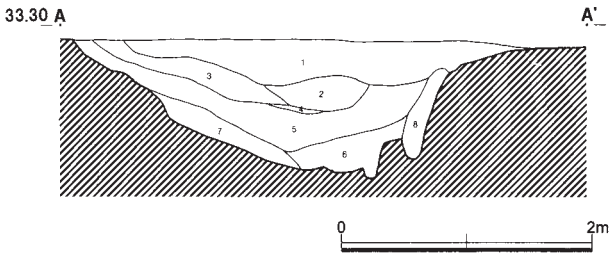


第74図　第７次調査区全体測量図


X=21145
X=21150
Y=-45205
Y=-45210
X=21155
Y=-45215
Y=-45220
12号溝
13号溝
195号土坑
撹乱
撹乱
撹乱
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
4m
0
2m
0
1層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒を含む。炭化粒をわずかに含む。締まりやや弱い
2層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒・ブロック（1cm）をやや多く含む。締まりやや強い。
3層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒・ブロック（1～5cm）を多く含む。
4層　黒色土　10YR2/1　ローム粒を含む。締まり弱い。
5層　黒褐色土　10YR3/1　ローム粒を含む。締まりやや弱い。
33.70 A
A'
表土
33.50 B
B'
33.50 C
C'
33.50 D
D'

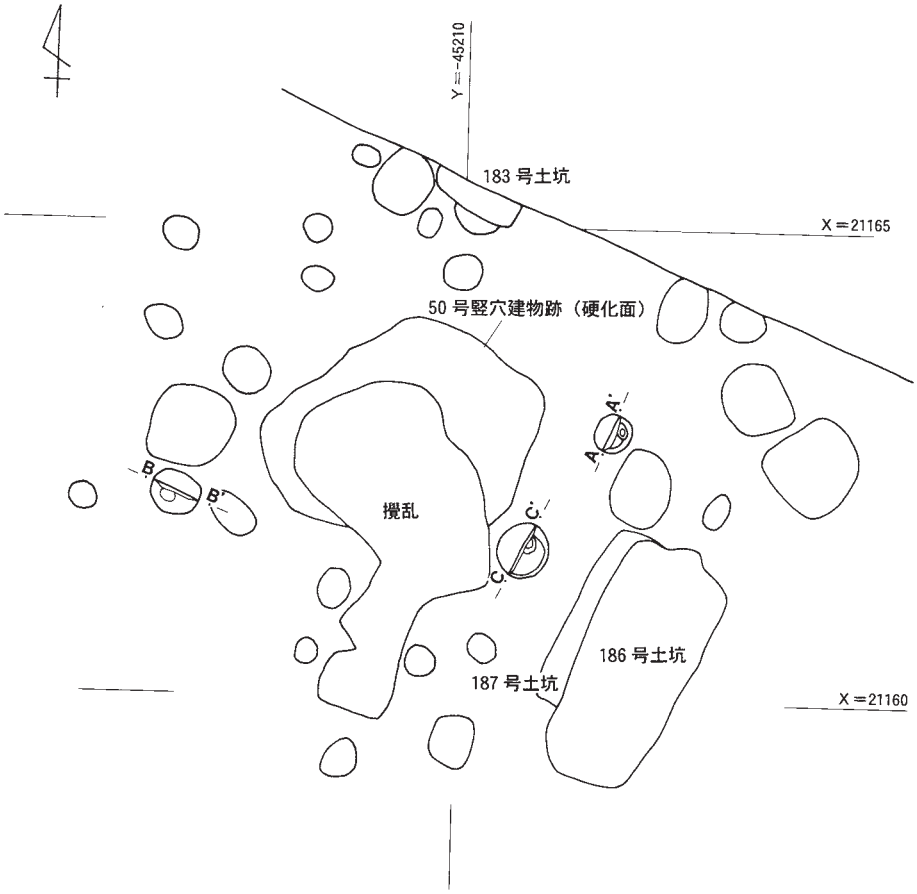
第75図　第12号溝

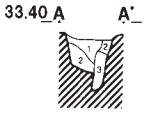




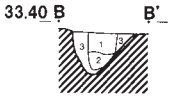
1層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒を含む。
2層　灰黄褐色土　10YR4/2　ローム粒、黄白色粘土ブロック（1～3cm）を含む。
3層　黒褐色土　10YR3/1　ローム粒を含む。
4層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒・ブロック（1～3cm）を多く含む。
5層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒を含む。炭化粒をわずかに含む。
6層　にぶい黄褐色土　10YR5/3　ローム粒・ブロック（1cm）を多く含む。締まり、粘性強い。
7層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　ローム粒を多く含む。
8層　にぶい黄褐色土　10YR5/4　ローム粒・ブロック（1cm）を多量に含む。炭化粒を少し含む。
締まり弱い。

第76図　第13号溝

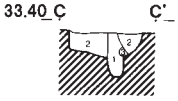




SPA
1層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒をわずかに含む。締まり弱い。
2層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒を含む。
3層　褐色土　10YR2/4　ローム粒を多く含む。締まりやや弱い。

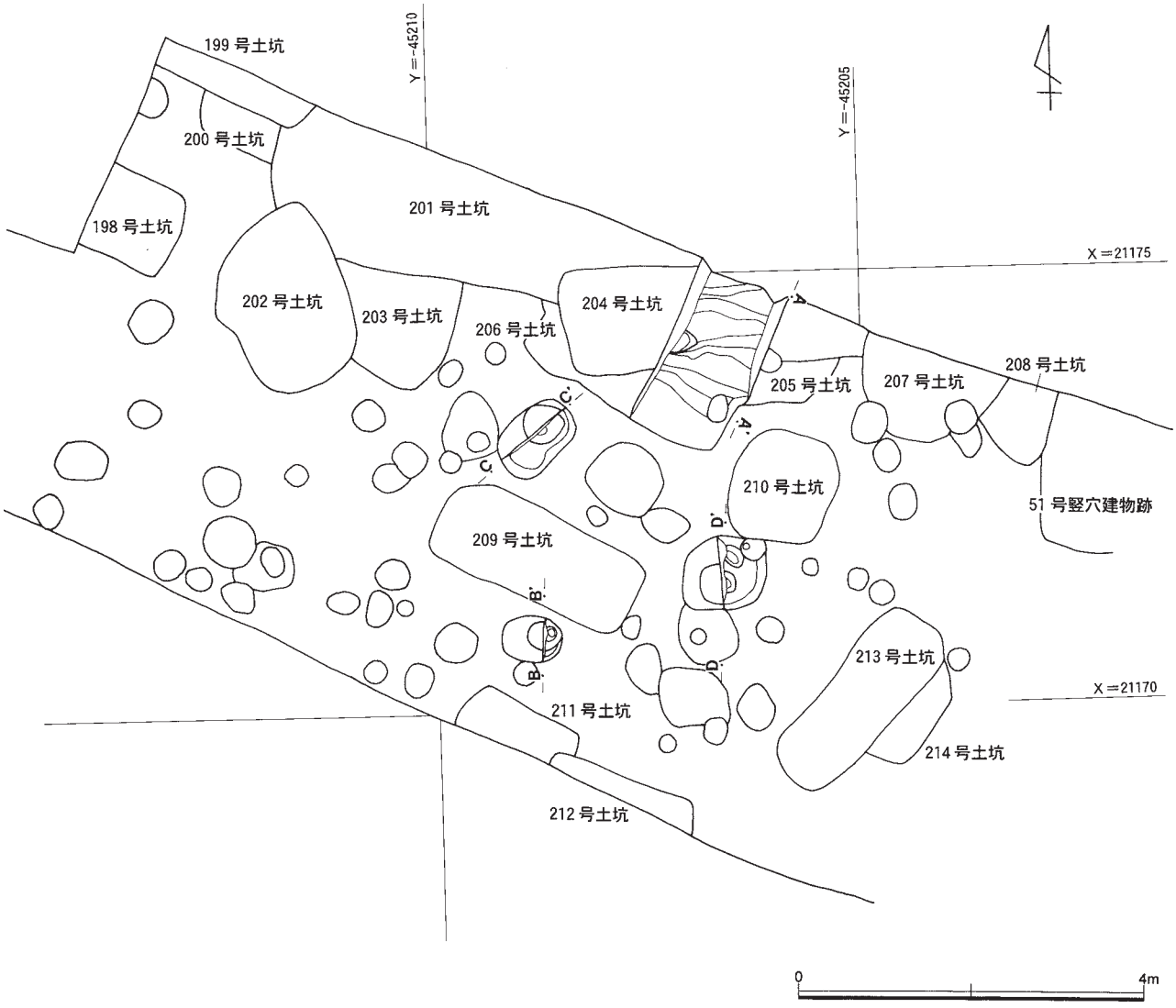


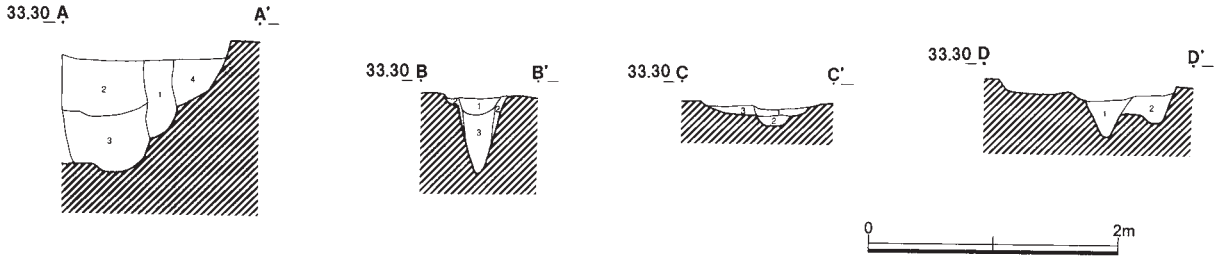
SPB
1層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒、炭化物をわずかに含む。
2層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒をやや多く含む。
3層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒をやや多く含む。



SPC
1層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒を含む。締まりやや強い。
2層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒を少し含む。締まりやや強い。
3層　明褐色土　10YR6/6　ロームブロック。

第77図　第50号竪穴建物跡周辺





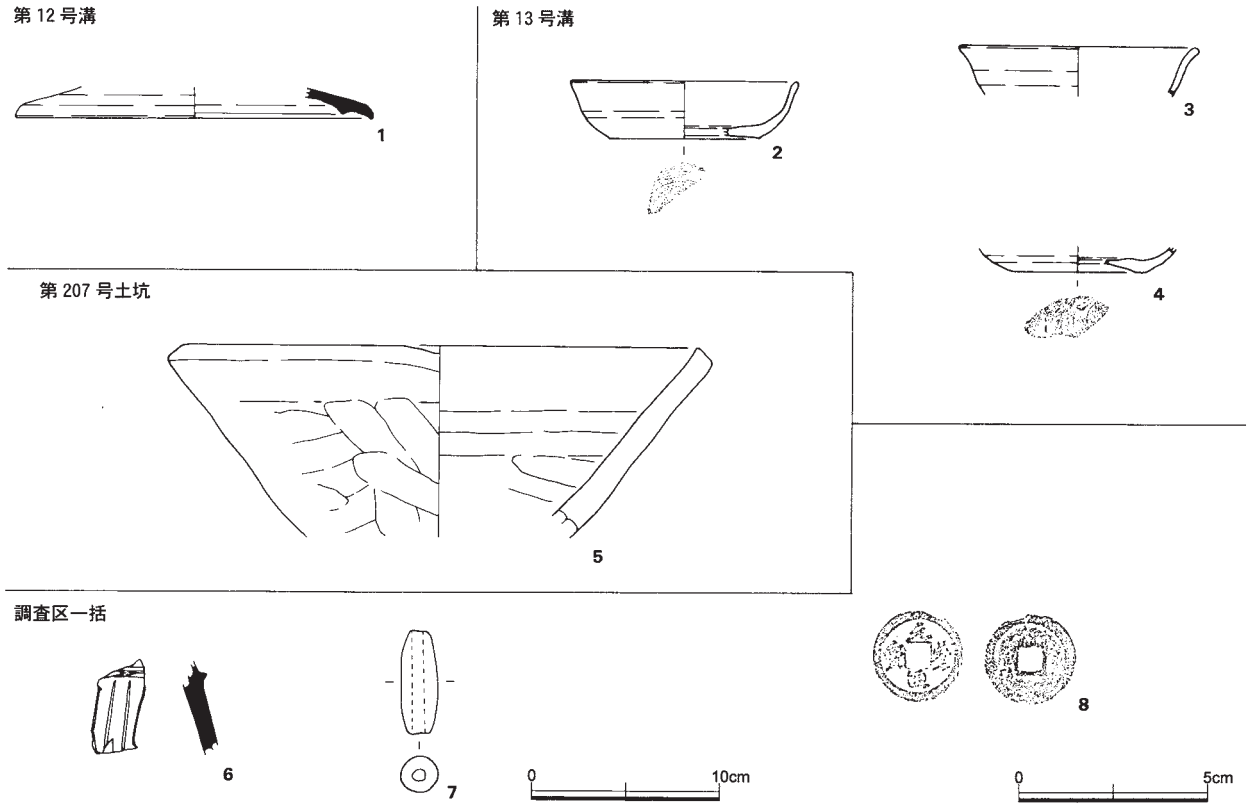
SPA
1層　黒色土　10YR2/1　ローム粒・ブロック（1～2cm）を含む。締まり弱い。
2層　灰黄褐色土　10YR4/2　ローム粒・ブロック（1cm）、焼土粒を少し含む。
3層　褐色土　10YR4/4　ローム粒・ブロック（1～2cm）を多く含む。黒色土粒を含む。
4層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　ローム粒を多く含む。

SPB
1層　黒褐色土　10YR3/2　ロームブロック（1～3cm）を多量に含む。締まり強い。
2層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒を少し含む。
3層　黒色土　10YR2/1　ローム粒を少し含む。締まりなし。

SPC
1層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒を少し含む。
2層　褐色土　10YR4/4　ローム粒を多く含む。
3層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　ローム粒をやや多く含む。

SPD
1層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒・ブロック（1～3cm）を多く含む。締まり弱い。
2層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒・ブロック（1cm）を多く含む。締まり弱い。

第78図　第７次調査区北部土坑群



第79図　第７次調査区出土遺物

番号	出土遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	第12号溝	S	蓋	(19.0)	－	－	ＡＣＨ	良	灰	10%	
2	第13号溝	R	小皿	(12.0)	3.0	(8.0)	ＡＢＣＥＨ	普	橙	20%	
3	第13号溝	R	小皿	(12.6)	－	－	ＡＢＣ	良	灰褐	10%	
4	第13号溝	R	小皿	－	－	(7.0)	ＡＢＣＤＥ	普	橙	15%	
5	第207号土坑	土師質	片口鉢	(27.6)	－	－	ＡＣＨ	良	にぶい橙	20%	
6	一括	S	円面硯	－	－	－	ＡＢＣ	良	青灰	－	
7	一括		土錘	長　5.4	幅　2.0	厚　1.9	ＡＢＣＨ	良	橙	100%	
8	一括		銭貨	長　2.44	幅　2.47	厚　0.12					「元豊通宝」

第28表　第７次調査区出土遺物観察表

d　その他の遺構・遺物

土坑43基とピットが多数確認された。土坑は長方形のものを主体として、大型の方形土坑や不整形の土坑がある。ほとんど掘り下げを行なっていないため、出土遺物はわずかだが、第207号土坑からは中世のものと思われる片口鉢が出土している。土坑の覆土は、ほとんどがローム粒・ブロックを含む灰黄褐色土に近いものであり、時期は中世主体と見られる。なお、第188号土坑は火葬墓である。

ピットは、建物跡と考えられるものは認められなかったが、一部で柱痕跡が確認された。時期は不明である。

土坑、調査区一括出土遺物で図示できたものは、第79図５～８である。

5　第16次調査

a　概要

第16次調査区はＣ－Ⅱ－197～Ｃ－Ⅱ－316グリッドに設けた。第３・５次調査で確認された正倉院（南）の西への広がりを確認する目的で、調査区を設定した。

確認された主な遺構は、溝２条と土壙７基等である。調査区周辺の標高は約34.5mで、遺構確認面までの深さは約40cmを測る。出土遺物はわずかで、コンテナ１箱に満たない程度である。

b　溝

第16号溝（第81・82図、第83図１、第29表）

調査区東部及び北トレンチを南北に縦走する。第317号土坑を切り、第27号溝、第319号土坑に切られる。幅は1.4m、確認面からの深さは40～60cmを測る。断面形は逆台形を呈する。主軸方位はＮ－14°－Ｅである。

図示できた遺物は、第83図１の瓶の口縁部である。遺構の時期は、古代末頃と思われる。

第27号溝（第81・82図、第83図２～７、第29表）

調査区ほぼ中央を東西に横走する。第16号溝、第321号土坑を切り、第319・320・322号土坑に切られる。断面形は箱矢研状を呈する。底面は平坦で、確認面からの深さは1.3m、幅は上端が約６m、下端が2.7mを測る。主軸方位は、Ｎ－70°－Ｗである。

図示できた遺物は、第83図２～７である。２、３は須恵器で、２は坏、３は甕、４～６は土錘、７は銭貨である。出土遺物に宋銭があること、覆土に浅間Ｂ軽石と思われる火山灰が含まれていたことから、遺構の時期は古代末頃と推定される。

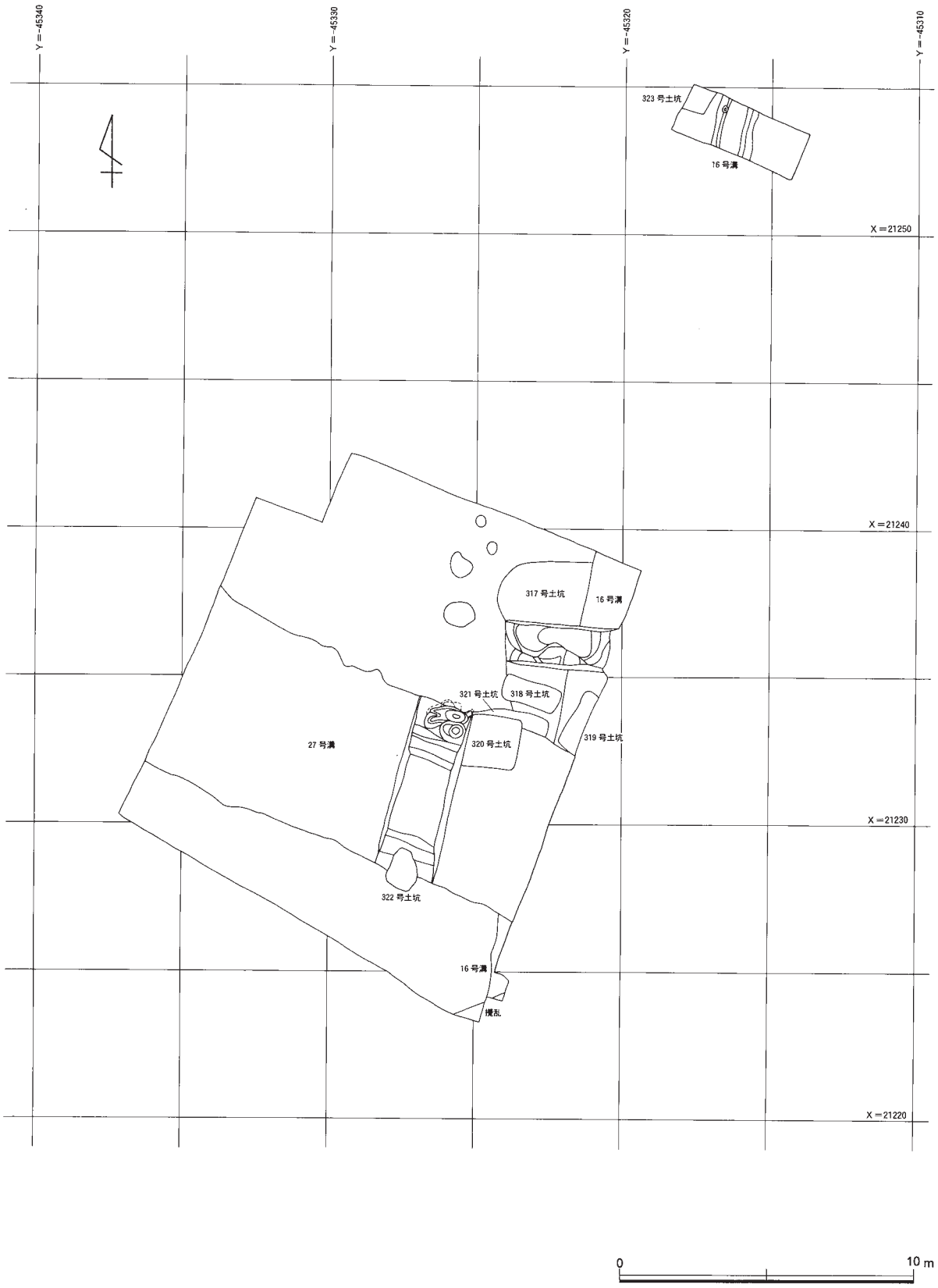
c　その他の遺構・遺物

土坑は、古代末頃～中世のものが７基確認された。第317号土坑は大型の土坑で、第16・27号溝等に切られることから、調査区内では最も古い遺構と考えられる。壁は斜めに立ち上がり、確認面からの深さは1.1mを測る。

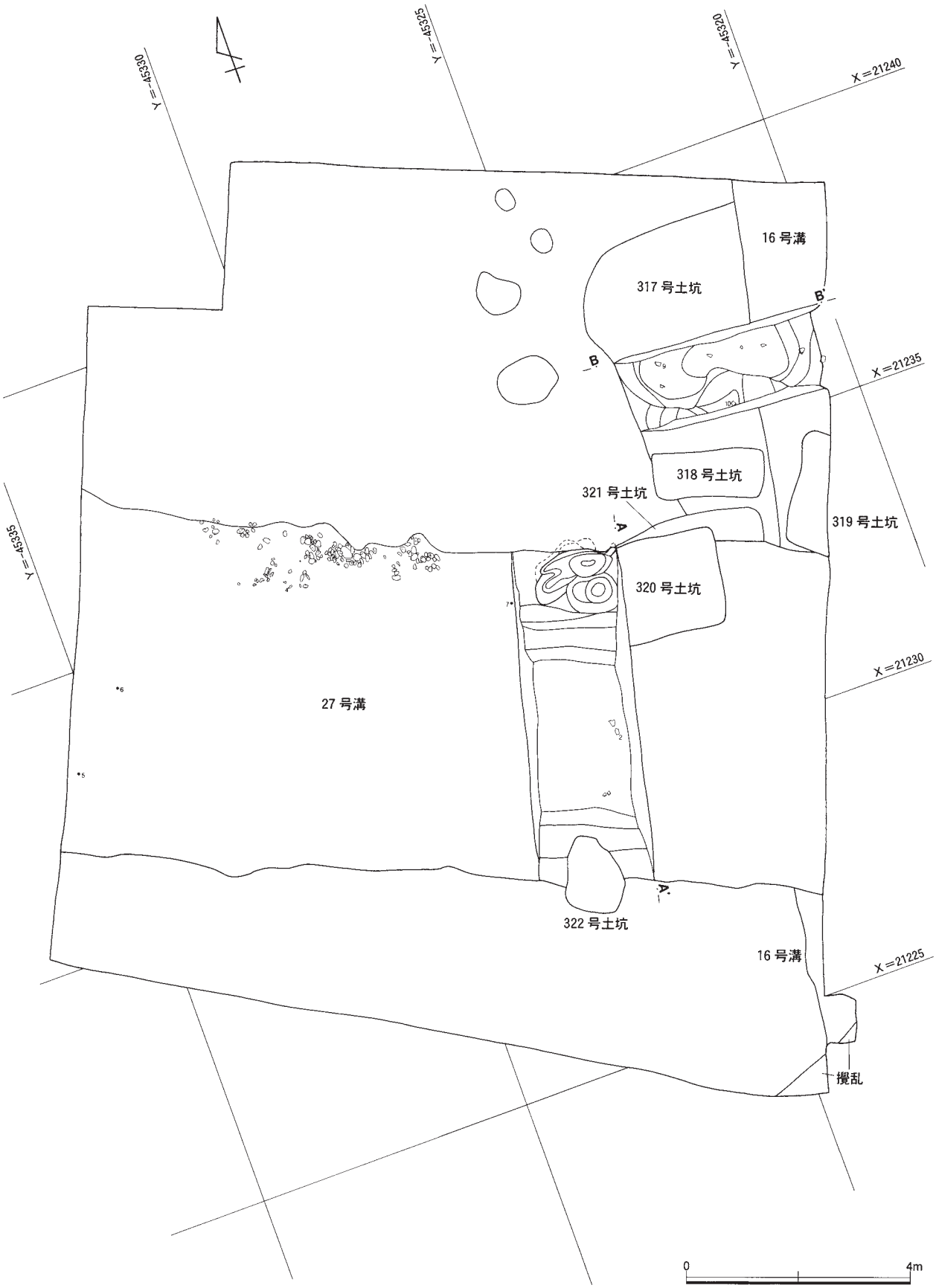
図示できた遺物は、第83図８～10である。ロクロ土師器の小皿が出土したことから、遺構の時期は、10世紀代以降と推定される。

また、調査区一括出土遺物は、第83図11、12である。

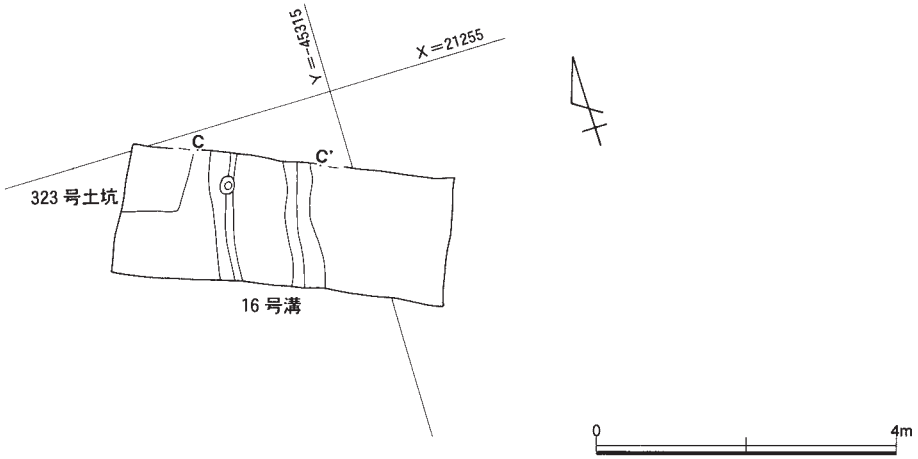
第16次調査風景

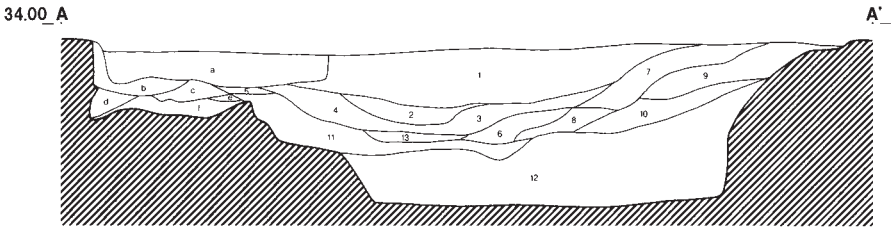


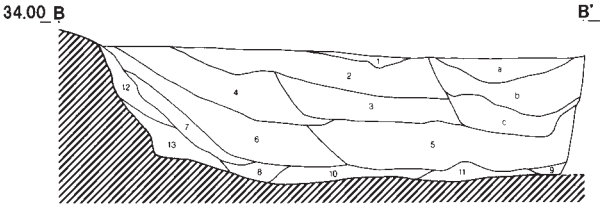
第80図　第16次調査区全体測量図

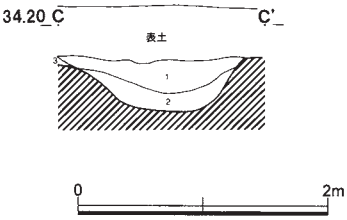


第81図　第16次調査区遺構実測図（１）









ＳＰＡ

第 27 号溝

1 層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒、焼土粒、炭化粒を少し含む。締まりやや弱い。

2 層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　ローム粒、焼土粒を含む。

3 層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒を少し含む。締まりやや弱い。

4 層　褐色土　10YR4/4　ローム粒を多く含む。

5 層　褐色土　10YR4/6　ローム粒を多く含む。

6 層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒、焼土粒、炭化粒を含む。

7 層　黒褐色土　10YR3/1　火山灰（浅間Ｂか）を多く含む。炭化粒を少し含む。

8 層　黒褐色土　10YR2/1　ローム粒、炭化粒を含む。締まりやや弱い。

9 層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　火山灰（浅間Ｂか）を少し含む。ローム粒、炭化粒を少し含む。

10 層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒、炭化粒を少し含む。

11 層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒を含む。締まりやや弱い。

12 層　褐色土　10YR4/4　ローム粒、焼土粒、炭化粒をやや多く含む。粘性あり。締まりやや強い。

13 層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　ローム粒をやや多く含む。締まりやや弱い。

第 320 号土坑

ａ層　灰黄褐色土　10YR4/2　ローム粒を含む。炭化粒を少し含む。

第 321 号土坑

ｂ層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　ローム粒を多く含む。炭化粒を含む。締まりやや弱い。

ｃ層　にぶい黄褐色土　10YR5/4　ローム粒を多量に含む。

ｄ層　黒褐色土　10YR3/1　ローム粒を含む。締まり弱い。

ｅ層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒を含む。

ｆ層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　ローム粒を多く含む。締まり弱い。

ＳＰＢ

第 317 号土坑

1 層　褐灰色土　10YR4/1　火山灰（浅間Ｂか）を多量に含む。締まり弱い。

2 層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒、焼土粒、炭化粒を含む。締まり弱い。

3 層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒、焼土粒、炭化粒を含む。締まりやや強い。

4 層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　ローム粒、焼土粒、炭化粒を含む。締まりやや強い。

5 層　褐色土　10YR4/6　ローム粒、焼土粒、炭化粒を含む。粘性あり。締まりやや強い。

6 層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒、焼土粒、炭化粒を含む。締まりやや強い。

7 層　褐色土　10YR4/4　ローム粒を多く含む。焼土粒を少し含む。締まり弱い。

8 層　褐色土　10YR4/6　ローム粒をやや多く含む。焼土粒を少し含む。締まりやや強い。

9 層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒を少し含む。締まりやや弱い。

10 層　にぶい黄褐色土　10YR5/4　ローム粒、焼土粒、炭化粒を少し含む。粘性あり。締まり強い。

11 層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　ローム粒をやや多く含む。焼土粒、炭化粒を少し含む。

12 層　黄褐色土　10YR5/6　ロームを多量に含む。締まり弱い。

13 層　黄褐色土　10YR5/8　ロームを多量に含む。締まり弱い。

第 16 号溝

ａ層　黒褐色土　10YR3/1　白色粒をわずかに含む。締まり弱い。

ｂ層　黒色土　10YR2/1　ローム粒を少し含む。締まり弱い。

ｃ層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒をやや多く含む。締まり弱い。

ＳＰＣ

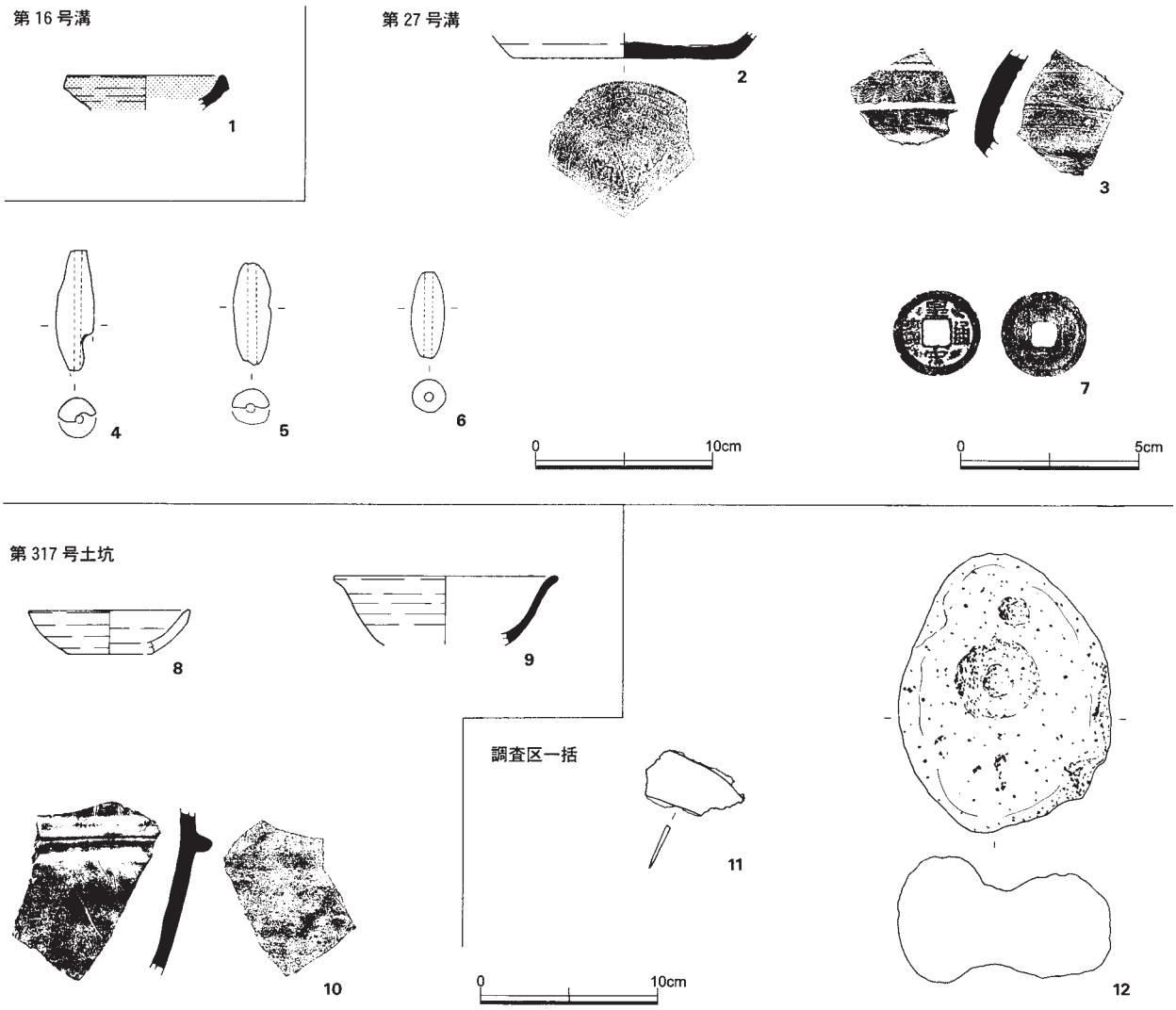
第 16 号溝

1 層　黒色土　10YR2/1　ローム粒を少し含む。締まり弱い

2 層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒をやや多く含む。締まり弱い。

3 層　褐色土　10YR4/6　漸移層。

第82図　第16次調査区遺構実測図（２）



第83図　第16次調査区出土遺物

番号	出土遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	第16号溝	S	瓶	(8.8)	－	－	A C	良	灰	－	内外面に自然釉
2	第27号溝	S	坏	－	－	(12.4)	A C G H	良	青灰	25%	
3	第27号溝	S	甕	－	－	－	A C F H	良	青灰	－	
4	第27号溝		土錘	長　－	幅　2.1	厚　－	A B C	良	灰褐	40%	
5	第27号溝		土錘	長　－	幅　2.1	厚　－	A B C	良	にぶい橙	45%	
6	第27号溝		土錘	長　4.8	幅　1.9	厚　1.8	A C E	良	暗褐	100%	
7	第27号溝		銭貨	長　2.47	幅　2.47	厚　0.11					「皇宋通宝」
8	第317土坑	R	小皿	(9.0)	(3.5)	(4.6)	A B C E I	良	橙	15%	
9	第317土坑	S	坏	(12.6)	－	－	A C F H	普	灰	25%	
10	第317土坑	S	甑	－	－	－	A C D F H	良	灰		
11	一括		鎌	長　－	幅　2.7	厚　0.3					重さ　13.78g
12	一括		凹石	長　15.6	幅　11.9	厚　7.0	石材　安山岩				

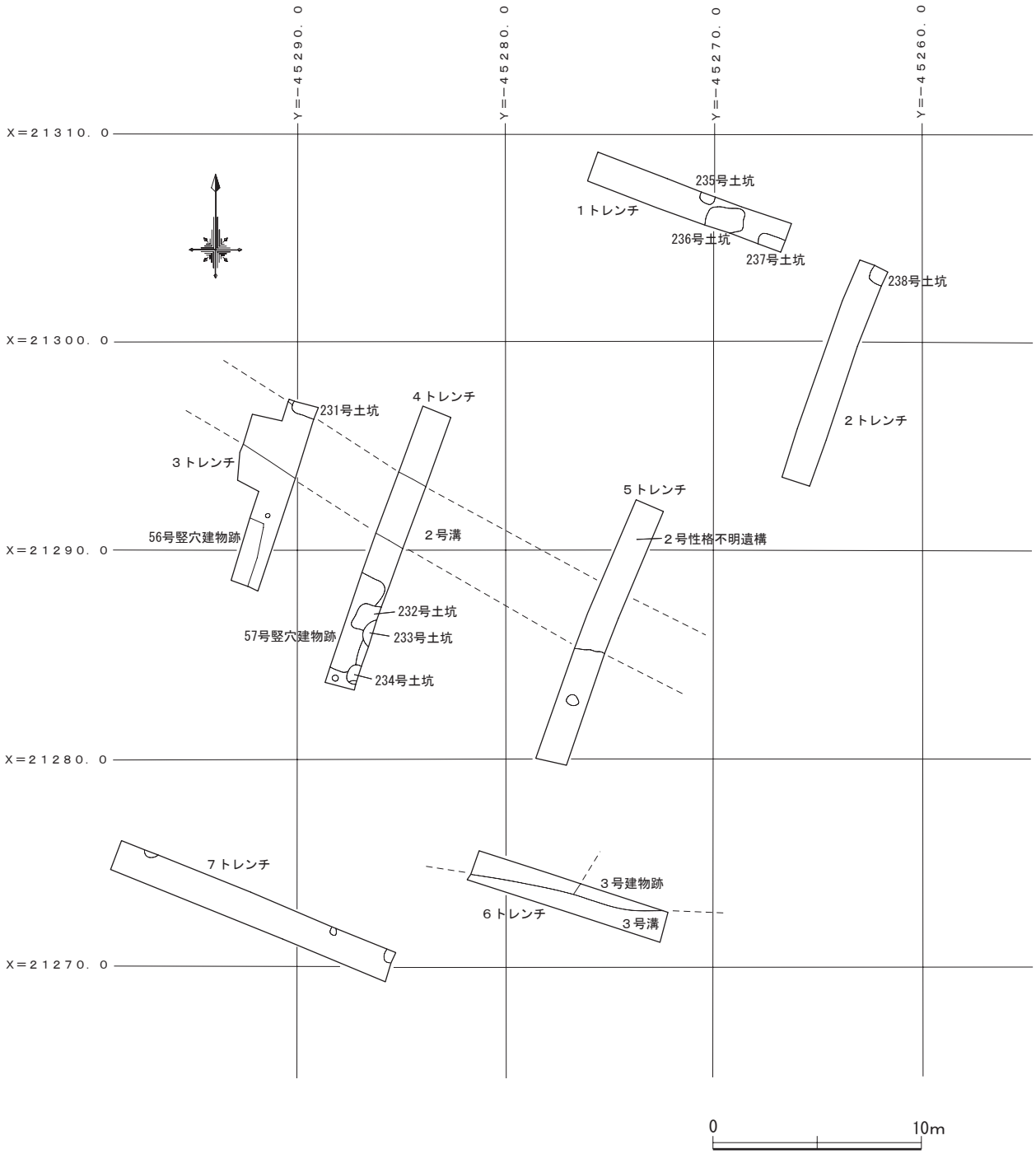
第29表　第16次調査区出土遺物観察表

6　第９～12・17次調査

正倉院区画溝の確認を目的としたトレンチ調査である。基本的に、幅約1.6mのトレンチを掘削した。出土遺物はいずれの調査区でも極めてわずかである。

a　第９次調査

第９次調査区は、Ｂ－Ⅲ－365～Ｃ－Ⅲ－106グリッドに設けた。第３・５次調査区で確認された正倉院（南）の西への広がりを確認する目的で、７本のトレンチを設定した。調査区周辺の標高は約34mで、遺構確認面



第84図　第９次調査区全体測量図

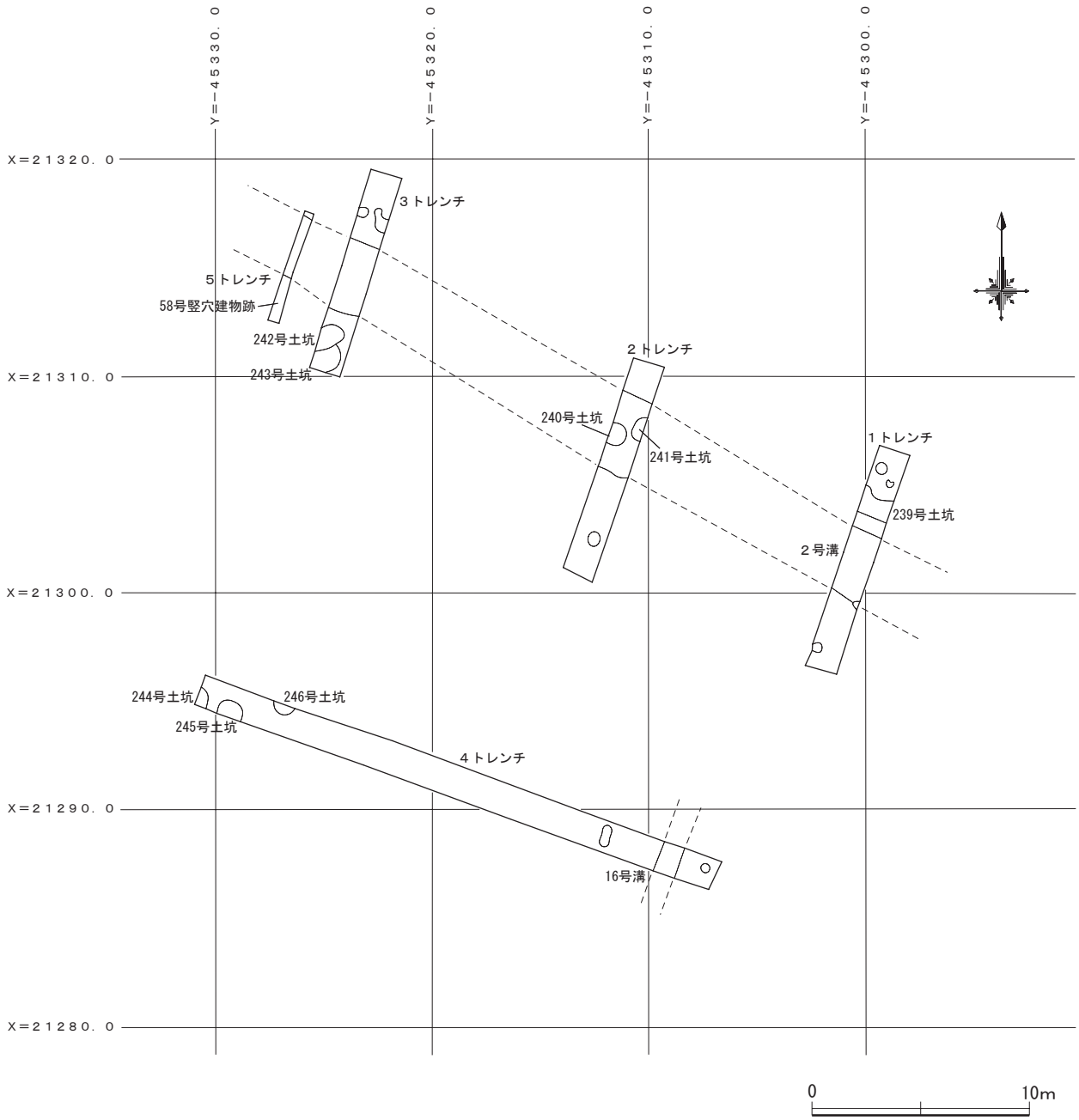
までの深さは約30 ～ 40㎝を測る。

調査の結果、正倉院（南）の北辺区画溝が更に西に延びることが明らかとなった。第２号溝の覆土は、南側にロームを多く含む。確認された他の遺構は、第３号建物跡の掘込地業と第３号溝、竪穴建物跡２棟、土坑８基である。竪穴建物跡の主軸方位は、いずれもＮ－20°－Ｅである。第５トレンチには、第２号溝と重複する遺構が存在すると見られ、第２号性格不明遺構とした。

図示できた遺物は、第89図１の須恵器甕である。第５トレンチから出土した。

b　第10次調査

第10次調査区は、Ｂ－Ⅱ－335 ～Ｃ－Ⅱ－59グリッドに設けた。第３・５次調査区で確認された正倉院（南）



第85図　第10次調査区全体測量図

の西への広がりを確認する目的で、５本のトレンチを設定した。調査区周辺の標高は約34mで、遺構確認面までの深さは約30 ～ 40㎝を測る。

調査の結果、正倉院（南）の北辺区画溝が更に西に延びることが明らかとなった。確認された他の遺構は、第16次調査区から延びる第16号溝、竪穴建物跡１棟、土坑８基である。第58号竪穴建物跡は、床面が確認面でほぼ露出しており、第２号溝に切られる。

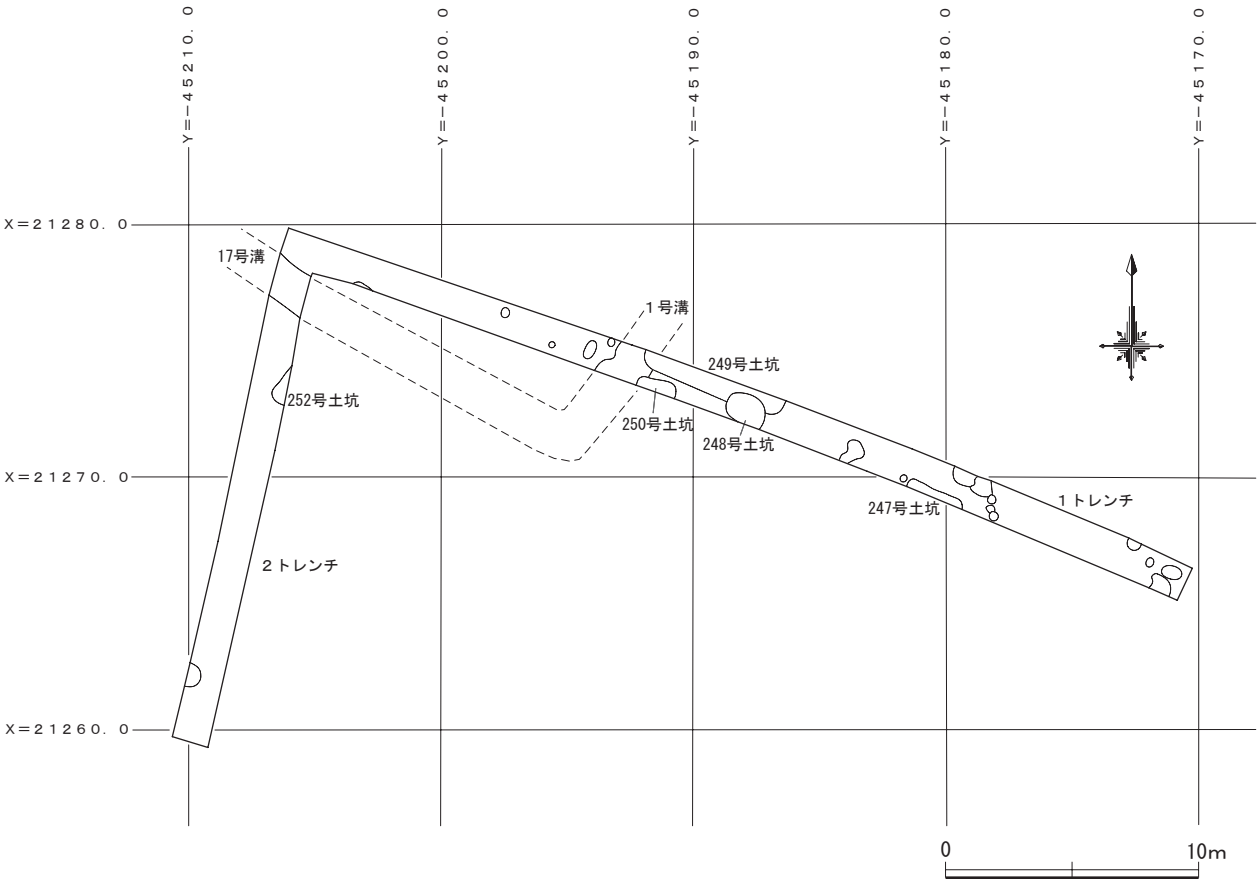
図示できた遺物は、第89図２の須恵器長頸瓶である。外面に自然釉がかかる。第58号竪穴建物跡から出土した。

c　第11次調査

第11次調査区は、Ｃ－Ⅲ－339 ～Ｃ－Ⅳ－326グリッドに設けた。第１・２次調査区で確認された正倉院（北）の南への広がりを確認する目的で、２本のトレンチを設定した。調査区周辺の標高は約34mで、遺構確認面までの深さは約30 ～ 40㎝を測る。

調査の結果、正倉院（北）の東辺区画溝の第１号溝と南辺区画溝と思われる第17号溝が確認され、正倉院（北）の南東コーナーが確認できた。第１号溝は幅約２m、ボーリングによると深さは20 ～ 50㎝と推定される。覆土にはロームブロックをやや多く含む。主軸方位はＮ－37°－Ｅである。第17号溝は、幅1.6m、ボーリングによると深さは20 ～ 50㎝と推定される。覆土にはロームブロックを少し含む。主軸方位はＮ－60°－Ｗである。確認された他の遺構は、土坑５基である。

図示できた遺物は、第89図３の円筒埴輪である。第２トレンチから出土した。



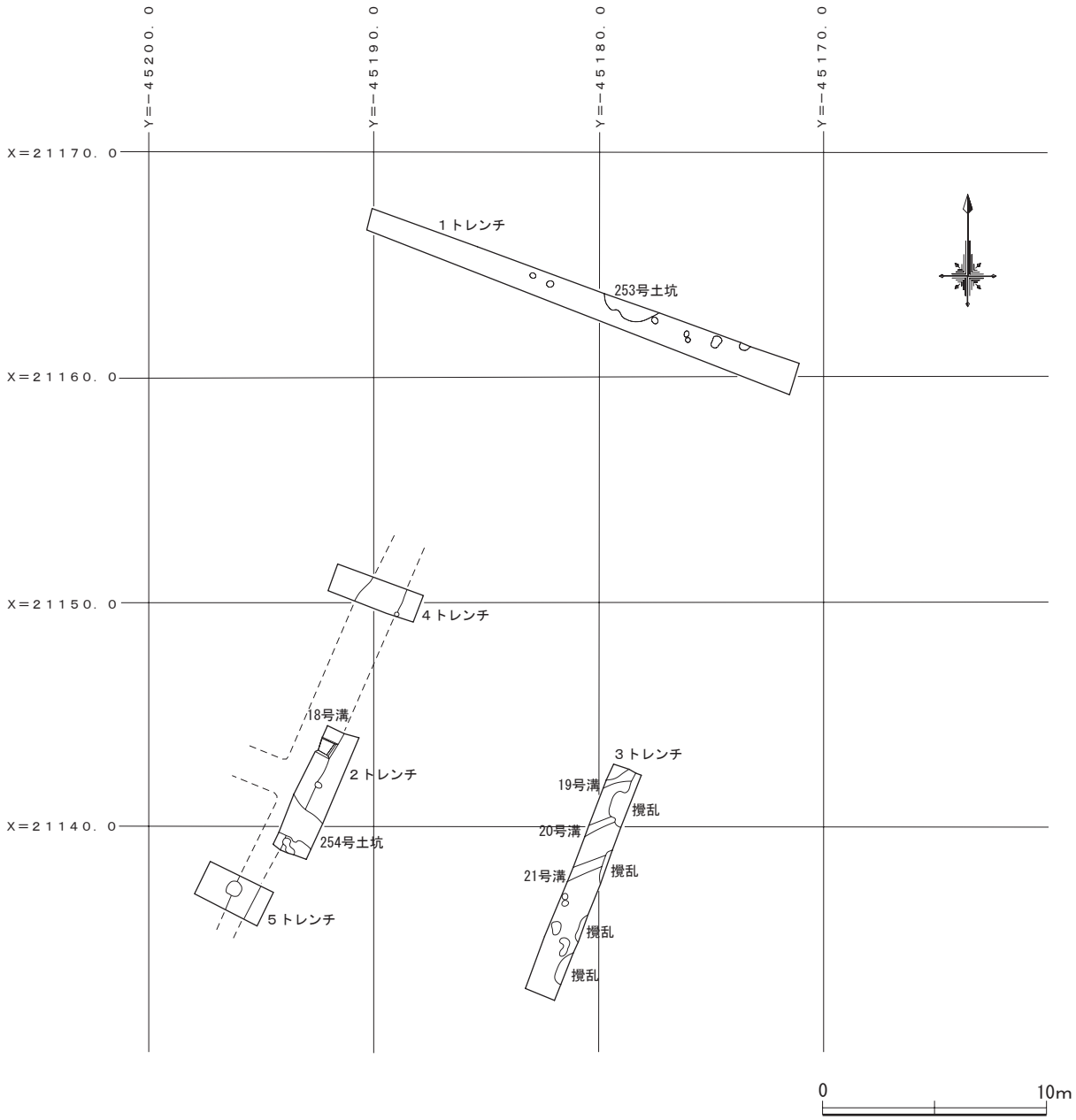
第86図　第11次調査区全体測量図

d　第12次調査

第12次調査区は、Ｄ－Ⅳ－283 ～Ｄ－Ｖ－24グリッドに設けた。第３・５次調査区で確認された正倉院(南)の東への広がりを確認する目的で、５本のトレンチを設定した。調査区周辺の標高は約34mで、遺構確認面までの深さは約30 ～ 40cmを測る。

調査の結果、正倉院（南）の東辺区画溝と見られる第18号溝が確認された。幅は0.9 ～ 1.1mを測り、覆土はローム粒・ブロックを含む黒褐色土を主体とする。主軸方位はＮ－25°－Ｅである。溝は正倉院区画のコーナーより南へも延びる。断面形は逆台形で、確認面からの深さは50cmを測る。東辺区画溝は第１トレンチでは確認されず、正倉院の東側に開放部があると思われる。確認された他の遺構は、土坑２基、溝３条である。

図示できる遺物は出土しなかった。



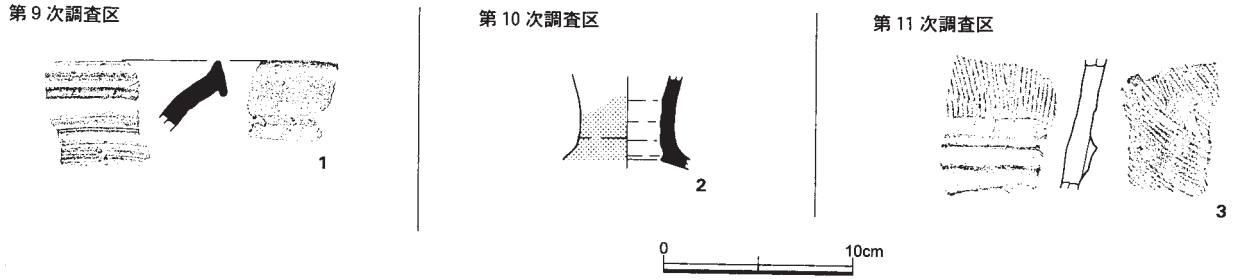
第87図　第12次調査区全体測量図

e　第17次調査

第17次調査区は、Ｂ－Ⅱ－168～Ｃ－Ⅱ－243グリッドに設けた。第３・５次調査区で確認された正倉院(南)の西への広がりを確認する目的で、６本のトレンチを設定した。調査区周辺の標高は約34mで、遺構確認面までの深さは約30cmを測る。

調査の結果、正倉院（南）の西辺区画溝と見られる第29号溝が確認された。覆土は中央部が黒褐色土、両端が暗黄褐色土である。ボーリングしたところ、約60cmの深さが推定される。溝の主軸方位はＮ－30°－Ｅである。確認された他の遺構は、第16次調査区から延びる第27号溝、他に溝１条、土坑10基である。第27号溝は、ボーリングしたところ、約90cmの深さが推定される。

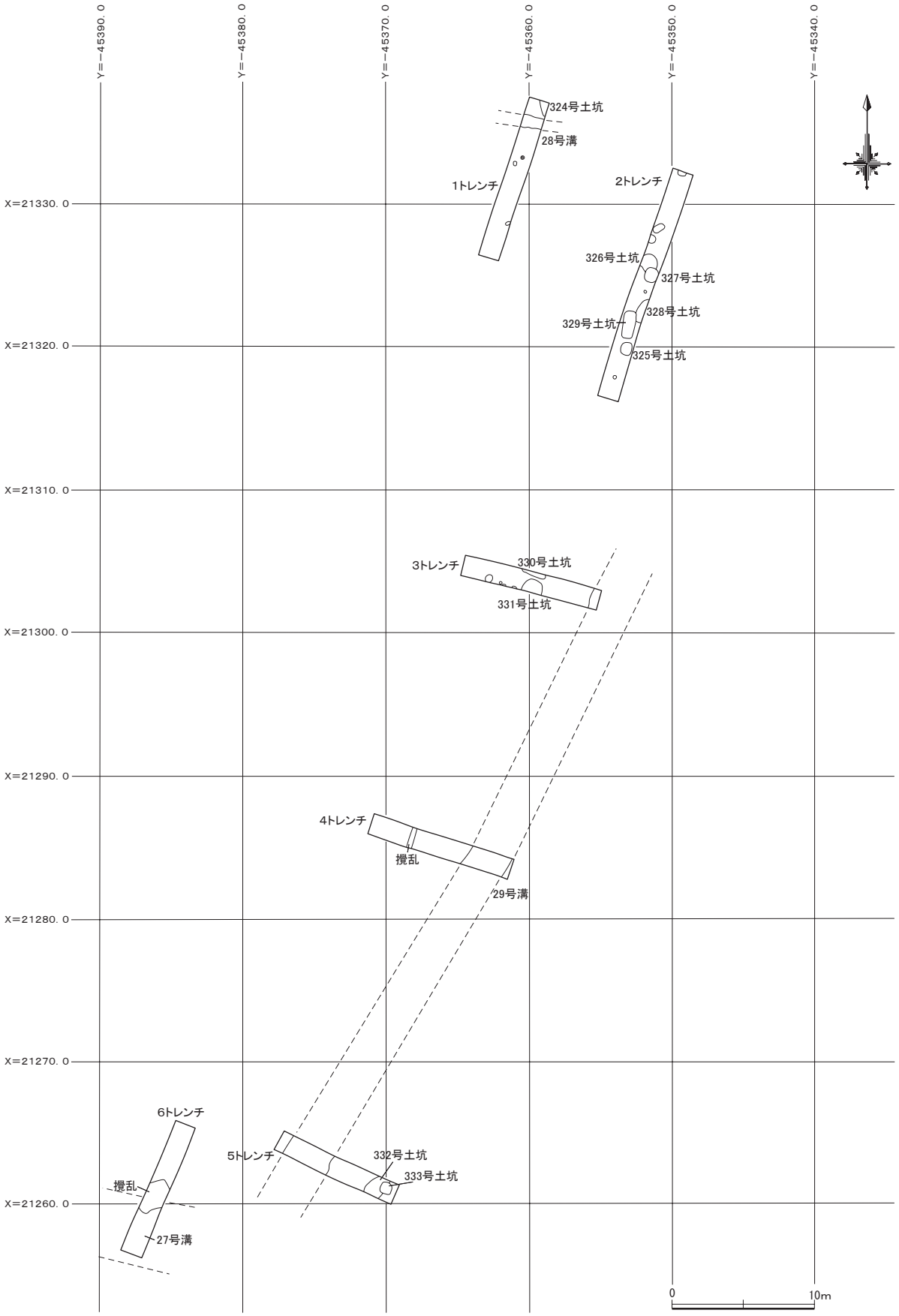
図示できる遺物は出土しなかった。



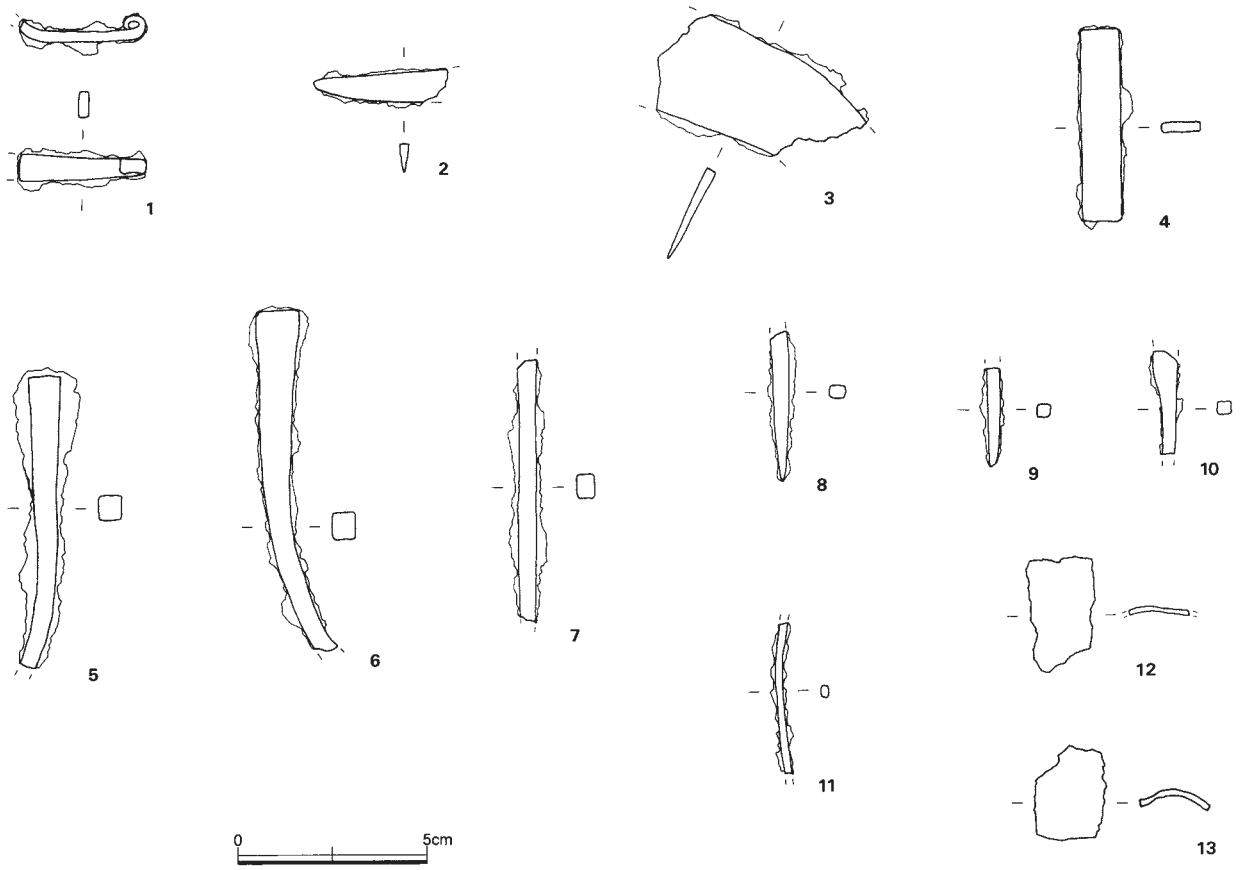
第88図　第９～11次調査区出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	S	甕	－	－	－	ＡＣＦ	良	青灰	－	
2	S	長頸瓶	－	－	－	ＡＣ	良	灰	5%	外面に自然釉
3		円筒埴輪	－	－	－	ＡＢＣＥＨ	良	橙	－	

第30表　第９～11次調査区出土遺物観察表



第89図　第17次調査区全体測量図



第90図　鉄製品集成

番号	種類	出土遺構	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号
1	不明鉄製品	第12号溝	－	0.7	0.2	2.33g	第69図　30
2	刀子	第34号竪穴建物跡	－	0.9	0.2	2.17g	第52図　23
3	鎌	第16次調査区	－	2.7	0.3	13.78g	第83図　11
4	延板状金具	第5次調査区	5.1	1.1	0.2	4.54g	第73図　24
5	釘	第35号竪穴建物跡	－	0.6	0.7	16.84g	第54図　13
6	釘	第8次調査区	－	1.2	1.2	21.85g	第73図　29
7	棒状鉄製品	第43号竪穴建物跡	－	0.5	0.7	7.54g	第59図　12
8	棒状鉄製品	第46号竪穴建物跡	－	0.4	0.4	1.80g	第60図　6
9	棒状鉄製品	第53号竪穴建物跡	－	0.3	0.3	0.91g	第65図　21
10	棒状鉄製品	第38号竪穴建物跡	－	0.4	0.4	0.99g	第59図　4
11	針金状鉄製品	第53号竪穴建物跡	－	0.1	0.3	0.87g	第65図　22
12	鉄片	第32号建物跡	3.0	1.7	0.1	1.30g	第50図　11
13	鉄片	第53号竪穴建物跡	2.5	1.8	0.1	2.24g	第65図　23

第31表　鉄製品一覧表

Ⅳ　調査のまとめ

1　はじめに

今回報告した正倉域は、幡羅遺跡の北部を占め、３万㎡以上の広い範囲に及ぶ。調査を行なったのは、その中の極わずかな面積に過ぎない。正倉域で確認された主な遺構は、既報告のものも含めて合計で、掘立柱建物跡18棟、礎石建物跡７棟、竪穴建物跡34棟、古墳跡４基、正倉院の区画溝、土坑等である。土坑は多数確認されており、大部分は中世頃のものと思われるが、一部古代の土取り穴やゴミ穴と考えられるものがある。礎石建物跡、掘立柱建物跡は、屋と考えられる１棟を除き、全てが総柱式建物跡である。

幡羅遺跡正倉域の特徴は、古墳跡や竪穴建物跡が多数存在することにより、正倉成立前及び廃絶後の様相が掴める点にある。一般的に、竪穴建物は正倉院内には存在しないと考えられ、幡羅遺跡でも正倉が成立すると、竪穴建物は正倉域から姿を消すと見られる。そのため、正倉成立前と廃絶後に竪穴建物跡が存在する場合、正倉の存続時期が明らかとなる。そこで次に、竪穴建物跡等を手掛かりとして、正倉の成立から廃絶までの変遷を辿ってみたい。

2　正倉院の変遷

a　正倉院（南）の変遷

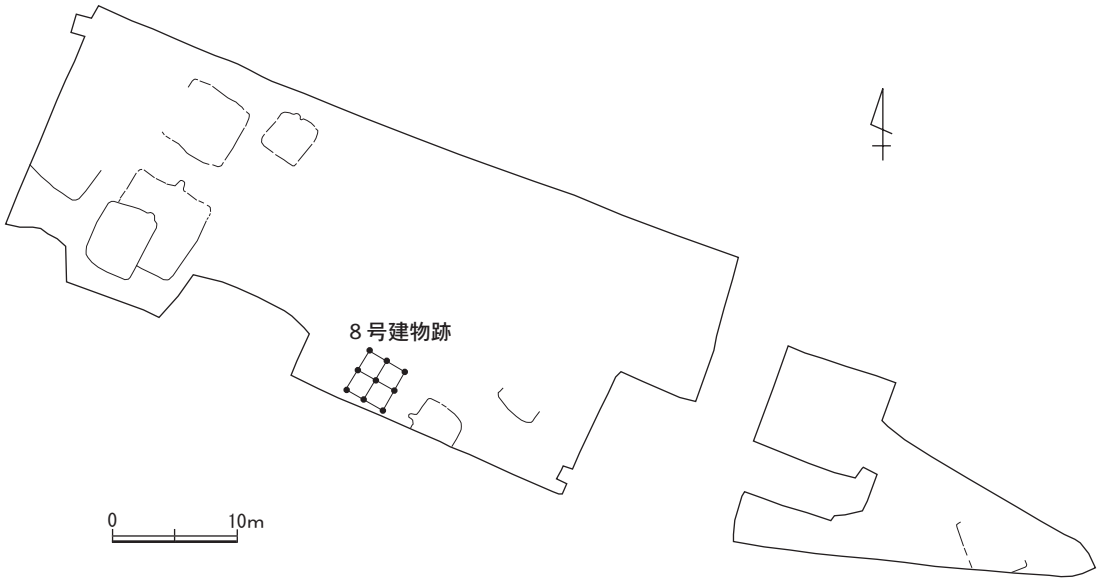
正倉院（南）には、第３・５・７～12・17次調査区が該当する。正倉跡が確認されたのは、このうち第３・５次調査区においてであるが、遺構の変遷を辿る上で第３次調査区が最も条件が良い。そのため、第３次調査区を中心に正倉院（南）の変遷について考える。

正倉跡、正倉院区画溝は、遺構の切り合い関係から、ほとんどの竪穴建物跡の後に位置付けられる。正倉跡は重複が非常に激しく、場所によっては、礎石建物の段階となる前に３回もの建て替えが認められる。掘込地業の下層を部分的にしか調査していないため、全ての建物跡を確認したとは言えない。また、東西調査区の間を走る現道及びその周辺にも建物跡が存在している可能性が高い。それらを想定しつつ、正倉跡の基礎構造や切り合い関係、主軸方位等により時期区分を行なった。正倉の増築過程は一様ではなく、御殿前遺跡のように短期間に小群が形成されたと思われるものもあるが（中島2000）、そのような例は少なく、各小群間全体にまたがって増築が進んでいくケースもある（山中他2004）。そのため、建物の存続を考えると、ここで区分したような時期を越えて存続するものがあることも想定される。必ずしも実態をそのまま表している訳ではないが、考古学的に捉え得る時期区分として表したい。その結果、正倉は成立から廃絶まで６段階に区分できる。以下、各時期ごとに述べていく。

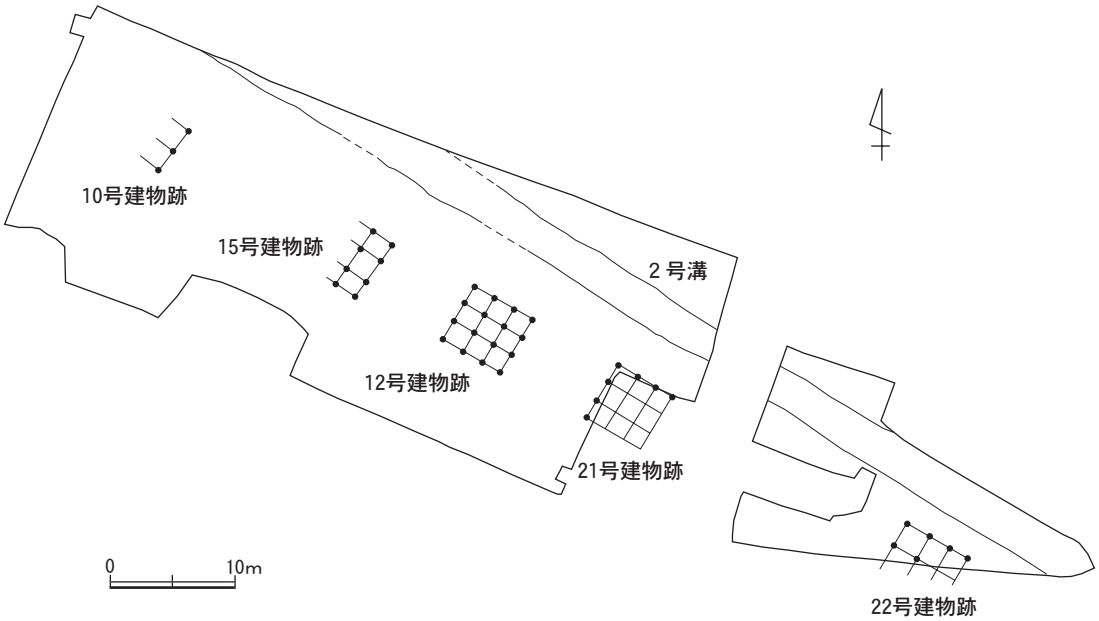
プレ正倉Ⅰ期（第91図）

正倉成立の前段階である。正倉域で確認される遺構は、古墳跡と竪穴建物跡がある。古墳跡は台地の縁辺部分に分布が限られ、これまで確認されているものは５～６世紀代のものである。また、竪穴建物跡は７世紀後半に出現し、それ以前のものは認められない。従って、竪穴建物跡を始めとする遺構が出現する７世紀後半まで遺跡地周辺は墓域として認識されていたものと考えられる。プレ正倉Ⅰ期は、竪穴建物跡等が現れる７世紀後半とする。

この時期には竪穴建物跡が主体であるが、掘立柱建物跡も認められる。第８号建物跡は２×２間、床面積約12㎡と後段階の正倉跡に比べ一段と小規模であり、他の正倉群と棟を揃えていない点が他と異なる。こうした小規模な倉庫跡は、深谷市熊野遺跡でも確認されており、その幾つかは７世紀後半のものと推定され、中宿遺跡（榛沢郡正倉跡）成立前に位置付けられる（鳥羽他2002他）。こうしたことから、第８号建物跡についても、正倉が造営される以前、竪穴建物群と併存す

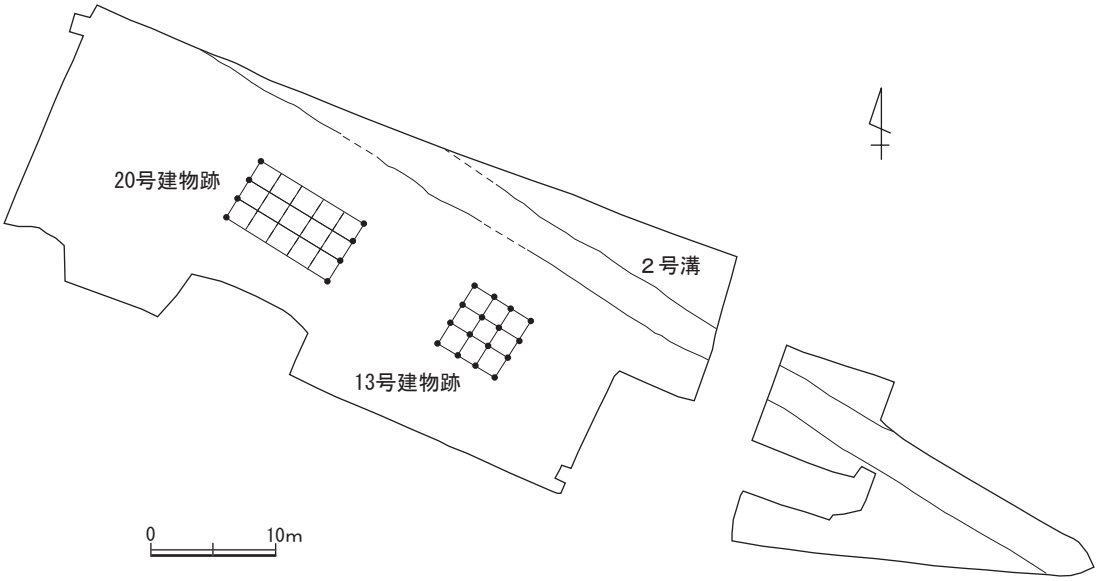


プレ正倉Ⅰ期

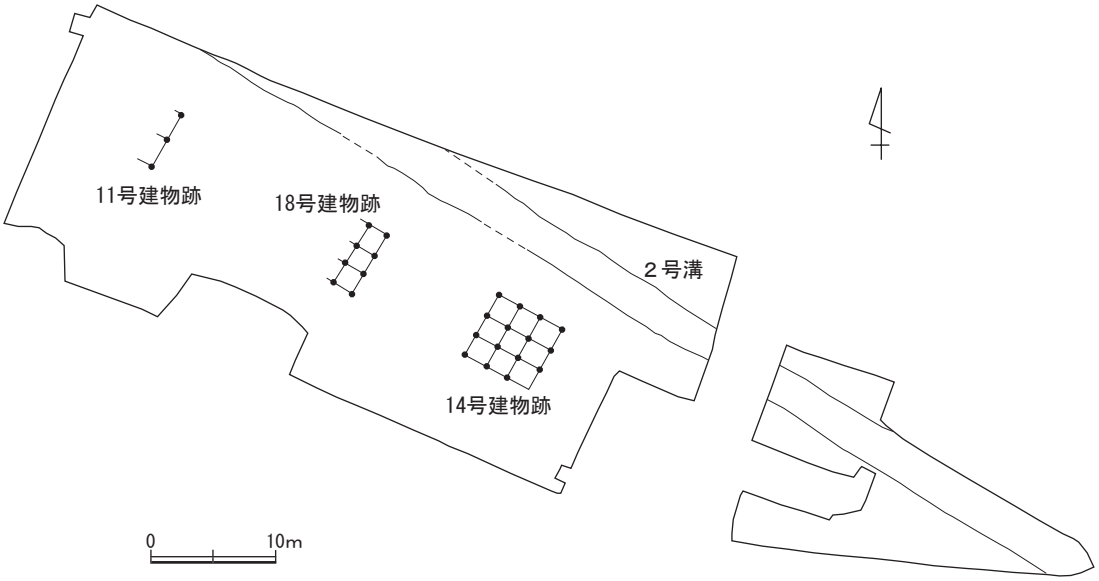


正倉Ⅰ期

第91図　正倉院の変遷（1）



正倉Ⅱ期



正倉Ⅲ期

第92図　正倉院の変遷（２）

るものである可能性が高いと思われる。

正倉Ⅰ期（第91図）

正倉成立期である。正倉跡は５棟確認されており、全て掘立柱建物跡である。規模が明らかなものはほとんど無いが、いずれも柱間は小さく、比較的小規模な建物と思われる。柱掘方は第10号建物跡を除き、布掘り又は二柱穴一体の掘方である。正倉院（南）の北辺区画溝である第２号溝は、掘削時期は明らかではないが、正倉造営と共に掘削された可能性が考えられる。

正倉Ⅱ期（第92図）

正倉跡は２棟確認されており、全て掘立柱建物跡である。第20号建物跡は中央部が掘込地業下層にあるため未確認であり、東西両端のみ確認している。当初、両端の柱列を別々の建物跡と考えたが、柱穴の配列、主軸方位、及び建物の変遷を考慮し、桁行のやや長い１棟の建物跡という結論に達した。桁行は距離から５間程度と推定される。２棟の建物跡は、Ⅰ期より若干建物の規模が拡大しているものと推定される。また、検出されている棟数は２棟と少ないが、第20号建物跡の西にある掘込地業の下層及び第13号建物跡東の未調査部分に建物跡が存在している可能性がある。

正倉Ⅲ期（第92図）

正倉跡は３棟確認されており、全て掘立柱建物跡である。規模が明らかなものは第14号建物跡のみであり、直接切り合う第12・13号建物跡より床面積が幾分広い。また、第14号建物跡は柱掘方が大きいという特徴がある。なお、第14号建物跡東の未調査部分に建物跡が存在している可能性がある。

正倉Ⅳ期（第93図）

正倉跡は２棟確認されており、全て掘立柱建物跡である。他時期の建物跡に比べ、５～７度北に振れているのがこの時期の特徴である。２棟共桁行が不明であるため、規模は確定できない。なお、第17号建物跡東の未調査部分に建物跡が存在している可能性がある。

正倉Ⅴ期（第93図）

正倉跡は４棟確認された。全て掘込地業を伴う礎石建物跡である。推定される規模はいずれも50㎡前後と、第３次調査区におけるそれまでのものに比べ大規模なものである。柱間も７～９尺と広い。第３号建物跡は、桁行５間、床面積約90㎡と幡羅遺跡内でこれまでに確認されている正倉跡の中で最も大きく、基礎地業にも円丘状盛土地業に類する工法が用いられている。

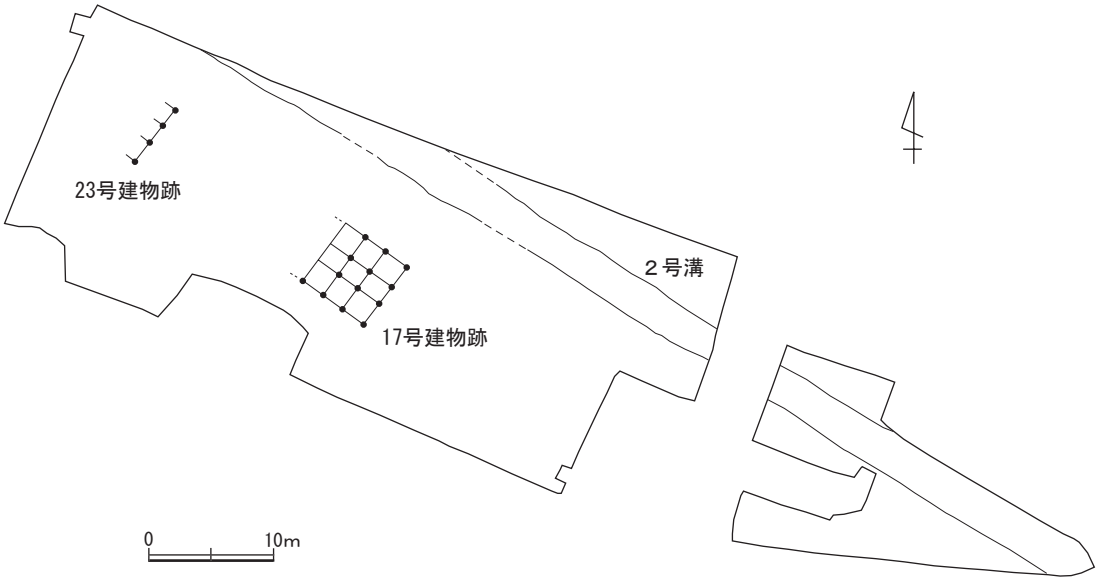
第５次調査区の掘込地業を伴う第32号建物跡も、この時期に属すると思われる。正倉院（南）の南部に位置し、南辺区画溝を切って構築されるため、この段階には少なくとも区画溝の一部が埋没していることが分かる。また、第３・32号建物跡周辺からは炭化米が多量に出土し、この時期の正倉の一部は火災により焼失したものと考えられる。

正倉Ⅵ期（第94図）

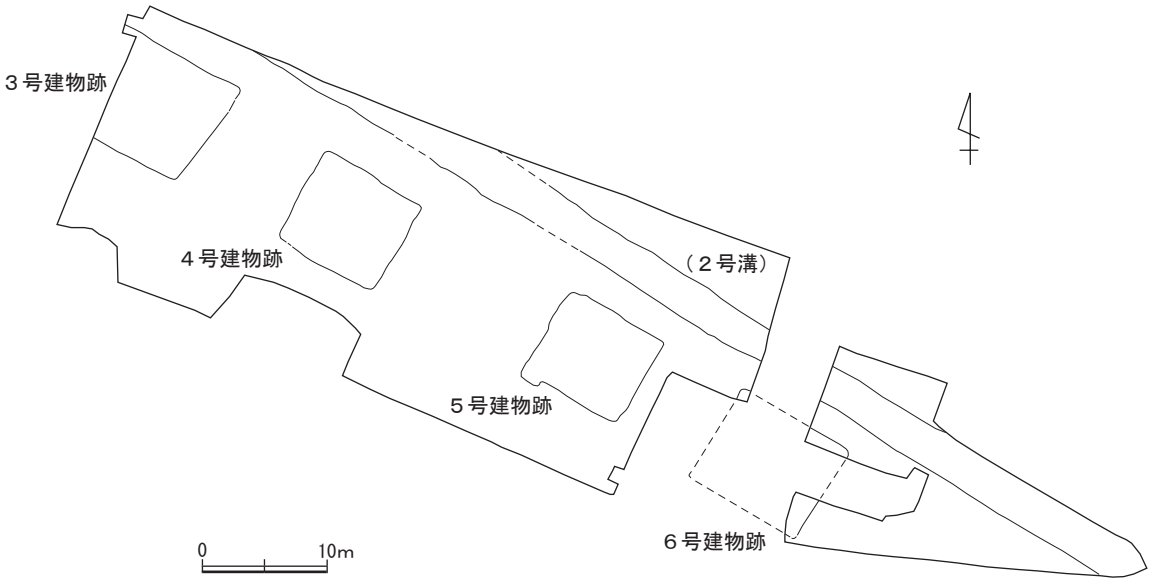
正倉の最終段階である。全て掘立柱建物跡で、総柱式建物跡２棟、屋と考えられる側柱式建物跡１棟が確認された。いずれも掘込地業と重複せず、礎石建物の跡地を避けるように建てられていると推定される。第19号建物跡の柱抜き取り穴上部から、ほぼ完形のロクロ土師器坏が１点出土しており、この時期の終末が推定できる。

正倉の年代観

正倉の年代観については、周辺に分布する竪穴建物跡の遺物が参考となる（第97～99図）。正倉成立前の竪穴建物跡は、７世紀後半～末頃のものである。これらは遺跡そのものの成立時期と正倉の成立時期を示していると考えられる。第６号竪穴建物跡出土遺物（第97図１～17）は、組成に皿を含まず、模倣坏と有段口縁坏を主体としており、７世紀後半のものである。幡羅遺跡成立期頃のものと推定される。比較的新しいと思われる７世紀末頃のものは、第34・39・46・52号

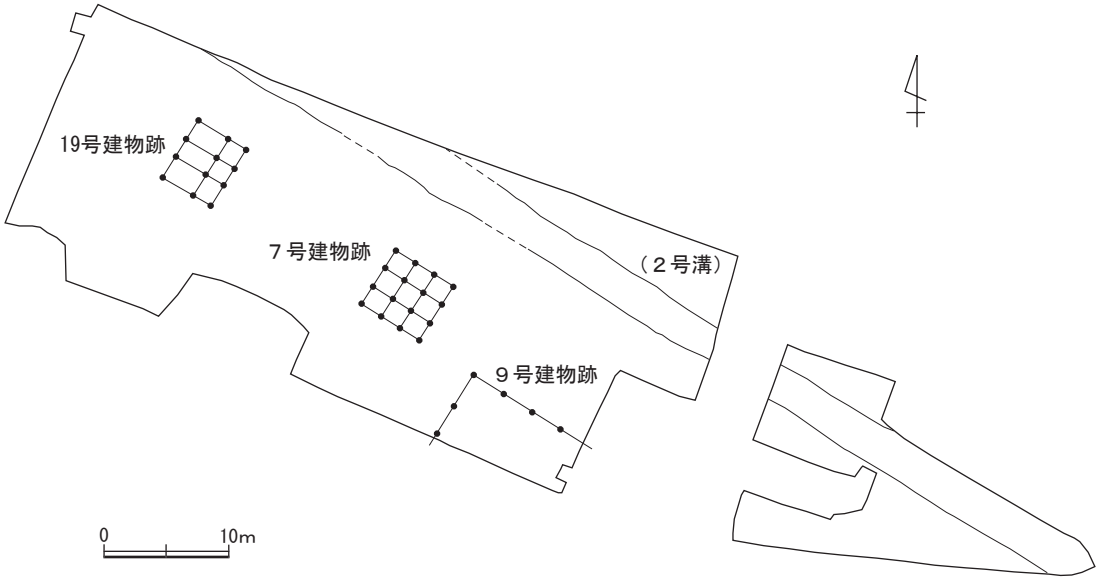


正倉Ⅳ期



正倉Ⅴ期

第93図　正倉院の変遷（３）



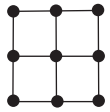
正倉Ⅵ期

第94図　正倉院の変遷（４）

時期	遺構	桁　　行	桁行柱間	梁　行	梁行柱間	床面積	主軸方位
プレ正倉Ⅰ期	第８号建物跡	２間（3.6m）	1.8m	２間（3.3m）	1.65m	11.88㎡	N－30°－E
正倉Ⅰ期	第10号建物跡			２間（3.9m）	1.95m		N－52°－W
	第15号建物跡		1.8m	３間（5.1m）	2.1m、1.5m		N－58°－W
	第12号建物跡	３間（5.4m）	1.8m	３間（4.95m）	1.65m	26.73㎡	N－60°－W
	第21号建物跡	３間以上（5.4m以上）	1.8m	３間（4.95m）	1.65m	26.73㎡以上	N－60°－W
	第22号建物跡	３間（5.85m）	1.95m		1.95m		N－62°－W
正倉Ⅱ期	第20号建物跡	５間程度（9.7m）	1.94m程度	３間（5.4m）	1.8m	52.38㎡	N－60°－W
	第13号建物跡	３間（5.4m）	1.8m	３間（5.4m）	1.8m	29.16㎡	N－57°－W
正倉Ⅲ期	第11号建物跡			２間（4.8m）	2.4m		N－63°－W
	第18号建物跡		1.8m	３間（5.4m）	1.8m		N－60°－W
	第14号建物跡	３間（5.85m）	1.95m	３間（5.4m）	1.8m	31.59㎡	N－60°－W
正倉Ⅳ期	第23号建物跡			３間（4.95m）	16.5m		N－55°－W
	第17号建物跡	３間以上（5.85m以上）	1.95m	３間（5.85m）	1.65m、2.1m	34.22㎡以上	N－53°－W
	第１ａ号建物跡	３間（8.1m）	2.7m	３間（7.2m）	2.4m	58.32㎡	N－40°－E
	第２ａ号建物跡	３間（8.1m）	2.7m	３間（7.2m）	2.4m	58.32㎡	N－40°－E
正倉Ⅴ期	第３号建物跡	５間（13.4m）	2.7m	３間（6.75m）	2.25m	90.45㎡	N－60°－W
	第４号建物跡	３間（7.65m）	2.55m	３間（6.75m）	2.25m	51.64㎡	N－60°－W
	第５号建物跡	３間程度（7.2m程度）	2.4m程度	３間程度（6.3m程度）	2.1m程度	45.36㎡程度	N－60°－W
	第６号建物跡	３間程度（7.65m程度）	2.55m程度	３間程度（6.75m程度）	2.25m程度	51.64㎡程度	N－60°－W
	第１ｂ号建物跡	３間（8.1m）	2.7m	３間（7.2m）	2.4m	58.32㎡	N－40°－E
	第２ｂ号建物跡	３間（8.1m）	2.7m	３間（7.2m）	2.4m	58.32㎡	N－40°－E
	第32号建物跡	４間程度					N－60°－W
正倉Ⅵ期	第19号建物跡	３間（5.4m）	1.8m	２間（4.5m）	2.7m、1.8m	24.3㎡	N－31°－E
	第７号建物跡	３間（5.4m）	1.8m	３間（4.95m）	1.65m	26.73㎡	N－59°－W
	第９号建物跡	４間以上（10.8m以上）	2.7m	３間程度（8.1m程度）	2.7m	87.48㎡以上	N－59°－W

第32表　正倉域における建物跡一覧表

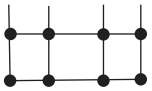
プレ正倉Ⅰ期



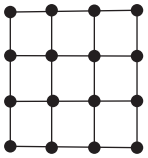
第８号建物跡

正倉Ⅰ期

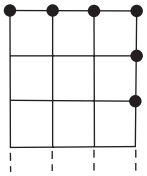
第10号建物跡



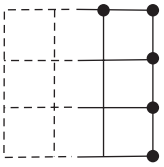
第15号建物跡



第12号建物跡

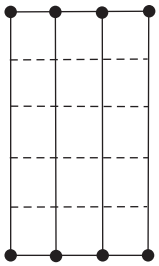


第21号建物跡

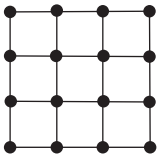


第22号建物跡

正倉Ⅱ期



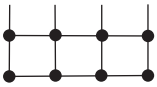
第20号建物跡



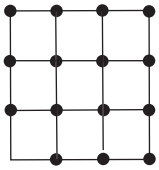
第13号建物跡

正倉Ⅲ期

第11号建物跡



第18号建物跡

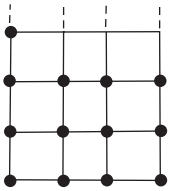


第14号建物跡

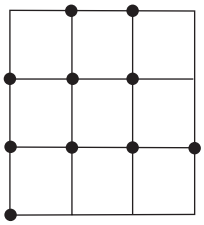
第95図　倉庫建物の変遷（１）

正倉Ⅳ期

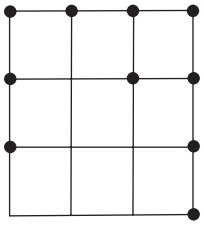
第23号建物跡



第17号建物跡

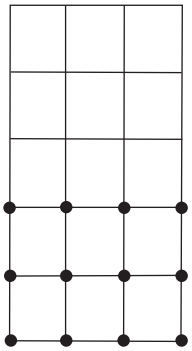


第１ａ号建物跡

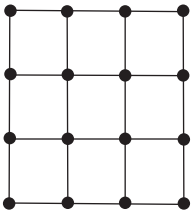


第２ａ号建物跡

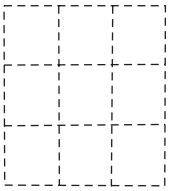
正倉Ⅴ期



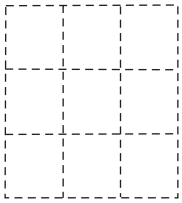
第３号建物跡



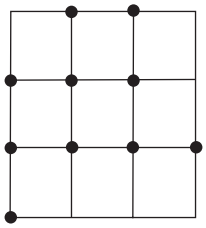
第４号建物跡



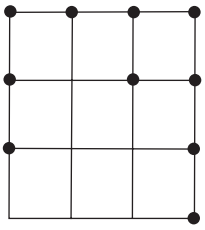
第５号建物跡



第６号建物跡

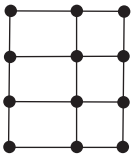


第１ｂ号建物跡

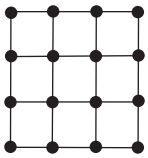


第２ｂ号建物跡

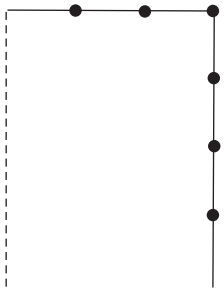
正倉Ⅵ期



第19号建物跡



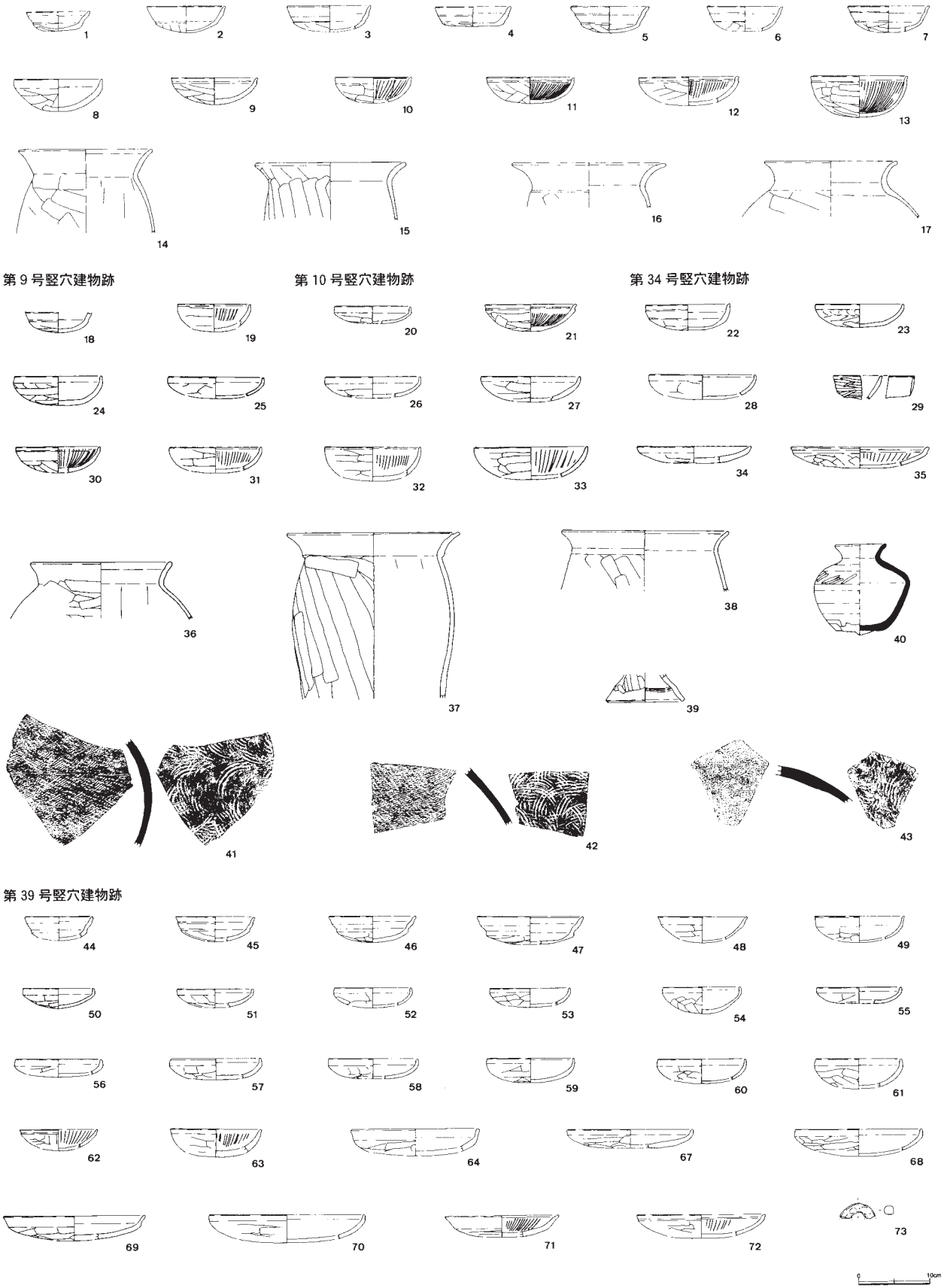
第７号建物跡



第９号建物跡

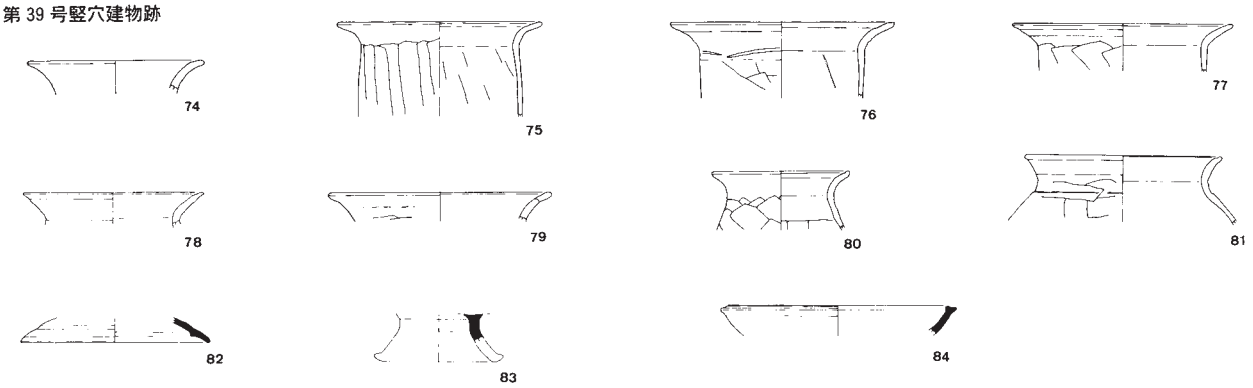
第96図　倉庫建物の変遷（２）

第 6 号竪穴建物跡

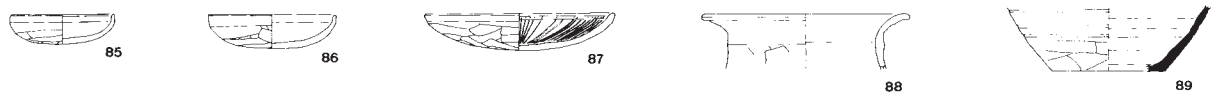


第97図　正倉成立前の土器（1）

第 39 号竪穴建物跡



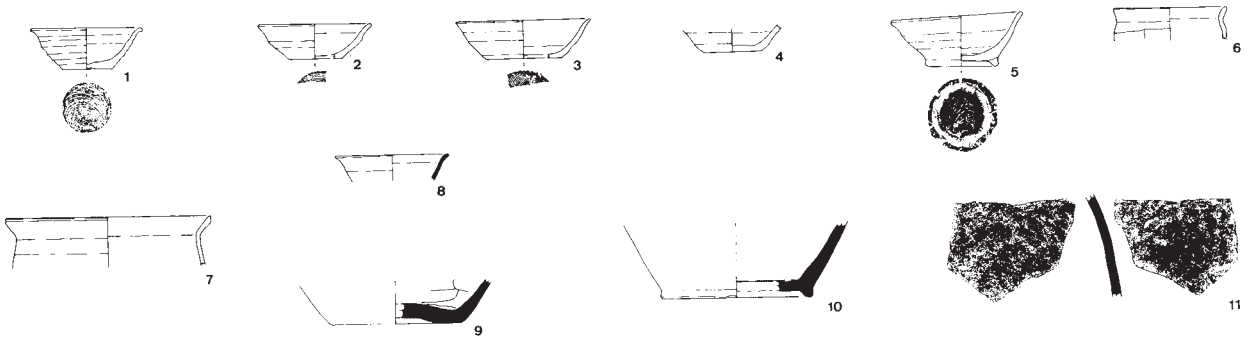
第 46 号竪穴建物跡



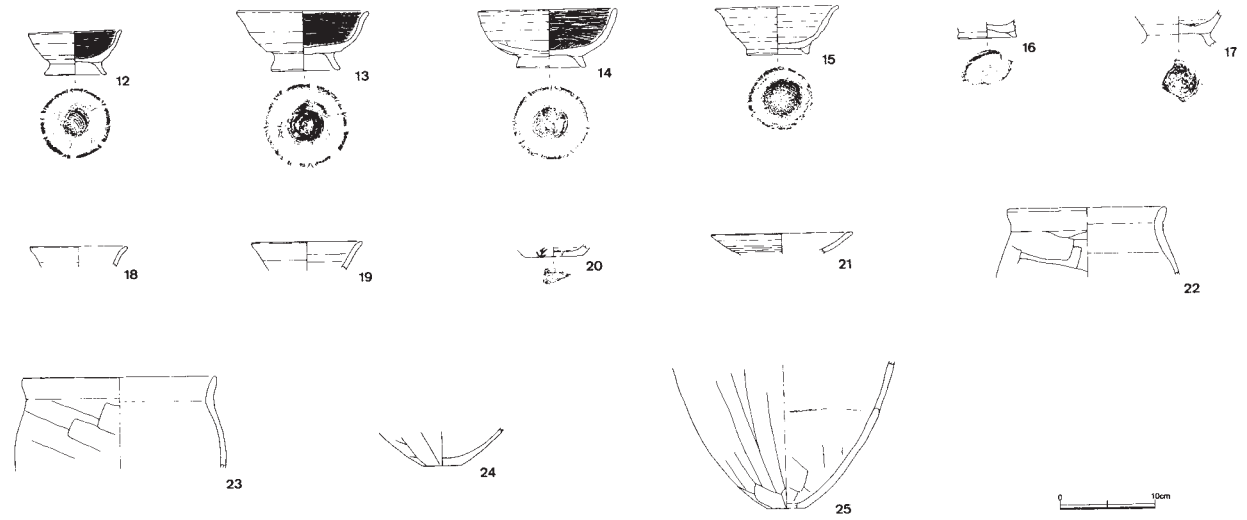
第 52 号竪穴建物跡

第98図　正倉成立前の土器（２）

第 19 号建物跡　　第 35 号竪穴建物跡



第 4 号竪穴建物跡



第99図　正倉の廃絶を示す土器

建物等（第97図18～第98図93）がある。このうち第46号竪穴建物跡は正倉院（南）の南辺区画溝に切られており、正倉院はそれ以降の成立とできる。また、第９号竪穴建物跡は出土遺物及び埋没状況から、７世紀末頃のものと推定される。覆土にはロームが多量に含まれており、埋め戻された状況を示している。出土遺物は極めて少なく、正倉造営に際して埋め戻されたことを髣髴とさせる。こうしたことや、正倉域に８世紀の竪穴建物跡が皆無であることから、正倉の成立は７世紀末頃と推定される。

次に廃絶時期については、正倉Ⅵ期に属する第19号建物跡出土のロクロ土師器坏（第99図１）が参考になる。この土器は10世紀前半～中頃のものと思われ、抜き取り穴の上部から出土していることから、建物の廃絶時期を示す可能性がある。また、第５次調査区の第35号竪穴建物跡は、10世紀前半～中頃の遺物が出土している（第99図２～11）。正倉院の外に位置するが、周辺は正倉が機能している段階には竪穴建物が存在しておらず、空閑地であったと思われる。この場所に再び竪穴建物が進出することは、正倉が廃絶したことを示唆する。第４号竪穴建物跡は、確実に正倉が廃絶した後のものであり、出土遺物から10世紀後半と考えられる（第99図12～25）。これらのことから、正倉は10世紀前半～中頃に廃絶し、10世紀後半には正倉院跡の中にも集落が進出することが分かる。

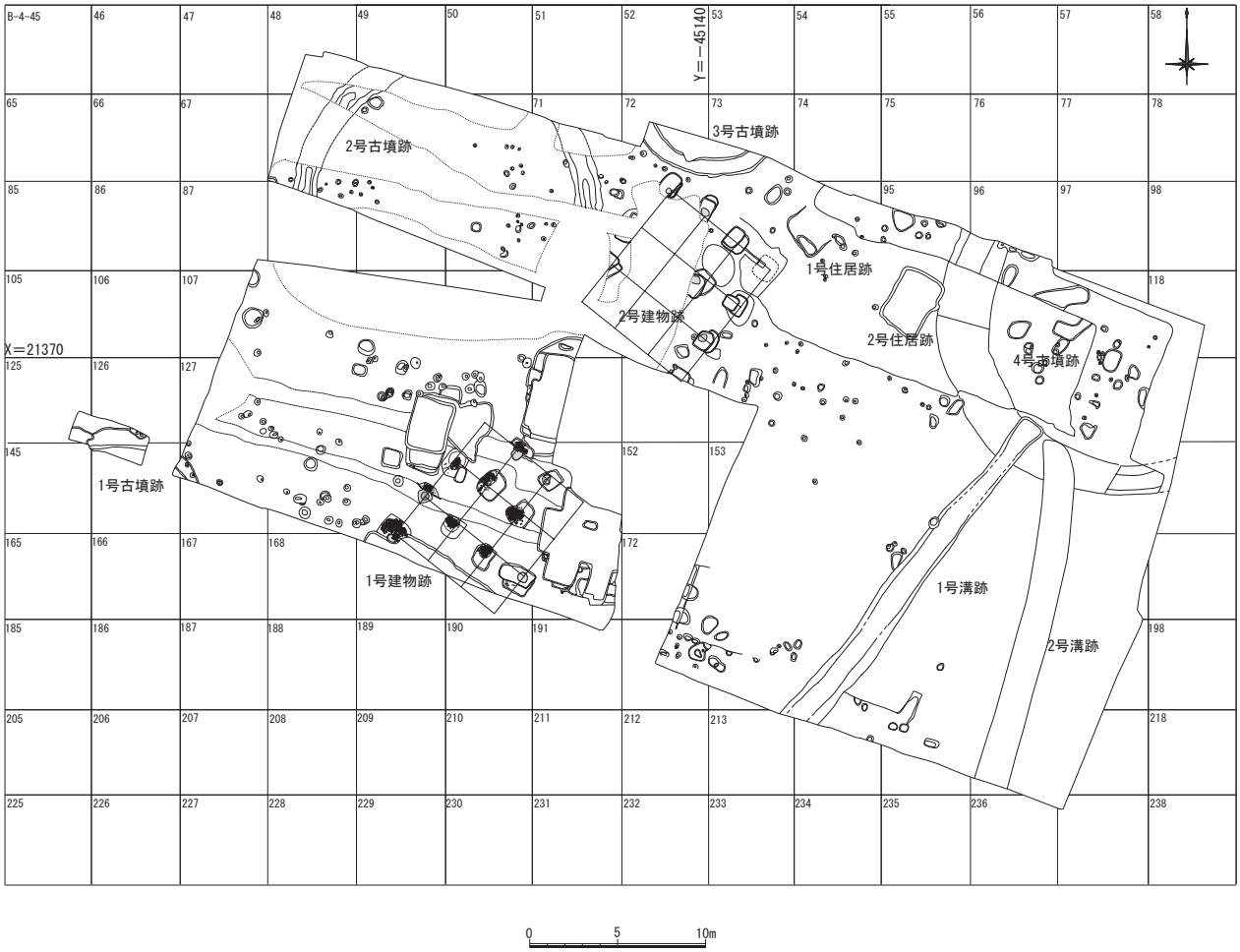
正倉は７世紀末頃に成立し、10世紀前半～中頃に廃絶したと考えられるが、その間の変遷についても触れたい。正倉の性格から伴う遺物は少なく、その時期を特定するのは難しいが、想定される時間幅の中で推定したい。基準となり得るのは、礎石建物の成立段階である。根岸遺跡等のように７世紀末～８世紀初頭頃という早い段階に、正倉に礎石建物が採用される例も中にはあるが、一般的に、礎石建物が倉に占める割合が増すのは、８世紀後半以降と考えられる（山中1994他）。幡羅遺跡の場合、礎石建物化する正倉Ⅴ期の前に、正倉の変遷が４時期考えられる。正倉Ⅴ期を比較的早い段階に設定した場合、それ以前の時間幅が極めて小さくなり不自然であるため、８世紀末頃以降と考えたい。そして根拠に乏しいものの、正倉Ⅰ期を７世紀末～８世紀初頭、正倉Ⅱ期を８世紀前葉、正倉Ⅲ期を８世紀中葉、正倉Ⅳ期を８世紀後葉と推定する。正倉Ⅴ期は比較的長い存続期間が想定される。その中で正倉火災に見舞われたものもあったはずであり、今回行なった放射性炭素年代測定で、９世紀初頭～９世紀後半の可能性が最も高いという結果が得られたことが参考となる（付編２）。最終段階の正倉Ⅵ期は、９世紀後半或いは９世紀末～10世紀前半或いは10世紀中頃と推定される。

ｂ　正倉院（北）の変遷

既報告の第１・２次調査区（第100図）は、正倉院（北）の北東部に当たると思われる。いずれも３×３間、床面積約58㎡の２棟の建物跡が柱筋を揃えて、建物１棟分の間隔を空けて建ち並ぶ状況が確認されている。いずれも同じ位置で、掘立柱建物から壷地業を伴う礎石建物へと建て替えられている。また、建物跡から南東に15m（約50尺）離れた位置に正倉院（北）の東辺区画溝が掘削されている。

正倉院（北）で確認された第１・２号建物跡は、掘立柱建物の重複が無い点が、正倉院（南）の正倉群と異なる。また、主軸方位はＮ－40°－Ｅであり、正倉院（南）の大部分がとるＮ－60°－Ｗとは直交しない。この点を考慮し、正倉院（南）との対比を行なうと、正倉院（南）で主軸方位が直角に近くなる正倉Ⅳ期に、正倉院（北）の掘立柱建物跡（第１ａ・２ａ号建物跡）が該当する可能性が高い。礎石建物への建て替えが同時期に行なわれたと仮定すると矛盾しない。但し、正倉院（北）の礎石建物跡は２棟共壷地業、正倉院（南）の礎石建物跡は５棟全て掘込地業と基礎地業が異なっており、注意する必要がある。

次に、正倉院（北）の位置付けについては、正倉Ⅳ期に成立、つまり増設された正倉院とする見方もできる。しかし、未調査部分が多いため、今後の調査で正



第100図　第１・２次調査区全体測量図

倉院（南）と同時成立が確認される可能性もある。現在のところは、北東隅の建物は正倉Ⅳ期に建てられた点、そして正倉院（北）もその時期に成立した可能性がある点を指摘するに止める。

3　正倉院の範囲

これまで述べてきた通り、正倉院は南北２箇所確認されている（第101図）。正倉院（北）は第１・２・11次調査、及び幡羅遺跡が確認される以前に行なわれた下郷遺跡第１次調査（未報告）で調査されている。第２次調査区は台地縁辺部に位置しており、正倉域がそれ以上北に延びる可能性は少ない。調査区北東隅には古墳跡があり、区画溝は墳丘部分で止まることから、正倉が存在していた段階では、墳丘は残っていたものと思われる。

正倉院（北）北西隅部と思われる周辺は、下郷遺跡第１次調査として行なわれた。ここからは２基の古墳跡や３棟の竪穴建物跡、溝等が確認されている。竪穴建物跡は２基のうち西側古墳跡の墳丘裾に構築され、いずれも10世紀後半～11世紀代のものである。また、溝は幅約２ｍの大きなもので、東側古墳跡の墳丘裾に沿って東に曲がる状況であった。溝の覆土には、10世紀後半～11世紀代の遺物が含まれており、この頃までは墳丘が残っていた可能性が高い。更に西にある森吉古墳は、現在でも墳丘が一部残っている。正倉院（北）は、これら古墳の分布・遺存状況から、下郷遺跡第１次調査区より西へは広がらない可能性が高い。一部墳丘の裾に沿って確認された溝は、断面形態や時期が正倉院区画溝のものとは異なる。しかし、規模は大きく、

第101図　正倉院の範囲

正倉院（北）西辺区画溝があったであろう位置に存在する。掘り直されて後々まで利用されていたことも考え得るため、現在のところ、正倉院（北）西辺区画溝の可能性を考えておきたい。

そうした仮定の上に立つと、正倉院（北）は南北約135m、東西約80mの規模となる。正倉造営段階では、北東及び北西隅にある古墳の墳丘を残しているため、造営に際して基準とした可能性も考えられる。

次に正倉院（南）は、第３・５・７～12・17次調査で調査されている。第３次調査区で北辺区画溝、第５・７次調査区で南辺区画溝が確認され、その後トレンチ調査で正倉院の範囲を確認していった。その結果、第17次調査区で西辺区画溝、第12次調査区で東辺区画溝を確認した。東辺区画溝は一部で開放する箇所が認められ、入口と考えられる。また、南東隅では、更に南に溝が延びる。正倉院（南）の範囲は、南北約90m、東西約220mを測る。

しかし、南辺区画溝は掘込地業によって切られているため、少なくとも南辺区画溝は正倉Ｖ期には機能していないことが明らかである。更に南に区画が広がっている可能性を考えたが、区画施設跡は確認されなかった。また、南辺区画溝を切る第32号建物跡は南側に土坑を伴っており、入り口は北側に向けていると考えられる。南辺区画溝が機能している段階においても、その近辺に建てられる建物は正倉院の中央、即ち北側に入り口を設けていたと思われる。第32号建物跡においてもその状況は変わっておらず、南辺区画溝は埋没しているものの、正倉院（南）の敷地は溝で囲まれていた範囲と大きく変わっていない可能性が高い。

４　おわりに

今回の報告では、既報告分を除く正倉域について述べてきた。これまでの調査で、正倉院の規模や変遷について明らかとなった点は多い。しかし、全体規模に比べて、調査された部分はわずかな面積に過ぎず、加えて保存目的の調査という制限がある。そのため、未確定の部分もあるが、それらは今後の調査課題である。時期変遷についても、今回は正倉域に限定して行なったが、今後他区域の整理を行い、改めて遺跡全体の変遷と、その中での正倉の位置付けについて考えていきたい。

発掘調査から報告書の刊行を行なうにあたり、埼玉県発掘調査評価・指導委員会の須田勉氏、山中敏史氏、佐藤信氏、大橋泰夫氏、小林三郎氏（故人）には多くのご教示を頂いた。また、鳥羽政之氏、竹野谷俊夫氏には諸事にわたりお世話になった。記して感謝したい。

最後に改めて、この発掘調査に深いご理解とご協力を頂いた地権者の方々を始め、幡羅遺跡の発掘調査、整理作業に携わり、文化財を後世に残すことにご尽力頂いた皆様に敬意を表したい。

〈参考文献〉

青木克尚他　2006　『幡羅遺跡Ⅰ』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第75集

荒木志伸　2000　「郡衙正倉の変遷」『郡衙正倉の成立と変遷』奈良国立文化財研究所

猪狩忠雄他　2000　『根岸遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第72冊

出浦　崇　2007　「三軒屋遺跡の調査成果」『第33回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』古代城柵官衙遺跡検討会

大橋泰夫　2001　『那須官衙関連遺跡Ⅶ』栃木県埋蔵文化財調査報告第249集

岡部町教育委員会　2002　『古代の役所』

川口武彦他　2005　『台渡里廃寺跡』水戸市埋蔵文化財調査報告第１集

田中広明他　1997　『中堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集

知久裕昭　2002　「幡羅郡－幡羅郡家周辺の遺跡群－」『坂東の古代官衙と人々の交流』埼玉考古別冊６
知久裕昭　2005　「幡羅遺跡の発掘調査」『武蔵野』第341号
知久裕昭　2007　「幡羅遺跡発掘調査の概要」『第33回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』古代城柵官衙遺跡検討会
鳥羽政之他　1995　『中宿遺跡』埼玉県岡部町埋蔵文化財調査報告書第１集
鳥羽政之他　1997　『熊野遺跡発掘調査概要報告書』岡部町遺跡調査会報告書第６集
鳥羽政之他　1999　『中宿遺跡Ⅲ』埼玉県岡部町埋蔵文化財調査報告書第４集
鳥羽政之他　2001　『熊野遺跡Ⅰ』岡部町遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第９集
鳥羽政之他　2002　「榛沢郡家と幡羅郡家」『坂東の古代官衙と人々の交流』埼玉考古別冊６
鳥羽政之　2003　『東国における郡家形成の過程』『古代武蔵国を考える』古代武蔵国研究会
鳥羽政之他　2004　『熊野遺跡Ⅲ』岡部町教育委員会埋蔵文化財調査報告書第９集
鳥羽政之　2006　「地方官衙遺跡の調査事例」『掘立柱・礎石建物建築の考古学資料集』帝京大学山梨文化財研究所
富田和夫　1992　『稲荷前遺跡（Ａ区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第120集
富田和夫　2000　『大寄遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第268集
富田和夫　2002　『熊野遺跡（Ａ・Ｃ・Ｄ区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第279集
富山　博　2004　『日本古代正倉建築の研究』法政大学出版局
中島広顕　2000　「武蔵国豊島郡衙の正倉－御殿前遺跡－」『郡衙正倉の成立と変遷』奈良国立文化財研究所
深谷　昇他　2003　『上神主・茂原官衙遺跡』上三川町埋蔵文化財調査報告第27集・宇都宮市埋蔵文化財調査報告第57集
福田　聖他　2002　『大寄遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第280集
藤木　海他　2002　『原町市内遺跡発掘調査報告書７』原町市埋蔵文化財調査報告書第28集
藤木　海他　2003　『原町市内遺跡発掘調査報告書８』原町市埋蔵文化財調査報告書第32集
松村恵司　1998　「正倉の存在形態と機能」『古代の稲倉と村落・郷里の支配』奈良国立文化財研究所
村上吉正他　2003　『下寺尾西方Ａ遺跡』かながわ考古学財団調査報告157
山中敏史　1991　「古代の倉庫群の特徴と性格」『クラと古代王権』ミネルヴァ書房
山中敏史　1994　『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房
山中敏史他　2003　『古代の官衙遺跡Ⅰ遺構編』奈良文化財研究所
山中敏史他　2004　『古代の官衙遺跡Ⅱ遺物・遺跡編』奈良文化財研究所

付編１　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・瀬谷薫
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・佐々木由香・新山雅広

１．はじめに

深谷市幡羅遺跡（第5次調査）の第32号建物跡周辺より検出された炭化イネ胚乳１点の試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。試料調整は、山形、瀬谷、Lomtatidze、Jorjolianiが、測定は小林、丹生、伊藤が行い、本文は佐々木、伊藤が作成した。また新山が種実同定と、写真撮影を行った。

２．試料と方法

測定試料の情報、調整データは表1のとおりである。試料は第32号建物跡（SB32）周辺から出土した炭化イネ胚乳である（写真１）。SB32は周辺に炭化材や炭化イネが散乱していることから、正倉で、火災により焼失したことが考えられている（炭化材については別項参照）。試料は大量に出土した炭化イネ胚乳のうち、1点を測定試料とした（PLD-6149）。正倉の時期は、考古学的には８世紀末頃に建てられ、９世紀代に焼失した可能性が考えられている。

試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

表１　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-6149	遺構：SB32周辺 遺物No：一括	試料の種類：炭化イネ胚乳 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH

３．結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C)、同位体分別効果の補正を行った^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

表２　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ^{13}C (‰)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲		暦年較正用年代 (yrBP±1σ)
			1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	
PLD-6149	−27.61±0.19	1195±20	780AD(6.6%)790AD 805AD(61.6%)875AD	770AD(95.4%)900AD	1193±22

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

4．考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

考古学的にはイネ胚乳は倉庫に備蓄されていた食料であることが考えられているため、測定試料のイネ胚乳年代は、イネを収穫した年代、すなわち倉庫が機能していた年代を示すと考えられる。得られた年代は、^{14}C年代で1195±20yrBP、1σ暦年代範囲では805-875calAD（61.6％）、780-790calAD（6.6％）、2σ暦年代範囲では770-900calAD(95.4％)の年代範囲を示した。1σでは9世紀初頭から9世紀中頃の年代範囲の確率が高く、2σでは、8世紀後葉から10世紀までの確率が高かった。^{14}C年代に対して暦年較正年代が幅広いのは、8世紀末から9世紀末にかけて暦年較正曲線が平坦なことに起因する。

参考文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, 355-363.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代, 3-20.

Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) Radiocarbon 46, 1029-1058.

写真１　年代測定試料（炭化イネ胚乳）
スケールは１㎜

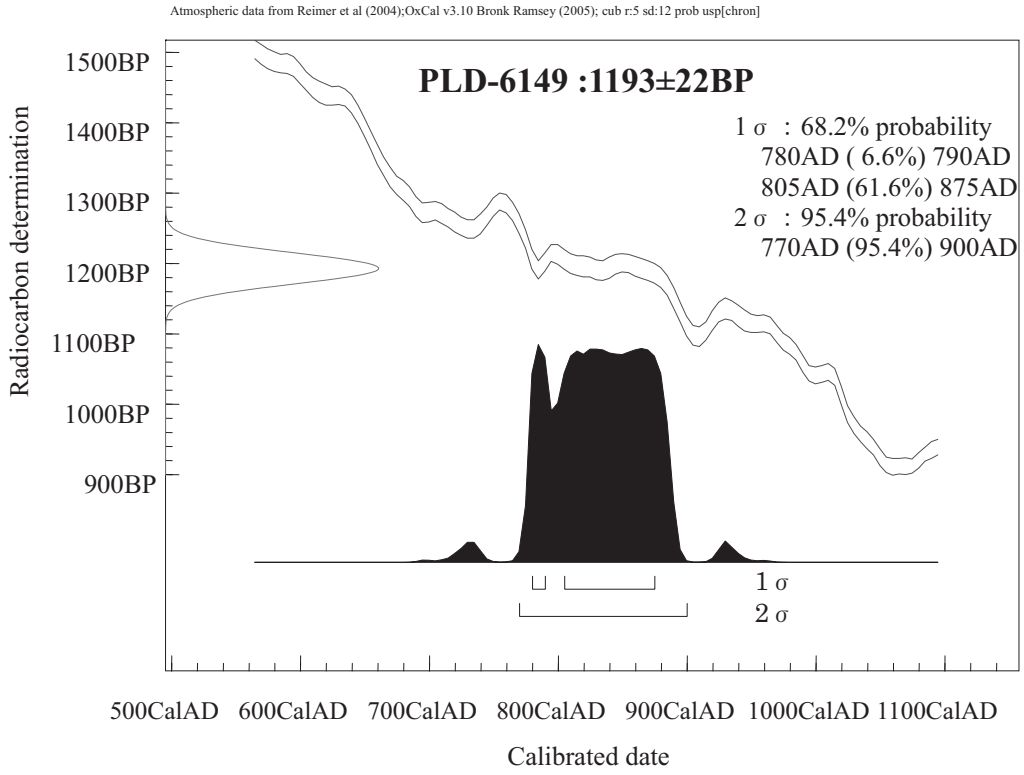


図１　暦年較正結果

付編２　第32号建物跡南から出土した炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

１．はじめに

古代郡衙の分布地である幡羅遺跡(７世紀後半～10世紀前半)において、第32号建物跡(SB32)に関連する炭化材の樹種同定結果を報告する。

SB32は、北側に分布する正倉院(２)の区画溝が埋った後に、地盤沈下を防ぐ堅牢な地業を施し建築されていた礎石建物である。SB32も正倉で、８世紀末頃に建てられ、９世紀代に焼失した可能性が高く、周囲から多量の炭化米と炭化材が散乱して出土した。この炭化材の由来を検討する基礎資料として、樹種を明らかにする調査が実施された。なお、SB32が建築される頃は、この調査区は空閑地のような場所であったと、発掘状況から考えられている。

２．試料と方法

試料は水洗選別された炭化材破片が、ビニール袋２袋に入っていたのでそれぞれを仮に試料1(約30ｇ)と試料2(約50ｇ)とした。2袋に入っていた破片数は非常に多いが、各破片の大きさはほとんどが1㎝角程度であった。取上げられていた試料から、形状や大きさの異なる炭化材を選び、樹種同定試料とした。実体顕微鏡下で同定を決定でない破片は、枝番号を付けて試料を識別し、材の3方向断面を走査電子顕微鏡で観察して同定を決定した。

同定は、炭化材の横断面(木口)を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に材の3方向(横断面・接線断面・放射断面)の断面を作成し、走査電子顕微鏡で拡大された材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を直径１㎝の真鍮製試料台に導電性両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子㈱製　JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

同定した炭化材の残り破片は、深谷市教育委員会に保管されている。

３．結果

同定結果の一覧を表１に示した。試料1の炭化材は約30ｇあり、試料2の炭化材は約50ｇであった。この2試料から検出された分類群は、オニグルミ(2破片)･クリ(100破片以上)･ケヤキ(3破片)･ムクノキ(1破片)･サクラ属(4破片)の落葉広葉樹5分類群、ヒサカキ(1破片)の常緑広葉樹1分類群、モミ属(2破片)の針葉樹1分類群であった。2試料からはクリが最も多く検出され、炭化材のほとんどがクリであったと言える。

検出された各分類群の破片は、1㎝角前後の小さな破片が多く、分類群により炭化材の形状が異なることもなかった。また、径の細い枝材であると類推できるような芯持ち丸木の炭化材破片も見当たらなかった。ただしヒサカキ(試料1-2)は、縦長の薄い破片で、片側側面は褐色を呈し未炭化状態であった。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の３方向の組織写真を提示した。

(１)モミ属　*Abies*　マツ科　図版１　1a-1c(試料1-6)

仮道管・放射柔細胞からなり、樹脂細胞はない針葉樹材。接線状に並ぶ傷害樹脂道がある。放射柔細胞の壁は厚く放射断面において接線壁に数珠状肥厚があり、分野壁孔は小型のスギ型やヒノキ型である。放射仮道管は無い。

モミ属は暖帯から温帯下部の山地に普通に見られるモミ、温帯上部の高山に生育するウラジロモミ・シラベ・アオモリトドマツ、北海道の山地に生育するトドマツの５種がある。いずれの材も組織は類似しており区別はできない。材質はやや軽軟で加工は容易であるが保存性は低い。

(２)オニグルミ　*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura　クルミ科　図版１　2a-2c(試料1-1)

単独あるいは2 ～ 3個が複合した中型で孔口は楕円形の管孔が除々に径を減じながら散在する散孔材。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織はほぼ同性または上下端部に方形細胞がある異性、主に3細胞幅である。接線状柔組織がある。

オニグルミは暖帯から温帯のやや湿った所に生育する落葉高木である。種子は食用になり、材は加工しやすく狂いが少ない。

(３)クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版１　3a-3c(試料1)

年輪の始めに中型～大型の管孔が密に配列し除々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は単列同性である。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。果実は食用になり、材は粘りがあり耐朽性にすぐれている。

(４)ケヤキ　*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino　ニレ科　図版２　4a-4c(試料1-9)

年輪の始めに大型の管孔が1 ～ 2層配列し、その後は非常に小型の管孔が多数集合して塊状･接線状･斜状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は異性、主に5細胞幅の紡錘形、上下端に大型結晶細胞がある。

ケヤキは暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。材質は堅く丈夫である。

(５)ムクノキ　*Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch.　ニレ科　図版２　5a-5c(試料2-2)

中型の管孔が単独または2 ～ 3個が放射方向に複合してまばらに分布し、晩材では帯状柔組織が顕著な散孔材。道管の壁孔は交互状で横に伸びた孔口はつながり流れ、穿孔は単穿孔である。放射組織は異性、１～ 3細胞幅の紡錘形、上下端に方形細胞があり、結晶細胞がある。放射組織と道管との壁孔は交互状に密在する。

ムクノキは暖帯の山野に普通に生育する落葉高木である。果実は食べられ、材は堅く丈夫である。

(６)サクラ属　*Prunus*　バラ科　図版２　6a-6c(試料1-8)

小型の管孔が年輪の始めにやや密に分布し、その後は放射状･接線状･斜状に複合して分布する散孔材。道管の壁孔は対列状または交互状、穿孔は単穿孔、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は同性にちかい異性、約4細胞幅、道管との壁孔は小型で多数が密在する。

サクラ属は暖帯から温帯の山地に生育し多くは落葉性の高木で、ヤマザクラ、マメザクラ、オオシマザクラなどがある。材は粘り気があり強く、保存性も高い。

(７)ヒサカキ　*Eurya japonica* Thunb.　ツバキ属　図版３　7a-7c(試料1-2)

非常に小型で多角形の管孔が多数散在する散孔材。道管の壁孔は交互状から階段状、穿孔は横棒数が非常に多い階段穿孔である。放射組織は異性、１～ 2細胞幅、単列部は大型の直立細胞からなる。繊維細胞にはらせん肥

厚が見られる。
ヒサカキは暖帯の林下にきわめて普通の常緑小高木である。

4．考察

8世紀末頃に建てられ9世紀代に焼失した正倉と考えられる第32号建物(SB32)南から出土した多数の炭化材破片を同定した結果、ほとんどがクリであることが判った。また少数ではあるが、サクラ属・ケヤキ・オニグルミ・ムクノキ・ヒサカキ・モミ属が含まれていた。従って、これらの炭化材をSB32の建築材と考えると、クリを主体として複数種類の広葉樹と針葉樹のモミ属を利用していたことになる。クリは広く周知されているように、有用な建築材である。またそのほかに検出された分類群も、優占利用されていることはほとんど無いが、建築材として利用度の高い樹種である。復元されている正倉には、針葉樹材を利用しているものが多いようであるが、柱材や部材に今回検出された広葉樹材が利用されていた可能性は、否定はできないと思われる。

また別の解釈として、第32号建物跡の南側は土坑や倒木痕があり、木々が生育していた空閑地のような場所であったと推定されていることから、SB32の火災時に周辺に生育していた樹木が焼けてその炭化材が堆積した可能性も考えられる。しかし、枝材の形状を示す炭化材破片がほとんど見られなかった点は、疑問が残る。

検出された分類群によって、炭化材破片の形状に違いは認められなかったことからも、分類群による由来の違いは不明である。ただしヒサカキだけは、薄く細長い破片で片側側面だけは未炭化な状態であったことが異なる。

関東平野の古代の集落住居跡では、古墳時代に引き続きコナラ亜属(コナラ節・クヌギ節)が利用され、また弥生時代以降は利用が減っていたクリの利用が多くなる傾向が知られている(千野、1991)。しかし集落と郡衙では、建築材樹種選択性がどのようであったかは、ほとんど判っていない。今回の結果は、当遺跡や周辺の郡衙関連遺跡での樹種利用の資料蓄積を待ち、検討する必要があると思われる。

引用文献

千野 裕道 (1991) 縄文時代に二次林はあったかー遺跡出土の植物性遺物からの検討ー.「研究論集 X」：214-249, 東京都埋蔵文化財センター.

表１　第32号建物跡南から出土した炭化材樹種同定結果一覧

試料袋No.	仮No.	検出分類群	備　考
試料１ （約30ｇ）		クリ	50破片以上あり
	1-1	オニグルミ	
	1-2	ヒサカキ	側面生焼け
	1-3	サクラ属	
	1-4	ケヤキ	
	1-5	ケヤキ	
	1-6	モミ属	
	1-7	オニグルミ	
	1-8	サクラ属	
	1-9	ケヤキ	
試料2 （約50ｇ）		クリ	50破片以上あり
	2-1	モミ属	
	2-2	ムクノキ	
	2-3	サクラ属	
	2-4	サクラ属	

写 真 図 版

第32号遺物跡周辺より出土の炭化米と炭化材

第 3 次調査区（東から）

第 3 次調査区（北東から）

第 3 次調査区（西から）

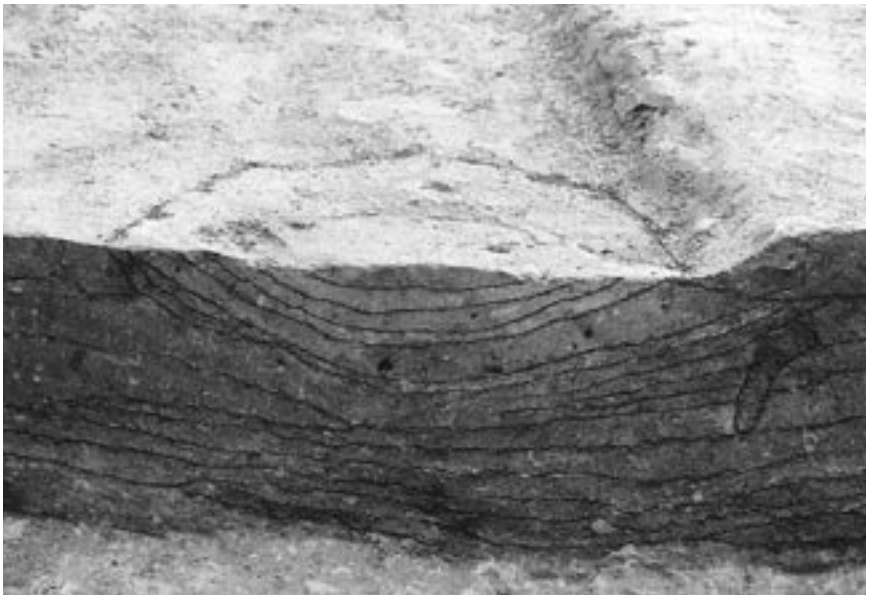
図版 2

第 3 号建物跡

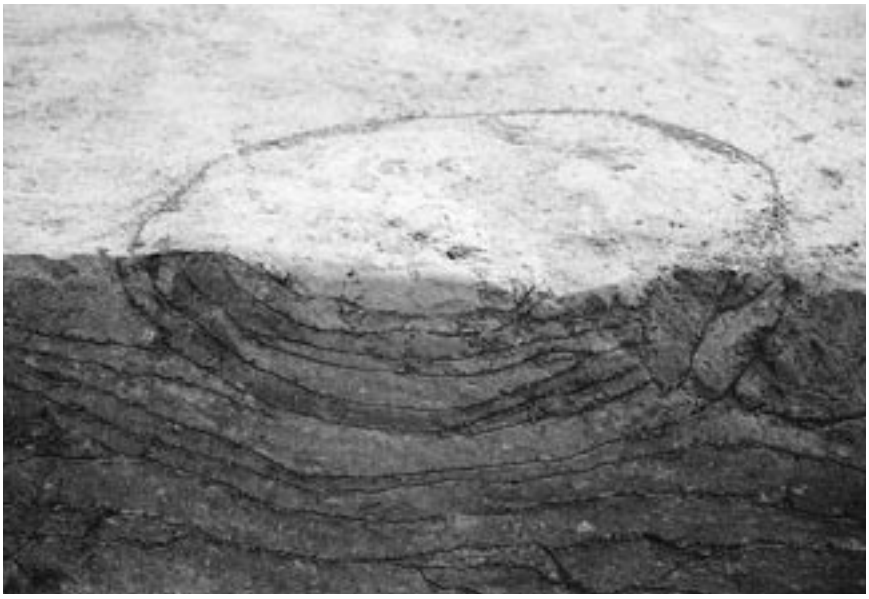
第 3 号建物跡下層

第 3 号建物跡周辺大甕出土状況

第 3 号建物跡土層断面（1）



第 3 号建物跡土層断面（2）



第 3 号建物跡土層断面（3）

図版 4

第 4 号建物跡

第 4 号建物跡土層断面（1）

第 4 号建物跡土層断面（2）

第 3 次調査区（南西から）

第 3 次調査区（南東から）

第 5 号建物跡

図版 6

第 7 号建物跡

第 8 号建物跡

第 9 号建物跡

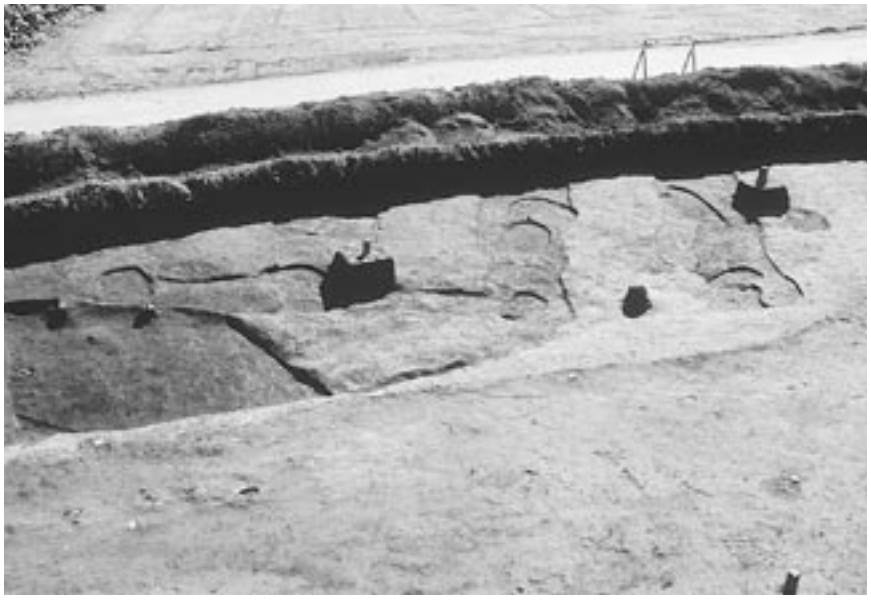
第19号建物跡

第19号建物跡西柱列北第 2 柱穴

第19号建物跡遺物出土状況

図版８

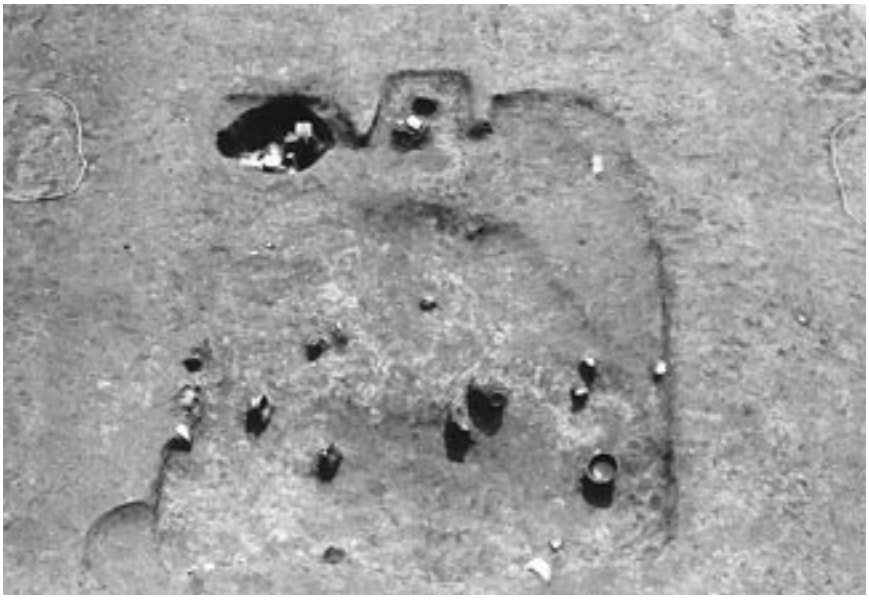
第19号建物跡周辺



第22号建物跡

第17・18号建物跡柱穴

第 2 号溝土層断面（1）



第 4 号竪穴建物跡

第 4 号竪穴建物跡遺物出土状況

図版 10

第５・７号竪穴建物跡

第６号竪穴建物跡

第８号竪穴建物跡

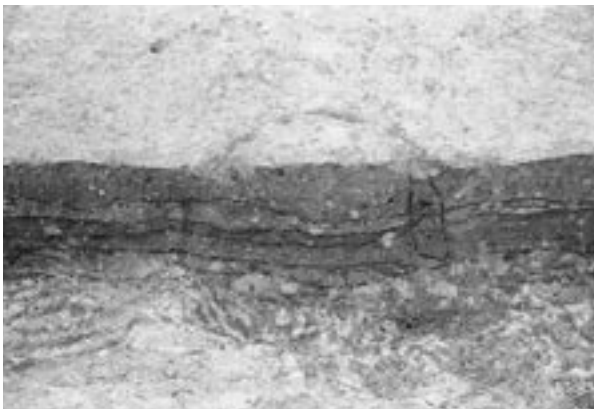
第 9 号竪穴建物跡

第10号竪穴建物跡

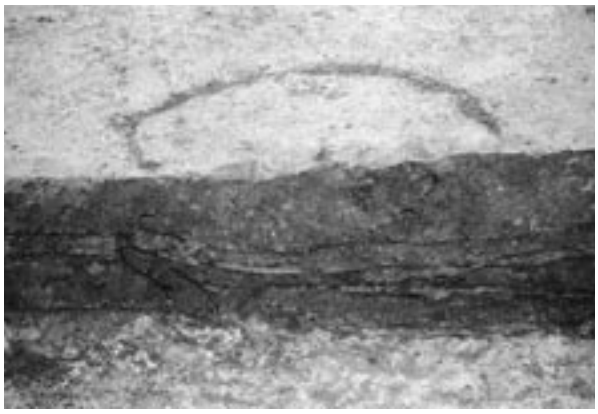
ナイフ形石器出土状況

図版 12

第４号建物跡土層断面（３）



第４号建物跡土層断面（４）



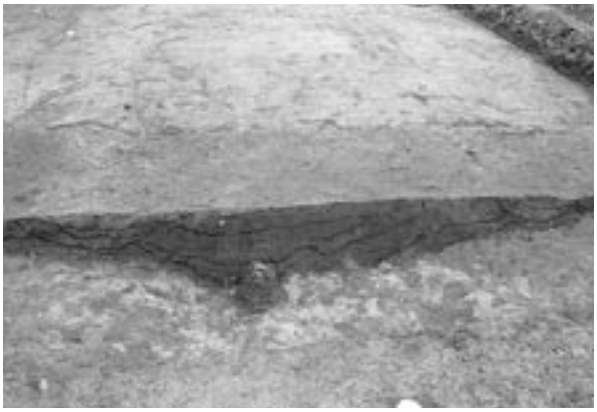
第４号建物跡土層断面（５）

第２号溝土層断面（２）

第４号竪穴建物跡カマド

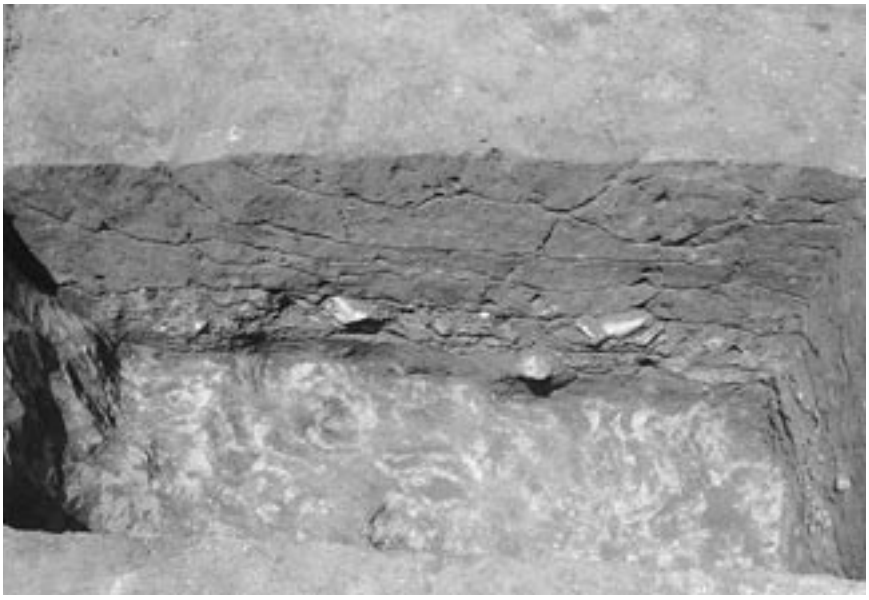
第４号竪穴建物跡貯蔵穴

第７号竪穴建物跡遺物出土状況



第５号溝土層断面

第32号建物跡、第173号土坑（１）



第32号建物跡土層断面（１）

第32号建物跡土層断面（２）

図版 14

第32号建物跡土層断面（３）

第173号土坑土層断面（１）

第５次調査区（西から）

第34号竪穴建物跡

第39 ～ 41号竪穴建物跡

第171号土坑

図版 16

第32号建物跡、第173号土坑（２）

第32号建物跡土層断面（４）

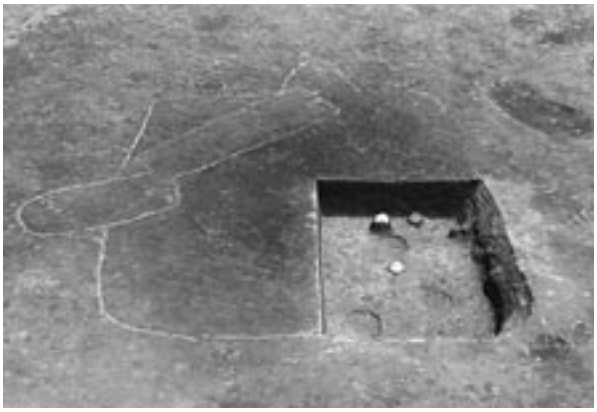
第32号建物跡土層断面（５）

第173号土坑土層断面（２）

第12号溝（１）

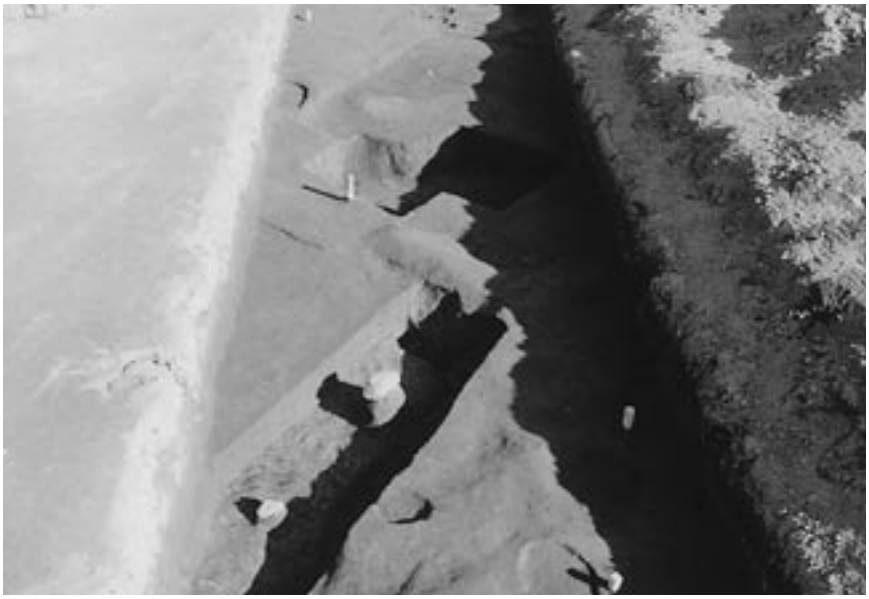
第12号溝（２）

第46号竪穴建物跡遺物出土状況



第35号竪穴建物跡

第８次調査区（北から）



第52号竪穴建物跡

第53号竪穴建物跡

図版 18

第７次南調査区（北西から）

第12号溝（西から）

第12号溝土層断面

第13号溝

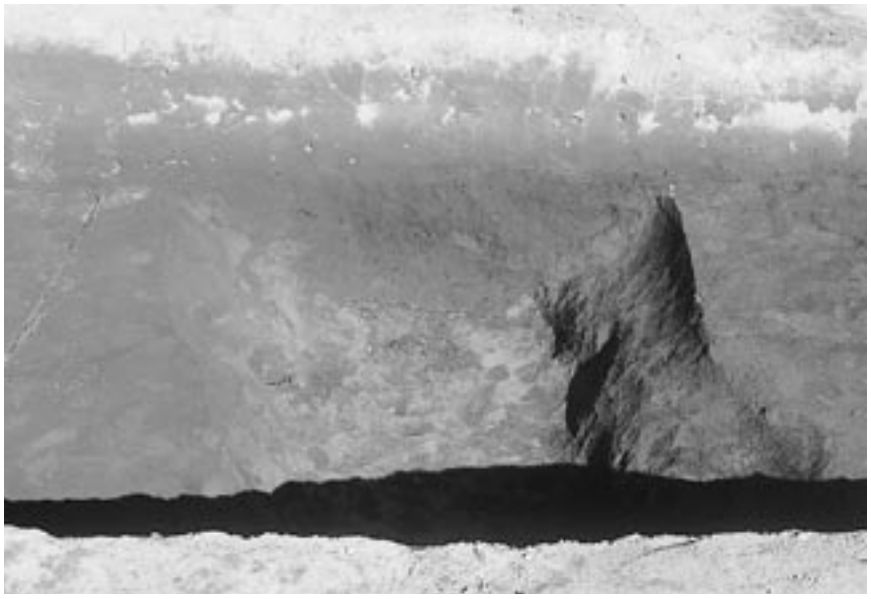
第13号溝土層断面

第７次北調査区（東から）

図版 20

第16次調査区（北から）

第27号溝



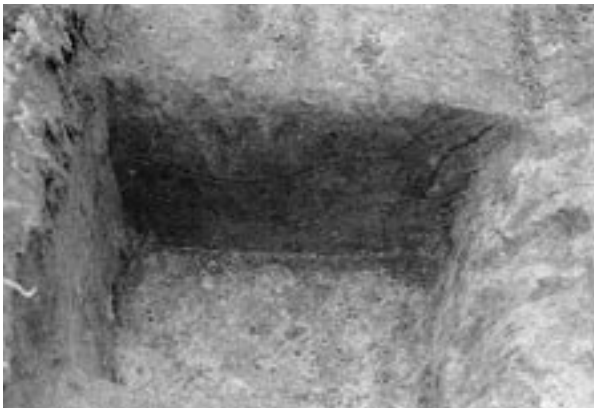
第16号溝

第 9 次調査第 6 トレンチ

第 9 次調査第 3 トレンチ

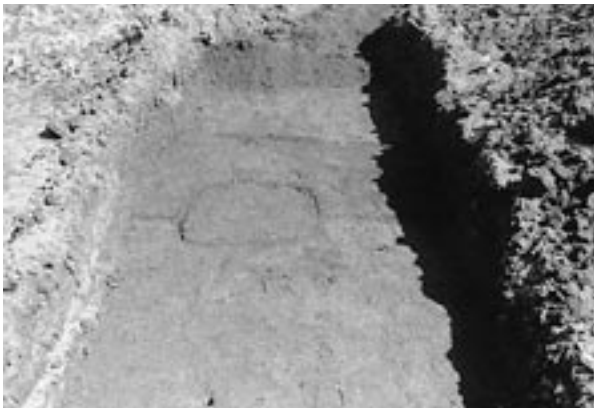
第12次調査第 2 トレンチ

第 9 次調査第 4 トレンチ



第18号溝

第12次調査第 4 トレンチ



第12次調査第 5 トレンチ

図版 22

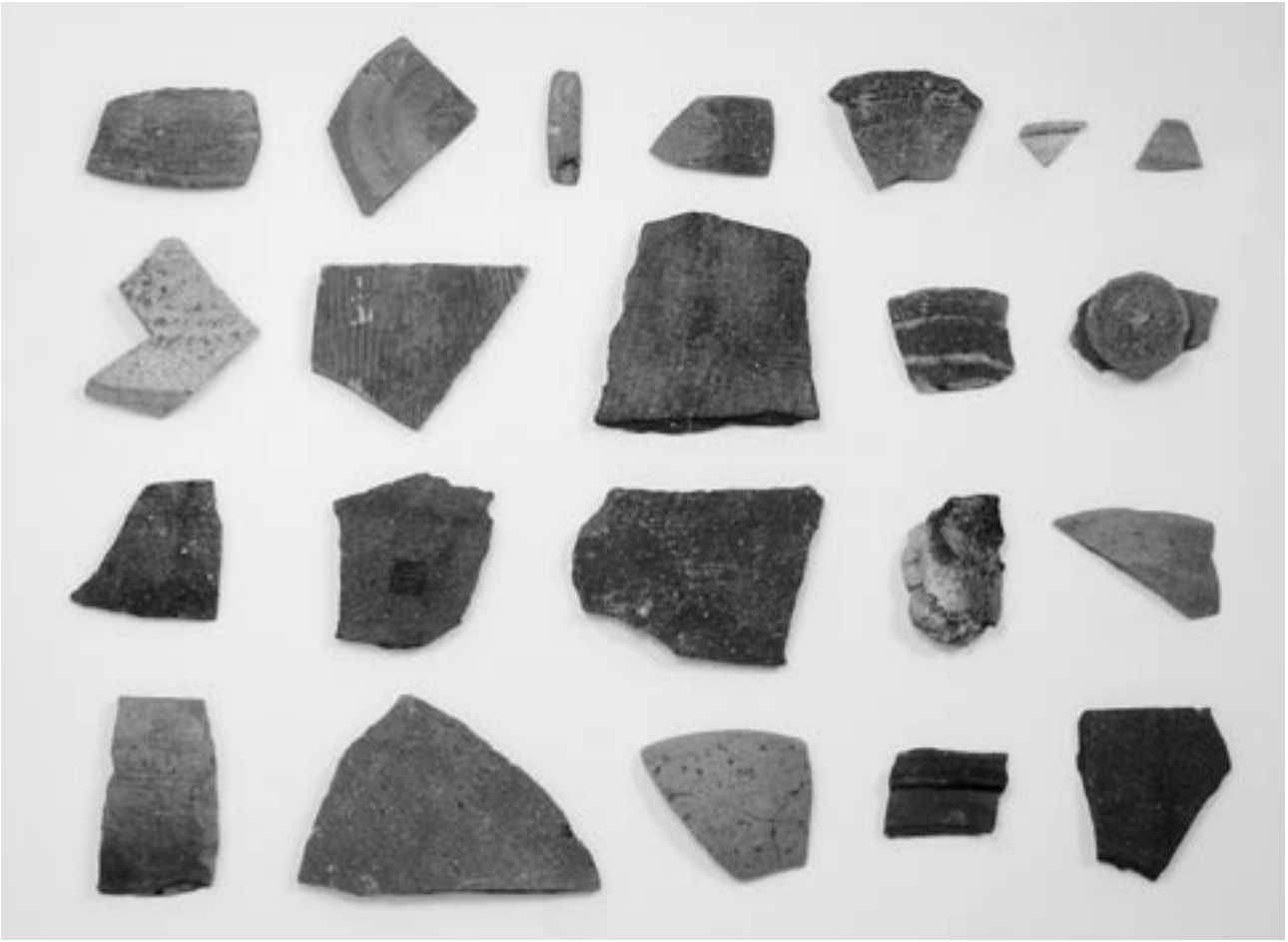
第７図１（ナイフ形石器）

第７図12（石鏃）

縄文時代の遺物

第29図 2 （第 4 号建物跡出土）

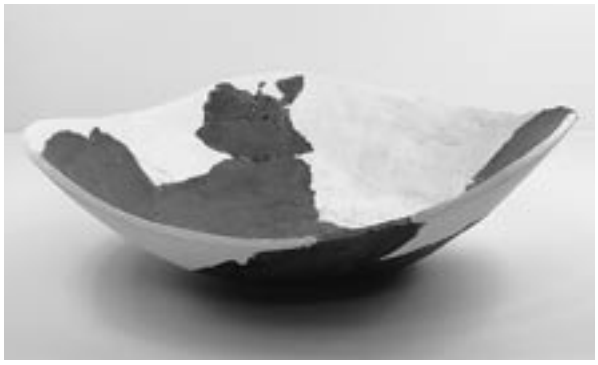
第29図20（第19号建物跡出土）



建物跡出土遺物

図版 24

第 3 号建物跡周辺出土大甕



第30図 2 （第 3 号建物跡周辺出土大甕）

第32図 1 （第 4 号竪穴建物跡出土）

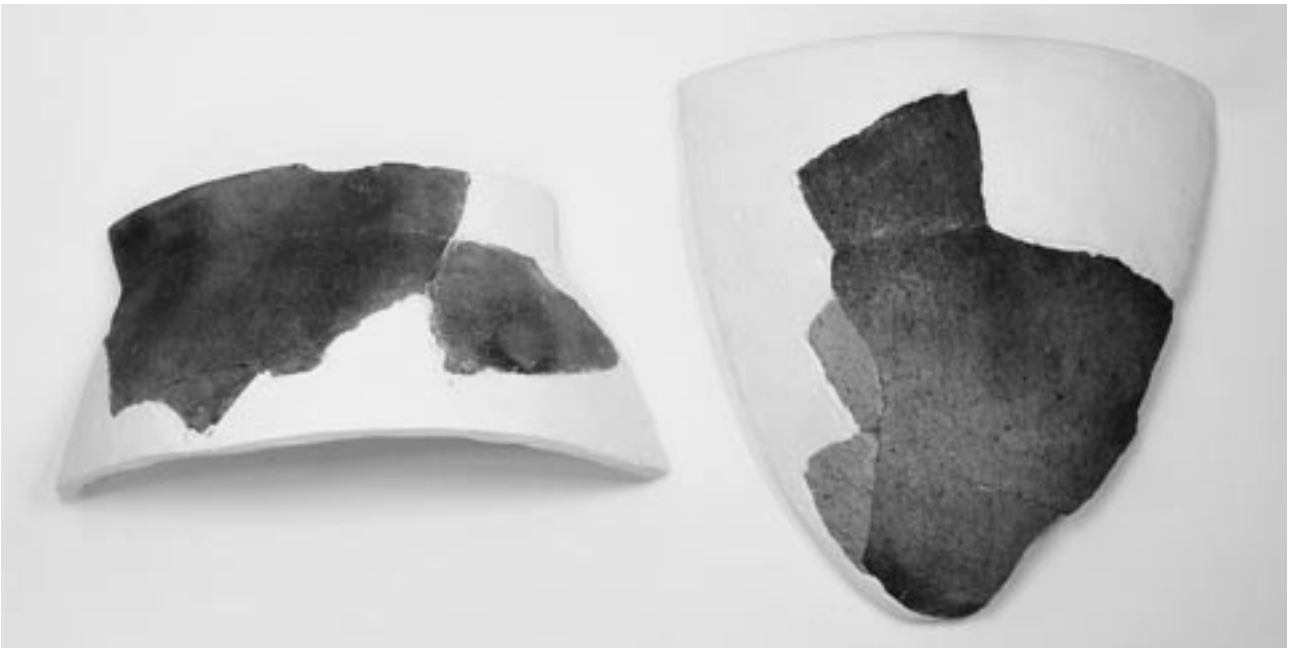
第32図 2 （第 4 号竪穴建物跡出土）

第32図 3 （第 4 号竪穴建物跡出土）

第32図４（第４号竪穴建物跡出土）

第32図９（第４号竪穴建物跡出土）

第４号竪穴建物跡出土遺物（１）



第４号竪穴建物跡出土遺物（２）

図版 26

第36図 2 （第 6 号竪穴建物跡出土）

第36図 4 （第 6 号竪穴建物跡出土）

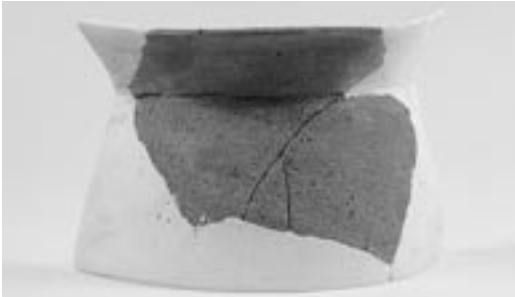
第36図 5 （第 6 号竪穴建物跡出土）

第36図 8 （第 6 号竪穴建物跡出土）

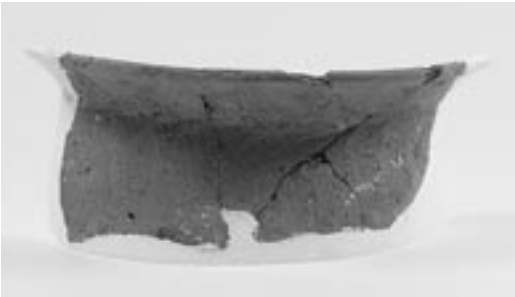
第36図 9 （第 6 号竪穴建物跡出土）

第36図11（第 6 号竪穴建物跡出土）

第36図13（第 6 号竪穴建物跡出土）



第36図14（第 6 号竪穴建物跡出土）



第36図15（第 6 号竪穴建物跡出土）

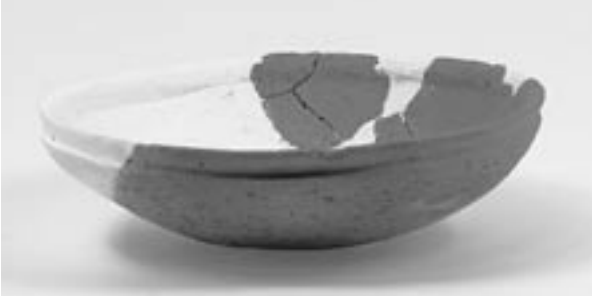
第36図16（第 6 号竪穴建物跡出土）

第36図17（第６号竪穴建物跡出土）

第40図８（第７号竪穴建物跡出土）

第40図13（第８号竪穴建物跡出土）

第40図14（第８号竪穴建物跡出土）



第40図20（第10号竪穴建物跡出土）

第９・10号竪穴建物跡出土遺物

第６号竪穴建物跡出土遺物（１）

図版 28

第６号竪穴建物跡
出土遺物（２）

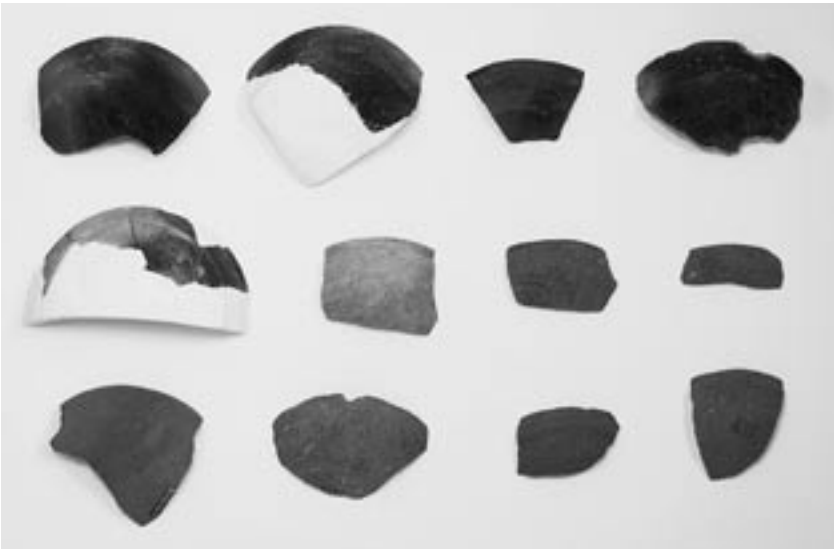
第５・７号竪穴建物跡
出土遺物

第８・10号竪穴建物跡
出土編物石

第42図１（第２号溝出土）

第42図８（第２号溝出土）

第42図11
（第２号溝出土）



第２号溝出土遺物（１）

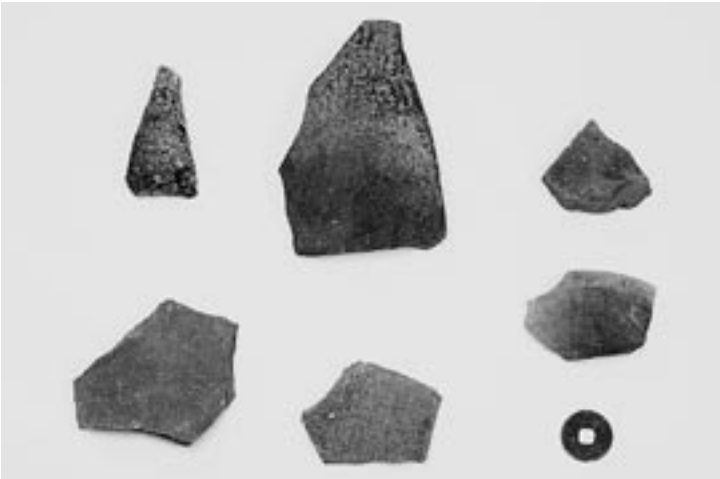
第２号溝出土遺物（２）

図版 30

第 3 号溝出土遺物

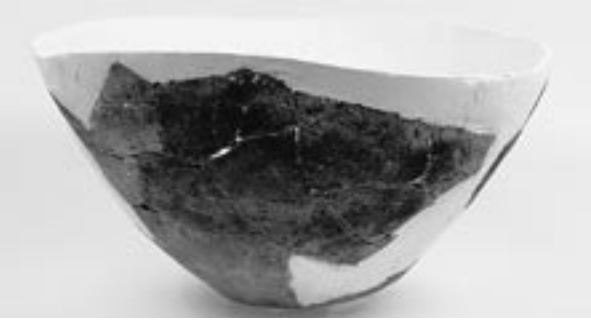
第 4 号溝、土坑出土遺物

第 3 次調査区出土遺物（1）



第 3 次調査区出土遺物（2）

第45図７（第３次調査区出土）



第45図８（第３次調査区出土）

第50図７
（第32号建物跡出土）

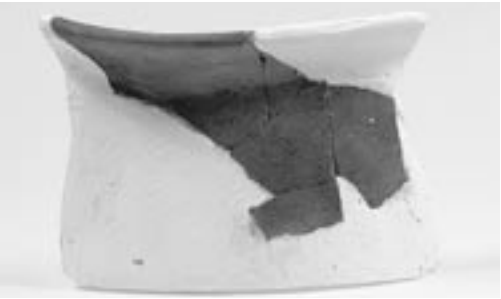
第32号建物跡、第173号土坑出土遺物

図版 32

第52図 1 （第34号竪穴建物跡出土）

第52図 2 （第34号竪穴建物跡出土）

第52図 3 （第34号竪穴建物跡出土）



第52図15（第34号竪穴建物跡出土）

第52図16（第34号竪穴建物跡出土）

第52図19（第34号竪穴建物跡出土）

第54図 5 （第35号竪穴建物跡出土）

第57図11（第39号竪穴建物跡出土）

第57図18（第39号竪穴建物跡出土）

第59図10（第43号竪穴建物跡出土）

第59図22（第45号竪穴建物跡出土）

第60図１（第46号竪穴建物跡出土）

第60図２（第46号竪穴建物跡出土）

第60図３（第46号竪穴建物跡出土）

第34号竪穴建物跡出土遺物（１）

図版 34

第34号竪穴建物跡出土遺物（２）

第35号竪穴建物跡出土遺物

第39号竪穴建物跡出土遺物（１）

第39号竪穴建物跡出土遺物（２）

図版 36

第39号竪穴建物跡出土遺物（３）

第33・38・40・42 ～ 44号竪穴建物跡出土遺物

第45 ～ 47号竪穴建物跡出土遺物

第52号竪穴建物跡出土遺物

図版 38

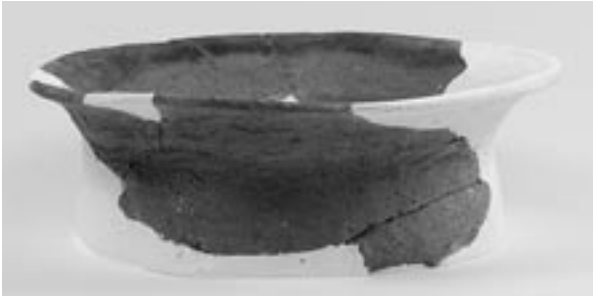
第53号竪穴建物跡出土遺物（１）

第53号竪穴建物跡出土遺物（２）

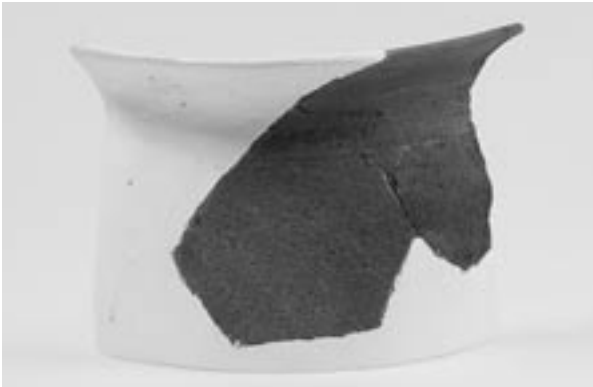
第52号竪穴建物跡出土鍛造剥片

第53号竪穴建物跡出土鍛造剥片

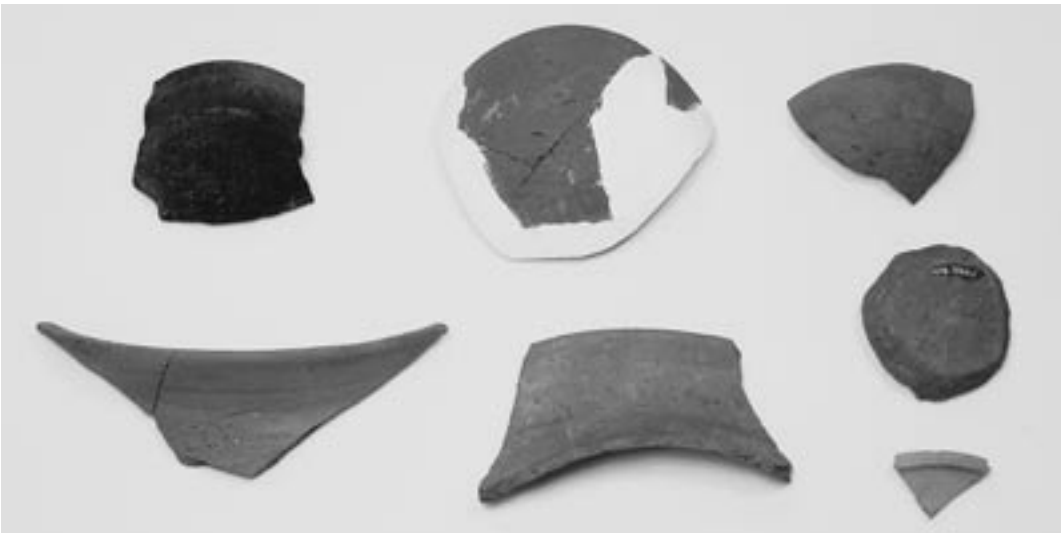
第65図 4 （第53号竪穴建物跡出土）



第65図10（第53号竪穴建物跡出土）



第65図 9
（第53号竪穴建物跡出土）



第54・55号竪穴建物跡出土遺物

図版 40

第69図 1 （第12号溝出土）

第69図 2 （第12号溝出土）

第69図 4 （第12号溝出土）

第69図 5 （第12号溝出土）

第69図 7 （第12号溝出土）

第69図 8 （第12号溝出土）

第69図 9 （第12号溝出土）

第69図11（第12号溝出土）

第72図 1 （第136号土坑出土）

第72図 2 （第155号土坑出土）

第72図６（第157号土坑出土）

第72図８（第166号土坑出土）

第12号溝出土遺物（１）

第12号溝出土遺物（２）

第５次調査区土坑
出土遺物

図版 42

第５次調査区出土遺物

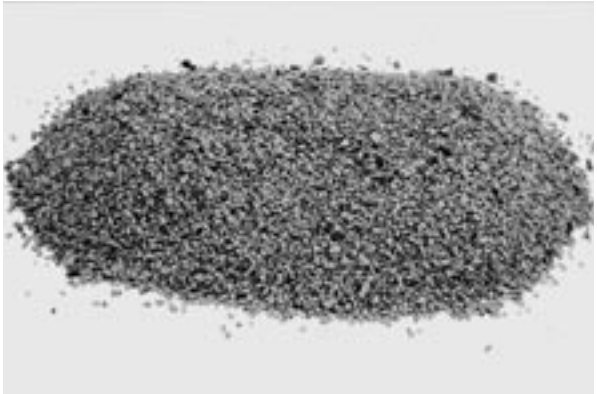
第５・８次調査区出土遺物

第７・９～11次調査区出土遺物

第16次調査区出土遺物

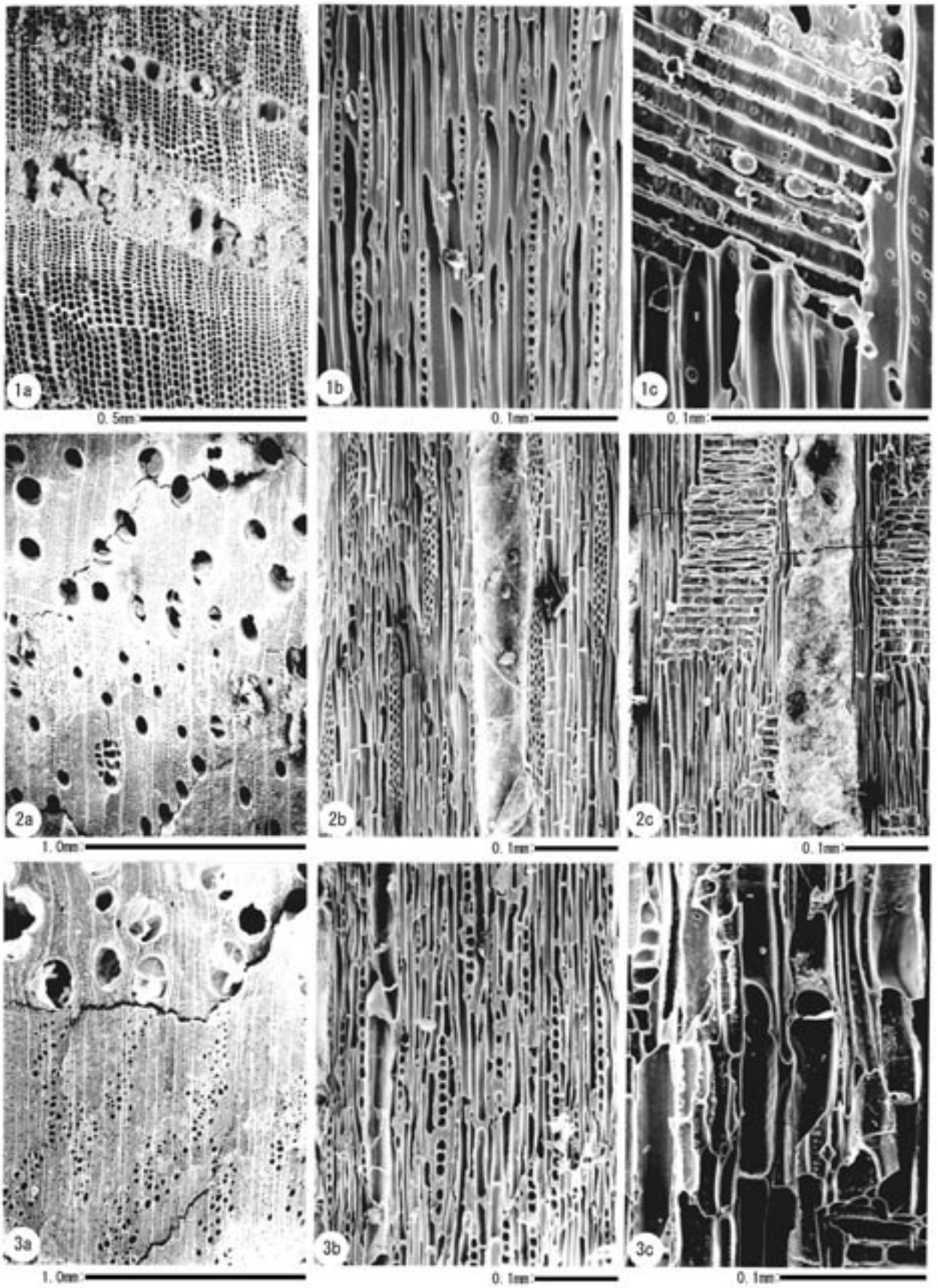
鉄製品

第 3 号建物跡周辺出土炭化米



第32号建物跡周辺出土炭化米

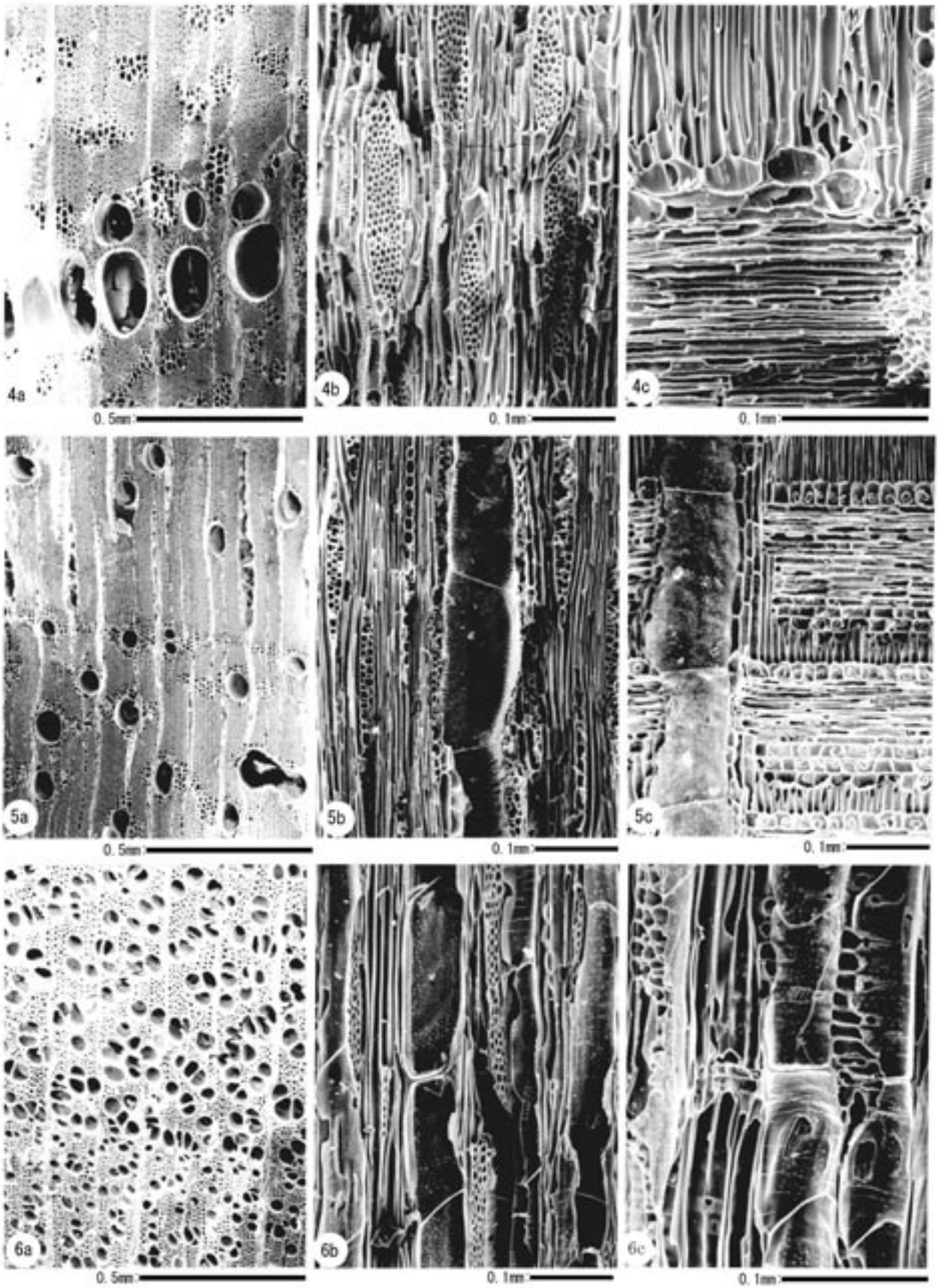
付編２図版１



蟠羅遺跡５次 SB32 南出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真（1）

1a-1c：モミ属（試料 1-6）　2a-2c：オニグルミ（試料 1-1）　3a-3c：クリ（試料 1）

a：横断面　b：接線断面　c：放射断面

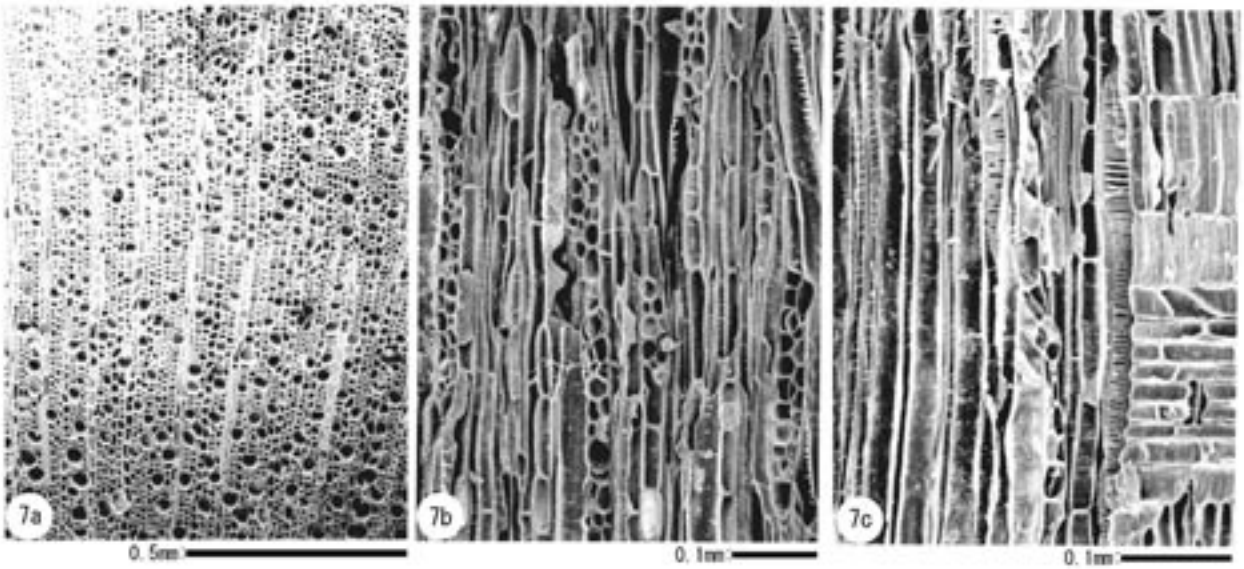


幡羅遺跡 5 次 SB32 南出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真 (2)

4a-4c：ケヤキ（試料 1-9）　5a-5c：ムクノキ（試料 2-2）　6a-6c：サクラ属（試料 1-8）

a：横断面　b：接線断面　c：放射断面

付編 2 図版 3



幡羅遺跡 5 次 SB32 南出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真

7a-7c：ヒサカキ（試料 1-2）　a：横断面　b：接線断面　c：放射断面

報告書抄録

ふりがな	はらいせき　に
書名	幡羅遺跡　Ⅱ
副書名	正倉跡の調査（2）
巻次	
シリーズ名	埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第88集
編著者名	知久裕昭
編集機関	深谷市教育委員会
所在地	〒366－0823　埼玉県深谷市本住町17－3　TEL　048－572－9581
発行年月日	2007年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 （°　′　″）	東経 （°　′　″）	調査期間	調査面積	調査原因
幡羅遺跡（3次）	深谷市東方字森吉3004－1、3005－1	11218	271	36 11 25	139 19 49	20020724～20021023	2,000㎡	重要遺跡の範囲・内容確認調査
幡羅遺跡（5次）	深谷市東方字辻3059－1	11218	271	36 11 23	139 19 46	20040701～20041130	1,800㎡	
幡羅遺跡（7次）	深谷市東方字辻3052－3	11218	271	36 11 22	139 19 49	20040907～20041130	700㎡	
幡羅遺跡（8次）	深谷市東方字辻3059－1	11218	271	36 11 22	139 19 45	20041201～20041224	200㎡	
幡羅遺跡（9次）	深谷市東方字森吉2999－1	11218	271	36 11 26	139 19 47	20050208～20050222	100㎡	
幡羅遺跡（10次）	深谷市東方字風張2888－1	11218	271	36 11 27	139 19 45	20050307～20050311	100㎡	
幡羅遺跡（11次）	深谷市東方字森吉3005－1	11218	271	36 11 26	139 19 50	20050307～20050311	100㎡	
幡羅遺跡（12次）	深谷市東方字辻3053	11218	271	36 11 22	139 11 22	20050317～20050322	100㎡	
幡羅遺跡（16次）	深谷市東方字風張2887－1	11218	271	36 11 25	139 11 45	20041101～20041224	200㎡	
幡羅遺跡（17次）	深谷市東方字風張2787－2	11218	271	36 11 27	139 19 43	20050803～20050805	200㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
幡羅遺跡	官衙跡 集落跡	古墳時代 奈良時代 平安時代	掘立柱建物　16棟 礎石建物跡　5棟 竪穴建物跡　34棟 正倉院区画溝 溝　9条 土　坑 137基	旧石器 縄文土器 石器 土師器 須恵器 鉄製品	幡羅郡家正倉跡の概要を確認した。

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第88集

幡　羅　遺　跡　Ⅱ

印　刷　　平成19年３月28日
発　行　　平成19年３月30日

発　　行　　埼玉県深谷市教育委員会